
或る皇国将校の回想録

keita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る皇国将校の回想録

【Nコード】

N0772P

【作者名】

keita

【あらすじ】

大協約世界に転生した主人公、馬堂豊久

彼は 皇国 陸軍大尉であり

独立剣牙虎第十一大隊本部情報幕僚として北領に赴任した。

それは不運だったのかそれとも――

北領紛争編、完結しました。

現在は内地編を進行中です。

序 天狼会戦 その一刻前

目の前の光景に小説や戯画に書かれた場面を映像にした様な既視感を感じた。

俺は皇国のこの国の実権を握る一族である五将家の一角である駒城家、

その譜代である馬堂家に生まれた。

所謂前世の記憶なのだろうか、自分の名前などは綺麗さっぱり思い出せぬのに物心ついた時から

何かを見る度に奇妙な既視感や体験し得ない記憶が脳裏から湧き出てきた。

その恩恵と云うべきなか算術や国語も習うと云うより思い出すといった感覚であり、

学校でも常に優秀な成績であつた、…その記憶の影響で歳の割りに老けた性格や妙な事を口走つた為か

変人扱いも付きものだった。

馬堂家は駒城家の譜代の中でも家格は高位に位置する為に将来は軍人が官僚の二択であり

長男はまず軍人になるのが慣例らしい。

それでも父の様に早々に退役して政治の方に力を入れてる人もいるが。

まあ、そのお陰で今は軍人として前線にいるのだが。

皇紀五六七年一月二十八日第八刻

天狼原野 北領鎮台主力 後方約一里

独立搜索剣虎兵第11大隊 情報幕僚 馬堂豊久大尉

「うん・・・現実逃避をしても寒いな真冬の北領は。向こうに居ないだけましな。」

三万を超す軍勢、その後方でその予備部隊の一員である俺は前方の光景に目をやり。

物凄く嫌な予感を伴う既視感を感じ、頬を引き攣らせた。

二週間前までは戦争によってこの四半世紀皇国が血を流した事はなく平穏であった。

一月二十四日

北方の大国である帝国が貿易で儲けている新興国『皇国』への貨幣の流出に耐えかね「蛮族鎮定」の為にこの北領に大軍勢を送り込んだのだ。

応戦するのは五将家の一角守原英康大将率いる北領鎮台

——軍政機構である鎮台を戦時用の軍に再編する時間すらないまま会戦に挑もうとしている。

「新城^{友人}が配属されるからってこの実験部隊への配属を希望したのは失敗だったのかねえ？」

そう俺が配属されているのは実験部隊だ。

新兵科を実験的な戦術構想の元に運用する為、二年前に設立された部隊だ。

勿論此処で戦争することなど想定外中の想定外だ。

それなのに何故かこの奇妙な状況に既視感を感じる。

最高級の嫌な予感つきで。

今ではもう朧な前世らしき記憶が最大級の警鐘を鳴らしている。

「この会戦の結果は最悪であると想定した方が良かったらうな。」

ぼそりと独り言ちる。嫌な予感は産まれてからこのかた25年外した事がない。

この想定が外れる事を祈りながら俺は大隊本部へ戻る為に歩き出した。

これからの始まる会戦が大きな動乱の始まりであろうことを予感しつつ。

序 天狼会戦 その一刻前（後書き）

初投稿がまさか皇国になるとは・・・

最短でも北領パートは終了させるつもりです。

拙作ですがお付き合いいただけたら嬉しいです。

第一話 天狼会戦 敗走？いいえ転進です

皇紀五百六十八年 一月二十八日 午前第九刻

天狼原野 北領鎮台主力 後方一里

独立剣虎兵第十一大隊 第二中隊

兵站幕僚 新城直衛中尉

「勝つとも！まともにやれば数が上回る我が方が絶対有利だ！！」
若菜中隊長殿がぶつぶつと爪を噛みながらつぶやいている。

全くもって将校が兵の前の振る舞うべき態度ではない。

兵の不安を煽る行動をするくらいなら黙っていて欲しいものだ。

それに実戦経験豊富な帝国、それも東方辺境軍が多勢相手に若菜の言うまともな戦をするとは到底思えない。

戦いは数と言うのは真理の一つだ。

だが三万と対二万二千、この程度なら十分勝ち目はある。

数は上回れど経験不足の軍隊を相手どって勝利を得るのなら相手を混乱させれば容易い。

手慰みに書いていた現在の布陣図に線を加える。

現在鎮台主力隊は未だ隊列の変換中だ。

あの戦慣れした軍隊ならば――。

――いや過大評価であると思いたい

その時、前方から怒号と地響きそして万にも届く銃声が響きだした。

同日 午前第十刻

天狼原野主戦場 後方一里

独立搜索剣虎兵第十一大隊本部 情報幕僚 馬堂豊久大尉

戦況は最悪である、戦列は一刻保てば奇跡だろう。

軍事の教本通りに隊型を組もうとしている最中の主力部隊に敵猟兵

達は縦列のまま強襲したのだ。

砲兵達も混乱している上この積雪では対応力は皆無だ。

元砲兵将校としてこれは断言できる。

急造の鎮台司令部、編成すら僅か二週間前の参謀達に実戦経験がほぼ皆無の兵達。

戦漬けで領土を広げ続けている東方辺境軍——百戦錬磨を体现した軍。

その差が奇麗に映えた結果だ、特志幼年学校の教科書に載せたい位だ。

観戦武官がいたら報告書の内容に悩まないだろう。

いかな。覚悟はしていても動揺している。

1・2・3・5・7・11

最悪だ、俺の嫌な予感的中した。

13・17・19。∴21は素数か？

落ち着け、祖父が言っていた。士官は危険な戦況ほど冷静にそしてふてぶてしく笑えと

俺は顔こそ引き攣っているが代わりに足が笑っている。

この距離でも、いや、この距離だからこそ敗北がはつきり予想できる。岡目八目と言っやつか。

取り敢えず俺と向こうの指揮官が冷静ならこのタイミングで・・・

同日 同刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊

第二中隊 兵站幕僚 新城直衛

平射砲とは違う、より重々しい擲射砲の砲声が轟いた。これで終わりか。

投入の機会を逸し、無駄に銃兵の両翼で慌てふためいている皇国軍騎兵と違い、

帝国はまだ騎兵戦力を投入していない。

そして、もし僕が指揮官ならば、
怒号や悲鳴に満ちみちた戦場に高らかに喇叭の音が響きわたる。

「ウーーーーーランツァーーーーール!!!!」

そう、このタイミングで騎兵を投入する。

遠く離れたこの地点にまで響き渡る勇声、帝国万歳ウーランツァール。

第三東方辺境領胸甲騎兵聯隊の勇猛さは名高い。

その一系乱れぬ統制と、彼らの指揮官に対する忠誠はこの大協約世界において並ぶものがない。

その投入による影響は疑いを入れる必要もないだろう

戦列が壊乱…否、粉碎された、

あれほどまでの精強さで知られている敵を迎え撃てるだけの防御力も、

戦意も今の北領鎮台には残っていない。

最前線で帝国騎兵の声を間近に聞いた者たちが泡を食って離脱し始める。

士気というものは崩ればもろい、一角が抜ければ、恐怖に駆られた他の戦列も抜ける。

今の皇国軍はまさに齒の欠けた櫛だ。使い物にならない。

若菜が喚いている通り撤退の指示が必要だ。

大隊の情報幕僚、馬堂豊久はこの戦況を把握してるのだろうか？

大隊が対応してくれなければどうにもならない。

せめて奴が何とか大隊の混乱を治めてくれたら――。

同日 第十刻半

独立搜索剣虎兵第十一大隊

大隊本部 情報幕僚 馬堂豊久

このタイミングで騎兵をだされたらもう詰みだ。

溜息をついて望遠鏡を下ろす。

逃げた幸せの代わりにこの瞬間も混乱した兵がこちらに向かっていく。

この混乱の渦に巻き込まれるのは危険だ。

踵を返し、大隊本部へ戻る。

混乱した集団は更なる混乱を、判断力の低下を招く。

守原公閣下は、危険性は理解しておられるらしい。

そして騎兵将校出身だけあってその決断の素早さは、並ぶものはいないだろう。

そう、鎮台司令部は真っ先に逃…退却したと導術兵が確認してくれた。

さすが名將は引き際を心得ておられる。糞っ垂れ！

情報を伝えたただけである導術兵を怒鳴りつける程馬鹿じゃないつもりだったか

思わず睨みつけてしまった。

流石に実仁親王閣下麾下の近衛第五旅団には伝令を寄越したらしいが同じ予備部隊である此方は無視された。

守原大將に御身を慮られた宮様が司令部の代わりに全軍撤退の許可を教えてくださいました。

違ったな撤退じゃなく『本土への転進』だそう。

言葉を飾る暇があれば導術連絡位は寄越してもらいたいね。

司令部が真っ先に逃げ出したせいで主力部隊の混乱に拍車がかかっている様だ。

情報も混乱している。

実仁閣下がいなかったら此方も同様に混乱していただろう。

司令部が真っ先に『転進』か。

下手したら水軍の船の上から撤退の指揮をとるつもりだろうか？

今は情報幕僚として本部にて戦況報告と撤退の進言をしなければならぬ。

「——以上が現在の状況です。近衛第五旅団も転進を開始しており

ます。

准将閣下の御厚意で現在なら本隊も混乱に巻き込まれずに秩序を持つて撤退が可能です。

なお、砲を人力で牽引する事を踏まえるなら撤退が僅かでも遅延すれば

大規模な装備の損失が起きる可能性が高いでしょう。

尚、導術は混乱しています、波が入り乱れているそうです。

私は、今の内に徒歩で伝令を送った方が確実だと考えます。

大隊長殿、御決断を。」

俺の言葉に大隊長である伊藤少佐が苦々しそうに頷く。

他の幕僚達はざわめいている。

開戦して二刻もしないで撤退が始まるとは誰も思わなかっただろう。

鎮台司令部が真つ先に転進なさる等もつと誰も――

いや、もう言うまい。

この大隊長は相変わらず何処か不機嫌そうな顔だ。

尤もこの状況で上機嫌な様なのは何処かの変人中尉位だろう。

あれはあれで兵には畏怖されつつも慕われているらしいが。

「報告通りの混乱ぶりなら当分統制は取り戻せないな。

まあいい、時間との勝負だ伝令を出せ。」

騎兵将校は決断が早いと言う俗説は本当みたいだ。

大將閣下と違ってありがたい。あれは義務を放棄しての早さだが。

俺達は麾下部隊への義務を果たさねばならない。

大隊長は軍主流から外され、燻ぶっているが無能ではない。判断を

下せば行動は迅速だ。

「了解です。集結地点は何処ですか？」

「開念寺だ。」

場所の選択は上々、上手く撤退出来るかは時間との勝負だ。

第一話 天狼会戦 敗走？いいえ転進です（後書き）

感想をお待ちしています。

第二話 幕僚会議、紛糾す

皇紀五六八年 二月九日 午後第五刻

独立剣虎兵大隊本部 開念寺

情報幕僚 馬堂豊久大尉

天狼原野からの撤退自体は今の所順調に進行している。

矢張りと言うべきか脱走兵は何人か出たがその馬鹿達を含めても損害自体は許容範囲内だ。

何より貴重な砲の損失を一門に抑えて撤退出来たのは幸いだ。

剣虎兵部隊は猫（剣牙虎の事だ）を馬が嫌うため馬を持てない。

騎兵砲すらも人力牽引だ。

僅かでも撤退が遅れていたら混乱に巻き込まれ、余計に失われただらう。

戦闘にも巻き込まれなかったただ成功と言っていいはずだ。

しかし、偵察に出ている第二中隊の帰還が遅れている。

第一・第二中隊——搜索剣虎兵中隊は単独部隊での戦闘に特化した三兵戦術の編成だ。

——それにこの大隊でも一二を争う実戦経験者である新城直衛中尉が所属している。

余程の事が無い限りもう帰還するはずなのだが。

余程の事とは？

考えたくないが、情報収集や分析が今の俺の仕事だ。

休憩ついでに門前で中隊を待ちながら考え込んでいると衛兵が駆け寄ってきた。

「第二中隊より報告です。本堂にお戻り下さい。」

——少なくとも導術連絡が出来る状況か

幕僚としても私人としても素直に胸をなで下ろした。

「——以上中隊長ウ四名、中隊主力ノ離脱ヲ援護セント囑トナリ戦

死セリ。

現在負傷シタ天龍ヲ発見大協約二基ヅキ救援ヲ行イシ為
帰還ハ約二刻後の見込ミ

発、第二中隊兵站幕僚新城直衛中尉 宛、大隊本部」

報告が終わった途端に戦務幕僚が怒鳴った

「負傷した天龍と遭遇？

ふざけるな！

そのような都合の良い話があるか！

若菜大尉達を見捨てて逃げ出したから遅れたのだろう！」

その可能性は否定できない。

若菜は実戦経験も無く偵察に出る前の会議の発言からもおよそ実戦
向きとは思えない。

家柄だけで昇進した将家による軍閥制の弊害を体现したような人間
だ。

その自覚はあるのか実戦経験者の部下への劣等感が強いと

新城直衛中尉

以前、訓練の後に猪口曹長達がこぼしていた。

大方、幕僚や下士官の進言を無視した独断専行の果てに見捨てられ
たのだと思う。

伊藤少佐は青筋を立てている戦務幕僚を横目でみて鼻で笑って言った
「役立たずのボンボン隊長と兵三名……。奴の事だ。馬鹿な奴等を選
んだのだろう。」

それで中隊主力が無傷で帰還するのだ。取り敢えずは十分だろう。」
率直な人だ。

この手の率直さは、「奴」と似通っている。

大隊指揮官殿は「奴」が気に食わない様だが同族嫌悪なのだろうか。
さて、若菜はアレでも一応中隊長だった。

「大隊長殿、戦死した中隊長の後任はどうしますか？」

この大隊の最先任中尉はその「奴」だがそのまま繰り上げか？
若菜よりは使える中隊にはなるか。

「新城中尉を充てる中尉の最先任だ。若菜よりは使えるだろう。」

——貴様の考え通りにな。

とにやりと笑みを浮かべて答えられた。
いかな、顔に出ていたか？

そして大隊本部は会議に戻った。

第二中隊から（ようやく）まともな報告が来た以上、今後の計画の
練り直しが必要だ。

戦務幕僚と顔をつき合わせて何度か言葉を交わす。

「連隊、騎兵連隊でしょう、恐らくは。

主力は増援との合流を優先させている筈です。

帝族が指揮官なのですから一度会戦で勝利した以上、
後は先遣隊を編成して戦果拡張するだけでしょう。

主力は前線にでないでしょうね。

大切な姫様の初の外征に泥を塗りたく無いでしょう。」

「問題は先遣隊の規模だ、情報幕僚。

どう考える？」

戦務が俺に再び話を振る。

「確実に一個旅団——六千以上でしょうね。

——これは推論ですが騎兵連隊と獵兵旅団が主力になるでしょう。
胸甲騎兵連隊は確実に入っていますね、何しろ連中の自慢の精兵で
すから。

砲——火力はそれ程でもないでしょう。

持つてくるのは騎兵砲に平射砲——軽砲が中心でしょうね。

行軍速度を重視するでしょうし、補給線の維持が出来なくなる。」

俺の分析を聞きながら戦務幕僚は顎を掻いた。

「問題は真室大橋を確保したがるかな。

——兵力の輸送に限界があったからこそ増援を待たずに会戦を挑ん
だ。

それを考えると工兵の数は少ないと見るべきか？

帝国 は北国だ、真冬の川で作業する技術は持っているだろうが。

「

「いえ、増援は既に到着しています。

支援部隊の不足はあまり期待しない方が良いでしょう。

ですが、偵察部隊の規模を考えると騎兵連隊を主力として強襲する可能性も——」

・
・
・

「第二中隊が騎兵中隊と交戦して取り逃がしたのであれば、敵の本隊が我方により接近してくる事が確実です。

敵兵力は聯隊から旅団規模と予想します。

戦力差を埋める為には此処より北方約六里の側道にて夜間に伏撃し、敵の指揮中枢を叩く事で相手を混乱させ——」

戦務幕僚は決して無能ではない。

淡々と手堅いが自分達が生きて帰れないであろう作戦を立案している。

俺も一枚どころではなく噛んでいるからこそ彼がどれ程の覚悟で戦術を組んでいったのかを知っている。

——畜生、所詮は大隊、頭数が足りなさ過ぎる。

俺は頬杖をつく様にして目を手で覆う、考え込む時の癖だ。

俺達は最高でも連隊——最悪は旅団以上の大軍勢を相手に今夜、夜襲を掛ける事になる。

地の利はあるが兵数の差は三倍以上である、厳しい戦争になるだろう。

座学で習ってはいたが帝国軍の皇国では不可能な程の行軍の素早さを嫌でも実感する。

開念寺の付近まで逃げてきた略奪された村人達の話思い出す。

帝国の現地での略奪は気に入らないが行軍の早さを確保するには忌々しい程有効だ。

しかも士気を保つ為などと民間人に対する最も下衆な行為を軍が推奨しているらしい。

北領でも村人達から弾薬と兵以外のあらゆる意味での資源を略奪しこちらに嵐の様に向かって来る。

・・・ふと、頭をある考えがよぎった。

相手の弱点を突き戦闘を避け、逃げながら時間稼ぎを可能にする戦術だ。

実行したら衆民からの軍への信頼は崩壊するし兵や将校からも

猛反発を受けるのも火を見るより明らかだが有効なものも間違いない。

一応は『大協約』には反しないはずだが…戻ってきたら新城にでも訊くか？

否、彼の駒城の育預はぐくみになった事情を考えればこんな事を訊くのは無神経の極みだ。

そもそも後ろで砲兵旅団がつかえているんだ。2日は防衛線上で粘らなくてはならない。無理だな。

手を外すと戦務幕僚達の会話に耳を傾ける。

いやはや馬鹿らしい、逃げ切れないからこうして戦闘の算段を立てているのに何故俺は逃げる方法を妄想しているのだ。

今は目の前の作戦を詰めなくてはならない。

そう「焦土作戦」など非現実的な妄想だ。今は忘れよう。

第二話 幕僚会議、紛糾す（後書き）

次回で魔王様と主人公を対面させる予定です。

伊藤少佐は漫画版で好きになったのですが書くことすると難しいですww

感想お待ちしております。

第三話 猫達の帰還

皇紀五百六十八年 二月九日

午後第七刻 開念寺

独立搜索剣虎兵第十一大隊 第二中隊

兵站幕僚 新城直衛

僕達は当初の予定より一刻遅れで大隊本部である開念寺に到着した。門前で出迎えたのは、衛兵と砲、そして時刻を見計らって細巻を吸いに外に出ていた大隊情報幕僚だった。

「やあ新城中隊長、龍神の加護を得られた様で何より。」

彼は中肉中背で豪商の若番頭のような顔つきをしていてまるで軍人らしく見えない。

だが野盗や反乱貴族の討伐で何度か実戦を経験している砲兵士官であり、

軍中枢である軍監本部で情報を扱っていた事もある男だ。

見たところ疲れているらしく顔色が悪い。

あの敗退から乏しい上に混乱した情報の中から

敵情の把握しようと奮闘し続けているのだから無理もない。

「馬堂大尉、僕は兵站幕僚ですが」

「若菜の後任に決まったんだよ。」

まあ大隊長から任命されたからとはいえども

まだ、非公式だしな、兵站幕僚の方が良いか？」

先導するように歩きながら

——他の幕僚達は荒れていたぞ、と飄然と笑っている。

後ろでは西田少尉達が小さく笑っている。

境内に入った辺りで歩みを止めて唐突に尋ねてきた

「一応訊くがあの報告はどこまで本当だ？」

事実上は、僕の報告に嘘は無い。

「はい、情報幕僚殿。全ての事実は、御報告した通りです。」

「成程、あの報告でも事実ではある訳だ。」

白けた様な半眼で僕を見ながら言葉を続ける。

「大隊長殿が呼んでいるぜ。」

ようやく、一応まともな情報が入ったんだ。

俺と同じ様な事を聞くのだろうさ。」

彼にとって必要な確認を取れたと判断したらしく再び本堂へと歩き始める

「その前に兵達を。」

「それは俺の仕事じゃないだろう。」

兵站幕僚殿に頼め。

彼は真室大橋まで街道の状況を確認すると言っていた。

そろそろ戻ってくるはずだ。」

そう言いながら堂々と欠伸をしている。

確かに彼の任務ではないな。

「部下に命じます。」

猪口曹長達に向って任せたと頷く。

「馬堂大尉、新城中尉、入ります。」

本堂に入ると幕僚達は先に入った豊久を見ずに僕に向って冷ややかな視線を送ってくる。

大隊本部で僕に好意的なのは、今ここには居ない兵站幕僚とさりげなく他人の茶を盗み飲みしながら席に戻っているあいつだけだろう。

あいつとは、二十年近い付き合いだ。

まあ少なくとも彼が居ると知れば少しは気の慰めにはなる。

大隊長室の扉を叩く。

「新城中尉入ります」

おざなりな返事が返る。中に入ると大隊長伊藤少佐は、屈み込み火鉢に吸っている葉巻の灰を落としながら言った。

「若菜大尉の事は報告を受けた。

後で受勲を申請するつもりだ、少なくとも感謝状は出るだろう。」

遺族は喜ぶだろう。将家とはそういうものだ。

少佐は火鉢から顔を上げた苦勞が刻まれている顔だ。

内乱で彼が主家としていた将家が亡びてからは軍の主流から外されている。

黒ずんだ階級章が彼の今を象徴している。

いや、僕も似たようなものか少尉の階級章との付き合いも何年になったか。

「到着が遅れた理由は？」

「はい、先の報告の通りです。大隊長殿」

「馬鹿野郎！天龍と出くわした！？そんな与太信じられるか！

貴様は若菜大尉を見捨てて後退した。だから遅れたのだろう！」

葉巻を火鉢に叩き落としながら怒鳴るがどこが演技じみている。

「はい、大隊長殿。

そうではありません。全ては報告の通りであります。」

空々しい雰囲気が漂う。

結論が出ている会話だ。

「まあいい、損害は役立たずのボンボンと兵三名だけで済んだ、それで十分だ。

貴様は好きになれんな。」

どうやら正直という美德は持ち合わせているようだ。

伊藤少佐は葉巻の代わりに、細巻に火を着けながら再び口を開いた。

「中尉、他に言う事はあるか？」

言っておくべきだろう。

「敵の可能行動に意見があります。」

大隊長は無言で眉を上げ促す。

「状況から判断して、今夜中に夜襲を仕掛けねばなりません。

放置した場合——」

大隊長が手を振り僕の言葉を遮る

「もういい、それは俺と幕僚達が考える事だ。」

「……」

同じ結論がもうでているのか。

「まあいい、あと二刻で指揮官集合をかける。
今後の方針はそこで決定だ。」

ああ、そうだ。既に馬堂大尉が話したろうが貴様に第二中隊を任せ
る。

若菜よりましな所を見せてくれ。」

どうやら昔は、有能な将校だったらしい。

いや、あいつが悪く言わなかった事も考えれば今もそうか？
そう考えながら僕は敬礼をし、退出した。

同日 午後第七刻半

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部 開念寺

情報幕僚 馬堂豊久

夜襲作戦での俺の任務は第一、第二中隊の騎兵砲分隊を再編したも
のと

大隊騎兵砲小隊、観測・戦況把握のための導術分隊・護衛の鋭兵小
隊からなる集成中隊の指揮の予定だ。

まだ正式に決定してないがその準備も必要だ。

「無茶を言わないでくれ」

申請書類を読み終え、開口一番、兵站幕僚が呻いた。

「やはり騎兵砲の補充は無理ですか？」

同じ大尉でも先任であり立場も経験も上だ。当然敬語を使う

「そもそも損失した砲が一門なのになんで要求が三門なんだ。」

「着弾観測と戦況の把握にまだ元気な導術兵を使うから砲兵が余る
のですよ。」

敵に突っ込むのは剣虎兵と尖兵の仕事です。

数少ない砲兵を専門外の地に送る意味は無いでしょう。

砲兵に白兵戦は無理ですよ。」

兵站幕僚は溜息をついて嫌な現実を言う。

「まともに要求を出していたら百年たっても届かないぞ。

輜重段列は糧秣と弾薬で満載だ。」

それは残念ながら見ればわかる。

「真室大橋の方はどうです？ 見に行ってきたのでしょうか？」

彼処に集積所を一時期おいていた筈だ。

「あそこは逃げ出した連中の装備が山のように棄ててあった、多分砲も有るだろうな。

それに街道も除雪済みだ。その代わり憲兵がいるが」

憲兵か、こんな時に面倒な。最悪——いや、無理か。

どのみち足がない。

「馬はありますか？」

騎兵砲の人力牽引は無理だ。猫に慣れていなくても馬のほうがマシだ。

撤退時に身に染みた。

「四頭はぐれた奴が彷徨っている。だがこれも急がないと接收されるぞ。

お前の部隊の編成は正式には指揮官会議の後だろう？
人手はどうする？」

「頼む相手はいますよ。もう兵站幕僚じゃない筈ですがね。」

・
・
・

「それで僕ですか」

大隊長室から出てきた新城を確保した。

嫌そうな顔をしているのは完全無欠に気のせいだ。

「まあ砲の損失が出たのは中尉の部隊だからね。」

若菜のアホが撤退時にもたもたしたせいだが、後任は新城だ。
砲の補給は彼の任務だ。

ちよつとだけ無茶を入れるだけだ。

「ここに偉大なる兵站幕僚殿の一筆がある。馬の発見場所もこれに書いてある。

後は新城中尉、貴官に一任する。」

華麗に敬礼をし、クールに去ろうとしたら後ろ首を掴まれた。

一応、俺は上官だぞ。文句を言おうとふりかえる。

「艦についても一筆貰って来て下さい、可及的速やかにお願いします。」

——僕も色々と入用なので。」

第三話 猫達の帰還（後書き）

基本は小説準拠ですが、展開的には漫画版も混ぜてます。テンポを考えると漫画の方が良いので

それにしても新城は難しい。他の人達は割と好き勝手・・・もとい描写が少ない分動かしやすいのですが。

第四話 指揮官集合 そして会議は踊る間も無く

皇紀五百六十八年 二月九日

午後第九刻 独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部 開念寺 本堂
情報幕僚 馬堂豊久大尉

「第二中隊の報告によれば敵の先鋒部隊は増援を受けてわが方に接近中である。だが我々は撤退支援の為に後2日は撤退の許可はおりない。このままでは明日には連隊規模以上の敵と交戦する事になる。」

幕僚会議の結論を伊藤大隊長が述べる。

この言葉に集まった20名近い将校達が呻き声をあげる、中には新城を睨み付けている者もいる。

無意味な八つ当たりだ。彼が連れてきた訳でも無かるうに。

「結果は分かり切っている誰も生きて故郷くにには帰れん。」

もはや誰も声をあげない。睨みつけていた者も目を伏せる。

「さて、それではこれから大隊長の構想を述べる。説明は戦務が行う。」

戦務幕僚が立ち上がり先程の会議で決定した夜襲作戦を解説する。

最優先目標は、敵本部

戦闘時間は、最大一刻。

さて、夜襲・乱戦は剣虎兵が最も活きる作戦である。

同数の敵なら損害は皆無のまま一方的に殲滅出来るだろう。

だが、問題は敵の数だ、多過ぎる。

敵の連隊は 皇国 陸軍の旅団規模に近い。

上手く乱戦に持ち込めても相手が統制を取り戻したら包囲されて猫ともども蜂の巣になるのは明らかだ。 限界を一刻と想定しているが実際はどうなるのか分からない。

それより早く統制を取り戻される可能性はある。相手の指揮官次第

だ。

そして、この作戦は中止の場合を想定していない。何故なら中止する程の大軍と正面から殴りあう位なら夜襲で戦う方がまだマシと言う事だ、撤退しても増援すらないのだから。皆逃げるのに必死だ。その上、実仁親王直卒の近衛旅団も後衛戦闘を行っている。

宮様直卒の部隊を本格的に戦闘させない為にも独立大隊の俺達ここにいるのだ。

政治的にも増援は有り得ない、来るとしても近衛が撤退してからだ。そして宮様はギリギリまで粘るつもりらしい。

それを踏まえ、現在の逼迫した状況を考えると数少ない多勢相手に打撃を与えうる機会だ。

撤退は出来ない。

俺は作戦の開始・撤退の合図である燭燐弾を打ち上げる軽臼砲を含めた大隊騎兵砲小隊と

第一・第二中隊の騎兵砲分隊からなる二個騎兵砲小隊、

そして護衛の鋭兵小隊で編成された集成中隊の指揮を任じられた。

支援と退路確保が任務だ。

着弾観測と戦況の把握に導術を使うが如何せん導術兵の疲労が激しく使えるのはせいぜい三人、

それも長時間酷使する事は出来ない。

そして第二中隊も砲はまだ補給^{強奪}していない。

せめて後一個大隊——いや一個中隊分の剣虎兵と余力のある導術分隊が居れば

俺達の生存率も跳ね上がるのだが・・・。

やれやれ無い物ねだりでさえ貧乏臭くなってきたな。

思わず苦笑が浮かぶ。

猪口曹長達が砲を確保してくればまだましになるが、さて、どうかな…。

午後十二刻七寸 開念寺 境内

第二中隊長 新城直衛中尉

猪口曹長達が戻ってきた。

大量だったらしく馬に牽かせた三台の櫓にかけた油布が盛り上がっている。

「大漁じゃないか。これなら砲も。」

豊久は、期待に目を輝かせている。

「騎兵砲は駄目でした融通のきかない憲兵が頑張っておりまして。いきなりその幻想がぶち壊された。」

「憲兵は殴り倒すものだろうに。」

本気の目で唸る様に言っている。少々涙ぐんでいるのは気のせいだ。その様子を面白そうに見ながら猪口は報告を続ける

「その代わり面白いもんを二種程見つけました。」

そう言って二台の櫓から布をはぎ取り箱が満載されている二台から中身を取り出す。

「^{ライフル}施条銃じゃないか！」

本人曰くささやかな夢が破れて、無気力に柱に寄りかかっていた馬堂がそれを見て驚愕し、声をあげた。

「値が張るからって守原大將は専門兵科の鋭兵の分すら満足に買わなかった筈だぞ！」

櫓二台だから八十、いや、百丁位か？

一体何処から拾ってきたんだ？」

「そういえば、大尉の御父上は、蓬羽兵商に投資していましたね。」

彼方此方の商売に投資し、かなり儲けているらしい

数年前に手を出したと噂になっている。

駒州内の財政にも利益を出しているので駒城公も容認している。

「蓬羽兵商、皇国最大規模の銃器製造会社の蓬羽ですか？」

様子を見に来た西田少尉が目を丸くして豊久に尋ねる。

「祖父が兵站畑だからな。口も出しやすい。」

癒着だ、癒着。と愉しげに毒づく。

馬堂家は代々、駒州軍の兵站や財政関係で働く者が多いらしい。

大昔、駒州の馬の管理を一任されていた程の重臣であり、

その家格は駒城の譜代でも益満に次いで高い。

そして五将家の闇は家の仕事上、益満家以上に知り尽くしている。

だが、今の当主代行（豊久の父）は政財界の実力者の衆民達と結びつきが強く

「主家を軽んじて金を持った衆民に尻尾を振っている。」

と陰口を叩く者もいる。

年賀の挨拶で会った彼の父、豊守は、

自分は将家ではなく商家出身だ

と冗談混じりに自称していた。そういう家風なのだろうか。

漆原少尉が思い出した様に口を開く。

「そう言えば馬堂家の方が駒州公の代理として衆民院にいらっしやつたと父が言っていましたね。」

漆原少尉の父は衆民院の議員だ。衆民院でも顔売っているのか。

「馴じんでいただろ。我が家は父の代から商人の家だからな。」

そう言つて口を歪めた。

矢張りそういう家風らしい。

「大尉殿、騎兵砲ではありませんが持つて来られた物がありますよ。」

その様子を面白そうに見ていた猪口曹長が口をひらいた。

「何だ？一応俺の麾下に入る鋭兵は皆、施条銃を装備しているぞ。」

「もちろん違います。擲射砲です。」

捕まえた馬を三匹とも使いましたが、ありやなかなかのモンですな。砲弾もここに三十発程。砲もそろそろ追いつく頃ですな。」

豊久は、感嘆の声をあげて薄らと見えて来た砲を見ようと歩いていた。

先程の教育が効いている。士官は走るものではない。

「しかし、豊久——馬堂大尉じゃないが大漁じゃないか。本当にどこで拾った。」

「迷子になっていた輜重兵どもがいましたね。それも三台の馬膺付きで。」

オマケに後方の砲兵旅団から馬を怪我させてはぐれた馬鹿もくっついておりまして。」

それで、まあ、そいつらに道を教えてやったのですよ。」

どの様に教えたのかは聞くまい。曹長の事だ荷を軽くする気遣いも忘れなかっただろう

西田が笑いを噛みしめている。

漆原は困った顔をしている真面目すぎて苦労する類の人種のようなだ。

「銃は何丁ある。」

「百丁きっかりです。実包の方は手持ちの物で代用出来ますので砲弾を優先しました。」

「成程。曹長、貴様の判断で中隊に配分しろ。」

まず尖兵に優先するように。足が遅くなると嫌がったら僕の命令だと伝える。」

僕も一丁貰うとしよう中隊長が持つことは規則違反だが

銃剣を着剣したら長槍代わりにもなる。

他の銃よりも銃身が長いので白兵戦でも有利だ。

鋭剣と一発限りの短銃だけでは心許ない。西田少尉と漆原少尉も僕に倣う。

ひとまずこれで僕に出来る準備は終わった。

後は死地へと赴き殺し、殺されるだけだ。

第四話 指揮官集合 そして会議は踊る間もなく（後書き）

感想を頂けたら嬉しいです。

第五話 暗闇に響く咆哮（前書き）

戦闘シーンは難しいです。

第五話 暗闇に響く咆哮

皇紀五百六十八年 二月十日

午前二刻三尺 伏撃予定地点

独立搜索剣虎兵第十一大隊 集成中隊 中隊長 馬堂豊久大尉

「冷えるな……」

伏撃予定地点への布陣は完成しつつある。

俺達は本部の前方で配置を終わらせていた。

騎兵砲と鋭兵で第一中隊の突撃を支援を行い、

その後は第二中隊の後方へ回り込み退路を確保する。

——時間との勝負だ、敵が統制を取り戻すまでに制圧しなければ包囲されてしまう。

そうなると扱いに困るのが擲射砲だ。

馬の牽引でも足が遅くなってしまう。

しかも馬が猫に慣れていないから離さないといけない、

第二中隊の方に、大隊長の許可を得て配置した。

一応移動を最優先にと後方に配置したが大丈夫だろうか。

連れてきた導術分隊は艦で休ませている、敵が来るまで消耗は避けたい。

だが、夜間だけあって凄まじく冷え込む。無風なのが救いだ。

「中隊長殿。風が吹かないだけマシですよ。砲弾も流されませんか
らね。」

最先任曹長の冬野曹長が答える。

五十路間近である経験豊かな下士官だ。

「まあな、だがこの気温で兵を凍えさせると動きが鈍くなる。」

「なんとまあ、敵に早く来てほしいと？」

この男、軽口を叩かないと死ぬらしい。

「むしろ帰ってほしいな。腹下したりして。」

馬鹿を言つて二人で失笑を交わす。似た者同士だ。

「フン、臆してはいないようだな。」

伊藤少佐が歩いてきた。

皆、敬礼する。

どこか上機嫌そうである。

「分かっているだろうが退却の判断は貴様に任せる事になるだろう。大隊本部は突入し、敵と交戦しつつ指揮をとる。」

「!!!」

本部も戦闘する？初耳だ。

「貴様は導術で戦況を把握し、一刻以内に退却の機会を見計らつて合図の青色燭燐弾を打ち上げる。」

もし、本部が全滅したら最先任大尉の貴様に指揮権が移る。貴様が大隊長だ。」

にやりと笑う。まさか、死ぬ気なのか。

「返事はどうした!!!」

！いかん、俺としたことが。

「はい！大隊長殿、確かに拝命いたしました。」

無理矢理、祖父の教え通りに不敵な微笑を貼り付ける。

「俺の指示で赤色燭燐を打ち上げる。その後は作戦の範囲内で貴様の判断で動け。」

大任だ。俺に出来るか？

だが此処は軍隊だ。俺は軍人だ、それも将家の跡継ぎだ。ならば答えは一つ。

「・・・はい、大隊長殿。」

ぎこちなく——だがしっかりと口を歪めた。

・
・
・

来た・・・周囲の——第一中隊の猫達が一斉に首を動かす。そして我々の耳にもはつきりと足音が聞こえる。

遂に前衛部隊が視界に入った。

旅団だ。最低でも、旅団規模。

固唾を飲む。落ち着け、必要な命令を下さなくては。撤退は、増援は、無い。

「曹長、各小隊に伝達、第一中隊が突撃後速やかに第二中隊の後方に移動、退路確保を支援する。

軽臼砲には、赤色燭燐弾の打ち上げ用意を。」

「了解であります。中隊長殿。」

後は大隊長の判断次第だ。

同日 同刻

第二中隊 中隊長 新城直衛

接眼鏡を下ろす。

「中隊膝射姿勢、擲射砲分隊は敵中央に砲撃用意、復唱の必要は無し。」

声が震えないように注意しながら言う。

僕も自分の銃に装填をする。

全てがまずい方向にうごいている。

敵は最低でも旅団、いかに伏撃野襲でも大隊規模では幾ら何でも役者不足だ。

前衛をやりすぎすという計画は崩壊した。

だが撤退は不可能だ。まさか青色燭燐弾を打ち上げるわけにはいかないだろう。

それに撤退しても増援の当てはない。

攻撃しかない。だが、合図がこない、独断で撃つか？

そうすれば大隊主力も呼応せざるをえない、僕が見捨てた若菜の様に――若菜と同じ？

しかし僕は正しい筈だ。

いや、

だが。

僕の躊躇を打ち切る破裂音が聞こえた。遅れて赤光が敵を照らす。開戦の合図だ！

「撃てっ！」

一瞬間が閃光に駆逐される。

そして再び闇に包まれた瞬間、砲声が轟いた。

馬堂の中隊が合わせたのだろう。

敵が動揺している。

燭燐弾が次々と打ち上げられ敵を照らす。

思わず渴いた笑いが出た。先鋒だけで大隊規模、つまり敵は恐らく二個旅団。

「中隊長殿？」

猪口が僕に声をかける。

ああ射撃を途切れさせてはならないな。

「総員、撃てえ！」

今度は、後方の擲射砲も火を吹く中央の騎兵集団……将校達の頭上に散弾が炸裂した。

初弾命中とは何て幸運だろうか。

「よし剣虎兵、及び尖兵、総員着剣」

豊久の我儘の戦果、存分に活用しなくてはな。

同日 同刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 集成中隊

中隊長 馬堂豊久

第一・第三中隊が突撃を開始した。俺達も急いで移動しなくてはならない。

包囲だけは何としても避けなくては文字通り全滅してしまう。

「騎兵砲小隊は両隊とも移動開始が可能です。」

「よし、鋭兵小隊は装填、着剣の用意もさせろ。側道を通り切る。」

敵の数が予想以上に多い、第二中隊も援護が必要だ。」

「危険ではありませんか？」

「勿論危険はある、だが最短距離は八百間程度だ。剣虎兵達の強襲で敵は釘付けになっている。」

今ならまだ可能だ。当然、騎兵砲は迂回させる。導術分隊も櫓に載せて同行させる。」

どちらも危険に晒す事は出来ない。

「了解であります。中隊長殿は？」

鋭兵小隊長の杉谷少尉が聞いた。

「俺は鋭兵小隊を直卒する。」

杉谷少尉も同行してくれ。」

自分の口にした言葉で恐怖がこみ上げる。腰に下げた特製の短銃と鋭剣が急に重くなる。

「行動、開始だ。」

・
・
・

しかし流石は、剣虎兵だな。

強力であるし何より派手だ、敵を完全に引き付けている。

急げば無傷で到着できるかもしれない。

成功するか、敗北するか、全ては時間の問題だ。

「大尉殿！」

「何だ？」

「二刻方向に！」

言われた方向に目を向けると乱戦から外れ統制を取り戻したらしい小隊が剣虎兵達へ銃口を構えている。距離は・・・五十間位か。

「総員、二刻方向。用意、撃て！」

敵の半数以上を殺れた。

残りは気がついた猫達に薙ぎ倒されていく。

あれは西田少尉の猫——隕鉄か

・・・うわ・・・手が千切れて牙に刺さってる・・・。
・・・っと 急がなくては。

同日 同刻

第二中隊 中隊長 新城直衛

猪口曹長がやってきた。

「この敵は片付きましたな。大半が逃げております。」

「損害は？」

「兵が三名程、将校と猫は皆無です。」

上々だ、鋭兵小隊の援護が効いたな。

「撤退しますか？」

横から声がかかる。

「おいおい、いかんよ。曹長、それを決めるのは俺だ。」

豊久が鋭兵達を引き連れてやってきた。

此奴は砲兵上がりなのだが、流石に度胸があるな。

彼の片手には特注の短銃が握られており、その銃口からはまだ煙が立ち登っている。

僕の様相を見て顔を顰めた。

返り血は兎も角、壊れた銃を棍棒の様に使ったので

銃床と顔に色々とかびりついているからだろう。

「新城中尉、俺達は発起線まで後退して退路を確保する。」

「なら兵藤少尉麾下の尖兵小隊をお願いします。」

擲射砲分隊もお返しします。

僕達は大隊主力の援護を。」

「了解だ。此方も導術で情報を収集するが、もしもの時は指揮を頼む。」

・
・
・

本部を狙っていた中隊規模の銃兵を片付け、漸く本部の周辺にたどり着いた。

流石に息が切れる。

「どうした！もう疲れたか！」

・・・大隊長か？まるで別人の様に澆刺としている。

豊久の言っていた通りに本部要員まで戦闘に投入したらしく供は二人のみだ。

「前衛は潰しました。退路は馬堂大尉の中隊が確保しております。」

そういうと応えるように砲弾が交戦している敵の後方で炸裂した。死人は居ないが動揺している様だ。

豊久の指揮下にある擲射砲か？

「成程、ついでに此方も手伝え。」

そういつて示した敵は方陣を組みかけている。

再び敵の後方に擲射砲が着弾した。

一拍おいてから霰弾が炸裂し数人が吹き飛ばされたが統制は崩れない。

流石に導術兵だけでは着弾観測が難しい様である。

此処は僕達が働かなくてはな。

「願ってもないことです。」

そう言うのと頷いて大隊長は駆け去った

・
・
・

二度程突撃をかけ敵を突き崩しつつある。

だが敵も態勢を整えつつあり、僕達も大隊主力も損害を出しつつあったが押し勝ちつつある。

その時帝国軍が大量の白色燭燐弾を打ち上げた。後続部隊が追いついたのか！

大隊主力が斉射を浴びて次々となぎ倒される。

騎兵中隊が僕達の脇を駆けていく砲を排除するつもりか。

青色燭燐弾が打ち上がる

将校が僕の前に飛び出してきた、銃を再び叩きつけ頭を叩き潰す。

抜けない

抜けない

口から妙な唸り声がでる。

千早の唸り声が聞こえて手を離す。

頭が一気に冷えた、僕は何をしていたのだ。

腰には鋭剣と短銃がぶら下がっている。

そして千早もいるじゃないか。

猪口曹長が駆け寄ってきた。

「大隊本部は？」

「全滅です！大隊長殿も戦死なさいました。」

「成程、指揮権は馬堂大尉に移ったか。」

青色燭燐弾も上がった、負傷者を救出し急ぎ撤退する。」

同日 同刻

集成中隊 中隊長 馬堂豊久

「中隊長殿！

集結していた主力が斉射を受けています！！

大隊本部が！」

導衛分隊長が悲鳴の如く声を上げる。

「落ち着け。

順序正しく話してみな。」

他人が焦ると自分のかえって落ち着く質だ。

これで少なくとも見栄は保ってられる。

「——集結した、主力が、潰乱しています。

大隊本部は——先頭に立っていた様です。」

——何と言っことだ。

大隊長は、失敗したのか？

いや、覚悟していたのだろうな、少佐は。首を振って現実に戻る

——否、感傷に浸る贅沢は後だ。撤退の指揮をとらなくては。

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

「青色燭燐弾を打ち上げる。二度打ち上げたら軽臼砲は放棄、擲射砲分隊と合流し、後退せよ。」

導術分隊は今念寺の輜重中隊へ連絡、その後は、残存部隊の位置を探れ。

騎兵砲小隊・鋭兵・尖兵小隊は、撤退を支援。指揮は俺がとる。」

「中隊長殿！中隊規模の騎兵が此方に向かっています！」

（おそらく）導術兵が叫び声をあげた。

——糞、退路を断つか、余程の自信があるのか。

「砲撃をしろ！導術！捉えた方向を指示しろ！」

砲声が轟く騎兵砲二門と擲射砲一門による霰弾が敵に降り注ぐ。

だが、生き残りの騎兵が青色に照らされながら此方に向かって来た。胸元が青い光を反射した。——自信があるはずだよ、畜生。

精鋭の象徴である胸甲を着けた敵騎兵は、俺に向かって突撃してきた。

「畜生！頭狙いか！」

短銃を抜き、先頭の騎兵を撃つ。

倒れない？糞ッ遠いか！？

一瞬焦ったが

その騎兵は一拍おいて胸を押さえ、悶絶しながら落馬した。震える手で玉薬を火皿に注ぎながら叫ぶ。

「近接用の散弾はまだか？」

「間に合いません！」

冬野曹長が応える。射角の調整もこう暗くては手間取る。

「大隊長殿！」

上手い！鋭兵達が上手く囲んでいる。

「杉谷少尉！兵藤少尉！

やれ！！」

五十発以上の弾丸によつて騎兵は全滅した。

俺が気を緩めた。その時

「大尉！」

俺が撃った騎兵が鋭剣を抜き、起き上がった。

「痛つ……」

俺の左腕に神経を焼く激痛が走った。

胸甲に輝が入っているが貫通する威力は無かった様だ。

「糞ッ……」

拳銃の輪胴を回し

敵の首を狙い

撃つ。

脊椎ごと首を撃ち抜かれ今度こそ倒れた。

「大尉！」

冬野曹長が駆け寄ってきた。

二の腕から血が流れている。

深くは無いがかなり痛く、出血も割と激しい。

――よし、動くな、止血をすれば問題無い。

「大丈夫だ、生きてるよ、止血を頼む。

導術を呼んでくれ。」

輪胴式を無理を言つて作らせたのは正解だった。
リボルバー

連射は無理だが玉薬を注ぎ輪胴を回すだけで撃てるのは助かった。

一々棒で突き固めるのよりは遥かにマシだ。

「部隊の撤退状況は？」

疲労困憊している導術分隊長が答える

「はっ……どうやら負傷者を救助していたらしく手間どっていませんが、

現在此方に向かっています。」

そう言いながらも少し体を揺らしている。

——導術兵達も限界か。

指揮しているのは誰だ？

第一中隊、第三中隊はどうなっている？

主力が叩かれた、と言う事は——そういう事なのだろうが。
第二中隊の救援が間に合えば良いが。

「杉谷少尉・兵藤少尉は各小隊を使って撤退の支援を。
擲射砲分隊・騎兵砲小隊は撤退しろ。」

冬野曹長に止血をしてもらいながら指示を飛ばす。

——散りすぎたな、これでは集結に時間がかかりすぎる。

銃兵達が戦列を組み直して前進していくのを見守る。

退路の確保はこれで行くのか？

新城は——直衛は無事だろうか？

同日 同刻

第二中隊 中隊長 新城直衛

「負傷者達は？」

「五十名程救出に成功しました。孤立していた者達も合流出来ました。」

猪口が答える。

「但し二十名程戦死者が。」

やむを得まい。そろそろ限界だな。

「宜しい。直ちに撤退だ。今宵の地獄はここ迄にしよう。」

・
・
・

「思ったより遅かったな。」

負傷して顔を少々青ざめながらも新しい大隊長は、

銃兵達と共に最後まで残り、将校の見栄を守っていた。

「申し訳ありません。大隊長殿。」

そう言うとき豊久は一瞬寂しげな表情を過らせた。だが直ぐにふてぶてしい笑みを浮かべた。

「第一・第三も合わせてこの数か――

中尉、撤退するぞ。当分は扱き使わせてもらつ。人手不足だからな。」

此処にいる全員で百名に届くか届かないかだ。

こいつも人使いの荒い奴だ。

まあ、若菜の数倍はマシだろうな。

「了解であります。大隊長殿。」

兎にも角にも軍隊故に選択権は無いが。

少なくとも最悪から片足を抜いてはいられるだろう。

第五話 暗闇に響く咆哮（後書き）

感想を頂けたら嬉しいです。

第六話 司令の思惑 司令の訪問

皇紀五百六十八年 二月某日

東海洋艦隊旗艦内 北領鎮台司令部

「速やかに夏季総反攻作戦の作成にかかれ！」

北領鎮台司令長官 守原英康大將は焦っていた。

この北領に於いての大敗は皇国全体にとって以上に守原家の痛手となっていた。

北領の利益の独占は守原家の栄華を支えるのに十二分な権益を与えていたのだ。

太平の世であつた四半世紀の間、護州鎮台と北領鎮台の二軍を保有しえる程に。

だが、裏を返せば北領こそが守原家の生命線だと言う事である。

北領から得ていた利益を失った事で長期に渡ると護州軍の維持すらも困難な状況に陥った。

北領鎮台の惨敗と財力の大幅な弱体化により守原家の発言力は大幅に弱まる。

現在の状況を打開する為には、只一つ北領の早期奪還しか無いのである。

完敗を喫したばかりの帝国軍を相手に早期に勝利しなければ守原は五将家の座から転落してしまうのだ。

だが、それは五将家、否、皇国の持ちこたえる政治・軍事力の全てを使い、漸く可能性が見える夢である。

詰まる所、守原大將が精力的に反攻の策を作成させている理由は守原の権勢の保持の為であり、其処には表向きに掲げている皇国に対する大義は欠片も無く。

そしてそれが可能かどうかを考慮する事もなかった。

鎮台司令部は転進に関しては最早何も興味を示さず、

只この立案に掛り切りであつた。

二月 十三日 午前第五刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部

首席幕僚 新城直衛中尉

「助かつたな」

義姉が相手の淫夢を見て股間が凍傷になるなんて話は情けなくて笑い話にもならない。

早々に目が覚めて助かつた。

便所へと歩きながらこれからについて考える。

大隊は真室大橋南方十里の地点に宿営している。

現在生き残つた士官は七人のみ、大隊長の馬堂大尉、

首席幕僚（本部には三人しか士官はいないが）の僕、新城中尉。

そして鋭兵の杉谷、尖兵の兵藤、

剣虎兵の西田、漆原、妹尾。

皆が少尉だ。

少尉が中隊を率い、下士官が小隊を率いている状態だ。

猫は十匹しか生き残っていない、

豊久が神経を尖らせていたお陰で導術兵と砲だけが損害を出していない。

だがそれらも消耗が激しく砲は弾切れ寸前、導術も疲労が激しく休ませなくてはならない。

まともな戦争はやはり不可能だ。豊久も何か考えている様だが。

真室大橋を落として時間を稼いだが補給が無いともはや限界だ。

だが豊久はこの部隊の早期撤退が許可される可能性は薄いと考えている。

何故か？

同じ最後衛にいる近衛旅団を、実仁准将を、皇族を戦死させる事も英雄にするわけにはいかないからだ。

陸軍の中でも衆民の將校が増えている時に皇室直属の近衛、それも弱兵で有名な近衛衆兵——衆民の部隊——がこの負け戦の殿軍を為し遂げる。

それも親王が直々に指揮をして、だ。その意味は推して知るべし。失敗しても敗北したのは司令である守原大將だ。

何方にしても守原は弱まり、皇室が強くなる。

守原英康がそれを容認する筈は無い。

・
・
・

考え込みながら歩いていると露天の便所に着いた。

隣で千早の喉を掻きながら

用を足していると豊久が歩いて来た。

ふと立ち止まり空を見上げている。

「どうしましたか？大隊長殿。」

「ん？新城——中尉か。」

ほら、あれ、使いが思ったよりも早く来たみたいだ。」

同日同刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊上空

皇国水軍転進支援本部司令 笹嶋定信中佐

凍えそうだ！むしろ鼻の穴が凍って貼りついている！

「頼むから早く下ろしてくれ！」

「もうすぐ到着しますよ！中佐！この負け戦の最後衛で踏ん張っている勇者達の所に！」

「こいつから降ろしてくれるなら馬鹿でも勇者でも構わんよ！」

風が強いので怒鳴りあいになってしまう。

「見えましたよ！」

目を下ろすと便所の近くで用を足し終わったらしい將校が此方を見

つめている将校と話している。

あの二人がそうなのだろう。

「あの二人の近くに降ろしてくれ」

二人が近寄って敬礼した。

「独立搜索剣虎兵第十一大隊大隊長、馬堂豊久大尉であります。」

幾度か戦塵に晒した砲術屋だと聞いているが

それでも柔和な顔つきと声をした青年だった。

振る舞いは兎も角、顔つきは将家には見えない。

——その中身は如何程なのだろうか。

「独立搜索剣虎兵第十一大隊首席幕僚、新城直衛中尉です。」

その隣に立つのは剣齒虎を連れた仏頂面の男だ。

駒城家の人間だと聞いているが、とてもそうは見えない。

「私は笹嶋定信中佐、水軍だ。転進支援本部司令。」

答礼する。さて、本題に入る前に朗報を伝えるか。

「おめでとう馬堂少佐、新城大尉、君達の野戦昇進が正式に認可された旨、

本日中にでも連絡があるだろう」

二人が顔を見合わせ——顔をしかめた。

同日同刻

第十一大隊本部

第一集成中隊・中隊長西田少尉

「おい、あの龍に乗ってたのって司令だってよ。ついでに撤退命令も出たんじゃないか？」

第二中隊長の兵藤少尉が夢みたいな事を言っている

「いや、それは無いって、大隊長が言っていただろ？」

近衛が退くまでは増援は兎も角、撤退はあり得ないよ。」

大隊長は、間違いは言わない。

将家の人にしては変り者だが先輩が——新城大尉がそういう程に優

秀だ。

元々古くからの友人らしい。

駒城の育預と駒城譜代の次席とも言える馬堂家の嫡男だ。顔を合わせる機会はあったのだろうか。

——変人同士だからかな？

どうでもいい莫迦な事を考えると——少し気が軽くなった。

「それに馬堂大隊長殿達を野戦昇進させたのですから、まず無いでしょう。」

第三中隊長の妹尾少尉も口を開いた。デス・マス口調が抜けない生真面目な人だ。

本部付き鋭兵小隊長の杉谷少尉も首を振って言う

「気持ちは分かるがね。」

八百人以上いた大隊も三百半ば、それも三分の一が他の部隊の敗残兵の寄せ集め。

大隊長達も何か考えているようだが補給がなければ何も出来んな。」

本部幕僚の漆原が続ける

「頼りの砲は弾切れ寸前、猫は十匹しかいない
使える導術兵も疲労困憊の十人きりだしね。」

兵藤がお手上げとばかりに手を上げる

「だから撤退だつて撤退！」

皆、溜め息をつくそうだったらどんなにいいか・・・

同日午前第五刻半

独立搜索剣虎兵第十一大隊宿营地 大隊長天幕

皇国 水軍転進支援本部司令笹嶋中佐

出された黒茶を飲んで人心地つく、

「それで、わざわざ寒い思いまでしてこの敗残兵の敗残兵達にどのようなご用件で？」

諧謔味を滲ませた目で私を見ながら馬堂少佐が口火を切った。

答える前に細巻を二人に渡す。

新城大尉はそのまま火を着けたが馬堂少佐は大事そうに細巻入れにしまった。

性格の違いが見て取れて面白いな。

「その前に部隊の状態は？戦闘は可能かね？」

新城大尉が顔をしかめる。馬堂少佐は飄々と肩をすくめて言う

「今のままなら輜重隊相手なら目の色変えて戦えますがね。

補給を受けないと話になりません。

補給を受けた後ならそうですね・・・。

後衛戦闘——殿軍なら5日程度は誤魔化し誤魔化して何とか。」

成程、状況によるか。

「ならば、攻撃はどうかね？」

例えば相手の後方に潜り込み、伏撃するとか。」

馬堂少佐は目を覆って数秒考えてから新城大尉に目をやった。

「どうかな？」

「情報があれば可能です。兵員は半減していますが、猫が十匹います。」

白兵戦では一匹で銃兵一個小隊以上の戦力になります。」

新城大尉が答える。

それに頷いて馬堂少佐が言葉を次いだ。

「兎にも角にも補給ですね。

集積所では物質は余っている様ですが、肝心要の前線への補給が滞っています。」

現状では糧秣すら不足しています。

戦場から馬の死体を持ってきても融かす為の火が使えません。

夜は当然ですが、日中でも煙が目立ちますから。

かと言って、凍ったままでは猫は兎も角、人間には食べられません。

腹を壊しても此処では満足な治療が出来ませんからね。」

「猫？」

新城大尉が答える。

「剣牙虎のことです。僕はそう呼びます。可愛いですよ。」

可愛い・・・ねえ

彼の後にいる剣牙虎に目を向ける

「まあ確かに頼もしくは見えるが・・・」

私としては可愛がるには色々と大きすぎる。主に体と牙が

「貴方々の船の様なモノでしょう。」

大尉が薄く笑みを浮かべる。

そういうものか。

さて 閑話休題 だ。 本題に入ろう。

「君達に頼みがある。」

そういうと新城大尉は笑みを消し、馬堂少佐は飄然とした表情を変えずに僅かに姿勢を正した。

「その前に、宜しいですか？」

大隊長が軽く掌を挙げながら言う。

「失礼ながら。中佐殿の権限を伺いたいのですが。鎮台を、陸軍をどの程度動かせますか？」

その声は和やかではあったが感情は一切込められていない。

——やはり聞くか。

「当然の質問だな。私は転進支援司令として転身作業全般を監督する権限を与えられている。」

「指揮ではなく、監督ですか・・・。鎮台司令部がいつでも口を出せる と。」

少々憐れむ様な口調だ。

「ん、まあその通りだな。正直どんな権限なのか自体よく解らん。そうした次第で君達にも下手に出ている訳だ。」

新城大尉が面白みを覚えた表情になる。

馬堂少佐は考え込む時の癖なのかまた目を覆っている。

「で、まあ頼みたいのだ。」

一瞬静寂が降りる。

新城大尉の猫——千早と呼んでいた——が尻尾で地面を叩いた時

少佐がその格好のまま口を開いた。

「・・・何日稼げと？」

解っていたのか！？

「・・・十日だ。少佐。予定が遅延している。」

鎮台を救い出すのに君達に十日稼いで欲しいのだ。」

そうすれば何とかなる。

「我々を除いて、ですか。」

新城大尉が冷え切った表情で訊ねる。

そんな事を聞かないでくれ。俺も良心が傷まないわけではない。

「美名津港が使えれば良かったのだが。」

思わず弱音が出してしまった。

「やはり使えないのですか？」

大尉は予想していたようだ。

「美名津の人口は二千以上です。」

《大協約》は美名津に勝馬に乗る権利を保障していますからね。」

目を再び外界に晒した少佐も皮肉気に口を挟む。

そう大協約の市邑保護の対象だ。協力を強要する事は出来ない。

裏切られても何も出来ずに寒風に兵士たちを晒したままだ。

「家名は上げられるぞ。君達は五将家の駒城家の関係者だろう？」

「それに、一万二千の兵たちと三百五十程度の大隊では良い取引だ、
でしょう？」

まあいいですけど。」

手を戻して不貞腐れた様に馬堂少佐が言う。

「それに私の家は一介の譜代の陪臣ですよ。家名はそれなりですし。

まあ確かに生還しても死んで 帝国 軍糧秣の礎になっても二階級
特進にはなるかもしれませんね。」

どうも私の言葉は感銘を与えるには至らないようだ。

「僕は駒城の育預です。血は繋がっていません。」

孤児がお溢れを頂いているだけですよ。姓も「城」の一字を貰った
だけです。」

新城大尉も苦笑しながら答える。

再び——今度は一寸近い静寂が訪れた。
そして大隊長が決断を告げる

「戦略上必要な事です。やむを得ないでしょう。

——全滅するつもりは有りませんよ？

補給、増援位は我儘を聞いて貰います。」

不敵な微笑を浮かべている。

成程、度胸がある。

「助かるよ。そちらは私が便宜を図る。水軍は衆民が大半だ。
将家絡みの余計な面倒は無いよ。」

守原と駒城の仲は険悪と言っても良い。

これは言っておかないとな。

「それでは、一個中隊の銃兵——可能なら鋭兵を、

それと騎兵砲部隊を二個小隊、擲射砲部隊を一個小隊分。

短銃工兵も二個小隊

それらの増援を糧秣を十二日分

弾薬を十五基数、その他諸々の物資、勿論馬車でお願いします。」

そう言いながら目録を渡される。用意済みか。

「手配しよう。」

改めて目を通す。遠慮がないな。否、当然か。

「宮様——近衛の旅団はどのような様子ですか？」

「ああ、実仁准将は中々の御方らしい。

あの弱兵部隊で撤退命令を固辞して後衛を勤めている。

負け戦にこそ皇族が良い所を見せる必要がある。」と

「そして皇室尊崇の念を、って魂胆ですかね。」

馬堂少佐が肩を竦める。

そう云う本人にはその手の意思は見受けられない。

呆れたように新城大尉が溜息をついた。

遠慮がないな。少佐も咎める様子もない。

譜代と育預、か。

それだけでは無いな、随分と息があっている。

「おいおい不敬だぜ。その言い草は。」

三人とも苦笑が浮かぶ。

馬堂少佐は机から書簡を取り上げる。

「まあ取り敢えずは親王殿下——尊崇すべき御方の弟君に身罷られては困ります。」

これを実仁准将閣下に御願いします。」

私にそれを手渡ししながら尋ねる

「海の様子はどうですか？」

「？そうだな、荒れている。この季節ならそういつものだ。」

少佐は一瞬瞑目し、表情を消した。

「それでは最後にもう一つだけ宜しいでしょうか」

第六話 司令の思惑 司令の訪問（後書き）

次回は金曜日の予定です。

ご意見・ご感想を頂けると嬉しいです。

第七話 榮譽ある死か 恥辱の生か

皇紀五六八年 二月 十三日 午前第九刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長天幕 馬堂豊久少佐

結局、笹嶋中佐への頼み事は二つに増えた。

新城が捕虜取引の時の便宜を頼んだのだ。

彼は作戦に必要な物資と増援を書いた目録と新城と俺との念書二枚そして実仁親王殿下への書簡を携え、近衛衆兵第五旅団の本部へと向かった。

返書は竜も少ないし数日先だろう。

「新城も抜け目無いな。もつと遠慮するかと思った。」

「何、十中八九死ぬと思われているんだ。捕虜になった時位は報われてもいいだろう。」

二人きりなので砕けた口調になる。

「それにお前だって補給やら増援やらで随分と欲張ったじゃないか。」

「ハッ！どうせ港で冷凍保存しているだけなら此方の宴で振舞えつて事だ。」

どうせ砲は載せられずに壊すのだろう、渋る癖にね。

「全く、たちの悪い客だな。」

これで代金じかんを払えなかったら地獄まで追って殺されるぞ。」

お前が言うな。その面で言うな。おお 恐い 恐い。

「まあ代金分を稼いでも死ぬつもりはさらさら無いがね。」

俺は死ぬときは床の上か餅を食っている時と決めているんだ。」

「餅は苦しいらしいぞ。」

「じゃあやめだ。」

風呂場でぼっくり、にしよう。」

左腕の傷を摩る。痛いのも苦しいのも御免だ。

「それにしても何故俺まで大尉に昇進したんだ？」

「さあな。多分将家の者と衆民の差別化を図ったのだろうな。まあそれも・・・」

駒城への貸しも兼ねてだろうな、死ねば嫌われ者の此奴も英霊だ。

「ああ、どうせ死ぬからと。」

「お前だつて死ぬ気はないだろう？」

そんなことより餞別に貰った細巻きどうする？上物だぞ、これ。」

南領産の高級品だ。流石は水軍の選良士官だ。^{エリート}

彼は転進が成功したら統帥部の参謀部戦務課に栄転するらしい。

「半分くれ。で、本当に小隊を真室に送るつもりか？」

水軍の船も回して貰うのだから二度手間じゃないか？」

「海が荒れていると中佐が言っていたからね。」

砲撃する前に沈められたら困る。俺の計画ごと文字通り水泡に帰する。せめて陸路から行動しないと

運以外の全ての要素、いや運すらも塗り潰さないとこの作戦は成立しない。

——おい取りすぎだぞ。」

真室にはそれだけの価値がある。いま此奴がゴツソリ持っていた細巻以上にある。

「確かに、だが、向かった小隊は、ほぼ確実に戦死か捕虜になるぞ。人選はどうする？」

「海が落ち着いたら水軍に回収してもらうよ。」

もし、その前に発見されても役目を果たしたのなら降伏を許可するつもりだ。

——人選ねえ。まず、俺は論外だな。

捕虜になりに行く様なモノだ無責任すぎる。大隊長だから当然だ。お前も駄目だ、遅滞戦闘は出来るだけお前に指揮をとって貰いたい。そうだ、漆原はどうだ？」

「あいつは駄目だ。真面目過ぎる、この手の事は、理解はしても納得しない。」

まさか途中で逃げるとは思はないがね。降伏する前に戦死を選ぶかもしれない

「じゃあ妹尾も駄目だな。杉谷は施条銃の専門家だから手放したくない。」

西田はお前が居ない時の剣虎兵の纏めに必要だ。兵藤はどうだ？」

「それが最適だな。急ぎ指揮官集合をかけよう。」

皆、荒れるだろうなあ。だがやらないと全滅だ。

・
・
・

同日 午前第十一刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部 大隊長 馬堂豊久少佐

「さて、解っていると思うが撤退は許可されない。

我々に与えられた命令は十日間の遅滞行動だ。

増援と補給は来る、だがそれでも以前より弱体なのは避けられない。

諸君、正面から戦ったらどうなるかな？」

別働隊も使うのだ。皆に理解させる必要がある。

漆原少尉が答える。

「まともに戦闘をしたら恐らく二刻もちません。」

まさにその通りだ。

「そう、増援が届き次第敵の渡河の妨害を行うがそれでも無理だ。

二日も稼げれば万々歳だろう。」

息継ぎついでに黒茶に口をつける。

その間に新城が言葉を引き取った。

「しかし、諦める事は出来ない。

ならどうする、詰まる所我らは根性を悪くして戦うしかない。」

新城が独特の偕譚味を込めてそういうと皆それぞれの反応を返した。

西田は不安げな笑みを浮かべ、漆原は失笑しそうな顔 妹尾は鼻白んだ様な顔

杉谷は瞑目して首を振っている　兵藤は予想していた様な顔。

「そう、我等が根性悪の首席幕僚殿が言う通り邪道の戦術を使うしかない。」

極めて例外的な戦術の為、今回はそれを諸君に講義するでしょう。

——兵藤少尉！帝国軍の我等には不可能とも言える行軍能力の背景は何か？」

兵藤少尉が背筋を伸ばして答える。

「はっ！帝国軍の行軍能力の背景にはその身の軽さにあります！兵站集積所、輜重段列に重きを置かず敵地において各隊が自活する事で

その行軍能力を持たせる大きな要因となっております。

北領においても北府の糧秣庫を押さえられた為。

帝国軍はその行軍能力を発揮しております！」

「八十点だな。」

細く補足すると自活を推奨する為に敵地での『愉しみ』

強姦・略奪を推奨する事もその要因の一つだ。

連中一度勝てば馬肉をぶら下げられた猫の様に悦び勇んで

戦果拡大の為に行軍している。」

言葉を切って見回すと、新城以外は皆、不愉快さ、そして怒りに顔を歪めている。

「ならどうするか、話だけなら簡単だ。」

そう、馬鹿な猫には目の前の馬肉を無くせば良い。おたのしみ

補給が無いなら自活の場を壊せば良い。」

漆原が反応する。何を言うのか予想出来たのだろう。

「この先に糧秣庫は——友軍の集結地までありませんが……」

「漆原少尉、話を聞いていたのか？」

糧秣庫には金目の物も女もめつたに見つからないぞ？

連中が戦争を楽しむ最大の場所は町だ。村だ。

この北領では衆民から奪い、衆民を犯し、

帝国の地としているのだ。

我々はそれを破壊する。

徹底的に。」

漆原は認めたくない事を認めて座り込んだ。
無理も無い。

四半世紀前、皇国最後の大規模な内乱である

東州内乱時に村々を味方とする為に五将家は自治体に大きな権限を認めた。

その為に皇国軍は徴発を行えず、代わりに兵站組織が発達した。
そして、報復に当時の東州公は多くの村を徹底的に破壊した。

その生き証人は俺の隣に首席幕僚として座っている。

「大隊長殿・・・まさか・・・」

流石に兵藤少尉も意外なのか。いや当然か。

「そう、我々は帝国の略奪を防ぐ為に村を破壊し、
衆民を美名津へと避難させる。

美名津への輸送は実仁准将閣下の近衛旅団に任せる。

村民を近衛の元へと誘導し、我々は村を破壊する。

ああ、その後に井戸に毒も入れなくては。

この時期ならば効果的だからな。」

「しかし、村を破壊したら軍への信頼が失われます！」

妹尾少尉も怒りを浮かべながら反対する。

「首席幕僚。」

「夜襲地点の付近から帝国兵の軍服を二十人分調達した。

これを着て夜間に村を襲う。当然住民は殺さない。」

新城が説明を続ける。

「翌朝、皇国軍が村を訪れる。帝国軍の接近を警告し近衛に引き渡す。

後は彼らが村人達を美名津に送る。我々は村を焼き、後退する」

漆原が顔を歪めて質問する。

「我らが転進した後に美名津も攻撃されるのでは？
それに受け入れを拒否したらどうなるのです？」

おいおいこれは基本だぞ。

「美名津は大協約の市邑保護条項の適用される軍事設備のない人口二千人以上の集落と言う条件を満たしている。

帝国軍も大協約は守る。それは確かだ。

そして、受け入れ交渉は実仁親王殿下直々に行う。

万が一拒否をしたら村民達が暴動を起こすと脅す。

近衛衆兵は弱兵だからな、武器を置いて逃げ出すかもしれない。」

俺は裏切り者の町が同胞の手で滅びても心は全く痛まない。

身勝手さはお互い様だ。

皆、沈黙する。

「まず真室の穀倉を焼き払う、その為に一個小隊を派遣する。

この部隊は穀倉を破壊した後、水軍の船に回収される予定だ。

それまでに発見されたら降伏しても構わない。」

皆を見回しながら言葉を続ける。

「増援が到着したら部隊を再編する。

遅滞戦闘隊と避難誘導隊に分ける。

避難誘導隊は輜重の馬車等を徴発し、村民の輸送に利用する。

その後、南下して苗川の渡河点、小苗橋にて布陣。

野戦築城に取り掛かる。

以上が大隊長の構想だ。」

一息ついて黒茶を飲む。

その様子を見計らって新城が口を開く。

「誰か質問はあるか？」

西田少尉が訊ねた。

「近衛達には教えるのですか？」

「まさか。機密は知る者が少なければ少ない程、漏れないものだ。

近衛には誠心誠意背後に迫っている帝国軍から人々を逃がして貰う。

「

機密保持の原則である。

それに嘘はついていない。

「汚い・・・」

漆原が言葉を絞り出した。

「汚い！そこまでして戦わねばならないのですか！」

青いな。正義感と正義を混同している。

正義なんて何時だって後付で決まるものだ。

それもあるという間に何度でもひっくり返る。

「当然だ。此处で黙って戦死しても誰も得しない。

鎮台は壊滅し、村民は奪われ、犯される。本土を守るものは一万人以上減り、

そしてそれで内地では更に人が死ぬ。

それなら村民を早期に逃し敵に利される前に村を破壊する方が効率的だ。

村人達にはいずれ来る被害を軽減させるのだと考える。」

「・・・効率的・・・なんて・・・」

理解はしているが納得出来ないのだろう。

「覚えておけ。何もなかったら村民達がどうなるか。

村は破壊される結果は何も変わらない。

だが村民を多少は助ける事は出来る。

我々が正面から戦い戦死する事は下らない自己満足だ。

ならば我々は無意味な誉れある死よりも

実をとって恥辱に塗れて生きるしかない。」

言い終わると自分でも気づかない内に崩れ落ちる様に座り込んだ。

自分でも信じきれない言葉をよくぬけぬけと演説出来るものだ。

「質問はないな。」

俺の限界の兆候をそれに見て取ったのか新城が皆を睥睨する。

「ならば解散だ。一刻後に真室に派遣する者を通達する。」

同日 午前第十三刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長室 新城直衛大尉

部隊の様子を見て回り豊久の天幕に戻った。

豊久は部屋に戻ってから沈み込んでいる。

無理も無い彼は将校として冷徹なまでの功利主義者たろうとしている。

だが、彼自身も心底それを信じきれていないのだろう。

——意外と、身内に甘い男だからな。

「・・・新城大尉。君はどうだ。納得出来たのか、この作戦に。」
軍人として問うのか。いや、部下としてか。

「僕が考えついた中では最善の策です。もちろんこの状況の中で、です。」

「そうか、重いな、隊長というのは。」

そう呟くと瞑目する。

お前もか、お前まで余計な事を考えるんじゃない。

全く面倒ばかりだ。僕はこういうのは苦手だ。

ああ畜生め。僕はどのような言葉をかければいい。

「豊久、君に状況の責まで負う必要は無い。少なくともこの戦況は君の責任ではない

北領鎮台、いや軍そのものに責任がある問題だ。それを許容した上で選択しなくては。」

暫く考え込んだ後、目を開け口を開いた。

「許容・・・か。そうだな、俺の仕事は時間を稼ぐ事、軍人として可能な限り皇国民を保護する事、

そして大隊長として部下を殺させず内地に帰らせる事、それ以外は知ったことじゃないな。」

幾らか割り切れた様だ。

元々そう信じがっていたのだからだろう。

「そう、割り切る事だ。後は昇進してから考えろ。」

いつの間にか軍務外の言葉に戻っていた。

「そうだな、悪いな。愚痴を聞かせて。」

「いいさ、悩まないのもそれはそれで問題だ。」

今悩まれて困っていたが口には出すまい。

「皆の様子は？」

兵藤を呼ぶ前に聞かせておくか。

「兵藤と杉谷は、ある程度割り切れている。

西田も大丈夫そうだ。理解して割り切ろうと考えている。

妹尾も迷いはあるが少なくとも衆民への有効性を理解している。

問題は漆原だ。あいつは感情的になっている。

部隊の統率にも影響が出かねる程にな。」

あいつは生真面目な分動揺すると脆いみたいだ。

「——そんなに酷いのか。」

「ああ、なまじっかお前を信頼していた分、裏切られた気持ちらしい。」

上を見上げて真っ先に目に入ったのが大隊長なのだろう。

動揺して視野が狭くなっている。

「裏切られた・・・ね。」

一瞬、痛切な表情が顔をよぎった。

「まあいい、確かに作戦の責任者は俺だ。嫌われるのも覚悟の上だ。」

「

確かにこの『焦土作戦』の全責任は命令を発する馬堂にある。

それが軍隊というものだ。

「やはり遅滞の方に回すか？」

「まあいい、そうしてくれ。」

顔を会わせる前に納得出来なくとも折り合い位はつけてもらわないと。」

苦みの強い苦笑を浮かべながら言う。伊藤大隊長の口癖が伝染してないか？

「納得が出来なくても、命令が下れば実行する。

実行しないのなら処断される。それが軍隊だ。」

漆原があのままなら処断も必要だ。

「そして、その手の反発も考慮して兵を選ぶのが隊長だ。」

「だがいつまでも選ぶ余裕はない。」

「だが幸い今はある。」

何なら難民を見つけたら引き合わせてやれ。

アイツも多少は考えが変わるだろう。

それでも変わらないならもう面倒は最期しかみれない。」

考えてはいるか。ならば良い。

「それもいいな。さて、そろそろ時間だ。兵藤を呼ぶぞ。」

「そうしてくれ」

彼に真室の穀倉を焼かせる、これ以後は笹嶋中佐の寄越す増援を待つしかない。

第八話 戦わない戦争

皇紀五百六十八年二月十五日 午前九刻

真室大橋より後方二里

独立搜索剣虎兵第十一大隊 首席幕僚 新城直衛

遅滞戦闘隊は、やはり僕が指揮をとることになった。

首席幕僚と言うよりも次席指揮官としての役割だ。

増援を含めた主力の殆どを僕に預けて豊久は村を焼く為に後退している。

今朝、兵藤少尉も尖兵小隊を率いて真室へと出発した。

「新城大尉殿」

「何か」

「砲撃の用意が整いました。後は着弾調整のみです。」

冬野曹長が報告してくれた。五十路前後の砲兵下士官。

つまり砲に関して全てを知り抜いた男だ。

豊久が信頼しているのだ、問題はないだろう。

「開始してくれ。」

帝国側も流石に焼き落とされた橋の修復には手間取っていたようだ。何せ、この真冬の北領で川に胸まで漬かって作業する事は不可能だ。豊久では無いが工兵を冷蔵させる事は出来ない。

弾着観測の為に派遣した者達からの連絡によると、そして川底に杭を打ち込み、

筏を繋ぐ事で浮き橋を作っているらしい。よく考えたものだ、と素直に関心する。

作業工程から見て二日から四日程で完成するだろう。

だが、邪魔させてもらおう。

有効射程内ぎりぎりだが接收した砲も含め、十八門もの騎兵砲そして十分有効射程内の三門の擲射砲が製作中の浮橋を、そして作

業中の工兵を狙っている。

調整の為に数発一番砲車が数発放った後効力射を始めた。

射程外だが六門の平射砲も接收している。中々の光景だ。

笹嶋中佐は氣を使ってくれたのか増援は騎兵砲三個小隊に鋭兵二個中隊、

そして短銃工兵二個小隊、それらの給食分隊に輜重小隊と予定より多く送られ、

大隊も頭数だけなら八百近くなった。

まあ正直、剣虎兵大隊と言うより鋭兵大隊に近くなった気もするが、長射程で重砲まで有しているのは大隊長殿の好みなのだろう。

急造の部隊だが、偵察の為に渡河した獵兵三個中隊を排除に成功し砲を展開する事が出来る程度には統率をとれている。

当分まともに戦うつもりはないが、

苗川までは作業の妨害と偵察部隊を潰す事に徹底する。

戦わない戦争といこうじゃないか。

二月十六日 午前六刻

北領真室大橋より二十里後方・苗木村

北領に点在する中の小規模な農村の一つである苗木村

そこは深い恐怖と怒りに包まれていた。

「どうか、どうか、お助け下され、帝国の輩が、

村へ鉄砲を、倉へ押し入ろうとして、止めようとした若い衆が。」

村長である苗木井助は、村を訪問した皇国軍の隊長である将校に歓迎の言葉もそぞろに嘆願した。

「その方々は——怪我を？それとも・・・」

その言葉を濁した将校は左腕に包帯を巻いた若い少佐であった。

「はっ・・・はい、あの、銃で殴られたらしく。」

倉に氣絶して倒れておりました。傍に忌々しいこの毛皮帽が。」

そういつて村長は震える手で帝国軍の毛皮帽を差し出した。

「やはり——ここまで来ているか。」

少佐は穏和な顔を歪め。怒りを滲ませながら話した。

「この狼藉の借りは必ず兆倍で返します。しかし今は貴方達自身の事を考えなくては。」

「どういふ事でございますか？」

おそろおそろ村長が尋ねる。

「お気づきでしょうが、我々は内地へと撤退を開始しています。

我々は貴方達を近衛兵達に護衛させ、美名津へと送り届けます。

そうすれば我々が撤退が完了するまで、大協約が皆を守ります。」

「情けない事を儂の若い頃は、先代の北領公様の手勢に加わっていた頃は……」

老人が枯れ木の様な腕を震わせ、過去を眺め、詰問する。

「四万の軍勢と相對したと？今は昔話を拝聴する時間はありません。」

「回想若い少佐は僅かな苛立ちを込めて言葉を遮った。

「——失礼しました。」

この冬場に五十里も歩くのは辛いでしよう。

軍の馬車を四台貸してさしあげます。

街道沿いの全ての村にも伝えていたきたい。

さあ、急いで準備を。」

——でないと女は犯され男は奴隷、村は略奪しつくされますよ。

そう感情の無い声と表情で告げられ村人達は慌てて逃げる準備を始めた。

同日 午前九刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊

大隊長 馬堂豊久

瞬く間に村は無人となった。

「皆、よくやってくれた。これでこの街道の人々も美名津へと移動

するだろう。」

杉谷少尉は不機嫌そうにしている。演技とはいえ村人を殴ったのだから仕様がなか。

俺が率いるのは杉谷少尉率いる鋭兵中隊と工兵二個小隊療兵分隊と輜重小隊に給食分隊だ。

他は新城の遅滞戦闘隊に回した。本来なら主力の遅滞戦闘隊を俺が率いるべきだが、

俺の負傷や双方の軍歴、導術兵を持たない近衛旅団との連絡、戦術上、村には高位の将校が説得する方が信頼されやすい等諸々の事情で俺が此方に回った。

何よりこの役目を他人に押し付けるのは、気に食わない。

・
・
・

人々が何年もかけ雪と戦い北領発展の苗木となると築き上げられた苗木村は半刻もせず焼き払われた。馬堂少佐は、自ら井戸に毒を投げ入れた。

同日 午前九刻半

真室大橋より後方二里

独立搜索剣虎兵第十一大隊 首席幕僚 新城直衛

「頃合だ。後退するぞ。」

これ以上の長居は危険だ。敵も警戒して砲を用意させるだろう。砲で釣瓶打ちされたら文字通り全滅してしまう。

戻って来た観測班に戦果を報告させる。

「はい、大尉殿。この二日で敵兵を200名程死傷させました。そして浮橋自体も破壊に成功しました。

ですが筏を固定させる杭は無傷ですので作業自体には・・・」

「いや、元々擾乱の為の砲撃だ。橋を破壊する事は余り期待してなかったからね。」

それに対岸で指揮を出していた将校も退避する前に十数人程叩けた。それで十分だ。」

これで少なくとも一日分は時間を稼げただろう。

漆原が声を掛けてきた。

「・・・これから大隊長が破壊させた村を通るのですか。」

北府からの難民を保護させてから腑抜けた様になっている。

「ああ、そうだ。それがどうした。それより今は戦争だ。」

そう言つと一瞬漆原は背筋を伸ばし、

何かを諦めた様に虚ろな姿勢に戻った。

二月十七日 午後第一刻 小苗橋

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

今の所、状況はこちらの目論見通りに推移している。

交戦を避け、偵察部隊を潰す等妨害に徹し、

後退している新城からも帝国軍の行動の鈍りが報告された。

遅滞戦闘部隊も明日には合流出来る。

——いや、水軍からの状況報告は最短でも二十日以降になる。

これが成功しないと話にならない。

一抹の不安を抱きながら橋を渡ると、目立つ軍服が見えた。

近衛が・・・多分中隊かな？天幕を張っている。何故こんな所に？

此方に気づいていたらしく指示を出していた一人が此方に歩いてくる。

「近衛衆兵第五旅団、旅団工兵中隊、中隊長田村孝則大尉であります。」

そういつて敬礼をした。

「独立搜索剣虎兵第十一大隊、大隊長馬堂豊久少佐です。」

俺も答礼をする。そうすると大尉が書簡を渡してくれた。

「実仁親王殿下からの御返書です。」

少佐殿の行動に殿下は敬意を感じておられる様子です。

大隊長殿のご要望はもちろん、我々にも志願を募り、築城作業を補助せよ、と。」

「第五旅団は何時頃、乗船しますか？」

「はい、順調なら二十二日には乗れるだろうと。」

それならこの部隊も二十日には帰さないとな。衆民出身だから工兵としては期待できるが

戦闘兵としては・・・ねえ？

「殿下のご厚意と貴官たちの勇氣に感謝します。」

この様子だと中隊の殆どが志願したらしい。

士気は低いと聞いただけに、これは意外だ。

「はい、自分達には過分なお言葉です。」

「それでは大まかな指示は私が出しますが、基本的には貴官にお任せします。」

それと、本隊の工兵二個小隊は貴官の指揮下に預けます。

村に残されていた馬鋤等の農具も持ってきたので必要ならそれも使
つて下さい。

十九日、最長でも二十日までに完成させて下さい」

・
・
・

同日 午後第四刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部 大隊長 馬堂豊久

打ち合わせも一段落し、実仁准将の御返書を拝見する。

難民の受け入れ交渉の成功と最後まで粘る俺達への感謝と頼まれた
補給の融通と

更に志願した工兵を協力させるが可能なら内地へと帰らせて欲しい
旨が書かれていた。

紙は最高級であり流麗な文字で書かれて親王に相応しい官位・官職を記されている。

だが、本文はその達筆には似付かわしくない程実務的——軍人的な文だった。

成程ね。軍人振りが板に着く程に軍人としての意識が高い御方か。皇国随一の弱兵部隊を率いて後衛を成功させるであらう御人だ。軍人としても策略家としても一流だ。

今の状況とて実仁准将の目論見通りだ。

実仁准将としては一刻も早く撤退したいだろう。

だが実仁親王としてはこの守原の大敗を機に成果を挙げ、近衛の、ひいては皇室の発言権を強化したい。

現在の五将家の寡頭政治制を快く思ってはいるまい。

そして自分は親王、ならば同じ予備であつた実験大隊を共に後衛戦鬪に配置し、

敵をそちらに誘引させるだろう。

そして後衛を成し遂げれば近衛の名を大いに上げられる。

その為にこの危険な綱渡りこづえりを続けていたのだ。

なればこそ今回の美名津への衆民の避難の護衛と受け入れ交渉は成果を挙げ、

撤退も出来る絶好の機会を提案された事は大いに歓迎すべき事なのだろう。

まあ、だからこそこまで大盤振る舞いしてくれたのだろうな。

「まあ、いい」

唇を歪め皮肉気に呟いた。

さて、戦わない戦争もあと数日で終幕かな。

後はここで戦うのみか。

第八話 戦わない戦争（後書き）

次回の投稿は金曜日の予定です。

御意見・御感想をお待ちしています。

第九話 川は深く・対岸は遠く

皇紀五百六十八年 二月十七日 午後四刻

御崎岬沖 皇国水軍巡洋艦大瀬

水軍中佐 坪田典文艦長

酷い大時化だ。夕刻に成ってから更に酷くなっている。

だが俺達は前進しなければならぬ。

敵地となった真室に、穀倉を焼いて潜伏している部隊がいるのだ。彼らを助けなくてはならない。

その時信号士官が俺の肩を強く叩いた。

「――！――！」

何かを見つけたのか一点を指して何かを言っている。

目を凝らすとあれは・・・竜か？水軍の飛竜だろうか？風に流されたらしく

ふらふらとこちらへと飛んで来る。

「誘導灯を出せ！風に流されている！」

あれでは振り落とされてもおかしくない！」

信号士官の耳許で叫ぶ。こうでもしなければ聞こえない。

竜が着艦しようとしたが波に揺られ竜士は竜ごと壁に叩きつけられた。

「ッ・・・」

呻いて起き上がろうとするが立ち上がれない。

急いで用意させた命綱で彼を繋ぐ。竜も何とか同様にする。

揺れが酷かったが彼を何とか艦橋の中、海図室に運び込んだ。

「おい！大丈夫か！」

「・・・脚が痛みますが・・・大丈夫です。」

療兵に診せたが重度の捻挫らしい。これでは竜に乗るのは不可能だろう。

「おい！何故この様な所にいたのだ？」

「はい笹嶋中佐殿の厳命で・・・真室の状況を・・・風に流されて・・・」

この男も竜も疲労困憊している。

「真室の状況・・・どうなっている！」

返答次第では・・・戻らなくてはならないかもしれない・・・

二月十九日 午後四刻 小苗橋

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部 大隊長 馬堂豊久

築城作業はほぼ完成しつつある。

近衛中隊は現在も作業中であり。

明日の早朝には北美名津港へと発つて貰う。

そして明日に始まるであろう戦いの為、

指揮官を本部に集合させている。

「さて、大尉。敵の位置は？」

「はい。敵の先鋒は十八日早朝に真室の渡河を開始し、午後三刻の時点で現在位置より十五里の距離にあります。」

「成程、どちらも許容範囲内だな。寧ろ上々か。」

さて、現在の状況だが、上苗橋は既に爆砕した。

そして、近衛工兵中隊の協力の下、築城作業を行っている。

此方は今日中に、遅くとも明日の午前中には完成するだろう。

そして敵は二十日の昼以降に到着する。

我々はそこから三日間の時か「大隊長殿！転進支援本部より伝令です！」

当番導術兵の金森二等兵が行き成り身を起こして言った。

一体何だ？二等兵は目を閉じ伝令を始める

「発・転進支援隊本部 宛・独立搜索剣虎兵第十一大隊本部
真室ノ穀倉ヲ焼却ノ成功ヲ確認スルモ

小隊救助二派遣セシ巡洋艦 大瀬 八

負傷シタ竜士ヲ救助シ帰還シタ為、救助二失敗。

尚、転進作業モ天候不良ノ為ニ一日ノ遅延ヲ必要トス。」

・・・ナンテコッタイ

いや・・・貴重な龍を偵察に飛ばしてくれた事は有り難いか。

「・・・喜ばしい知らせだ。」

真室の穀倉は敵の手に落ちる前に焼かれている。

兵藤少尉達の無事は祈るしか無いがこれで迂回され、

直接、鎮台主力を叩かれる恐れは無くなった。

我々は四日分の時間を稼げば良い。

敵は疲労し兵站も崩壊している。

不可能ではない。」

妹尾少尉が懸念を表し言う

「ですが、距離のある北美名津は無理でも

我々の後背を突く事は可能です。

大隊規模以下の騎兵でも挟撃にあつたら危険です。」

「有り得る。だがその場合は砲で牽制出来る。

後方にも念の為に壕は作った、そこに予備を投入し

砲と連携すればしのぎ切れる。

幸い真室大橋にて我が軍の置土産である平射砲を六門接收し、

砲は27門、砲兵大隊並だ。

補給も転進支援本部及び実仁准将閣下の御厚意で

滞りなく行き届いている。」

問題は導術兵達だ。八人いるが、疲労の色は濃い。

この二日は休ませているがこれからの四日間、皆を酷使しなければ

なるまい。

「案ずるな。我々の戦術的な有利は多い。

第一に敵の兵站の破壊の成功。

第二に現在の状況で望みうる限り最厚の築陣の完成。

第三に導術——君達による情報伝達で戦力を隠蔽したまま連携を取

れる事だ。」

休みながらも本部に詰めている彼等に目を向ける。
皆、覚悟を決めた目で肯いてくれる。

将校たちへ視線を戻す。

新城大尉、西田少尉、瀬尾少尉、杉谷少尉、

皆も幾らかは可能性を見出し、顔色が良くなっている。

士気は堅調——漆原以外は、

虚ろな目をして腑抜けている。

「質問は無いな。——よしでは解散だ。各員配置に戻れ。」
皆を退室させる。

「はぁ・・・」

正直なところ。言う程自信があるわけではない。

「虚勢を張るの、こんなに巧かったかな・・・」

若干憂鬱になりながら黒茶に口をつける。

「巧かったぞ。」

不意に背後から声がした。

「ゴハアツ・・・ゲホツツ」

驚いてむせている俺を楽しそうに見てやがる。

「・・・脅かすな。ド阿呆」

我らが首席幕僚だ。

何だ？何時だったか根性悪呼ばわりした事でも根に持っていたのか？

「いや、千早も居たぞ。そんなに驚くか？」

千早は俺が吹いた黒茶の匂いを嗅いでいる。

「皆を配置に戻した筈だが？」

「自分は此处が配置です。大隊長殿。」

恭しく敬礼しくさりやがる。

「・・・忘れていたよ。」

新城は別行動以来、二日ぶりの本部配置だ。

昨日は休ませていたし今日の午前中は隊員や砲の配置に馬防柵の設置、

補給の配分と互いに忙しかった。

「あー、それで、何か説明に穴があったか？」

「いえ、今の時点では十分です。」

それより、漆原少尉はどうするおつもりですか？」

首席幕僚として、か。

「・・・アレでは使い物にならない。予備に置くつもりだ。」

「はい、それならば、

早い内に予備を一度投入した方が宜しいかと。」

「！ 何故だ？」

予備隊は最後の盾。

今は守勢に徹するのなら絶対に温存するべきだ。

「敵の動きを混乱させます。」

此方の兵力を過小評価するか、過大評価するか。

どちらでも損はありません。」

「帝国側が過大評価するなら慎重になり行動が鈍る。

過小評価するなら攻め急ぐ敵を火線集中地点に引きずり込み結果は同じと？」

この防御陣地の築城に際して練った工夫の一つだ。

壕や砲に角度をつけある程度侵入したら一掃させる事が可能だ。

「だが、賭けになるぞ？」

最悪、過大評価されたとして

もし仮に敵の騎兵大隊にでも回り込まれたら防ぎきれるか自信はない。」

「だからこそ、です。」

戦力を過大評価するなら迂回の準備に時間を掛けます。

真室の穀倉を破壊した今なら回り込む時間を考えても十分に採算がとれます。」

成程ね。過小評価されても損害を増やせば以下同様、と
「迂回の準備はどれ程かかと予想する？」

経験豊富な元兵站幕僚の計算ならば信用出来るだろう。

「もし大隊規模なら三日以上はかかるでしょう。」

何しろ向こうの兵站を崩壊させています。

それに予備隊の投入は漆原の為でもあります。」

——戦場で迷いを抱くものは血に酔わせるか戦死させてやるべきです。

厭な——笑顔だ。こいつの、この顔は、嫌いだ。

・
・
・

二月二十日 午前十三刻 大隊防御陣地 丘陵頂点付近

独立搜索剣虎兵第十一大隊 首席幕僚 新城直衛

晴れわたった平野には閱兵されるかの様に整然と大軍が向かって来る。

近衛も今朝内地へと帰った。

皆が手紙を押し付けていた。

あの大軍が相手だ。何人生きて帰れるのやら。

「おうおう、ゾロゾロと、戦いは数だよ。兄貴ってヤツか？」

呆れた声を豊久があげる。

聞いたことのない言葉だが真理ではある。

「圧倒的ですな。敵軍は、

一度でいいからあんな立派な軍隊を率いてみたいものです。」

——我が軍だろじゃないのな。

と大隊長が毒づく。

「敵は八千はいますな。糧秣は不足しておらんでしょうか。」

猪口曹長が思わず疑問の声をあげる。

「不足しているとも、勿論。」

偶然か、豊久と同時に声をあげてしまった。

気まずそうに手をひらひらと振りながら豊久が言葉を続ける。

「まあ・・・後方は凄まじい事になっているだろうねえ。」

「追撃戦の通例通りですね。此処で消耗したら後がないでしょう。」
後方の鎮台に真つ当な評価（過大評価だが）をしているから無理をしたのだろう。

ならば此処で消耗させる。

「それで、どうなさるのですか？」

猪口が確認の言葉を出す

「勿論、此処で粘るさ。」

此処は防御戦には理想的な土地だ。

正面から馬鹿正直に戦争するなら一刻も保たないが。

此処ならば上手く戦^やれば何とかなるさ。」

馬堂少佐が答える。

「橋はどうします？いつでも爆破出来るようにしておりますが。」

「そうだな・・・これ以上近寄られる前に爆破するか。」

工兵が作業している場所へ目を向けようとする。

「いえ、まだです。向こうが渡らせる最中まで待ちましょう。」

まだ早いぞ、豊久。

「危険じゃないか？」

「ですがあまり早く吹き飛ばすと他の手を考えられて面倒になります。」

馬堂少佐が目尻を揉みながら考え込んでいる。

「だが、此れ程露骨な罠にかかるか？」

敵だって馬鹿ではないだろう。

此方が時間稼ぎに徹している事だって理解している筈だ。
ならば確実に出来る内に爆破させた方が安全だろう。」

反論は豊久らしい無用な賭けを避ける物だった。

「勿論、だが向こうも余裕が無いのです。」

優先的な補給は受けていても物資・糧秣の枯渇はこれから更に酷く

なります。

物資は奥津・・・北端の港に届いているでしょうが
此処に届く迄には相当時間が掛かるでしょう。」

「此処で持久戦になればそれまでに戦闘不可能になると。」

「その通りです。」

だからこそ敵は此方が失敗する可能性に賭けて
罾だと理解している橋を渡らせるでしょう。」

「成程ね。」

橋のあるなしでは大違いだ。

目の前で橋が落ちれば士気も下がる。

後はこの陣地で凌げるな。」

理解したようだ。

指揮官としては有能だが少々慎重が過ぎる所がある。

いや、それが美点でもあるか。

経験を積みばそれも重厚さとなるかもしれない、

只の鈍間にはなるまい。

鈍重なのではなく

寧ろ相手と戦場に誘い込み優位を得て叩き潰す方が得意なのだろう。

優位に立ってから叩き潰す その定石に忠実なのだ。

あくまで程度の問題だ。 経験が解決するだろう。

「我々も本部に戻るか。」

この苗川、見掛け以上に深く、此岸は遠いぞ・・・」

大隊長は悪辣な笑みを浮かべながら身を翻した。

皇紀五百六十八年二月二十日 午後一刻

シュヴェーリン・ユーリイ・ティラノヴィッチ・ド・アンヴァラー

ル少将は

指揮下の先遣隊約8400名に苗川渡河を命じた。

第九話 川は深く・対岸は遠く（後書き）

次回は日曜の予定です

御意見・御感想をお待ちしています。

第十話 苗川攻防戦 其の一

皇紀五百六十八年 二月二十日 午後第一刻半 東方辺境領鎮定軍

先遣隊本部

先遣隊司令官

シュヴェーリン ユーリイ・ティラノヴィッチ・ド・アンヴァラー
ル少将

兵を進撃させると思わず鬱憤が口を出してしまう。

「全く！たかが一個大隊でよくもやってくれる！」

夜襲に阻止砲撃！兵站破壊の放火！そして野戦築城！器用な事だな！敵の指揮官一体何者だ！例の猛獸使いか？」

テンロウでの戦いでは、とても此処までやれるような軍隊には見えなかったぞ？

グオオオオオオオオオオオオン!!!

凄まじい雄叫びが何重にも重なって響きわたった。

「やはり、あの猛獣使いか……三個大隊を僅か一個大隊で食い荒らした。」

「はい。その様ですな。」

率いているのは二日前に捕えた捕虜によると野戦昇進の少佐だそうです。

シヨウケ——貴族の産まれだそうです。

——因みに彼個人は猛獣は連れていないそうです。砲兵出身だそうですよ？」

参謀長のアルター・ハンス中佐が反応してくれる。

「ああその様だな。見てみる。」

そして橋を渡ろうと兵達が密集する。

そこに十門以上の砲がそこに霰弾を一斉に降らせる。

「見てみる。見事な砲撃じゃないか？」

橋の周辺は鮮血により赤に染まっている。

何と言う事だ。

痛ましい状況だ・・・

だがそれでも少なくない兵が渡河を成功させる。

兵の状況から目を上げる敵の陣地を見ると

何とまあ堅固な陣地だ。

基本的に野戦築城は今まで重視された事はない。

散らばった部隊への伝達手段が無いからだ。

それを良くも此処までやるものだ。

兵の姿を見事に隠蔽している。

十数リーグ離れた此処から望遠鏡で見ただけでは砲もろくに見えない。

皇国軍は背天ノ技とやらを使い遠くのものを見、声を届けると云う噂があるが

・・・まさかな。

「伝令！第18獵兵連隊第37獵兵大隊壊乱！！」

一個大隊が壊乱か・・・やってくれる！！

「砲の布陣はまだか！！急がせろ！！」

声を荒げてしまう。

「はい、我々は機動力を重視し、獵兵、騎兵を先行させており、砲は未だ後方です。砲の数も糧秣の不足の影響で・・・」

ああ分かっていても、牽引させる馬は糧秣をバカ食いする。

我々の状況では許容できない程に・・・。

「それでも良い！急がせろ！」

「半刻はかかります。」

「急がせろ！砲を展開すれば敵も少しは黙る！！」

奴等は無視は出来ない。

あの部隊に奇襲された部隊の惨状は到底看過しえん・・・。

だがユーリア殿下も速やかな鎮定を望んでいる。

何とかせねば・・・

同日 午後第二刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 小苗陣地 掩体壕内
大隊長 馬堂豊久少佐

やれやれ、なんとまあ豪勢な事だよ。

砲弾が掩体壕の周囲に降り注ぐ。

「おい誰だ、物資が不足しているって言った奴は。」

「大隊長殿ですよ。大隊長殿。」

残った猫達の管理をしている西田少尉がツツコミを入れる
一緒に壕の中に避難している。 敵の砲撃が始まったのだ。
砲の後方に居た為壕に退避している。

「砲をぞろぞろと連れてくる体力は無いはずだがなあ。」

「我々と地力が違いすぎますね。あれでも減ったのでしょうか?」

「あつさり言わないでくれ。虚しくなる。」

「はい、申し訳ありません。大隊長殿」

声に笑いが混じっている。 図太い奴だ。 流石は新城の教え子か。

此方の砲声が轟いた。

「砲の排除を最優先に、と言ったが、上手くいけばいいが。

これでは士気の維持にも一苦労だ。」

「こう砲撃戦が続くと猫が怯えます。 戦闘中なら問題無いですが。」

彼の猫——隕鉄——を宥めながら言う。 確かに少々怯えている。

「はあ・・・予定通り猫は西方側道の警戒に使ってくれ、敵を十里
先でも見つけるのだろうか?」

「はい、大隊長殿。 騎兵なら十五里でもいけますよ。 何しろ馬は好
物ですから。」

「よし、西田少尉は後方に回ってくれ。 猫が反応したら導術索敵を
行う」

「はい、大隊長殿。」

よし、此方も反撃しなくてはね。

「金森二等兵！工兵に敵が次の突撃を行ったら合わせて爆破をさせるように伝達を！」

冬野曹長！騎兵砲及び擲射砲小隊、対岸小苗橋正面へ斉射用意！爆破と同時に撃て！」

漆原少尉、予備隊を出撃用意！渡河した敵を掃討せよ。」

同日 午後第二刻半

東方辺境領鎮定軍先遣隊本部 先遣隊司令官

シュヴェーリン・ユーリイ・ティラノヴィッチ・ド・アンヴァラー
ル少将

「第36獵兵大隊渡河に成功しつつあります。」

「アルター、本当に橋を無傷で奪取出来たのか？」

爆破に失敗したのか？だが、それなら砲で破壊すれば誘爆とて可能だ。

そう考えていると爆音が響きわたった

「してやられた！！大隊主力狙いか！！」

渡河に成功した二個中隊も大隊本部と分断され、一瞬動きが止まる。そこへ敵からの射撃が行われ次々と倒れていく。そして丘陵から中隊が突撃を行われ、我々の部隊は完全に掃討された。

これで二個大隊が後退を余儀なくされている。

敵は恐ろしい程冷徹だ。

自分の戦力が痛手を受けない範囲の敵を渡河させ橋を爆破。

橋を渡ろうと密集した地点への正確な霰弾砲撃、渡河した二個中隊も敵の銃兵によって

掃討された――が。

「アルター、あの中隊は・・・何だ？」

見た所配置されている部隊で十二分に排除出来た。あの部隊は何だ？
「分かりません――恐らく予備部隊では？」

「予備！？馬鹿な。如何してあの状況で予備を出すのだ。」

「此方の予想以上に余裕が無いのか・・・あるいは過剰兵力を投入したのか・・・」

過剰兵力！まるで悪夢だ。あの陣を突破するのにどれ程被害がでるというのだ！

「——どちらにせよ真正面から挑んでいては損害が出るばかりだ。アルター何か策を。この泥沼から抜け出す策を。」

アルターはその明晰な頭脳を巡らし言葉を紡ぐ。

「——西方に、橋が有った筈です。それを利用すれば側背を突けます。」

「ああ確かに、だが彼処は、上苗橋は既に爆砕された。流れは急で御丁寧にも川岸を馬防柵でほぼ完全に封鎖しており、騎兵でも渡河は困難だ。」

「騎兵部隊の他に排除の為に砲兵分隊を連れていかせては？」

「砲までも？そうしたら騎兵は一個大隊すら厳しくなるぞ？」

「カミンスキイ大佐は優秀な男です。彼なら厳しくとも機を逃さないでしょう。」

「カミンスキイ？」

「いかん！！奴は——」

そこで言葉が詰まった。

「——奴をこれ以上昇進させたら・・・始末におえん。」

ユーリア姫殿下の愛人たる立場を利用し——とは言えんな。

「何より別働隊を出したら両方息切れする可能性が高い。」

「しかしユーリイこのままでは損害が増えるどころか殿下からの命を果たす事も——早期突破すら不可能です。」

不可能！！この男ですらそういうか！！
頭を抱えたくなる。

「命令を果たせなかったら・・・」

——信賞必罰、その言葉の後半は味わいたくない。

同日 午後第三刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部付近 掩体壕
大隊長 馬堂豊久少佐

「なあ新城、もしも——もしもの話だが北領鎮台が
美名津、或いは内地への衆民を避難させ、

真室川 或いは苗川沿いに築城

敵を誘引し水軍を使い奥津に揚陸、兵站集積所を占拠
封鎖とかは可能だったのかな？」

「さあな、やってみない事には分からないが、
敵は現在もそれを警戒している。現在の状況でやられたら全員、餓
死すら有り得る。」

「だろ う ね。敵さんも必死だ！つと」

壕の側に着弾したらしく壕の中が揺れる。

「しかし、水軍が鎮台の参謀部が今頃考えているんじゃないか？」

「いや、採用されないだろうな。」

「最高司令官が真先に逃げ出しちゃあ統率も厳しいと？」

「まあな、何より守原英康本人にその気がないだろう。」

「ん？だが守原家は・・・」

それはあの家の懷事情が許さないのでは？

「全てが終わってから総反攻、だろうな」

矢張りそうなるか。

「・・・まあいい、今は、な

それより今は帝国軍だ。

敵の迂回への妨害は行っている。

当面は正面に集中してれば大丈夫かね。」

「あの馬防柵か、わざわざ手の空いた部隊を使つてまで作らせた分
は効果があるな。」

実仁親王殿下の残した工兵中隊のお陰だ。

「作りは簡素だがあれを排除するには砲兵が必要だ。迂回部隊の足

を鈍らせる。」

工兵じゃあ川を渡れないし架橋する時間も体力も無い筈だ、多分。

「矢張り迂回するかな？」

「分らん。だが、全てが上手くいくかもしれない。」

新城にしては珍しく僅かに声を明るくして言った

「かもしれないな。この調子なら、迂回されても到着前に逃げ切るかもしれない。」

同日 同刻

東方辺境鎮定軍先遣隊本部 先遣隊司令官

シュヴェーリン、ユーリイ・ティラノヴィッチ・ド・アンヴァール少将

「矢張り——正面からは困難、か。」

「ユーリイ、時間が有りません！明日にでも此処を突破しなければ。」

「——ハンス、カミンスキイ大佐を呼べ、それと直ちに参謀達に迂回渡河に必要な作業を策定させる」

・
・
・

「糧秣を何とかして頂かない事には、閣下。

迂回するのに急いでも一日はかかります。

聯隊の手持ちでは不可能です。

腹を空かせた馬では突撃など出来ません。」

思わず目の前の容姿端麗な男を睨みつけてしまう。

ああ分かっているとも。それは全軍の抱える問題だ。

「他に方法は無いのだ。

聯隊全体を動かす必要は無い。

敵は一個大隊規模だ。」

偵察部隊はそう報告していが――

「しかしそれでも二個大隊も動かせません。確かに偵察部隊は600名前後だと報告していましたがとても信じられません――危険すぎます。」

この言葉は――無能者の証明たる言葉だが今はこれしか言えん。

「これは命令なのだ。大佐。」

「はい、閣下。しかし小官が反対した事は、」

「分かっている。文章にもしておいてやる。」

日が暮れるまでまだ一・二刻あるそれまでに出發せよ。」

書状

發 第三東方边境領胸装甲騎兵連隊本部 宛 先遣隊司令部
持ち出せる糧秣は一個大隊を賄うことも困難と判明渡河した時点で
消耗しつくすと予想される。

午後第四刻に東方边境領胸装甲騎兵連隊第一大隊を連隊本部が直率し
出發す。

第十話 苗川攻防戦 其の一（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第十一話 苗川攻防戦 其の二

皇紀五百六十八年 二月二十一日 午前第五刻

苗川渡河点後方 小苗陣地後方 大隊本部

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

詰まる所、順調と言って良い範囲内だ。

まあ向こうも切羽詰まっている様で

夜間に渡河を強行させ獵兵大隊の四分の一を凍死。

もう四分の一を此方に銃殺させてようやと諦めた様だ。

酷いな、ありや。兵が哀れだ。

昼ならまだしも夜は、騎兵以外は渡れないと思う。

騎兵だつて大隊規模以上でないと砲の餌食だが。

まあそれをしたら鎮台を叩く主力を消耗する。

此処で時間を浪費している分

機動力を持った部隊の価値は上がる。

遅れば遅れる程攻撃目標の数は減る。

あるいは手間取っていたら返り討ちの可能性もある

主力を攻撃したいのなら胸甲騎兵を消耗したくないだろう。

だから後方からの不意打ち挟撃等の手段で優位を得た戦況以外では

出来るだけ投入したくない——筈だ。

まさかと思うが連隊総唖喊ウランツァールされたらと思うとゾツとする。

あの大軍には後先考えさせないとあっさり踏み潰されてしまふ

取り繕つても我々は700にも満たない敗残兵にすぎない。

8400名の精兵共を相手取るには相手の弱体化に嫌がらせ、

地の利を活かした築陣、後方の虚構の軍勢（本来の正当な評価）

これedyouやと互角だ。

「近衛に、親王殿下に恩を売っていなければ死んでいたな。」

代価として補給の便宜に工兵中隊の助力まで貰えたのだ。

兵をある程度自由に動かせた事で上苗橋を爆破する際に馬防柵の設置も出来た。

正直な所、内地に帰還出来たとして、ほぼ確実に厄介な政争に巻き込まれるだろう。

手柄を挙げた皇族、大敗を喫した守原、育預と譜代でその尻拭いをした駒城。

厄介事以外の何の臭いがするだろうか。

「栄達・・・かな？」

いやはや救い難いな。亡国の危機に出世の臭いを嗅ぎつけるか。笹嶋中佐の餞別タバコを取り出し火を着ける。

「まあ全てはあと三日・・・か。」

・
・
・

同日 午後第二刻 上苗橋跡

第3東方边境領胸甲騎兵連隊 連隊長カミンスキイ

渡河点に到着した。

対岸を見ると簡素な馬防柵が橋のあった場所の周辺に張り巡らされている。

「あの馬防柵、見た目は貧相だが厄介だな。アレのせいで余計な時間を食う。」

首席参謀のプレハノフ中佐が答える。

「砲兵の随行を強要させ足を遅くさせる。

しかし、深く、流れの強いこの地点から

砲を渡河させることは不可能

良くもまあ思いくものです。」

疲れた様に息を吐く。

「全く、抜け目の無い事だ。

それでは砲兵である柵を破壊するでしょう。」

「はい、騎兵砲小隊を前面に！」

「この部隊で馬上水練の一番上手い者は？」

「ゴトフリート・ノルディング・フォン・バルクホルン大尉です。」

「あああのごつい顔の男か。」

そう言うのと参謀長は一瞬呆れた様な顔をして呼びに行った。

まあ確かに俺が言つては大半の人間がそうだろうが。

何しろ家が没落したせいで帝弟の稚児になった程の顔だ。

今もユーリア殿下の愛人。

客観的に考えても俺は美男子である。

それを武器にもしている。

このまま終わるつもりは無いが、

あの姫様も踏台にして直ぐに這い上がってやる。

「連隊長殿、フォン・バルクホルン参りました。」

典雅な発音に古風な名前！

見かけにそぐわぬ育ちの良い坊やか！

・・・不快にさせてくれる。

「渡河の先駆けだ。」

馬ならば渡る事が可能な筈だ。

練達の者である君に任せよう。」

「了解しました大隊長殿、渡ります。」

逡巡せずに鮮やかに答え、苦労しつつも急流を渡り、

砲撃で崩れた岸や柵を踏み越えた。

成程、大した腕だ。皆、感心を通り越し半ば呆然としている。

「渡れぬわけではないな。渡河を開始せよ。」

・
・
・

午後第五刻半　上苗橋跡　対岸
第3東方辺境領胸甲騎兵連隊　連隊長カミンスキイ

「損害は？」

「溺死等で67名です。」

「厄介な事だ。日が暮れたせいで渡河の際に濡れた服も乾かせない。今日は此処までか・・・」

参謀長と話していると伝令が対岸に駆けつけた。

「伝令！シエヴェーリン閣下より伝令です！」

本隊より一個中隊一日分の糧秣を駄載させ向かわせます！

合流地点は大佐の任意の地点です！」

正面からの早期突破は不可能と判断したか。本隊も苦勞しているな。

二月二十二日午前第七刻　小苗陣地　後方半里　西方側道　防御陣地
搜索剣虎兵小隊　小隊長　西田少尉

「ん？」

隕鉄が反応した。

俺を訴える様に見る

「増谷曹長！探ってくれ！」

「はっ！・・・」

疲れきった導術分隊長が意識を集中している。

大隊長の懸念通りにならなければ良いが・・・

「少尉殿！騎兵です！騎兵が600！前方十三里！」

何て事だ・・・大隊長殿に知らせなくては

二月二十二日　午前第七刻半　大隊本部

独立搜索剣虎兵第十一大隊　首席幕僚　新城直衛

今日中、遅くとも明日には迂回した騎兵と交戦しなければならない。

「予備隊を側道の壕に配置、騎兵砲を四門設置、砲の指揮は権藤軍曹。剣虎兵小隊は西田少尉こんな所かな。」

やはり、士官の不足が辛いな。ある程度単純な指示でないと兵が混乱する。

「はい、大隊長殿。そんな所でしよう。」

豊久も要領を得た様子で指示自体は簡潔だ。

「新城大尉、そちらの指揮は君に一任する。」

それと可能ならば、士官を生け捕りにしてくれ。」

「また無茶を。何故ですか？」

まあ予想はつくが。捕虜を捕えようとして

道連れに刺される事もある。

正直、皆殺しが一番確実だ。

「緊急時の手札になるからさ。」

貴重な猫を投入するのだから

馬を脅かすとかして

落馬した奴とかを見繕ってくれ。

何なら兵でも良い。」

「可能ならですね。」

備えとしては有効だが・・・

「ああ此方に同胞が居るだけでも幾らかはマシになる。」

出来れば貴族の士官が望ましいがね。」

豊久も困難なのは理解して必要だと判断したのだろう。

「望ましい事は得てして困難なものですよ。」

「知っているよ。出来れば、で良い。」

現状ならば撤退とて不可能じゃないからね。」

「了解です。大隊長殿。」

——面倒は今更だろ、頼むよ。

そう言って僕に細巻を一本押し付け、

何やら書き物を始めた。

午前十一刻 小苗陣地より後方十五里 北美名津浜
北領鎮台転進支援本部 司令 笹嶋定信

導術兵を皆休ませている。最後に前日の独立搜索剣虎兵第十一大隊からの

報告では遅滞戦闘は順調に続けられているらしい。

それが今の所、唯一の良い知らせだ。

導術兵は皆、疲労困憊で軍医の診断によると最低でも本日一杯は休ませないと

死亡すら有り得るそうだ。

龍士も翼竜ももう飛べない、一人は負傷すらしている。

「司令！良い知らせです！」

浦辺大尉が駆け込んで来た。

「畝浜が手土産——30隻もの運荷艇を括り付けて到着しました！」

「ほう！それは、久々に良い知らせだ。」

「それと天象士からもこの天候回復も暫く続くと。」

「それが本当ならば、明日の夕刻までには終わりそうだな。」

「はい。十分可能です。」

「導術兵が目醒ませば・・・」

馬堂少佐達も生還出来るかもしれない。

「それでも明日ですね。伝令も出す余裕は有りません。」

浦辺大尉が帳面に目を向けて言った。

——明日、か。それが致命的な遅れにならねば良いが。

・
・
・

「司令！海岸の残兵は2000名以下に減りました。」

「やはり明日の内に終わりそうだな。」

残りが1000名以下になったら撤収の準備をしろ。

ああ、それと物資の破壊をしなければ、残った部隊の指揮官は？」

浦辺大尉が書類を読み直す。もう一度読み直した。

「――近衛衆兵第五旅団・旅団長――実仁准将閣下です。」

「おいおい」

思わず失笑が漏れる

守原大將はどうやって生きていくつもりだろう？

まごうことなき五将家の一員が皇族より先に逃げ出した。

自業自得ではあるが。

「再び拝謁させて頂くとするか。」

午後第一刻 西方側道防御陣地

独立搜索剣虎兵第十一大隊 首席幕僚 新城直衛

金森二等兵が報告する。

「大尉、敵、前方十里の位置で停止しています。」

さてさて此方は300弱。向こうは600強か。

常道通り砲で叩いて射撃で掃討、その後に剣虎兵で攻撃、だな。

これで犠牲は最小限で済む。

「よろしい標定射撃痕に接近し次第砲撃開始。」

恐怖に震える手を押さえながら言う。

いやはや情けない。

良くもまあ未だに将校の演技を続けられている物だ。

「敵が補給を受けた様子はないのだね？」

「はっはい。」

自分が増谷曹長と代わった時からには他の部隊と接触した様子はありません。

ですが川向から百名程の人馬の接近を察知出来ました。」

後方からの補給にしては早い上に数が少ないな・・・

本隊から絞り出したなけなしの糧秣か？

その補給を受けてから仕掛ける気か。

「どちらにせよ補給としては不十分だな。」

駄載させないと渡河は出来ない、

駄載させる分、馬の数も増える。

護衛の分を考えれば尚更だ。

大まかに考えて二個中隊弱いや、一個中隊分がやっただろう。

半里前方に剣虎兵小隊と観測班を置いている。

彼等も身を隠している。

連絡役の増谷曹長は消耗が激しく、

休ませているが明日から

また働いてもらわなくてはならない。

「金森二等兵、

後は増谷曹長から連絡が来るまで榎藤軍曹の所で休んでいる。

猪口曹長、運んでやれ。」

「はい、大尉殿。」

猪口が背負って運んで行った。

僕の事を信じきった目で見ている。

まだ子供だ。今はまだ上手く事が運んでいる。

生きて帰せるかもしれない。

あの子供の様な兵を。

「・・・」

だが、正面陣地が突破されたら？

僕がヘマをして敵に敗れたらどうなる？

糞っ、また手が震えてきた。

毎度毎度僕も小胆な事だ。自嘲の笑いがいつもの様に浮かぶ。

金森二等兵は遠目にその笑みを見て安堵した。

——ああ少佐も大尉も僕達を使つて皆を、仲間を守ってくれている。

——それならば、術力が擦り切れようと、導術兵の本望です。

——それで皆を救わせてくれるのなら。戦友を、内地の家族を守れるのなら。

——僕達は、僕は、それを、この部隊に居る事を、誇りに思います。

第十一話 苗川攻防戦 其の二（後書き）

今年は今回が最後の更新です。
皆様、よいお年をお迎えください。

第十二話 苗川攻防戦 其の三

皇紀五百六十八年 二月二十三日 午前第十刻

小苗陣地 丘陵頂上付近

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

獵兵達が渡河を挑み苗川を朱に染めている。

擲射砲による夜間砲撃と騎兵砲による牽制もあり
敵の砲兵の損害数は少なくなかない。

それでも此方の倍以上あるのは

圧倒的兵力差を痛感させてくれるが。

「西からは騎兵大隊、北からは二個旅団、
間をとって北西からは鬼でも攻めて来るのか？」

敵も焦っているのか随分無茶をやってくれる。

「大隊長殿、鬼門は北東です。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無かった事にしよう。

俺の記憶には何もないな。

「渡河した騎兵を排除すれば追撃の戦力が厳しくなる。
これ以上の部隊の渡河は大規模にせざるをえない。

工兵の作業を伴うものになる。

時間稼ぎには最高だ。

それが可能なら、だが。」

ある程度の築陣は行っただが、

この苗川のような地の利は無い。

除雪していない隘路位だ。

この大隊では随一の戦上手を当てた、
戦力も割きうる限りを配置した。

大隊の半数を配置している。
それでも今すぐ逃げ出したい程の不安感が襲いかかる。
頼むぞ、新城直衛大尉。

同日 同刻

小苗渡河点陣地より後方半里 西側道 防御陣地
独立搜索剣虎兵第十一大隊 首席幕僚 新城直衛

「此処で殲滅すれば敵も鈍るのだがな。」
地の利は此方にある。

除雪されていない隘路、疲労した馬に兵、考えうる限り
騎兵が戦うには最悪の状況だ。

それでも帝国の胸甲騎兵部隊は精強だ。

それを今、僕は思い知っている。

砲声が轟き、騎兵の隊列が三度、崩れる。

それでもなお、怯まずに接近する。

最早先頭は半里程度の距離しか無い。

予備隊約二百五十名を配置した壕

その五十間前方に馬防柵を設置してある。

足止め程度にはなるが決してそれ以上では無い急拵の物だ。

予備隊と剣虎兵小隊は皆が施条銃装備だ。

これが唯一の贅沢である。

「大した統率だな。この悪路で叩かれても尚も退かない。」

僕の不機嫌さを感じたのか千早が顔を寄せる。

それを揉みながら様子を見る。

敵は分隊規模の横列で縦隊を組んで突進している。

皇国軍では使われていない隊形だが便利そうだ。

「もう一度撃つたら馬防柵付近への

集中砲撃の用意をさせろ。」

「はい、大尉殿。」

そう答え、観測結果を伝える声の方を向き
ぐったりとしている金森を気遣わしげに見た。
新兵であり恐らく十七才だろう。

だが見た目はまるで子供の様に見える
軍曹は四十路前だ。

近い年頃の子供がいてもおかしくは無い。
心配なのだろう。

金森の顔色は蒼白になっており

導術兵の象徴である額の銀盤も

疲労の度合いを示し黒ずんでいる。

導術兵達は皆この様な状態だ。

導術は乱用すると酷いときには死を招く。

今はまだ交代制を取れているが

それでも過剰な負担を強いられている。

だが今は前方の戦況に心を向ける。

現在攻撃を行っているのは二個中隊だ。

残りの二個中隊は後方一里に控えている。

補給の前に糧秣を優先して配分させたのだろう。

本格的な行動の前の威力偵察のつもりか、

それとも逼迫した兵站事情から焦りが生み出した行動なのか。

何方にせよ此处で大隊の半数が拘束されている状況は好ましくない。
頭数から何もかも兵站事情以外は帝国に水を空けられているのだから。

畜生め。

守原大將が少しはまともな指揮をとっていればこんな面倒は無かつたのだ。

いやいや、どうにもならない事を愚痴っている

僕も言えた者ではないな。

馬防柵に殺到した部隊が予備隊の銃撃で倒れながらも、
馬防柵に槍斧や鋭剣を叩きつけ、

破壊しようとしている。

僕が命じた通りにその頭上に四度、霰弾が炸裂し30名程倒れた。その衝撃からか馬防柵が根本付近から倒れてしまう。急拵だから無理もないか。

倒れた柵を乗り越え、騎兵達がなだれ込む。

「総員、撃て！」

漆原少尉の掛け声が聞こえ、

再び銃声が響く。

流石施条銃だ。

良く当たる。

隊列が激しく乱れた。

猛獣の咆哮が響いた。

西田の剣虎兵小隊が攻撃を開始したのだ。

馬が捕食者の声に反応し、

恐慌に陥った。

横からの射撃と正面からの猛攻、そして馬の混乱。

部隊は混乱から壊乱へと

成りつつあった。

300名の精兵達は

200名もいない烏合の衆へと成りつつあった。

だが、勇壮な帝国語が微かに聞こえた。

中央の一部で秩序が戻り撤退を始めた。

不味いな。向こうには優秀な指揮官がいるらしい。

此処で統制を取り戻され本隊まで戻られると危険だ。

「装填、急げ。」

漆原も気付いたか。

「軍曹、中央、距離二百間。」

「はい、大尉殿。」

優秀な下士官特有の迅速簡潔な言葉と

正確な命令の実行により、その付近は赤く染まった。

・

・

同日 午前第十二刻 独立搜索剣虎兵第十一大隊

大隊本部 大隊長 馬堂豊久

「発、転進司令本部

宛、独立搜索剣虎兵第11大隊

本文。

貴官等ノ奮戦ニヨリ北領鎮台転進作業八本日夕刻ニテ完遂スル見込ナリ。

転進支援本部八大隊ノ転進ヲ、25日正午マデ待ツ用意、アリ。

本日、午後第五刻マデニ返信サレタシ」

導術兵の言葉を書きとめて読み返す。

「良い知らせだな。」

だがタイミングが最悪だ。

側道の部隊が来る前に来て欲しかったと思つのは贅沢だろうか？

冬野曹長から敵襲の報告が入った。

二正面作戦を強制させるか。

「ったく、向こうに導術兵がないのが救いだな。

あの数だけでも面倒だと言うのに」

砲の再配置が済んだばかりだと言うのに。

愚痴を喉元で押し留めつつ自分の戦場へと意識を向けた。

第十二話 苗川攻防戦 其の三（後書き）

明けておめでとうございませう
拙作ですが今年もお付き合い願ひます。

第十三話 苗川攻防戦其の四（前書き）

戦闘描写が難しすぎる。

戦闘時は三人称の方が良いかな・・・

第十三話 苗川攻防戦其の四

皇紀五百六十八年 二月二十三日 午前第十二刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部

大隊長 馬堂豊久

撤退か・・・。

希望を持つてはいてもいざ許可が降りると実感が無いものだな。寧ろ困ったな。

なんて贅沢な気持ち湧いてくる。

よりによって側道に騎兵大隊がいる時に来るとはね常識的に考えて夜間に撤退するべきだが

問題は現在新城が相手をしている騎兵大隊だ。

補給が不十分でも負傷者を抱えた歩兵に追いつくのは容易い。

・・・日が沈む直前に砲撃で一気に叩くか？

導術に無理をさせれば夜間砲撃も不可能ではない。

擲射砲を使つて本部を狙撃すれば混乱する。

日没後は主力も渡河は諦める、不可能ではないが。

しかし、撤退許可が出た日に焦つて全滅なんて最悪の冗句だ。

本来なら無理は禁物だが

陣地から出てから補給を受けた騎兵に襲われたら危険だ。

統率さえ麻痺させれば逃げ切れるのだが。

新城が追撃を諦めさせる程に損害を与えれば最高だ。

無理をさせて導術兵を死なせるのは気分が悪い。

いや、戦争で気分が良くなる事など無いか。

この地獄で笑うのは自棄になった奴か魔王だけだ。

同日 同刻 側道防御陣地

独立搜索剣虎兵第十一大隊 首席幕僚 新城直衛

思わず笑みが浮かぶ。

ひよっとしたら分かりやすい形で勝利らしき物を得られるかもしれない。

指揮官には命中しなかったようだが砲撃の効果は十分だ。

指揮官は統率をとれなくなり。

瓦解した後方から兵は逃げ出している。

前方は銃撃で瓦解している。

「軍曹、次は敵の後尾を狙え。これを最後にする。

金森二等兵、砲の斉射後、剣虎兵小隊に突撃を許可しろ。」

壕に戻る。

「予備隊総員、装填及び着剣。砲の斉射後、もう一度射撃をしたら突撃する。」

さすがに剣虎兵一個小隊のみでは厳しいだろう。

指揮系統が瓦解した相手だ。

これで終わる。

「攻撃は馬か騎手の足を狙え。

逃げ出したら深追いはするな。」

剣牙虎を見せれば混乱は恐慌となる。

数で勝るこの状況なら圧力としては十分だ。

砲声が響き後方で砲弾が炸裂する。

施条銃の銃撃により騎兵たちが倒れる。

鋭剣を抜き、振り下ろす。

「突撃！！」

手が震えるが不思議と足はもつれない。

脇を千早が駆け抜ける。

第三東方辺境領胸甲騎兵連隊第一大隊第三中隊
中隊長 ゴトフリート・ノルディング・フォン・バルクホルン

敵は巧妙にして大胆、そして周到だ。

部隊は既に200名を切った。

私の指示も先程の砲撃で周囲の者を排除され、届かない。

私が砲撃で死なかつたのも幸運としか言えまい。

そして横腹を猛獣使いの部隊に突かれ、

正面から部隊長らしき猛獣使いを先頭に250近い銃兵が突撃を開始した。

砲撃と猛獣使いの突撃で分断され、前方には60名もいない。

猛獣の咆哮で馬が恐慌に陥り騎兵が振り落とされている！

落馬をした者は首を貫かれ、しない者は足や馬を銃剣で切り裂かれ落馬して馬に踏み殺されるか他の者と同じ運命を辿るかだ。

私は怯える馬を宥めながら周囲を見回す。

猛獣使い達は明らかに実践慣れをしている。

あの夜襲の生き残りだろう。

やはり奇襲時の猛獣使いは騎兵の天敵とも言える。

数の少なさが救いだろうか？

「集結！集結！」

最後尾の騎兵達を取り纏めに行く。

私の従兵であり猛者であるアンリ・ロボフ軍曹が数名を従え駆け寄ろうとする。

その時

「——！！」

将校らしい若者が三人の兵と二匹の猛獣を従え突撃してきた！！

さらに乱戦を行っていた猛獣使い達が集結しつつある。

それを邪魔する者は既に粗方いなくなっている。

「軍曹！状況は！？」

「我々の中隊は半壊し混乱に陥っております！」

先行した第二中隊は銃兵部隊の突撃を受けております！」

それにこの部隊も前方は突破されつつある……。

だが、あの将校を討ち猛獣使いを突撃すれば何十名かは救える！

「何人動ける!?」

「20名・・・いや、30名いけます!!」

「よし!私に続け!残りは退却の許可を出せ!」

後方の銃兵部隊の指揮官が部隊を引き連れ合流した。
遂に突破されたのだろう。

第二中隊は全滅したのか・・・。

この男も猛獣使いだ。

そして二個中隊相当の銃兵部隊を指揮しているのだ。

この恐るべき大隊の中樞だと推測出来る。

ここで討つ!

「我に続けえ!

あの猛獣使いの将校達を討てばあの蛮兵達は烏合の衆だ!

征くぞ!!

ウーランツァール

帝国万歳!!」

集結した33名の胸甲騎兵が呐喊する。

銃兵の将校が十数名を率いて前面に出てきた。

膝射体勢をとらせている!

不味い!

銃兵部隊の射撃で半数が崩れる。

引き際を見誤ったか・・・

だが、まだだ!

まだ、終わらん!

前方の銃兵達を槍斧で薙払う。

部隊長の猛獣使いに向かう。

「終わりだ!」

猛獣が飛び掛かろうとする。

「若殿!」

アンリが助けに出てきてくれた。

が

アンリに向かい猛獣が凄まじい咆哮をあげた。

今まで見た事が無い恐怖の表情をアンリが浮かべる。

馬も恐慌状態だ。

若い将校が見逃さず馬の尻を斬り付ける。

「若殿オ!!!」

制御を失い馬は

後方へ逃げて行く。

「クツ・・・」

私もその咆哮で馬が竦んでしまっている。

馬に猛獣が飛び掛かり牙を突き立てた!

馬が暴れだす!

思わず槍斧を落とし両手で手綱を握る。

将校が鋭剣で足を斬り、

そのまま、馬の腹に剣が突き刺さった。

「グオツ・・・」

私も鋭剣を抜刀し、切り付けようとしたが馬が痛みで悶えている。

バランスを崩れる!

全身に衝撃が奔る。

「ガツ・・・」

馬から落ちたのだ。

馬は苦痛のあまりに逃げ出した。

蛮兵達が囲む。

私は未だ起き上がれない。

此処までか・・・

猛獣使いが兵達に指示を出す。

私は乱暴に、だが生かされたまま担ぎ上げられた。

・
・
・

独立搜索剣虎兵第十一大隊

首席幕僚 新城直衛

「損害は？」

漆原が答える。

「予備隊は38名です。」

「本部付剣虎兵小隊、損害10名、猫二匹です。最後に態勢を立て直されたのが辛いですね。」

隕鉄を従えて西田も答える。

あれにはぞっとした。

ただでさえ士官が不足しているのだ。

大隊の致命傷にすらなりえた。

成功していたら大隊の将校二人が死んでいたのだ。

漆原一人で此方の陣地を統轄するのは困難だ。

馬防柵も破壊されている。

そこに補給を受けた大隊主力が襲いかかる。

十中八九、突破されるだろう。

本部を潰され大隊は全滅すら有り得る。

捕虜となった士官を見る。

大勝負を挑むだけあって勇壮な顔つきをしている。

「増谷曹長、金森二等兵は砲兵の配置場所付近で待機。渡河した敵部隊の動静を監視してくれ。」

「他の部隊は一時後退。」

捕虜は丁重に本部まで輸送する。

療兵を呼んでくれ。」

同日 午後第二刻

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊本部

大隊長 馬堂豊久

目の前の蒼白ながらも勇武の相を保っている騎士を見る

「 皇国 陸軍独立搜索剣虎兵第十一大隊指揮官 馬堂豊久少佐です。」

大協約 の保障する貴官の俘虜としての権利、その遵守に全力を尽くす事を誓約します。」

幸い、俺の 帝国 語は錆び付いていなかった。

さて、この状況では保険の必要性が高まった。

ここに捕えしは東方辺境軍の花形

胸甲騎兵連隊の士官

さてさて、士官の素性は如何に？

「<帝国>陸軍第3東方辺境領胸甲騎兵聯隊第一大隊第三中隊指揮官
ゴトフリート・ノルディング・フォン・バルクホルン 騎士 大尉
です。」

貴官の様な勇氣と道義のある敵と出会えた事を身に余る光栄とします。」

新城大尉の龍神の加護は厚い様だな。

騎士！それも名前からすると生え抜きの貴族家系だ！

帝国 公用語用の名に変える前からの騎士貴族！！

最高の切札になる。

「過分の言葉、痛み入ります、大尉。」

まさに身に余る言葉だ。

打算の上で捕虜を得る様に命じたのだから。

ちくり、と羞恥心が刺激される。

「大尉、負傷は止血しておけば命に別状は無く。

後遺症は残らないそうです。

当面は安静にしていして下さい。」

療兵を呼んで安全な場所に移送させる。

「さて、新城大尉を呼んでくれ。

小苗陣地の指揮権は杉谷少尉に預けさせる。」

下らない、羞恥よりも撤退の算段をつけなくてはならない。

「新城大尉、入ります。」

入ると俺の顔を見て疑問の色をつかべた。
いかな、気持ちの切替が出来てない。

「良い知らせと悪い知らせがある。どっちを聞きたい？」
気分転換の軽口だ。

「・・・悪い知らせから聞きましょう」
新城らしいな。

「緊急の要件がある。」

午後五刻まで二人共此処に詰めなくてはならない。」

「良い知らせは？」

「転進支援本部から撤退の許可が降りた。」

午後第五刻までに詳細を返信すれば撤退できる。」

新城も何とも言えない表情を浮かべる。

俺が知らせを受けた時と似た顔だ。

「それで、だ。渡河した部隊はどう動く？」

「相応の損害を与えました。夜間に動く程無謀とも思えませんが・・・」

珍しく言葉を濁す。

「大尉にしては珍しいな。何かあるのか？」

「糧秣の問題で焦っているようです。」

糧秣が尽きる前に強襲してくる可能性があります。」

「北美名津まで一日はかかる。」

その前に追いつかれるか。」

「恐らくは。再び糧秣を優先的に回して

一個中隊程度でも追ってくる可能性があります。」

「擲射砲を廃棄して急がせても辛いかな。」

負傷者を運ぶ為に馬車を使うので騎兵砲は足並みが揃う。

「此方の戦闘可能人数は現在五百五十名程度

猫は八匹いる。」

除雪された街道で渡りあっても負けはしないが。」

何人死ぬか解らない。導術兵に警戒させるしか無いが。

「危険だが日没直前に擲射砲を動かして砲撃させるか？

中央を狙えば擾乱程度にはなる。」

先程考えていた案だ。

危険だと思いが相談してみよう。

「無理です。時間的に厳しい。

砲を捨てても追撃されたら

逃げ切れません。」

「――ふむ。」

「撤収作業中にそのまま強襲されたら

全滅します。」

「無理か。」

「夜陰に乗じて撤退。導術兵で警戒、

単純だがこれが確実でしょう。」

「まあ今更博打を打つ意味は無いか。

それで行こう。」

あの夜襲以来博打の連続で感覚がおかしくなっていたようだ。

部隊の現状と行軍予定、負傷者の数の把握、撤退の準備、その他諸々。

仕事はまだまだある。

だが、それは兵を死地からほんの一時とはいえ舞い戻す為の仕事だ。

「――やはり。」

今更な実感が湧いてきた。

「何だ？」

「やはり良い知らせだな。」

「何を今更。」

我が旧友は普段の印象を変える朗らかな笑みを浮かべた。

第十四話 最後の転進 最後の捨石

皇紀五百六十八年 二月二十四日

午前第五刻 苗川渡河点より後方約三十里

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長馬堂豊久

今とるべき策は唯一つ

逃げるんだよオオー！

と言つても別に走るわけでは無い。

歩行に差し障りが無いとはいえ軽傷者も歩かせているのだ。

馬車を二台分重傷者と導術兵・バルクホルン大尉用に割くのが限界だ。

二日日分の糧秣と残り僅かな弾薬を運ばせているだけなのに何故か？手持ちの馬車全部近衛に渡したからだ。

避難民の輸送の為だから仕様が無いのだが。

「霧が濃いな・・・」

猫と導術に頼らなければならぬか。」

相対的に考えれば有利ではあるが、視界が利かないのは単純に不安を煽る。

夜を徹して歩いているので兵たちの疲労は濃い。

というか俺も疲れている。

敵の先遣隊にもそろそろ気取られるだろう。

いや騎兵大隊も輜重隊と合流している頃か。

つまり追撃戦が始まる頃合だ。

いや、距離を夜間に稼いだのだから・・・

あゝ駄目だ。疲れて頭が回らん。

馬から降りて前衛の新城大尉達の剣虎兵達の所に早足で行く。

指揮官は走るな。と祖父や教官にきつく言われた事が染み付いている。

剣虎兵自体を否定するつもりは無いが、馬との相性の悪さばかりは面倒である。

北領鎮台が厄介物扱いしたのも解らないでもない。今はまだ馬は流通の要なのだ。

尤も馴れさせれば何とかなるのだが完全では無い。

「そろそろ休憩にする。森の所で休憩をとろう。」

「はい、大隊長殿。」

新城大尉もさすがに疲れたようだ。顔が恐い。

・
・
・

目的地までは後、三十里——半日程度で到着するはずだ。転進作業には二刻程度と見ていいだろう。

苗川からも三十里程、騎兵もそう長く単独行動は出来まい。

休憩をとってもこの状態なら何とかなる。

——休憩しないと後が危険だ。

疲労させたこつちが疲労しきったところを襲われる

これが因果応報ってお話だったのさ、何てオチは好みじゃない。そんな訓話を読みたいなら寺の説話集で読める。

身をもって体験したくは無い。

休憩開始から一刻程した時

増谷曹長の部下の一人が頭を跳ね上げた。

「大隊長殿！」

敵主力より、

騎兵二個大隊が突出して行動を開始しました！

側道の大隊と合流し南下しています！」

「！！！」

やられた……。

俺の部隊は確かに帝国の兵站を破壊した。

だが、それは、補給線を絶ったワケではない。
それをすれば致命傷になる。

帝国軍はそれを恐れて二個旅団をあゝの状況で派遣させたのだ。
真室が破壊された事でそのか細い線に無理を言わせたのだらう。
時間切れ。

莫大な糧秣を用意させる理由
一個大隊に消耗した先の大軍。

その虚構は消え失せた。

残りますは、小癩な大隊

急造の補給線から回した一個連隊分の糧秣
叩き潰すにはそれで十分。

「傷を負った連隊でも十分ってか？」
悪罵を噛み殺して呟く。

主力が北美奈津からほぼ完全に撤退する時期だと判断したのだ。

見事に的中だ。

俺の一縷の望みも絶たれた。

そして蛻の殻の陣地。

戦力はその規模で十分把握出来る。

僅かながら期待しついたもう一つの欺瞞、

戦力の過大評価も消え失せた。

最早一後先考える必要は無くなった《・・・・・・・・・・・・・・・・》。

そう確信させたのだ。

俺は自国の村を焼き、敵を弱らせ

陣地と地の利に頼り

背後の尻に帆をかけた冷蔵式敗残兵の群れに下すであらう

過大評価、いや本来の正当な評価を張り子の虎にして時間を稼いだ
のだ。

それらが消え失せた今、 帝国 軍は考える。
答えは一つ対処も一つ。

この大街道で裸の大隊を叩き潰す。
なんとも単純明快にして

確実極まりない答えじゃないか。
羨ましい限りだ。

だが抵抗し、生きて帰りたい。
皆を生かして帰りたい。

どうする？

濃霧と導術を利用し逃げる。 Non

海岸まで逃げ切れても作業中に襲われる。
行き着く場所は北米名津だ。

そんな終わりは断じて御免だ。

やり過ぎす？ Non

本隊と挟撃されたいのか？ 余計無惨な結果を産むだけだ。
遅滞戦闘隊を集成、時間を稼ぐ。 これしかない

此処で騎兵を相手に三刻も稼げば何とかなる。

濃霧を利用して稼げば苦しいが何とか残りは生きて帰れる。
問題は誰がやるかだ。

言い替えれば誰を内地へ帰すかを俺が決める。

さてどうする一番魅力的なのは今すぐ皆に土下座して
自決し、後を任せる事だが流石にやれない。

まず基本として導術兵は論外、

帝国では宗教上の理由で導術は忌み嫌われている。

遅滞戦闘部隊は後で捕虜になることが確実なのだ。
それは酷すぎる。

ならば霧を利用する以上、剣虎兵は必須だ。

鋭敏な感覚に騎兵の攪乱、必ず必要になる。
脳裏で組み立てる。

一個中隊規模で

敵を誘引し、

可能な限り時間を稼ぐ。

糞っ！

俺は敵に殺されるか

捕らえられるか。

その未来しか与えられないのか！

いつの間にか顔を覆っていた手で

不甲斐ない自分のこめかみを締め付ける。

「大隊長殿。」

新城が声をかけてきた。

「何か。」

「自分が」

柄にも無い事言うな。

お前が小胆なのは知っているさ。

「いや、俺がやる。」

中隊を集成し直率する。」

「撤退出来なくなります。」

それに大隊長は主力を掌握していなければ。」

「主力？

戦うのは俺が直率する中隊だけだ。

ならばそれが主力だ。」

指揮官としては士気と統率を保つ手段だ

と言い訳してみる。

屁理屈の上に偽善だ。

「・・・」

まるで硝子の様な目で俺を見ている。

何を考えているのか分からない。

「捕虜と騎兵砲小隊二個と剣虎兵小隊、鋭兵小隊、療兵分隊を残せ。

残りは大尉が撤退行動を指揮し、転進せよ。

それとお前が取りすぎた細巻を返せ。

命令、だ。」

それと文を渡す。

「はい、大隊長殿。」

騎兵砲はこれで全てだ。

負傷者が多く馬が足りなかったのだ。

新城から奪還した細巻に火を着ける。

やはり旨いな。

・
・
・

「最後まで貧乏籤ですな。少尉殿。」

「まあいいさ。帝国の捕虜の扱いが良い事を祈るよ。」

冬野曹長と西田が軽口を叩きあっている。

あゝ、もつと悲壮な感じになっていると思うたが。

「少佐殿、忙しくなる前に食べときましよう。」

冬野曹長？何？何で握飯、食ってんの？

はあ、何かどうでも良くなってきたな。

鋭兵小隊の小隊長として志願した漆原は複雑そうな顔で此方を見ている

「一個寄越せ。」

作戦は単純、ここまで来た敵を森から砲撃及び射撃する。

猫に咆哮^{なか}させ、騎兵を混乱させる。

後は森で身を隠しつつ雪壕へと誘引する。

穴だらけだな。

自嘲したくなる程穴だらけの作戦だ。

誘引？此方の射撃で中隊規模だとあっさり看破されたらどうする？

一個大隊を宛てがい、追跡を続けられよう。

砲撃と剣虎兵への畏怖による判断ミスを願うばかりだ。

本隊は最早、猫が一匹いる銃兵部隊でしかない。

この部隊は騎兵砲四門、猫七匹、兵数は約九十名と

一個中隊規模としては中々の戦闘力を持っている。
準備する時間はある。

やるだけやってみるか

——敵先鋒と接触するまで後二刻。

・
・
・

午前第七刻 苗川渡河点より後方約五十里

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長代理 新城直衛

「大尉殿、敵部隊は遅滞戦闘隊と交戦を開始しました。
増谷曹長が報告する。」

「そうか、無理をしない範囲で索敵を続けてくれ。」
意外ではあった。

豊久は決して無能でも臆病でも無いが、
その根底には保身の意識が強く、

自ら捨て石となろうとする人間では無いと思っていた。

いや、あいつも死ぬつもりは無いか。

預けられた文を見る。

彼の父に宛てられている。

何が書かれているのだろうか。

父への遺言？

それとも生還した後への布石？

彼奴は何を考えてこの文を書いたのだろうか？

いや、今考えることではないか。

今は一刻も早く北美名津へ到着しなくてはならない。

第十四話 最後の転進 最後の捨石（後書き）

書き溜めが尽きた・・・
週一ペースになるかもしれません。

第十五話 最後の意地 最期の言葉

皇紀五百六十八年 二月二十四日 第十三刻小半刻前

街道より西方二里 森林内

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

「やれやれ、本当に貧乏臭い戦だな。」

敗軍らしい竜頭蛇尾の戦だよ。ホント

竜頭蛇尾・・・か。

そう言えば俺が指揮権を受け継ぐあの夜襲前に天龍に出会ったとか
新城が言っていたな。

ああ此処までどうにもならないのならいつそ龍神の加護でも祈るか？

いやいや、今までの博打の出目の良さにこの濃霧、

寧ろ天の配剤をしかと受け止められたから

此処に生きているのか。

遅滞戦闘中隊は砲を失い兵を半数近く亡くしている。

だが、幸運と濃霧に助けられ。

連隊の先鋒大隊本部を奇襲し、潰した。

剣虎兵は正しく人虎一体と表現するに相応しい活躍した。

騎兵砲は最期に森の中に入った迂闊な小隊を

近接用散弾で吹き飛ばし、沈黙した。

その後は、砲兵にも銃を持たせている。

此方は30名近く戦死者を出し負傷者も同数以上だが敵はその倍以上の痛手を被った。

だがそれでも敵は追撃戦で本隊を潰すには十分以上の戦力を保った
ままだ。

そして何を思ったのか二個大隊強の兵力で此方を囲んでいる。

側道陣地戦で渡河した一個大隊を半壊させたのでこれで全軍だと思

う。

本隊との挟撃を恐れているのか？

此方にはそんな戦力は無いが。

或いは矢張り疲労が濃く無理を恐れているのか、

流石に猫の数までは解らないだろうし

本隊の戦力を過大評価しているのだろう。

実に都合が良い。

此方の実情は厳しいからね。

睨み合いは大歓迎だ。

「冬野曹長は？」

「命に別状は有りません。ですが意識が戻るまでは暫くかかります。」

馬に蹴られ、頭部を強く打ち気絶している。

ギリギリまで騎兵を引きつけた砲撃の代償だ。

生きて戻れたら希望に沿った選択をとれる様にしてあげなくては

拳銃の火皿に玉薬を注ぐ。

「西田少尉、漆原少尉、戦闘可能人数。」

「剣虎兵小隊、戦闘可能人数 十二名、猫五匹です。」

「鋭兵部隊、砲兵、軽傷者込みで戦闘可能人数、四十三名です。」

漆原を見ると反発する余裕も無いのか

以前の素直さが戻っている。

いや、何か変わった。

戦場に適応し変化したのか。

ひょっとしたら俺なんかよりもっと優秀な――

「大隊長殿！敵が集結しています！」

膠着状態に焦れたか。

「打ち方用意！！」

射撃を行う。

押し返している。

後少し、後少し保たせなくては・・・

「少佐殿！敵の・・・」

漆原が戻ってきた。

——銃声が、響いた。

正午

独立搜索剣虎兵第十一大隊

本部付剣虎兵小隊 小隊長 西田少尉

敵の騎兵は森林内では行動が制限され突撃が行えない。
だからこそ大隊長は本隊が追いつくまでは此処で誘引する。
と考えたのだ。

射撃を受けるとあっさり後退して行つた。

おかしい、そう思つた時斜め後方で銃声が響いた。

「しまった！総員後退！」

「・・・やってくれる。」

騎兵銃を装備した小隊が徒歩で奇襲をかけたようだ。

馬堂少佐が五名程の兵を直率し応戦している。

捕虜の大尉は足を負傷しているからか静観している様だ。

「剣虎兵小隊！突撃い！」

此方に気がつき逃げ出そうとするがそうはいかない。

隕鉄が咆哮し、飛び掛かった。

・
・
・

即座に殲滅出来た。

漆原は背中に数発の銃弾を受けている。

療兵は首を振る。

「大隊長殿、助かりません。急所は外れていますが
これでは苦しむだけです。」

「・・・」

馬堂少佐は目に哀切な光をよぎらせた。

漆原が何かを呟く

「漆原少尉、」

馬堂少佐が耳をよせ、

「――。」

何を聞いたのか

そして銃口を心臓の上に乗せた。

「違う、俺は・・・」

何事か呟き引金を引いた。

瞑目している。

寒風が――吹いた。

「西田少尉、青旗を持って来てくれ。」

絞り出す様に言った。

午後第一刻一尺 街道より西方二里 森林内
独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

「少佐殿・・・自分は・・・貴方の様に正しくは・・・」

彼の末期の言葉が耳に残る。

違う、俺は正しく何か無い。

正論を武器にして皆を言い包めただけだ。

いや、どうなのだろう。

軍人としては正しかったか？

どうなのだろうか？

此処にいることも間違っているのか？

寒風が――吹いた。

思考が打ち切られ自分の場違いな思考。

新城の言う所の贅沢な思考に浸る自分に

尻を蹴り上げたくなつた。

駄目だ。奴の言っていた様に割り切らなくては。

今、必要なのは・・・

取り敢えずあれをもう一回やられたら終わりだ。

「西田少尉。青旗を持ってきてくれ。」

捕虜であるバルクホルン大尉の所に向かう。

「大尉。」

「何だろうか？少佐殿」

「我々の戦況では。」

「解っています。少佐。」

どうやら立場が変わったようですな。」

勇壮な顔に笑みが浮かぶ。

「ええ。どうやら本来あるべき立場に。」

——部下達には通じないから言える事ですが。」

本音をこぼせる相手がこの人だけか。

「お願いできますか？大尉。」

「ご一緒しましょう。少佐殿」

彼に肩を貸し。

青旗を榎藤軍曹が掲げ森を出す。

部隊から離れた辺りで

バルクホルン大尉が

諫める様に口を開いた。

「少佐殿、貴官は若い様だが先程の様な物言いは止めた方が良い。」

「申し訳ありません。」

どうも戦闘が終わると思うと気が緩んでしまった様で。」

確かに軽率な物言いだ。

しかしこの人から言われるとは。

やはり誇り高く、公明な騎士なのだろうな。

破壊された砲と騎兵達の死体の先で森が拓けた。

森を出ると騎兵達の殺気立った視線が突き刺さる。

青旗とバルクホルン大尉を見て歓声と戸惑いが広がる。

最後の命綱の効果は上々、か。

いなかっただら踏み潰されていたかもしれない。

「降伏の為の軍使を受け入れて頂きたい。」

前に出て来た士官に声をかける。

先程、刻時計を見たら宣言した時間をやや過ぎていた。

この騎兵の数を改めて見る

最後の仕事も果たせた様だ。

霧が晴れている事に漸く気がついた。

やはり疲労している様だ。

「宜しい！軍使を受け入れる！」

権藤軍曹に大尉を預け、

前に進む。

一際立派な将校が馬から降り、前に出て来た。

「 皇国 陸軍独立搜索剣虎兵第十一大隊

指揮官 馬堂豊久少佐です。」

「 帝国 陸軍第三東方辺境領胸甲騎兵連隊 指揮官

男爵大佐 アンドレイ・カミンスキイです。」

凄い美男子だ。

年は俺より少し上か？

帝国人は分かりづらい。

「大佐殿、私と私の部隊は 大協約 に基づいた降伏を行う用意が

あります。」

「貴官の決断に敬意を表します。少佐。

大協約 に基づき貴官とその部隊の降伏を受諾します。」

胸に手をあて宣誓する。

彫刻かと思う程に様になっている。

「 大協約 の保証する捕虜の権利

その遵守に全力を尽くす事を

皇帝ゲオルギ三世陛下の忠臣にして

藩屏たる 帝国 軍將校

帝国 貴族として誓約いたします。」

「貴官の勇氣と道義に感謝します。

カミンスキ大佐。」

その言葉で儀式は終わりだ。

そう言いたいのか兜を脱ぎ、親しげな表情をした。

「まさしく勇戦されましたね。少佐。」

なんとまあ。つてか？

名演だな。

だが悪意が滲んでいる。

宮野木の糞爺を思い出す。

「いえ、真に称賛されるのは兵達です。

常に彼らが砲火に身を晒し、

馬を駆り剣牙虎と共に戦場を走ります。」

「そう、正しく

称賛されるべきは常に兵達です。

ですが兵は——猛獣は——

腕の良い猛獣使いの下で

初めて有益に働きます。」

そっちが本題か？

新兵科の事でも探るつもりか。

「猛獣。剣牙虎の事ですか。」

「ええ、そうでもあります。

そして、貴方の部下達の事でもあります。」

何のつもりだ？

「何しろあの地、確か——マム口でしたか

其処にいた部隊は全滅するまで

勇敢に戦い抜いたのですから。」

「!!!」

馬鹿な!!!

降伏を許可した筈だ!!!

——まさか、

「さぞかし勇敢だったのでしょうね。

生憎と私は先遣部隊としてナエガワで

貴官の部隊と交戦していたのですが。

マム口で玉砕するまで戦いぬいた部隊が居たと聞きましたよ。」

俺の顔をみて愉しげに大佐は口角を吊り上げた。

その瞳には蒼白な顔をした敗北者が映っていた。

笑みを見つめて硬直した顔面を戻す。

「確かに、ええ確かに

彼らは勇猛果敢でした。

名誉を持って散った事を誇りに思います。」

言葉を返し、敬礼をする。

部隊の元へと歩く。

畜生、俺は出来る限りの要素を塗り潰した筈だ。

あの時そう確信した筈だ。

畜生め、水軍との二重の手段での策は確かに成功した。

だがこの事態は何だ？

後悔しない為にここまでやったのだぞ？

希望を持つ為の

『何かが出来る』

が

『何かが出来た』

になつて責め立てやがる。

止める、大馬鹿者。

まだお前は指揮官だ。

部隊に戻り

嘲笑との戦争を行う必要がある。

自己憐憫などやっている暇はない。

顔を戻す努力をし、部隊へ戻った。

部隊の残存兵力は五十名にも満たなかった。猫は五匹しかいない。

剣虎兵大隊……か。

本隊はまだ三百以上いた。

それを撤退させたのだから格好がつかないのは当たり前か。

冬野曹長も目を覚ましていたが、脳震盪の様で。

療兵曰く眩暈が酷く立たない方が良いらしい。

「西田少尉、権藤軍曹。

我々は目的を完遂した。

これは少なくとも敗者としては

最高の栄誉と言って良いだろう。

最後まで軍人としての見栄を張らなければならない。

特に武器を引き渡すまでは絶対に、だ。」

皆、疲労の色が濃いながらも頷いた。

冬野曹長が負傷した為、最先任軍曹の権藤が

砲兵らしい裂帛の号令を放ち

装具の点検を行った。

そして冬野曹長達、重傷者を担がせる。

バルクホルン大尉は特に丁重に、だ。

列の先頭に立つ。

嘲笑うか？

嘲笑いたければ嘲笑え。

確かに俺達はお前達に勝ってはいない

だが俺達もお前達には敗けていない

「第十一大隊、前進！」

この降伏交渉は 皇国 陸軍が

北領において行われた最後の交渉であり。

書類上は、大協約に基づき帝国陸軍は

北領においても降伏を全て受け入れた

と記されている。

第十五・五話『猛獣使い』帰還せり

皇紀五百六十八年三月五日

皇国水軍 巡洋艦 大瀬 上甲板

独立搜索剣虎兵第十一大隊

大隊長代行 新城直衛

大隊長、か。

最後の最後で大隊長が代わった。

一個大隊を丸ごと残すと間に合わない、敵を放置したら全滅。ならば、隊を分け、敵を遅滞戦闘で食い止めるしかない。

そしてやり遂げた。

それは確かだ。

だが奴が無事かは、いや、もう考えるまい。

西田も残っている。

少なくともあいつなら見捨てはしないだろう。

漆原もそこまで馬鹿じゃない。

戦死したかもしれないがそうでは無いかもしれないとも考えられる。

あの戦況でこれは一つの贅沢だ。

導術では部隊が統制を保ったまま捕虜になったらしい事しか分からない。

少なくとも将校が豊久か西田、漆原が生きている事は確かだ。疲れ切り。

最後は昏倒寸前だった導術に覗かせていた。

いや、あの状況では命令しなくては最後まで勝手に覗いただろう。

そして僕も止めなかった。

違う、止められなかった。

不安だったのだ。

あの馬鹿め、最後の面倒だけ僕に押しつけて残りやがった。
僕が残るべきだった。

だが、僕が此処にいるのは豊久が命じた事だ。

アイツが先に行けと言った時、僕は――俺は安堵した。

豊久はそれを見透かしていたのだ。

彼奴は昔からそうだ。

まったく気に入らない。気に入らないぞ。

戦争とはもつと残虐で、救いのないものであるはずなのだ。
こんな戦争は、大嫌いだ。

どうにもならない事を考えていると周囲が騒がしくなった。

「新城大尉。」

浦辺大尉、笹嶋中佐が残した転進支援本部の人間だ。

「浦辺大尉、騒いでいる様ですが何でしょうか。」

「ええ、天龍が接近しております、

東海洋では滅多に見掛けませんので一昔前までは

戯れに転覆させられていましたから、

警戒しているのです。」

指された方向を見る。

確かに天龍だ。

わざわざ此方に来るか、しかしたら、『知己』なのかもしれない。

「知己、ですか？」

「はい、北領で 大協約 絡みで。」

「ならば艦橋に行きましょう。」

坪田艦長は叩き上げの船乗りですから、

合戦準備も考えているでしょう。」

・
・
・

坪田中佐と話していると天龍が接近してきた。

坪田中佐が体を強ばらせる。

『当方に敵意なし、当方に敵意なし

貴艦便乗中の友人に挨拶を送りたし。』

導術の声が頭に響く。

天龍程になると僕達にも導術の声を聞かせられる。

「お出迎え痛み入ります、坂東殿。」

『とある筋より貴官の生還を知りまして、ご迷惑かと思いましたが
兎にも角にも一言お祝いを申し述べたく参上致しました。

助けていただいた時に申した一斗樽は持ち合わせていませんがね。』

笑いのような導術の細波を感じた。

『皇都まではもう僅かですお乗せしましょうか？』

「お気持ちは有り難いのですが、部下と共に帰還する事も自分の任務です。」

『このままでは艦の邪魔になりますな。

今日のところはこれまでにします。

いずれ皇都にご挨拶に向かいます。』

「皇都での再会を楽しみにしております。」

導術ではなく咆哮で答えた若き天龍

坂東一之丞殿は再び高みへと舞い上がった。

・
・
・

全く意外だな、自分にこんな里心があるとは、

気に入らない所だらけ、僕の全てを奪い全てを与えた国。

一番親しい友人と後輩を残して尚かんじるこの気持ち。

「故国、ですね。」

そうだ。《故国》だ。

「故国、です。」

大隊の人間たちがわらわらと甲板にいる理由だ。

他の船にも大隊の人間達が甲板に出ている。

妹尾少尉　杉谷少尉は別の船に居る。

「おい！」

港が微かに見えるようになると皆が次々と手を振り、声を上げはじめた。

戦場では古兵として戦っていた者達も下士官の演技をかなぐり捨てている。

全員が僕の視線に気がつき慌てて顔を引き締め、氣ヲ付ケの姿勢になる。

故国、か。

少なくとも僕達にとっては任務達成の時だ。

「諸君、故国だ。御苦労様でした。」

三月六日午前第七刻

皇都水軍埠頭

独立搜索剣虎兵第十一大隊

大隊長代行　新城直衛

帰還の式典は簡素な物だった。

軍監本部から来た代表が1ヶ月の休暇と路銀の支給の旨を伝えた。

僕は陸・水軍、両方で少佐の階級を得た。

水軍は名誉階級だから実権はないが少しは報われた気持ちになる。

兵達が解散し軍監本部の人間との話を終わらせた。

僕の家令（正確を期すなら僕一人の新城家の、だ）

である瀬川が歩いてきた

「直衛様、荷物を。」

「ありがとう。」

そして僕を待つ陸軍中将の元へと歩く

「駒城閣下。」

新城少佐、只今戻りました。」

敬礼する。

「御苦労様でした。少佐。」

答礼された。

それを済ませると

中將と少佐の間に

沈黙が降りた。

それを破ったのは

乳母の抱く幼子の声だった。

「麗子様、初姫様ですか。一年ぶりですか。

大きくなられましたね。」義兄上が顔を緩ませた。

「ああ驚く程にな。

何はともあれよく帰ってきた。直衛。」

「直ちゃん」

この声は・・・

「ただいま戻りました。

義姉上。」

蓮乃義姉さん。

僕と共に東州の戦野を彷徨い。

姉さんのおまけで僕は育預になった。

唯一人の愛する女性

大恩ある義兄上の妾にして事実上の正室。

僕の入る余地は

無い。

「また無茶をして、怪我は無い？」

「無事です。義姉上」

どうしてもはにかんでしまう。

「小さな頃から何時もそう。

見栄を張って無茶をして。

本当は何もかも恐くて仕方ないのに。」

泣き出しそうな声だ。

「直ちゃん・・・」

泣き出した。

僕の

僕の胸で、ねえさん、が

彼女の全てが僕のおぞましい衝動を煽る。

だが僕はそれらを全て微笑に収束させる術を
完全に修得している。

千早の鳴き声が聞こえた。

「おいで！千早！」

巡洋艦から運びだされた檻から飛び出し

僕に甘えるように鳴いた。

一同は笑いに包まれた。

変わらぬ、故国だった。

・
・
・

三月九日 午前第十刻

馬堂家下屋敷

駒城家 育預 新城直衛

何やら商人らしい男がぺこぺこして出ていった。

それを丁重に送り出し、

微笑を浮かべて僕の事を呼ぶ

「済みませんね。少佐

何分この手の事は

時間が勝負なのです。」

何時みても豪商の番頭にしか見えない。

「いえ、僕が急に押し掛けたのです。

馬堂大佐殿。」

馬堂豊守予備役大佐

豊久の父だ。

東州内乱にて負傷し

後方勤務に配置されてから

頭角を現した人だ。

今では投資家。

或いは駒州公篤胤様の

右腕として知られている。

「それで何の用でしょうか？新城少佐。」

馬堂豊長少将

憲兵隊隊長・兵部省にて主計部監査課長を歴任し、今は確か駒州兵
站部司令となっている。

この十数年、後方勤務をしている。

還暦を迎えてなおも騎兵将校の様な体躯をしている。

豊久が苦手としていた。

いや、苦手としている祖父だ。

二人とも声が緊張している。

豊久が帰還しなかった。

そして僕が大隊長を代行していた。

その意味は戦死か捕虜か、どちらかしか無い。

「はい、最初に、馬堂豊久少佐より文を預かっております。
御改め下さい。」

文を豊守が受け取った。

文を二度読み、

柔和な微笑みがやや胡散臭いモノになった。

そして豊長少将に渡した。

「ん。これは・・・」

矢張り読み返し、

「んむ・・・」

いささか困ったように顎を撫でる。

その様子を偕謔味に満ちた目で見ながら豊守様が口を開く。

「まず少佐に知らせるべき事として

第一に新城少佐の事を自身の意志で大隊長として任命している事

第二に以降の軍務においても

君を大隊長として正当に扱って欲しいそうです。」

「はい。」

厄介な口出しを避ける為か？

「後は・・・まあ此方の話ですな。」

豊長少将が困った顔で目を通して言う。

息子や孫とは大違いだ。

正直な話、気になるが、触れない方が良さそうだ。

・
・
・

「育預殿。今度は、豊久が此处に居る時にまた話をしたいものですな。」

実直な顔で豊長少将が別れの挨拶をする。

「はい、全くもって同感です、豊長殿。」

あれでも旧友だからな。

第十五・五話『猛獣使い』帰還せり（後書き）

この主人公、独身主義で突き進むか

原作キャラ相手にフラグを立てるべきか・・・

To be or not to be

何ていつちよ前に悩んでいたります。

第十六話 参謀長との面会（前書き）

申し訳ありません。

レポート書いたり試験前だつたりで遅れました。

第十六話 参謀長との面会

皇紀五百六十八年 三月十日

北領鎮台司令庁舎 一室

俘虜 馬堂豊久

誰かが部屋をノックした音で目が覚めた。

俘虜になって二週間

今の俺には時間だけが腐る程ある。

何故か俺を労役に就けるつもりは無いらしい。

困ったな。

俺が指揮をとらないと部隊の指揮官足りえなくなる。

そして何よりも、暇だ。

ノックに応えて扉を開けた。

士官候補生らしい少年が入室し礼を行った。

「自分は鎮定軍司令部付、ロトミストロフ少尉候補生であります。

貴官は戦時俘虜馬堂少佐殿でしょうか？」

「私が馬堂少佐です。

貴官の用件は何だろうか？」

「鎮定軍参謀長よりの伝言を預かっております。

『ご迷惑でなければ参謀長執務室において願いたい。』との事です。

「

何が目的だろう。

剣虎兵の実態を探るつもりか？

それとも皇国軍そのものか。

会戦で大敗した後にあそこまでやったのだ。

予想外ではあるうな。

まあ、考えても無駄か。

口を滑らせない様に気をつけるしかないな。

「自分は、少佐殿がお受けに頂いた場合、御案内するように命じられております。」

「喜んでお招きをお受けしましょう。」

・
・
・

現在俺達が居る場所は元北領鎮台庁舎だ。

そして、その参謀長室は、そのまま 帝国軍 が頭につくだけになったようだ。

ロトミストロフ君がノックすると丁重な応答が聞こえた。

「どうぞ。」

少なくとも粗野な人間ではないようだ。

入室すると紳士然とした壮年の人物が居た。

西方諸侯領の軍服を着ている。

帝国 軍では貴族将校は出身地の軍服を着用する。

西方の出身、バルクホルン大尉と同郷なのか。

「馬堂豊久少佐です。」

参謀長閣下のお招きにより参上しました。」

「クラウス・フォン・メレンティン大佐です。」

大佐で一個軍の参謀長！

東方辺境姫の引きか？

危険だな。

この人が参謀長だとしたら

未だ若輩の 帝国 陸軍元帥ユーリア東方辺境姫を支え、
一個軍を動かしていたのだ。

いや、考えれば実権を参謀長が握っていてもおかしくはない。
メレンティン大佐か、
もしかしたらば――

「ドウゾヨロシク」

好意的な微笑を浮かべて皇国語で挨拶される。

一介の少佐に鎮定軍参謀長がここまでやるか？

個人的な何かがあるのか？

意図を見定めなくては。

もう一度返礼しながら考える。

今は型通りに話を進めよう。

悪く転がる事は無いだろう。

「大佐殿がお望みならば鋭剣をお預け致します。」

「貴官は 大協約 の遵守を誓われますか？」

「誓います。」

そして、それを前提とした博打を打った。

部下を殺し、俺は生き残った。

兵藤少尉達は俺の軽率さで死んだのだ。

「ならば私も 帝国 将校としての名誉にかけて貴官の将校たる権

利を擁護しよう。」

そして、両手を広げる

「よくぞ、いらした！」

芝居がかった言い方である。

だが、これは真意を隠す為と言うより趣味だろう。

うん、趣味だ。

同好の士の匂いがするもの。

「ロトミストロフ君、ご苦勞様。

下がってくれ給え。」

案内役の少年を下がらせ、俺に席を薦める。

メレンティン大佐が座り、俺が座ると途端に尋ねてきた。

「さて、君に何を差し上げようか？

黒茶か、あるいはもっと強い物もあるが。」

「自分は下戸ですので黒茶をお願いします。 大佐殿

帝国 産の酒はどうも強過ぎて。」

「兵隊言葉は使わなくて良い。」

この場では君は私の客人なのだから。」

そう言つて従兵に茶を持つてこさせた。

細巻を取り出し、俺にも渡した。

上物だ。

笹嶋さんの時もそうだった

駆け引きには何故か上物の細巻がもれなくついてくる。

相手が大物だからか？

細巻の香りを楽しみながら父の言葉を思い出す。

——功を焦つて急いてはいけない。

居丈高に構えても無駄だ。

要らぬ力は込めてはならない。

ぬらりと相手の懷を覗き込め。

そう、教えられた。

「少佐、君は私の真意を図りかねているのだろうが、」

メレンティン大佐は紫煙をくゆらしながら言葉を続ける。

「詰まる所、私が君を呼んだのは純粹な敬意の表明なのだ。」

「敬意の表明、ですか。」

それは、光栄に思います。」

嘘は言っていない様だが、それだけでは無いな。

黒茶で口元を隠しながら観察する。

「どうにも信じきれない。と言つた様だね。」

苦笑を浮かべてメレンティン大佐が話す。

「私の様な俘虜の身に、

一個軍の参謀長殿がわざわざその様な事をなさるとは、

意外に思いました。」

「少佐、私は鎮定軍参謀長であると同時に、いや、それ以上に騎兵
将校なのだ。

処女が恋に胸を焦がす様に

騎兵将校は英雄たるに胸を焦がす。

なればこそ、私はこの戦で英雄となるであろう君に面識を得たかった。

先に私の大望を実現した要訣を学びたいからね。

敵であるなら尚更だ。」

「参りましたね。」

そう言われたら勘ぐれませんよ、大佐殿。」

なるたけ飄然とした笑みを作りながら降参する。

またもや相手の方が上手かな。

面白そうに頷きながらメレンティン大佐は再び口を開く。

「猛獣使い、か。」

その指揮官が砲兵将校とはね。」

「大隊の首席幕僚は猛獣使い——剣虎兵の最古参でしたがね。」

勿論、新城の事だ。

つとそう言えばこれを確認しなくては、

「大佐殿、私の部下の剣牙虎は正當に扱っていただいていますか？」

「ああ、君と少尉の私物として扱っている。」

「剣牙虎は剣虎兵達にとつては頼もしい戦友です。」

少なくとも騎兵にとつての馬と同等かそれ以上に、です。」

話が望みの方向に流れたからか、大佐が僅かに語気を強めた。

「それには腹立たしくなる程に同意しよう。」

特に頼もしさについてね。

しかし、兵器としては、勇猛に過ぎるね。

世話役まで殴り倒したそうだ。」

隕鉄さん達、何やってんすか。

全く困ったものだ。

「まあいい、丁重な扱いは保証する。」

他に何か希望はあるかね？」

「部下達の労役に私も指揮官の義務を果たさせていただきたい。」

私は彼らの指揮官ですので。」

「考慮しよう。」

だが確約は出来かねる。

何しろ鎮定軍司令官閣下が君に興味を抱いているからね。まあ君に興味を持っているのは私も同じだが。」

何やら嬉しい嬉しいお言葉が聞こえたのだが。

「司令官閣下、ユーリア東方辺境姫殿下ですか。

殿下は確か今回が初の外征でしたね。」

そして、初陣にケチをつけた俺に興味、か。

素敵過ぎるお話だ。

改めて 大協約 の遵守をお願いしたいよ。

「良く知っている。」

閣下の関心を買っただけはあるかな？」

桑原、桑原。

この言葉、怒りの雷も遠ざけてくれるかね？

「元・情報幕僚ですから。」

それなりに勉強していますよ。

仰ぐ旗が同じであればと思うくらいに。」

半分以上本気だ、 皇国 の将家の生まれじゃなかったら其方に産

まれていたら

それはそれで、幸福だったかもしれない。

「残念ながら私は皇国に生まれ、家族も友も主家も居ます。

それなりに故国を愛してしまってますね。

それでも相手を不当に貶めるつもりはりあませんが。」

頷いてメレンティン大佐が語る。

「互いの忠誠の対象が違っていても。

軍人としての相手への敬意を些かも薄めてはならない。

それこそが我々の守る最後の一線なのだろうな。」

最後の一線、か。

そうかもしれないな。

「そうですね、社会を動かす根幹は人間同士の交流と交換です。

その潤滑油として相互の敬意こそが尊ばれるべきだと私は考えます。

そして、それは実績によつて齎されるべきです。

日常でも、政治でも、そして戦場でも。」

自国の村を焼かせた指揮官が

略奪を推奨している軍の参謀長に言うのだから、皮肉なものだ。

「断然、同意する。」

それならば、何をもつて貴官は自身の事を正当とするかね？」

諧謔味を滲ませた目で俺を見る。

「私が敬意を払われるべき存在とする理由ですか？」

「そうとも言えるな。」

成程、焦土作戦を自国で行つた指揮官である俺の価値観を探るつもりか。

「そうですね。」

大協約に反せず任務を成し遂げた事でしようか。」

「例え、自国の村を焼き、町の穀倉を焼いても、かね？」

「不幸な事に敵軍はそれ以上の非道を恒常的に行つていたので、敵軍の兵站破壊と自国民を大協約の保護下の都市への移送を両立する為に実行しました、その結果を実績としましょう。」

皮肉を交えて答える。

「成程、自国の村を焼いたのも互いに効率性を追究した結果か。」

皮肉で返された。

値踏みする様に此方を見ながら言う。

「それならば貴官は私をどの様に評価するかね？」

うん？また妙な事を聞く。

俺の心理テストでもやっているのか？

「判断に必要な情報が欠けています。」

強いて言うのなら、子爵家に産まれた方に相応しい品格を持った一流の主人役ホストの技術を持った御方としか言えませんか。

我々はこれが初対面ですのでこの程度しか言えません。」

「！？」

私の事を……。

いや、兄の事を知っているのかな？」

「はい、帝国西方領の軍服を来た、『メレンティン』大佐殿。まあ十中八九は帝国高等外務官である

マルデン子爵殿の親戚だと当りをつけたのです。」

まさか弟だとは知らなんだが。

「いやはや、驚いたよ。」

まさか、軍人としてではなく氏素性から答えられるとは思わなかった。

不思議な気分だ。」

この世には不思議なことなど、つてね。

「戦争になる前から皇国・帝国間で交渉が行われていましたからね。私は北領に赴任する前に高等外務官殿の名を耳にしたのです。」

「成程ね。君は貴族

いや、君の国ではシヨウケと呼ぶのか、その家の産まれか。」

「ええ、その通りです。」

元々は良馬の産地を統治していた主家の下で

馬の管理を取り纏めていた家だそうで。

まあそこその家柄ですね。」

再び値踏みする様に見た後、メレンティン大佐が口を開いた。

「少佐、君は中々どうして現実的な考えを持った人間の様だ。

それに相応しい見識を持つてもいる。」

「鎮定軍参謀長殿にそこまで言っただけだと面映いですね。」

この北領を俯瞰し、策を練っていた人だ、

ここまで言われると世辞でも嬉しくなる。

「君はこの戦いで 帝国 軍をどう評価したかね？」

「私は感想戦の御相手が出来る様な立場ではありませんよ？」

「構わない。君に尋ねたいのだよ。」

困るな。喋りすぎた感じがするのだが。

「その前に黒茶をもう一杯。」

従兵がすぐに注いでくれた。

「ああ有難う。

——そうですね。

当然と云えば当然でしょうが、
鍊度の違いには驚かされました。

元々 帝国 は大陸において戦争によって領土と
農奴の獲得を行っていました。

皇国は——五将家による国内の平定の後
は
太平を謳歌し、

貿易による経済的な勝利によって繁栄していました。
その違いが明確に出ましたね。」

何方が優れているかなぞ分らないが。

まあ差し障りの内範囲で話を続けよう

「 帝国 軍は戦において、

あらゆる点で我々を凌駕しています。

戦術面に於いては、天狼会戦でそれは証明されました。

戦略面についても、 帝国 軍による大規模な奇襲により
軍政機関である北領鎮台は軍への再編成が整わず。

十全の力を発揮しえずに大敗しました。

海運貿易が発達しているからこそ、

大量の回船を使用した素早い転進が可能でしたが
それが無ければ北領鎮台は全滅していたでしょう。」

「簡潔だね。」

「此処まで見事な大敗を喫したら

ぐう 以上の言葉はこれしか出ません。」

戯けながら答える。

「此処まで賞賛されると嬉しくなるな。

貴官の様な現実主義者ならば尚更だ。」

「嫌な現実と戦っていましたからね。

取り分け天狼会戦からの一ヶ月は特にそうでした。」
情報幕僚の専門であり将校の仕事の一部である。

「あの場で降伏したのも、かな？」

「・・・」

もう少し早かったら――

いや、そんな考えは無意味だ。

「答えたくないなら構わない。」

だが、君の属する民族は勇武を重んじ、
誇り高く敗北より死を選ぶ。

そう聞いていた。

子供の寝物語にしては過激だが、

私は子供の頃から東方の戦士の伝説を聞いて
夜も眠らず興奮したものだった。」

俺にも覚えはあるさ。

「その性根は今も残っていますよ。
ですが時は移りました。」

ええ、古き良き一騎打ちは廃れ、
戦では相手を眼前にする刃より

何者が放ったかも知れずに鉛玉で人は死にます。

どこの誰に打ちとられたかも知れず将校は死にます。

私は――その様な考えより任務を果たした事に誇りを感じます。
歴史と伝統は銃と砲に駆逐されつつある。」

良き事か悪い事かは分らないが、
その先も薄々解っている。

この世界もそうなるのだろうか。

剣と銃だけではどうしようもない時代が

英雄が消え去る時代が到来するのだろうか？

「だから、降伏したと？」

「ええ、任務を完遂した以上無駄な死は好みではありませんし
熟練兵の価値を考えるなら非効率的です。」

任務を達成し友軍は内地へ転進した。
それで十分誇りに思います。

まあこれはあくまで私個人の考えですが。」

「成程・・・」

確かに現実的だな。

尤も君の祖国でも、私の祖国でも多数派とは
言えないだろうが。」

理は認めるが、といった感触だ。

「そうでしょうね。」

この地の産まれならまた話は違つたでしょうが。」

「違うのかね？」

「私の部隊は 帝国 との関係が悪化した後に
集成し、増派された兵団に属していました。」

兵は 帝国 で云う公民になりますね。

志願兵です。

まあ本来なら私は五将家の駒城に仕える家なので

領地である駒州に置かれる鎮台に配属されるのですが。
実験部隊で経験を積むつもりでしたので。」

「そして我々は君の率いる公民軍してやられた、と。」

半ば戯けて鎮定軍参謀長殿が言う。

「その前に会戦で大いにしてやられましたので

それでお許しください、大佐殿。」

此方も似たように返し、二人で笑いあう。

「全く以て君は我々の幕営に欲しいな！

君とは中々好みが似通っている様だ。」

帰つた後の事を考えるとそれも心惹かれるよ、ホント。

「それではご多忙中、有意義な時間をありがとうございました。」

「いやいや、私の方も楽しめたよ。」

軍曹！

少佐を部屋へ連れて行ってあげ給え！」

互いに礼を交わし部屋を出た。

部屋からでるとこっそりと嘆息する

ボロは出さなかった・・・筈だ。

第十六・五話 内地にて

大辺記：皇紀五六八年三月十五日

独立搜索剣虎兵第十一大隊が帰還して既に十日が過ぎた。

大隊長を引き継いだ新城大尉の言葉を信じるならば、

少なくとも遅滞戦闘を行った部隊は捕虜となった事は確認したらしい。

軍監本部からも確認をとる様に急かしているのだが

豊久様の安否は確認できなかった。

豊守様も不安に思っている。

あの方もああ見えて中々子煩悩な様だ。

私自身も父を亡くした後、引き立てて下さった

馬堂家には恩義がある。

御蔭で三十路前に少佐になれた。

それに、新品少尉だった豊久様に幕僚勤務のイロハを教えたのは私だ。

気にならないと言ったら嘘になる。

だが今日は駒城の若殿と窪岡少将——軍監本部主席戦務参謀——が密会を行う様だ。

豊守様も参加するらしく、私も連れていくらしい。

此処で筆を置くとしよう。

これから戦乱の日々が記されていくのであろう。日誌を何時か懐古の気持ちで読み返せるのだろうか。

・
・
・

皇紀五百六十八年三月十五日

皇都内某邸宅

軍監本部戦務課甲種参謀 大辺秀高

皇都、猿楽街から四辻離れた裏通り些か古びた家
その二階から

窓越しに咲き始めの桜を眺め男が呟く

「もうすぐかな。」

駒城保胤、駒城の若殿であり

皇国 陸軍中将、駒州鎮台の司令官でもある。

豊守様が微笑し

「桜の方は天象院を信じるなら一月後と行った所ですね。

去年は外したから怪しいモノですが。」

「窪岡閣下は間もなく到着致します。

実仁閣下も後半刻もしないでしょう。」

私がそう答える。

「今年は汚名返上と本気だろう。」

皇族御一同から衆民まで皆が楽しみにしている桜宴をふいにしたんだ。」

障子が開き。

軍服を着た男が入室した。

「桜は六弁、散りゆく際に、ってな

最近はやつとも機嫌が悪い、

数少ない娯楽である桜宴まで外されたら

とばつちりでまた皿が割れる。」

窪岡淳和少将だ。

「子供の頃は楽しみだったな。

何時も怖い顔をしていた父があの時だけは優しくかった。

片っ端から豪勢に物を買ってくれた。

嬉しかったよ。

盆も正月も家に居ない事が多かった。

父が何処かで戦死したのも、盆だったしな。」

「今の貴様を見れば、親爺殿も喜んでおられるさ。ろくな後ろ楯もなくその年で陸軍少将なのだから。」

窪岡少将は諸将家の準男爵。

普通なら四十半ば前に

少将になるのは困難な家柄だ。

「そうだといいがね。」

幼年学校で駒城の世継と親しくなった。

その引きのお陰なんて実力に入れるのか？」

「実力だよ。間違いなく。」

保胤様が人の善性で造られた様な顔で微笑む。

三十路半ばにも見える若々しさだが窪岡少将と同じ年だ。

「それにしてもこの屋敷

誰の持ち物だ？」

馬堂、お前の妾の家か？」

「いえいえ、まさか。」

私はそんな金は有りませんよ。」

惚けた笑みで答える。

己の代から資産を倍増させた人が

何を言っているのやら。

そして思わせぶりに私を見る

「おい・・・まさか。」

窪岡少将がアスローンまで攻めてきた

と報告を受けた様な顔で私を見る。

「浮いた話の一つも無いと思ったら。貴様。」

「違います。」

面倒なので一刀両断する。

我が後見人方面から

舌打ちが聞こえた気がするが無視する。

その様子を笑って見ていた保胤様が笑って言う。

「家の爺様が片付く前に妾にやった家だそうだ。」

その甥子達が貸してくれたのさ。

爺様に随分と恩義を感じてくれている。」

「やはり妾宅か。

それならば、後で白粉を持って来させてくれ。

この辺りに妾を囲っている事になっているんだ。

白粉の臭いと酒も一杯程度呑んでおかないと。」

先程の言葉通り恐妻家で有名な少将に余りにも似合わない偽装を今度は二人がからかいだす。

そんな光景を眺めているとこの家の主が

最後の客人の到来を告げた。

即座に会話を止め、

全員が二刻半の角度の礼をする。

この礼をする相手で自分の足で歩く人間——戦死者では無い者はこう呼ばれる

——皇族、と

実仁親王閣下が入室する。

北領での手柄で少将に昇進している。

（普通なら戦場に居るだけでも武勲物だ。）

そして皆、着席した。

「それで、駒城中将、本日の密談、

その目的は私の想像通りと思ってよろしいのですか？」

軍人的な話し方だ。

少将が中将に対している。

この密談、そういう物である、

そう考えているのだろう。

実仁少将はこの手の武張ったやり方を好み、

また礼節を重んじる御方だ。

この礼節の裏にある皇族たる立場への深い理解がなければ周囲から危険視されていただろう。

「殿下。どうか常の言葉をお願いします。」

自分の今の身なりは、この通りなので。」

若殿も豊守様も商人風の身なりだ。

実仁親王殿下もそうだ。

因みに私と窪岡少将は軍服である。

終わったら軍監本部に戻るからだ。

窪岡少将は戦務課の上司である。

「俺も、だな。皆も楽にしろ。」

殿下が即座に言葉を切り替える。

御付き武官からこの手の言葉を習ったらしい。

「で、あの総反攻か？」

姿勢を崩して問い直す。

「そうです、殿下。」

六月を予定されている夏季総反攻作戦。

あれは楽観的に過ぎます。」

保胤様が答える。

「ふむ、それを止める為の悪行に俺を巻き込むと？」

「そこまでひどい話ではありませんよ」

そう言いながら苦笑する。

この三人は幼年学校で机を並べた仲である。

豊守様はそれより幾らか年上だ。

「おい、豊守、淳和、本当か？」

「私はそれ程あくどい話ではと思います。」

微笑を浮かべながら豊守様が答える。

「貴様の基準は当てにならん。」

私は大辺から概略のみを聞かされただけです。

おい、どうなんだ。」

「夏季総反攻。それに対する近衛と軍監本部。」

その意見を確認したいのです。」

酒を一口含み、言葉を継ぐ

「都護・龍州・駒州鎮台は反対、

他の鎮台は賛成しています。

当然ですが、守原の護州が筆頭です

宮野木の背州・西原の西州鎮台が積極的賛成

安東の東州鎮台は消極的賛成で様子見といった所です」

「都護は執政府の紐付きだ。

まあ前線に出る事は無いだろうが

それゆえに客観的なのだろうな。

だが龍州は玉虫色だ。

それ故、地理的に矢面に立たされるのを恐れているだけだろう。

フン、鎮台から軍になったら参謀の配置次第でまた意見が変わるに決まっている。」

窪岡少将が鼻で笑う。

皇州都護鎮台はその名の通り皇都近辺の治安維持、

そして執政府の要人の警護が主な任務だ。

その為、規模は並だが兵の訓練は厳しく、近衛の代わりに精兵としての名を得ている。

そして、皇州が天領であるので五将家よりも執政府の影響力が強い。

龍州は広大な東北地方の地名だ。

その中の天龍の支配する龍上を除く三国を抱え

鎮台の規模は護州、駒州・護州並に巨大であるが、

内部には五将家の者が入り混じっている

鎮台司令は潰れかけた諸将家の人間だ。

確か名前は須ヶ川中将・・・いや、大将だったか？

影が薄い、つまり実権は皆無だ。

下級将官や佐官の間で五将家の派閥が実権を奪い合っている。

その為、政治的には混然としている。

よく言えば臨機

悪く言えば風見鶏だ。

現在、それに頭を悩ませている窪岡少将が嘆息し、

「軍監本部は参謀の半数以上が反対しています。」

水軍は少なくとも統帥部と皇海艦隊は反対しているようです。」

保胤様が話を継ぐ。

「統帥部は反対派が大多数を占めているそうです。統帥部戦務課甲種の者と話す機会がありました。」

「ああ水軍の名誉少佐にされたのだったな。貴様の義弟は。」
新城・・・直衛か

豊守様が身動きする。

私の足元からもカタリと音がした。
鉄筆を落とした様だ。

私も平静ではないらしい。

「部隊が捕虜になったことは確認できたのだろうか？
来週には正式に捕虜の確認が出るのだから。」

慌てて宥める様に保胤様が言う。

「ええ。育預殿のお陰で。」

息子からの文も届けてもらいました。」

ぎこちない笑みを浮かべている。

軽く咳払いをし、実仁親王殿下が話す。

「近衛では禁土は賛成している。」

衆兵は黙っている。つまり反対だ。」

「禁土は将家の軍です。」

此方は予想していましたが、

衆兵はもう少し戦意が高まっていると思いましたが？」

窪岡少将が尋ねた。

「そうでもない、

美名津での交渉はむしろ

皇族としての俺の手柄に近い。

勅令もどきを書いたただけだからな。

肝心の後衛戦闘は名ばかりだ。

実際に戦ったのは豊守、貴様の息子と

保胤の義弟、新城直衛だ。」

不機嫌そうに嘆息する。

「兵達もそれを知悉している。

総反攻の反対勢力には当てにするな。」

「それでは殿下は？」

「勿論、反対だ。

守勢に回れば兎も角、奪還なぞ不可能だ。」

豊守様が口を開く。

「衆民院は割れています。

今回の大敗自体も問題ですが。

これからの戦の長期化を問題視しています。

敗戦はもちろんですが、戦費の増大を恐れています。

継戦だけでも莫大な負担になりますし、

当然ながら、アスローンとの貿易線も封鎖されます。」

皆が苦い顔で頷く。

「これは執政府も同様です。

此方はアスローン諸王国。

そしてアスローンを通して、南冥民族国家群——正式には凱帝国ですな

その国とも交渉の可能性を探っております。

帝国経済の疲弊が開戦の理由なのですから更に余裕を奪い。

帝国の力を削げば和解の目があると。」

「二つ戦線を持たせると？

経済の崩壊が見えてくれば交渉の余地もある。」

保胤様が反応した。

「はい、ですが反応が鈍い様ですね。

無理ありませんが、

元々両国共に十年に一度は攻め込まれています。

疲弊しているのは互い様なのでしょう。」

「戦端を開くには意志の統一が必要か。」

親王殿下が国家の頂点を見てきた一族の表情になった。

「守勢に回るにも、です。」

窪岡少将が話はじめた。

「軍監本部は、鎮台を軍に切り替え、

上陸適地である龍州付近に集結、

遅くとも秋までに防衛体制を整える必要があると考えています。

反攻なぞ論外です。」

「まずは禁裏の意志統一が必要です。」

保胤様も言葉を続ける。

「先の通り、執政府、衆民院は揺れています。

将家を廟堂会議で押さえさえすれば

皇主陛下の託宣で十分意志統一が成立します。」

「おい、豊守、やはりあくどい話じゃないか。」

殿下が豊守様に戯けて声をかける。

「左様ですか？」

豊守様も常のやや胡散臭い微笑にもどっている。

「全く貴様の息子も貴様に似ていたぞ？」

懷から書面を取り出して言う

「あの男、野戦任官の少佐の分際で、

水軍中佐を使い走りにして

准将に向かって後退を進言し、便宜を強請り、

代価は衆民の保護と美名津市長との交渉

そして駒州公との関係強化！

駒州と皇家の関係なぞあんな若造が口にするか！？

おい、貴様、

何かあったら駒城の御老公の名を出せ

とでも息子に教えたのか？」

無言で目をそつと逸らす父親である。

「おい、頼むぞ。」

将来の駒州公が頭を抱える。

「殿下、そんなささやかな事よりも
禁裏の方は如何ですか？」

ぬけぬけと話題を切り替える。

「・・・陛下は俺と同意見の筈だ。

直宮もそうだろう。」

言葉が続ける。

「だが、俺と直宮が同意見だからと

陛下は賛成しない。

まだもう一押しが要る。」

何やら考えていた様だ。

「具体的には、殿下？」

窪岡少将が急かす。

流石に駒城の意見をそのまま採用するわけにはいかない。

あからさまにすぎる。

「北領で最後まで帝国軍と渡り合った部隊。

その大隊長が武功を奏上する。

奏上の間は玉心に親しく接し

陛下を除き何者も止められない。」

「！」

「陛下に、そこで？」

笑みを消した豊守様が静かな声で尋ねる。

「そうだ。それで一切合切何もかもが決着がつく。

陛下も止めたいのだ。」

思わず私も口をはさむ。

「大隊長ですか。殿下、どちらの事をおっしゃっているのですか？」

私が聞きたいのはそこだ。今は二人いる。

豊久様と新城直衛少佐。

「早ければ早い程良い。

私は育預殿を推薦します。

彼に独断で奏上させ、駒城は無関係で通します。

奏上の後には近衛衆兵に編入させる。

殿下を後ろ盾にすれば良い。」

豊守様が静かに提案した。

「馬鹿を言つな！」

大隊を指揮していたのは豊久だ！

ならば彼が帰国するまで待たせれば良い！

直衛を政治の道具にするのか！」

保胤様が声を荒げる。

豊守様の目つきが鋭くなった。

不味いな。二人とも頭に血が上っている。

御二人共身内には情が厚いからな。

「若殿様、育預殿は譜代家臣の中でも嫌われています。

武勲を上げた以上今までの曖昧な状態では居られません。

ならばいつそのこと近衛に編入して

衆民の側につかせた方が幾らか増しです。

豊久様は由緒正しい駒城の陪臣——将家です。

彼を矢面に立たせたら奏上の意味は

完全に駒城が守原を告発する形になり、

駒城が孤立します。

いえ、駒城の内部でも割れるかもしれません。

——馬堂を切り捨てるおつもりなら話は別ですが。」

育預の立場のままでは曖昧だ。

ならば衆民の軍に編入する。

独断で守原を告発し、近衛衆軍に飛ばされる。

実仁親王がそれを取り成す。

白々しいが形にはなる。

この場合は形に成る事が肝要だ。

「保胤、俺も同感だ。

馬堂の嫡男では、将家でありすぎる。

この件を将家の争いで完結させるわけにはいかん。」

「殿下！」

保胤様が目を剥く。

窪岡少将はそれを静観している。

彼は駒城派ではあるが

権門に縋っているわけではない。

それだけで軍監本部首席戦務参謀にはなれない。

「保胤、俺も新城少佐の事を考えてないわけではないぞ——。」

実仁親王殿下が保胤様の説得を始めた時、微かに扉を閉める音がした。

窪岡少将に目配せし、障子を静かに開き廊下へと忍び出る。

殿下の御付武官と家主が話している

「失礼、如何しました？」

御付武官曰く。

何者かがうろついているらしい。

護衛の専門家が言うのだ。

間違いではないだろう。

「私が見て参ります。」

外に出て軍監本部への道から僅かにずれる

教師風の地味な男が歩いている。

路地の周りを二週もしている。

——あの男は確か——

「なるほど、な」

屋敷へ戻る。

豊守様が口を過ぎた事を保胤様に謝っていた。

実仁親王殿下が保胤様を納得させたようだ。

保胤様が涙を懐紙で拭いている。

「どうだった？」

窪岡少将が心配そうに尋ねる。

「将家の者ではありませんでした。」

敵ではない分より厄介です。」

殿下が気づいたようだ。

「俺についてきたか。」

「はい、今様の忍、皇室魔導院です
皆が考え込む。」

—— 皇国 最大の諜報機関である皇室魔導院
上手く立ち回り、味方にしなくてはならない相手だと。

第十六・五話 内地にて（後書き）

第十六話改訂しました。

試験中なので、今週も遅れるかもしれません。

第十七話 俘虜の事情と元帥の事情

皇紀五百六十八年 四月一日

午前第十一刻 作業場

独立搜索剣虎兵第十一大隊

俘虜 馬堂豊久

豪雪地帯での春はただ素晴らしいものではない。

雪解け水によつて踏み固められた雪道は泥濘となつてしまふ。

帝国 軍には森林の伐採と運搬を命じられているが、

折角生き残る事が出来た兵を

事故で負傷させてしまふのも阿呆らしい。

当然ながら、手を抜いて働いている。

「少佐殿、今日は四十本位で如何でしょうか？」

冬野曹長が本来命じられている仕事量のわりに
のんびりと聞く。

この人の手の抜かせ方は上手過ぎて困る。

「その位で良いだろう。」

よりによつて俘虜を働かせて

予定通りの成果なんて

最初から期待していないだろう。」

「了解しました、少佐殿。

それじゃあ戻ります。」

兵達の様子を見に曹長がもどつて行つた。

西田が呆れた様に口を挟む。

「少し手を抜きすぎじゃありませんか？

帝国 軍の要求は六十本です。

幾ら何でもあからさま過ぎますよ。」

「そうでもないさ、向こうさんも最初から

必要量より多目に要求しているし
此方にも碌な期待をしていないさ。
元々向こうは奴隷の扱いに

手慣れているのだからね。

まあ文句を言われたら

一週間位は量を増すさ。」

「奴隷の扱い、ですか……。」

西田が嫌そうに顔を歪める。

「そうだ。」

知っているとは思うがそれが帝国の国力の源だ。

この通り能率は悪いし問題点が多いが

莫大な人数でそれを補っている。

だからこそ 帝国 には——。」

前から考えていた事を口に出そうとすると。

「あれ？」

少佐殿、あそこを歩いて来るのは、

皇国の官僚達じゃありませんか？」

ん？確かにそうだ。

懐しの制服が見える。

「少佐殿、何か不味い事したんじゃないですか？」

西田は悪戯っぽく笑う。

「……心当たりが無いわけではないが。」

あの撤退の後、笹嶋中佐との交渉やら

実仁親王殿下との文通（？）やら、無茶はしたが……。

いやはや必死とは、げに恐ろしき物である。

「無いわけではない？」

有りすぎて逆に、じゃないのですか？」

さすがは新城子飼いの部下

的確な突っ込みである。

「ま、時期的にも多分俘虜の確認だろう。」

ついでに内地の状況を幾らか教えてもらいたいな。」

内地——いや故国と言った方が正しいのだろう。

今頃、父と駒城の殿様達がこの戦の後始末

守原の北領奪還作戦を潰すのに奮闘している筈だ。

最後まで戦った唯一の将家の者である

新城は確実に巻き込まれているな。

俺が戦死や俘虜になった場合に備えて

手紙で新城を代役として担いでおいたが。

却説、あいつはどう動かされるかな。

軍監本部を動かすに

いや、それだけでは止まらないな。

何しろ大敗した上に最大の経済基盤を喪失したのだから。

このままなら五将家の座から転落しても

おかしくは無い。

事実二十数年前に安東がそうなりかけた。

守原も危機感を強めている筈だ。

もつと強力な手段が必要だ。

実仁親王のお陰で衆民の間での皇家の支持は高まった

親王殿下が禁裏の意思統一を行えば

衆民院と執政府の協調を得る為には最高の材料になる。

それと軍監本部の過半数を掌握出来れば何とかなる。

其方に英雄の一人である新城を使い、

実仁親王殿下が禁裏の意思統一を図りそれによって将家を抑え込む。

五将家内でも守原、宮野木には確実に恨まれる。

宮野木は反駒城の筆頭だ。

先代が院政（誤字に非ず）に追い込まれてからは特にそうだ。

西原はどうか？

ある種、最も常識的な将家だから奪還派か。

安東は利を失えば容易く手を引くだろう。

東州の復興で家を潰しかけてからは実利主義に染まっている。

つまり、彼奴は駒城の家臣団の中でも嫌われている上に

五将家の半数の恨みを買収するワケだ。

・・・帰った後が怖いな。

内憂外患としか言いようがない。

「気になる事があるのですか？」

西田が真顔になって尋ねる。

思考の沼に沈んでいた所を引き戻された。

「ああ。内地での事さ。

多分大事になっているからね。

その渦中に我らが首席幕僚も居ると思うから

酒の肴に丁度良い話が聞けるかもしれないぞ？」

そう言つて官僚団に向かつて歩きだす。

同日 午前第十一刻三尺 作業場

俘虜 西田少尉

「先輩の幼馴染みつて言うから薄々分かっていたけれど、あの人も結構アレだなあ。」

勿論、将校、いや、士官としての能力に疑問は無いし新城先輩と違つて付き合い易い感じはある。

それでも先輩と同じ様に、同じ物を見ていても時々全く違うモノを見ている気がする。

「おい、聞こえているぞ。

早く来い、少尉。」

オマケに地獄耳だ。

「はい！

申し訳ありません、少佐殿。」

まあ兎にも角にも生きて此処にいられる。
それでこの人に付き従う価値があった。
それで十分だ。

午前第十一刻 三尺 作業場

俘虜 馬堂豊久

西田を呼びつけ、官僚団の方に向かう。
先導者はロトミストロフ少尉候補生だ。

「少佐殿、貴官に面会者です。」

「ご苦勞様、

ロトミストロフ少尉候補生。」

答礼し、官僚団に向き直る。

「私は執政府兵部省

人務局の栃沢二等官だ。」

軍政を司る兵部省の官僚か、

俘虜交換の担当者かな？

「独立搜索剣虎兵第十一大隊

大隊長、馬堂豊久少佐です。」

一番若い者が一番高位の人間が優秀なのだな。

「私は皇主陛下の執政府の命と 大協約 に従い、
戦時俘虜交換担当官として派遣された。

帝国 が、 大協約 に基づいた俘虜の取り扱いを行っているか
確認しに来た。

・・・貴官は随分と特別扱いされている様だな？」

書類を斜め読みしながら詰問気味に尋ねる。

はいはい、懐柔されていませんよ、と。

「その様ですね。

色々と自分から聞き出したい様でした。

まあ今は部下と共に

労役に服しています。

それ程特別扱いはされていませんよ。」

実の所新しく与えられた部屋は 帝国 士官と同じ階級の部屋らしい。

これまでやられたら疑われても仕様がなない。

全く、あの賢獯な参謀長は、厄介だ。

ひょっとしたらあの時も

何か口を滑らせているかもしれない。

「それにしては労役を部下だけに行わせている様子に見えるが？

貴官の上着には、跳ねた泥一つ付いていない。」

この人、やけに噛み付くな。

「二等官殿、失礼ですが、

軍役の経験は有りますか？」

「ない。」

それでは無理もないか。

「軍隊では、当然ですが人死にを前提として構成されております。

そして、厳然な序列が作られ、誰かが死ねば、その通りに部下が役目を引継ぎます。」

俺の様にね。

「ですから、大分すると

士官、下士官、兵の間で、

厳密な分業、及びその為の教育が行われています。

兵の仕事を侵すことは

軍の組織構成に反します。」

納得出来かねる様だが

これ以上の説明は要らないだろう。

「まあ、戦死を前提とした

軍組織は特殊ですからね。

説明は大雑把ですが

これ以上は必要ないでしょう。」

「私には理解できない。
そう言いたいのか？」

執拗いな。

「畑違いの上に無意味な説明よりも
仕事を優先すべきでしょう。

互いに時間は有限ですし、

自分も俘虜になった以上は

部下の労役を指揮せねばなりません。

この様な無駄口よりも、

果すべき仕事を早く済ませましょう。」

いかな、言い過ぎた。

苛立つとどうも言葉選びが下手になる。

「なっ・・・」

気色ばむ栃沢二等官を

部下達が宥める。

「ああ、失礼。

それで、我々の扱いは如何に？」

「貴官の部隊には、第一便を以て帰還させるべし。
と特命を受けている。

これについては、陸軍軍監本部、

それに、水軍からも強い要請を受けている。」

笹嶋中佐、約束を守ってくれたのか。

本当にあの人には世話になった。

俺も最低限の約束は果たした。

向こうも約定を果たしてくれた。

「いつの間に将家の威光が水軍にまで届くようになったのやら！」
衆民には将家嫌いは多い

この人もそうなのだろうが、

社会人としてこれは如何なものだろうか。

流石に俺の外交用の笑みも引きつってきた。

西田は苛々しているのか

足下の泥で冒瀆的な角度の曲線を描いている。

・・・いや、落ち着け。

この人は現場を見るべき立場では、ない。

ただ、必要以上に絡んでいるだけだ。

「それは可笑しいですね。」

将家の数は減っている筈ですが？」

此方も必要以上に挑発しすぎた、此処で仕切りなおしたい。

「・・・まあそうだ。」

栃沢もやり過ぎを自覚したらしく言葉を濁す。

互いに気まずい空気が漂う。

「今後の話をしたいのですが宜しいでしょうか。」

「ああ、仕事を始めよう。」

・

・

・

同日

帝国軍東方辺境鎮定軍総参謀長

クラウス・フォン・メレンティン

「獵兵二個連隊・砲兵一個旅団

その他独立部隊及び支援部隊

総勢二万二千名、鎮定軍の序列に加わりました。」

帝国 東方辺境鎮定軍総司令官・陸軍元帥・東方辺境領姫 ユー

リア・ド・ヴェルナ・ツアリツィナ・ロッシナ殿下への報告を続ける。

「 皇国 に破壊された兵站の再構築もこの支援部隊で完成します。」

└

あの食えない青年将校の事を思い出す。

聞き出した事から話をずらされ、

肝心な事はあまり聞けなかった。

「これにより、第21東方辺境獵兵師団の損害は充足し完全編成となります。」

この島国への進攻の最大の懸念は渡洋の際の輸送船の不足だ。
あの青年の指摘通り経済的な敗北は回船の不足等流通面に響いている。

僅か半個師団を直率してテンロウで戦う羽目になったのもそれが原因である。

兵站の再構築に際してはそれが響いた。

「それで？クラウス、今後は予定通り？」

豊かな金髪を弄りながら、殿下が無防備な甘えた声を出される。
幼い時から侍従武官としてお世話をしてきた身としては嬉しくもあるが……。

「真面目に聞いてくださいよ、姫。」

参謀長としては、困ったものだ。
と言わざるを得ない

「分かっている、参謀長。」

報告を続けなさい。」

がらりと表情を替えて促す。

やれやれかなわいな。

「今後は第五東方辺境騎兵師団・第十五重獵兵師団を主力とした約十二万の増援を予定しています。」

「他には？」

「必要とあらば、二個騎兵連隊、三個砲兵連隊が引き抜けます。
それを加算すれば支援部隊込みで約二十万になります。」

東方、北方、両辺境の蛮族達に対する防衛を考えるとこれが限界です。」

「この国の蛮族どもの動向は？」

「一部で総反攻を企てている様です。」

「好都合じゃない。此方の動きの鈍さを勝手に補ってくれる。」

「殿下。一部、ですよ。執政府が無能で無い限り潰されます。」

「そうでは無いと？」

「殿下、何故攻め込む事になったのか忘れたのですか？」

あまり敵を侮るのは危険ですよ、姫。

「民部省が煩く言っていたから進攻を始めたけど、

矢張り辺境の蛮族達を先に叩いて置くべきだったかしら。」

姫が嘆息する。

「いえ、それはそれで問題があります。」

「輸送かしら？」

「はい、現在でも辺境艦隊から118隻を割くのは良いのですが、徴用船舶が197隻と、予想より少なく

今後の輸送に支障が出る可能性があります。

これは 帝国 の海運が廃れているのが原因です。

更に遅れていたらどうなっていたのか、考えたくありませんな。」

「そうかもしれないわね。」

今回、水軍は成果が出せなかったし。」

「いえ、118隻には海が広すぎます。」

輸送船団の護衛と敵の搜索で精一杯です。

輸送船団に被害が出なかっただけでよしとすべきでしょう。」

「つまり貴男の前任者、ケレンスキイ中將が軽率だったと？」

顔を陰しくして尋ねる。

「いいえ、姫。」

これは寧ろ、全般的な情報不足が原因です。

帝国 諜報総局は北方、東方の探りの方へ力を注ぎ、

この 皇国 は重視していませんでした。

この外征は民部省の要請で急遽決まったようなものです。」

見事な奇襲、か。

あれは私達にも奇襲の様なものだ。

態勢が整わなかったのはお互い様である。

「情報不足、ね。」

確かに実際、戦ってみると意外な事が多かったわ。」

ユーリア殿下がまた嘆息して言葉を続ける。

「急場であれ程の船を集めて逃げ出すとは思わなかった。

それにあの物資の量！

海岸で焼き忘れた分だけで鎮定軍でさえ半年は養える。

アスローンだって

あれ程の手際は持たないでしょうに。」

それは確かにそうだ。

「あの国は、民部省が懸念した通り、

商業が盛んなのです。

商船をかき集めたのでしょうか。」

「商業ねえ。」

つまらなそうに言う。

関心が薄いのだろう。

「その手の問題には、姫の方がお詳しいでしょう。」

「詳しいからといって理解が深いとは限らないわよ、クラウド。」

兵理の方がお好みなのは昔からか、その様子を見ると思い出す。

「自分がその手の問題に疎いのは

軍人ゆえと思っていましたか？

あの青年は随分と詳しい様でしたな。」

政治に経済、あの青年は官僚の方が向いていたのではないだろうか？

「ああ、あの男。

見かけは良くもなく、悪くもなく、と言った所ね。

これといって気を引くものは無いわ。」

詰まらなそうに言う。

姫自身がその詰まらない男の特別扱いを命じたのだが。

やれやれ、もう少し素直さを身につける様に

御養育するべきだったかな？

「いえ、面白い男でしたよ。

中々話が合いました。」

「あら、それじゃあ相当な軽口男なのね。」

微笑みながら私をからかう。

「姫、何と心無きお言葉を、ああ、爺は哀しく御座います。」
そう返すと困った物だ。

と言うように嘆息し、また話す。

「それで、貴男は随分その男を評価した様ね。」

「はい、私の部下にいたら間違いなく引き立てています。」

正直な話、大協約が無かったら首を刎ねたい程です。」

「あら、随分と剣呑ね。」

私がそう言ったのが意外だったのか

姫は少し目を見開いた。

「あの男は、シヨウケ—— 皇国 の有力な軍閥貴族の出です。
国に戻った後で、事と次第では厄介な相手になります。」

あの部隊が英雄に祭り上げられる事は明らかだ。

その結果次第では恐ろしい事になる可能性もある。

「それ程切れるの？」

姫が興味深そうに耳を傾ける

「誘導尋問を仕掛けたのですが、
のらりくらりと躲されまして

煙にまいて逃げ切ったのですから

大したものですよ。」

「そう・・・貴方がそこまで言う男、

私もあつて見ましよう、興味が湧いたわ。」

互いが互いを如何に評するか、

興味深いが・・・。

「姫、その前に此方の処理と報告を。」

如何に帝族にして元帥閣下と云えど面倒とは何時も付き纏う物である。

第十七話 俘虜の事情と元帥の事情（後書き）

凄まじく遅れました。
申し訳ありません。

第十八話 奇襲 虚実の迎撃

皇紀五百六十八年 四月十三日 午後第十一刻
俘虜 馬堂豊久

「慣れも良いことばかりでは無いな。」

蠟燭の光が硝子越しに琥珀色に色づいている。

寝台越しに酒瓶を眺めている。

中身は当然ながら酒だ。

「バルクホルン大尉の気持ちは有難いけど
そもそも飲めないからな。」

この百薬の長に対して俺はとんと無調法だ。
メレンティン参謀長との会話の後、

帝国 士官に与えられているのと同じ位
上等な部屋に移住させてもらっている。

その時案内してもらったバルクホルン大尉の従兵が
大尉から、と酒を届けてくれる。

呑めぬと伝えたらならば肴にと菓子まで貰った。

その菓子はありがたく戴いているのだが、寝酒は体に良くない。
俺だって少しは体につける。

え？ 細巻？

軍に居る限り副流煙を吸いまくるので手遅れである。
それはさておき、これで酒瓶は三本も貯まっている。

「皆に渡すか。 いや、どうせなら——」
色々と考えながら酒瓶を長椅子の下に戻す。

俘虜相手に贅沢品を渡すか。

兵站が完全に整いつつあるらしい。

内地侵攻までは半年も無いだろうな。

先の事を考えると眩暈がする。

・
・
・
四月十八日 午後第五刻 作業所
俘虜 馬堂豊久

「総員、傾聴！」

冬野曹長が号令をかける。

「皆、聞いているな。」

帝国 軍より俘虜労役の任の完了を伝えられた。
開放期限までの数日間は自由だ。

そうは言っても娯楽は少ないだろう。」

目配せをし、権藤軍曹達に瓶を抱えて持つてこさせる。
十本もあれば三十数名に乾杯させる事は出来るだろう。

「——と言うことで、俺が溜めていた分と

西田少尉から喜捨させた分の酒を・・・聞いてないね。」
皆、酒に目を奪われている。

まあいいけどさ。

西田がしょぼくれているのは気にしない。

ロトミストロフ君がまたやって来た。

「馬堂少佐殿、東方辺境領姫ユーリア殿下が
貴官に拝謁の栄を与えると仰っておられます。」

嫌な予感しかしねえ。

だが俘虜故に拒否権は無い。

・
・
・
同日 午後第五刻半 司令官室受付
俘虜 馬堂豊久

副官室に通された。

この先に嘗ての守原英康の執務室——司令官室がある。

その部屋には副官の代わりに侍女らしき女性が

書類を片付けていた。

陸軍元帥の侍女ともなると書類仕事もこなすらしく、

乾ききつていない吸い取り紙が何枚も屑籠に捨ててある。

例によつて案内役のロトミストロフ君がその女性に来訪を伝えた。

「皇国 陸軍少佐 馬堂豊久殿をおつれしました。」

声が裏返っている。

緊張しているのか。

何故だろう。

女性だからか？

いや、違うな。

それとは違う。

「少佐、こちらへ。」

その女性が奥へと続く扉を開けてくれる。

黒い扉に白く美しい手が映えていえる様子が

奇妙に印象に残った。

礼をして入室する。

——違和感を覚える。

ユーリア姫らしき人は窓辺に立ち、

俺達に背中を向けている。

別にそれは何ら奇妙な事ではない。

威厳を見せる演出だろう。

部屋は 帝国 風の豪洒なインテリアに変わっている。

両側には赤布に金糸で飾り立てた垂れ幕がある。

「皇国 陸軍少佐、馬堂豊久様をお連れしました。」

一拍間が空く。

無反応だ。

「少佐、ご挨拶を。」

——再び、違和感を覚える。
何に對してだ？

「 皇国 陸軍少佐、
馬堂豊久、参りました。」

口では挨拶をしながら
違和感の正体を考える。

ロトミストロフの挨拶？

そう、奇妙に緊張していた。

「拝謁の栄に浴し、恐悦至極に御座います。」

副官室で何を見た？

山積みの書類に生乾きの吸い取り紙。

それだけか？

いや、違う。

この部屋に入る前に何を見た？

黒に映えた白く美しい手。

白い？

二刻半の礼をする。

窓辺の人物は未だ、動かない。

ま さ か

頭を上げてジリジリと違和感の源である侍女（？）へと向ける。

確信があったワケではない、

生前（？）読んでいた本の迷警部曰く

俺の直感がそう言っている。

予断ありきの推測だ。

だが、それに応えるかの様に

その女性はクスクスと笑い始めた。

その笑い声に呼応するように

俺の心臓が早鐘のような音を打ち、冷や汗が湧き出ている。

だが、何処かそれを演出の様に愉しんでいる自分がいる。

そして、俺の謎解きの正誤が告げられた。

「もういいわよ、クラウディア。」

下がってちょうだい。」

そう言われた哀れな侍女さんは、

俺に負けず劣らず冷や汗を流していた。

南無。

まさかこんな事をやるとはね。

何とも行動的なお方だ。

「ふふふ、少佐、私が 帝国 東方边境姫ユーリアです。

貴男の属する軍隊を敗北させた鎮定軍の司令官よ。」

未だ笑いが収まらないようだ。

「馬堂豊久です。」

一応二刻半の礼をする

「どうやらまたも貴男を

奇襲し損ねる所だったようね。」

「いえ、十二分に驚きました。

屑籠を見る貧乏性と

殿下の美しい手を見る不躰さを持ち合わせていなかったら

失神していたかもしれせん。」

「それは大変。」

ユーリア姫は、クスクス笑いながら着替えをしに部屋へと行った。

・
・
・

「慣れも良いものじゃないわ。」

何時も同じだと退屈してしまうもの。

だからたまにこうして遊ぶの。」

軍服に着替えたユーリア姫が楽しげに話す。

「そうしたくなるお気持ちは理解できます、殿下。」

そう答えながら

外交用の笑顔を浮かべているが

引っ掛けられて気分はあまり良くない。

正直、ろくな事にならないだろうし、

早く帰りたい。

「随分、不機嫌そうですね？」

此方を見て、微笑みながらそう言われた。

「そう見えますか？」

「見えますね。」

にべもない。

思わず嘆息する。

「突然呼ばれ、

何事かと身構えていましたからね。

いや、まさか・・・。」

クスリと笑われる。

「意外でしたか？」

「ええ、まさに奇襲でした。

ああ、これは先程も言いましたか。」

やれやれ、主導権を握られたか。

まあこうして見ると胸でかいし美人だし胸でかいし

中々眼福、眼福。

「心なしか不躰な視線を感じるのですが？」

「気のせいです、殿下。」

怖い見張りも居るだろうしね。

あのわざとらしい垂れ幕の辺りかな。

「言っておきますが、

男性としての貴方には惹かれません。」

冷やかな目で睨まれる。

「手加減して下さいよ。」

そうはつきり言われると泣きたくなります。」

俺は、二十五歳になったばかりで

ユーリア殿下は二十六だ。

殿下の方が年上である。

地位は言うに及ばず、である。

「それは困りますね。」

悪戯めいた微笑を浮かべる。

「なにしろ軍人としての貴官を

私は高く評価していますから。」

表情が真面目なモノになる。

「あの先遣隊を叩いた夜襲、

そして、その後の異常なまでの戦果には驚かされました。」

そう言うて茶に口を着けた。

「殿下、その言葉、私の前任者が聞けば誇りに思うでしょう。」

俺の脳裏では皮肉な笑みを浮かべる凶しか浮かばないが。

「あら？」

貴男はその大隊の幕僚だったのでしょうか？

そしてそこから大隊長を引き継いだ、と聞いています。」

試す様に尋ねる。

「はい、情報幕僚でした。」

尤も、まともな報告が一つしか無いので仕事にあぶれていましたが。

「

そう答えると

「まともではない報告は？」

数多くの情報から取捨選択しそれを得たのでしょうか？」

・・・成程ね。

「いえいえ、

中々集まりませんでした。

天狼では文字通り情報が錯綜しましたが
まあその後は搜索部隊からの情報だけが頼りでした。」

父譲りの胡散臭い笑みを貼りつける。

「騎兵伝令は使わないのですか？」

質問の早さが段々と早まってきた。

「はい、

何しろあの猫は馬を怯えさせるので、
偵察は徒歩で行うしかありません。」

矢継ぎ早に質問が飛ぶ。

「それでは部隊間の連絡に苦労するのでは？」

考えさせない気が、
ならば。

「はい、実験部隊ならではの苦労でした。

・・・其方の御国でも同様の部隊がいるのでは？」

「・・・」

一瞬、言葉に詰まった様だ。

会話のキャッチボールに付き合う気は無いよ、姫様。

「実験部隊とはその様な物です。

得体の知れない物をなんでも手当たり次第に

詰め込んだ部隊なのですから

上層部からは信用なんてされませんよ。」

導術や剣虎兵の情報は漏らしたくない。

特に導術の事はそうだ。

《帝国》の国教は反導術であり、厳しい弾圧を加えている。

「そう・・・その様な部隊、

それも高々七百名の大隊で

全軍の足止めをしたのですか。」

姫様はやや皮肉気に話題を変える。

「ええまあ、嫌がらせと

ハツタリだけで時間を稼いだ様な物です。
派手な敗北で始まり、

地味な敗北で終わりましたが。

その間にあるのは、それだけです。」

「嫌がらせ、ですか。」

自国の村を焼くのを

嫌がらせの一言で済ませるのですか。」

・・・言ってくれる。

「負け戦だから選択した邪道です。

あの様な状況でなければ

絶対に行ないません。」

メレンティン参謀長からも聞かれたな。

思い出しながら言葉を続ける。

「如何に上手く敗けるか、

なんて二度と考えたくありません。」

思い出すだけで嫌な気分になる。

部下を丸め込み、自国の村民を騙し、逃げ続けた。

「所詮、戦術の中でも邪道です。

それを使わざるを得ない戦況に陥った時点で

指揮官としては失格です。

戦争なぞするものではありませんね。

金も命も浪費します、拳句の果てに信用まで叩き売りです。」

感情は出さない、ただ肩を竦めるのみ。

「戦争と平和の違いは一つではなくて？」

議論を挑むには極論にすぎますよ、姫様。

「同じ資産が増える可能性があるからと

商売と賭事を同列で扱うのは適切では無いと思います。」

「随分と婉曲的に言うのね。」

「ならば、限りある人材と資産を浪費する時期を

平時と同列に扱うべきとは思えません。」

と言つべきでしょうか。」

侵略戦争とてそうだ。

そんな事をするくらいなら貿易で搾り取るのがより効率が良い。それで国力を削げばさらにやり方が増える。

「成程、ね。」

やつぱり貴男は官僚。

いえ、商人に向いているわね。

貴男の言う商売下手の 帝国 に居たのなら

大商会を構えていたかもしれないわ。」

面白そうに言う。

メレンティン大佐から聞いたのかな？

「どうでしょうかね？」

帝国 にいたら

今度は軍人向きに

育つかもしれませんか？」

少々戯け気味に言う

姫様は瀟洒にクスリと笑いながら

「軽口好き同士、

クラウスと気が合う筈ね。」

クラウス？随分と親しそうだ、元侍従武官とかなのかな？

「大佐殿は何と仰っていましたか？」

気になるな。

「褒めていたわよ、彼。」

微笑みを残し、言葉が続ける。

「そう、己の幕営に居ない以上、

首を刎ねたい程に、と言つていたわ。」

目に剣呑な光が閃いた。

覇気を肌を感じ、思わず固唾を飲んだ。

「それは、褒めていただいているのでしょうか？」

「寧ろ、賞賛している、と言つべきでしょうね。」

私も同意見です。」

「勿ねるのですか？」

こつちも誉められると不安になる。

「まさか！此方の幕営に來なさい、と言っているのよ。」

頭が真つ白になった。

「貴男になら少なくとも連隊を預けられる。

功績をあげれば、望むのなら私の参謀にしてあげても、良いし
師団だつてあげるわ。

爵位も与えられる。」

真剣な目で見つめられる。

「能力があるのならば、この国を鎮定した後、統治に一枚噛ませあ
げてもいい。」

このくにを？

おれが？

野心の熾火が掻き立てられた。

俺が知っている別の世界の可能性。

権力があれば、

新たな時代の行く末を読み切り

何かを手に入れられるかもしれない。

「ようやく。」

俺を観察していたユーリア姫が満足気に言つ。

何だ？

「ようやく、胡散臭い笑いが取れたわね。」

思わず口元を触る。

作っていた表情は

あっさりと消え去っていた。

「なかなか良い表情かおしていたわよ？」

勝者の余裕からかどこが親しげな話し方になっている。

「・・・嘘だったのですか？」

事実東方辺境軍は急速に領土を拡げた際に彼らの言う蛮族を大量に受け入れている。

だからこそ信じたのだが。

「勘ねてはダメよ。」

姫様は、喉の奥で笑っている。

何かもう動揺しすぎて演技が出来ていないようだ、完全に忘れてやられた。

「私が話した事は全て

帝国 陸軍元帥 ユーリア・ド・ヴェルナ・ツアリツィナ・ロツシナ

の名に賭けて真実です。

貴男が私と 帝国 に忠義を尽くし、相応しい武勲を上げるのなら、

私は貴男の後ろ楯になります。」

帝国を統べる一族に相応しい覇気を感じさせる口調で告げる。

「何なら貴男を愛人にしても良いわよ？」

一転して仇っぽい目で見つめられる。

自分の顔が紅潮するのが分かる。

「あら、存外に初心なのね。」

心底面白そうに言われた。

余計なお世話である。

「ソレはそれで面白そうだけれど。」

年下は初めてだし、と何やら呟いている。

因みに俺は先月二十五になったばかりだ。
この姫さまは二十六である。

閑話休題

「此方にいらっしやい。」

それはきつと甘美なのだろう。

敵を多勢を持って叩き潰し、

美姫の下で勝利の美酒に酔う。

素晴らしい光景だ。

そして俺は無意識にこう答えた。

「嫌です。」

今、確かに選択の余地はあった、

だが俺は亡びるのである。故国を選んだ。

何故かは自分でも解らない。

安い矜持か、家族、友人への未練か。

どちらにせよ大した理由ではないのだろうな。

何とも——困ったものである。

「そんなに滅びる故国がいとおしくて？」

「そうですね。」

自分でも些か驚きましたが自分なりに愛国心を持っている様で。

それに——。」

交渉用の笑顔をまた顔に張り付ける。

「それに？」

俺は、他人をからかうのは好きだが、

からかわれるのは嫌いだ。

いやはや、我ながら始末に負えない餓鬼だ。

「私は内政の失策を戦争で誤魔化す様な君主を奉じるのは御免です
ので。」

ピクリ、と体を震わせ、東方辺境領姫が押し殺した声で答える

「そう、それが貴男の選択ね。」

「そういう事になりますね。」

逆襲成功、かな？

こんな餓鬼の喧嘩みたいなモンで勝っても意味は無いけど。

「良い事？私が貴男の愛しい故国を滅ぼすまで生きていなさい。
どんな顔をしているか愉しみにしているわ。」

とても凄惨な笑みを浮かべている。

おお、こわいこわい。

「安心して下さい、殿下。」

私も殿下が 帝国 にお帰りになられる時の
御尊顔を拝見するのを愉しみにしていますから。」

懺悔を聞く拝石教の聖職者の様な笑みを浮かべて言い返す。

「フフフ……」

「……」

互いに笑みを交わす。

その後ユーリア殿下がチラリと部屋の垂幕を見る。

「こう、俘虜の身になると 大協約 が有難く思えます。

苗川辺りでは恨み言を呟いていたと云うのに。」

ぼそり、独り言の様に但し聞こえる様に呟く。

茶を飲もうと思ったが空になっている。

「そう、敬意を払うべき対象に敬意を持たないのは愚者の行いね。
ならば私も 大協約 と貴官に敬意を払ってこう言いましょう。

とても残念、と。

さあ、お下がりなさい。」

帝国 陸軍元帥の顔になった。

「それでは。」

退出の礼をし、部屋を出ようとしたら。

「後悔するわよ。」

追いかける様に声が聞こえた。

笑わせるな。

「何方が？」

同刻 司令官室

東方辺境領姫 ユーリア・ド・ヴェルナ・ツアリツィナ・ロッシナ

結局、負けていないが勝った気にもなれなかった相手は

此方の軍門に降る事は無く部屋を出て行つた。

——釈然としない。

やり込めたがやり込められた。

聞き出したい事ははぐらかされた。

部屋の奥、そこに掛けられた垂幕から護衛のカミンスキイが出てきた。

「あの男、真に此方に引き込むつもりだったのですか？」

「嘘はつきません。」

東方辺境領の貴族になれば生殺与奪は私が握れる。

無能なら殺し、反旗を翻す様なら私が叩き潰せる。」

あの押し殺していた野心、面白そうだったけれど。

「あの男、掴み所が無いですね。」

敵に回す事も味方として轡を並べる事も危険でしょう。」

秀麗な眉間に輝が入っている。

同族嫌悪って奴かしら、アンドレイ？

野心の隠し方は貴方の方が下手だけど。

「そうね、でも思ったより可愛らしい所もあったけど。」

外面の崩れた後のあれは驚いた。

あの子供の様な表情、

あれ程心根が剥き出しにした顔はそうそう見れないわね。

「ああ、矢張り惜しい、あの男なら参謀でも将校でも使えたのに！」

「御意。」

陰のある声でアンドレイが答えた。

参謀教育を受けていない実戦一筋の騎兵将校。

そして私の公認の愛人。

じつと彼の目を見つめる

「殿下？」

やはり、似ているようで似ていない。

「何でもないわ。行きましょう。」

そして、寢室へと向かった。

第十八・五話 奏上

皇紀五百六十八年 四月四日 午前第十刻 宮城内 謁見の間前
独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 新城直衛

皇国 陸軍の礼装に身を包み謁見の間へと歩いていく。

——僕には、合わないな。

礼装を着た義兄上や豊久を思い出して自然とそう思った。
義兄上は扉の向こうに参列している。

豊久は——如何に労役の手を抜くか腐心しているのだろう。
本来収まりがつく筈なのは、逆だろうに——。

苦笑を堪え切れずに唇を歪めて扉の前にたどり着く。

そこには還暦に近い皇室式部官が二人の侍従武官を従えて待ち受けていた。

式部官が探るように尋ねる。

「少佐、宜しいかな？」

畜生、こういうのはアイツの役目だったのに。

アイツ、分かってあの手紙を書いたのだろうな。

ああ糞、無事に帰って来たら一杯やる前に殴らせてもらおうか。

未だに肝が座らずに内心では、恨み言を零し、頷く。

その様子を観察し、落胆した様子で式部官が口を開く。

「先に頂いた軍状報告の文面から受ける印象とは随分違いますな。

御国の最精鋭である第十一大隊の生え抜きと聞いておりました。

ならば余程の偉丈夫かと思っておりましたが。」

まあ確かにそう取れる様に書いたのは僕だ。

だがそれにしても随分な言い方だ。

「ご期待に添えず申し訳ありません、式部官殿。

もつとも、僕はそれを得意としているのだが。」

そう言くと式部官は鼻白んだがすぐにそれを長年の経験で押さえ込

んだ。

それを見ていた武官達はしてやった、と言いたげな微笑を浮かべた。軍の内では僕の評判は悪い、

どの様に思われているかは想像に難くない。

だがそれ以上に同業者を貶されるのは不快なのだろう。

目礼をし、銀装飾を施された扉に向かう。

式部官がその重厚な扉を厳かに開いた。

「駒州公御育預、 皇国 陸軍独立搜索剣虎兵第十一大隊大隊長、

皇国 陸軍剣虎兵少佐兼 皇国 水軍名誉少佐

新城朝臣直衛殿。

軍状報告御奏上の為、御入室！！」

式部官が扉の様に重厚で厳格な声で告げた。

ふと思った。

位階を持たない陸軍軍人が此処に呼ばれるのは

この式部官が勤めて以来初めてではないだろうか。

そんな事を考えながら謁見の間へと歩を進めた。

・

・

・

午前第十刻 宮城内 謁見の間

玉心二親シク接スル者 新城直衛

青檀に銀装飾を施した荘重な壁、僕の進むべき道を示す緑絨毯。

皇家の求める有難味に満ち溢れた空間だ。

僕の視界には先導しようとして前に歩む式部官、

そしてその左右には文武百官が立ち並んでいる。

五将家の一角である安東家からは、

東州公にして東州鎮台司令の安東光貞。

その叔父にあたる陸軍大臣、安東吉光が対面（文官の並ぶ左側）に居る。

駒州公であり、僕の義父である、駒城篤胤大将。

その嫡男であり僕の義兄上、駒州鎮台司令の駒城保胤中將が駒城家から。

西原家からは西州公である西州鎮台司令の西原信英大将が参列している。

宮野木家からは背州鎮台司令の宮野木清麿中將が居る。

そして守原家からは元北領鎮台司令の守原英康大将がいる。

守原家の次子であるが肝心の当主である長康が病に伏せており、実質的な当主はこの男だ。

そして当主の息子である守原定康も参列している。

そしてそれぞれの家の一門と陪臣の者が左右、

特に武官が並ぶ右側の大半を占めている。

近衛総軍からは総軍司令の神沢中将。

禁土隊司令の栗原少将、

そして衆兵隊司令の実仁少將が並んでいる。

そして皇州都護鎮台司令の佐久間中将、龍州鎮台司令の須ヶ川大将この二人は要地の勢力争いと妥協の結果として

五将家に仕えずに潰れかけていた旧諸将家から見繕われた人物だ。そして左の文官達は詳しく知らない。

だが、それでも最も玉座に近い所に座す者は分かる。

天龍——龍族利益代表だ。

視線を正面へ戻す。

緑絨毯の道を歩きだした。

予想以上に深い絨毯を踏みしめると

その沈みこむ様な感触が切欠となったのか背筋を汗が流れ落ちた。いや、儀式を儀式らしくする、

絨毯の外から響く式部官と僕に続く侍従武官達の足音故だろうか。音響が謁見の間に響き、それが逆に儀式の静謐で荘嚴ま空気を演出している。

そして、遂に先導する式部官が立ち止まった。

式部官から三步先へと歩み、玉座の前に立ち止まり、そして、僕は皇主と――唯一人でまみえた。飾りを一切つけていない軍礼装を纏う体は小柄だが全身から無形の威厳を発している。

その顔は無表情ながら優しげな印象を与える

そして丸みを帯びた目は僕を見つめている。

この状況を楽しんで、否、僕に興味を持っている。

僕が何をするのか知っているのだろう。

義兄上か？

いや、未だ一度も顔を合わせていない実仁親王か。

何もかも打ち合わせ通りか。

ああ、そうか、つまりこれは儀式なのだ。

滅びかけのこの国で名目上の君主が生き延びる為の。

ただ周囲への恨みを避ける為だけの儀式。

そして俺は人形だ。

皇家に掛かる厄を擦りつけて流される人形だ。

畜生、どいつもこいつも自分以外の何もかもを叩き売りしている。

ならば其奴らの値段は幾らだ？

お膳立てされたこの儀式、俺の値段は？

その値段は誰が決める？

自身の値段を決められない事が腹立たしい。

「少佐。」

式部官が不審そうに囁いた。

この儀式は進行を無視して考えこんでいたようだ。

半直角の礼をし、五寸数えて頭を上げる。

我らが皇主が軽く頷き玉座に腰を沈めた。

「新城直衛殿、軍状報告御奏上なされます！」

懷から奉書を取り出す、手は震えていない。

それに僅かな安堵を感じる。

虚栄と虚飾に彩られた軍状報告を淡々と読み上げる。

余りにも酷いそれに自嘲すら感じながらも
何しろ自分が請け負った厄介事なのだから。

・
・
・

三月十三日

駒城家 育預 新城直衛

僕は——大いに困っていた。

初姫様——義姉と義兄上の娘——が膝の上で眠っているのだ。
もう半日近く相手をしている。

遊び相手をしていた千早はぐったりとしている。

僕も同様だ。

剣牙虎を消耗させるとは、大した女傑だ。

扉が叩かれた。

義兄上の家令が顔を出した。

「失礼します、若殿が——。」

そこまで言い、僕の膝の上を見て言い淀む。

「用件は？」

「はい、若殿が、お越し戴けると有難いとの仰せでございですが、
——」

どうしたものか、起こすのも何だし。

「若殿にこの有様だから此方にお運び願いた「ちあや。」」

初姫様、駒城麗子が目を覚ました様だ。

どんな夢をみていたのやら第一声が千早とは。

余程気に入っただらしい。

いやはや、大した姫様だ。

思わず笑いが込み上げてくる。

ひとしきり笑いが部屋に満ちた。

ひとしきり笑いがおさまった。

笑みを浮かべたまま伝言を変える。

「姫様と千早が一緒でも宜しいのなら直ぐにでも伺うと。」

そして、小半刻もせずに義兄の書斎へと向かうことになった。

・
・
・

家令が扉を開けると、龍州産の子犬が駆け寄ってきた。
毛並みが良い。

おそらくは、義兄上の誕生祝いとして
馬堂家から贈られたのだろう。

龍州犬は猟犬として知られるが

番犬も兼ねて、

あの家では専門の使用人を雇い熱心に何匹も飼われている。
成長すれば一閤半にもなるが――。

「――！！」

この通り、千早に全身を一舐めされる位に小さい。

「こら、そんなことでどうする。」

苦笑して悲鳴を上げて部屋の隅へと逃げ出した子犬を叱りながら僕
達を招き入れる。

一礼して示された椅子に座ると姫様を父の下に帰して差し上げる。
近寄った愛娘に微笑んで頭を撫でる。

抱き上げはしない、将家の父としてはこれでも破格の触れ合いだ。
姫様はよちよちと千早の方へと向かっていった。

その様子を見て先程の子犬も近寄っていった。

それを辛抱強く受け入れる千早。

少々うんざりして見えるが気にしないようにしよう。

その様子を二人で見ていると義兄が思い出したように口を開いた。

「あれに、雄猫を見つけてやらねばな。」

それはそうだが千早も中々どうして頑固なのだ。

「そうしたいのは山々ですが、好みが厳しいらしくて、

一度は血みどろの喧嘩になりかけました。」

あの時は猪口と西田の三人がかりで抑える騒ぎになった。

「主人と似て始末におえない、か。」

珍しく人の悪い笑みを浮かべる。

「不徳の致すところで。」

主の場合は幼年学校では同じ班の友人が、それ以外では豊久が面倒を見てくれていた。

願わくばまた面倒を見てくれればとおもっている。

全く我ながら不徳極まりない輩だ。

しばらく世間話を続けていると家令が黒茶を持ってきた。

その黒茶を黙って飲みながら何やら逡順している。

「——お前に良い知らせがある。」

「何でしょうか？」

「馬堂の世継、彼が俘虜となっている事が確認出来た。」

「それは。」

「確かだ。」

官僚が来月には確認に出向く。」

溜息がもれる。

何はともあれ無事を素直に喜ぼう。

「お前にも素直に喜ぶ事があったか。」

他人事のように言っているが本人も嬉しそうに言っている。

「彼は、将校としてどうだった？」

駒城保胤中将が尋ねる。

「そうですね。」

慎重過ぎるくらいがありますが、まず間違いを犯しません。

優秀な幕僚と十分な時間さえあれば連隊位は上手く扱えるでしょう。

「

北領での実績があれば部隊を率いる説得力は十分だろう。

「そうか。」

満足そうに頷く。

そして、意を決したのか細巻を取り出し、僕に勧めて火を点けた。
やはり上物だ。

「それで、義兄上。」

僕に何かやらせたい事があるのでしょう？

仰ってください。」

話しやすい様に此方からも促す。

義兄上は意を決しても苦しみ続ける善人だ。

それ故に僕が唯一人敬う人だ。

「やはり解るか。」

ばつの悪そうな顔をする。

「何か面倒な事でしょう。」

ええ、生きるか死ぬか、と云う事なら幾ら何でも考えますが、
そうでないならばやりますよ。」

「全く、お前は妙な所だけ正直だ。」

嬉しさ半分呆れ半分といった様子で義兄上は細巻を捨てた。

「一命を賭してなどとは、

僕にはとても言えません。

やはり僕は根っからの将家ではありませんからね。

それに、命というやつは、うまく使えば長持ちします。

それについて、随分と勉強しました。」

その逆は物心ついた時には、既に知っていた様にも思う。

「そうだろうな、

私よりも遥かに詳しいだろう。」

そう答える義兄上は、

痛切な何かを堪える様な顔をしていた。

「だからこそ、お前を幼年学校に、軍に入れる事は反対だった。」

「確かに、あの時、義兄上は反対なさった。

嬉しかったですよ。

僕の事を真剣に考えてくれた人は、

それこそ両の指で数えられる位しか居ませんから。」

一緒に大殿の書齋で本を読みあさっていた豊久は話を聞くだけであつた。

それが彼なりの真摯さだった事は理解している。

その後、家臣団の大半が反対に回っても馬堂豊長は沈黙していた。主家の判断に口を挟むつもりは無い、と言っただけだった。

「お前は人前では滅多に口を開かなかった。

私には軍人向きとは思えなかった。

それにお前は面倒事を背負い込む質だからな。」

嘆息し、僕を見ながら言葉を継ぐ。

「見事に騙されたよ。

此処までの戦上手とは思わなかった。

だが面倒を背負い込む質というのは当たったな。

何しろ私まで面倒を背負わせようとしているのだから。」

自嘲するように言葉を吐き捨てる。

「お気になさらずに、義兄上。」

大きめの声で答える

「それで義兄上の仰る面倒とは？」

声を戻して本題に入る。

「北領での大敗に

——いや、お前達の大隊にとってはまごうことなき勝利だがその軍状報告を皇主陛下に奏上してもらう。」

申し訳なさそうに次期駒州公が言った。

「待つてください。

それは北領鎮台司令であつた守原大将の役目でしょう？

よしんば大隊長が行うにしても

豊久が——大隊長が生きている事が分かっているのならば。」
理由は察しがつく。

だがそれならば尚、あいつの役目の筈だ。

「馬堂豊久少佐は未だ生死不明だ。

少なくとも明日までは、な。

お前でなくてはならないのだ。」

義兄上の顔に浮かぶ苦渋の色が深まっている。

「陸軍内では夏季総反攻論が主流を占めつつある。」

矢張りそうか。

「信じられない、と言えれば幸せなのでしょうが。」

「理由は分かるか。」

此方もやるせないといった顔だ。

「ええ、義兄上や豊久に他の将家と言う者を懇切丁寧に教えていた
だきましたから。」

豊久が軍監本部情報課に居たときの騒ぎはよく覚えている。
表立っては騒がれず。

僕も渦中に居たわけではなかったが。

「ああ、お前が剣虎兵学校に赴任したすぐ後に一悶着あったな。
与り知らぬ所で起きた騒ぎを思い出したのか嫌そうに呟く。」

「ええ、実に興味深い体験談でした。」

我が旧友には珍しい顔だけでも見物だった。

「まあ兎にも角にもそういう事だ。」

嫌そうな顔のまま言葉を切った。

「要するに、陛下に奏上仕まつる際に総反攻と

その不愉快な首謀者について何か述べれば宜しいのですね？」

「そうだ。」

成程、だから豊久では駄目か。

「将家に、取り分け守原には恨まれます。」

駒城とは無関係。

僕の独断での行動ですか？」

「ああ、そういう事になる。」

義兄上は、悲痛な表情をしている。

「馬堂家は強い。」

ならば育預を、ですか？」

駒城家の財政を保たせているのは馬堂家の面々の力が強い。

ある意味では家臣団筆頭格である益満家よりも
駒城への影響力は強い。

「頼む！」

皆まで口に出させないでくれ！

私は——自分が情けなくなる。」

苦渋に歪んでいた顔がさらに歪んでいた。

余程苦痛なのだろう。

「申し訳ありません。」

そつと目を逸らし、千早達と戯れる初姫に目を向けて笑みを浮かべる。

「そうになると、僕はどうなるのですか？

駒州の後備ですか？」

軍に再編するのなら直ぐに戻るかもしれない。

「駄目だ。」

奏上が駒城と無関係である以上

露骨に庇う事は出来ない。

駒州鎮台の中でも口さがない者はいるしな。」

育預、詰まる所それに尽きる。

少なくとも明確な理由を求めるのならば。

「それでは何処に？」

「陸軍には置けない、近衛だ。」

陸軍ではなく近衛、つまり——。

「となると、衆兵ですか。」

よりにもよって近衛衆兵か

畜生、口出しする阿呆がいるせいで。

大方、佐脇か河田が急先鋒だろう。

畜生、どちらも餓鬼の頃からろくな事をしない。

見ている、その内必ず。

絶対だ。

「あまり考えるな。」

義兄の声で目を上げる。

「何かを考えている時、いつもお前の顔に陰が出る。まあ常の仏頂面も見栄えは良くないが。」

心配そうに見られるのはいつまでたっても慣れない。

「気をつけます。」

首肯しながら顔の筋肉を意識して緩める。

失敗したな、どうにも子供の頃から可愛がられた相手には気が緩む。

「少なくとも、実仁殿下はお前の事を心配していた。

せいぜい上手く後楯になつてもらえ。

いいか、けて生意気な態度をとるなよ。」

親王殿下、か。

信用できるのか出来ないのか、見極めたい。

少なくとも当面は味方であると有難いが。

「義兄上の御言葉とあれば。」

首肯する。

「それを生意気と言うのだ。」

温かい叱責の言葉、ああやはりそうだ。

「僕の後楯は義兄上と義姉上だけですよ。」

初姫様が歩きよってきたのを抱き上げる。

「これからも、せいぜい甘えさせて貰います。」

あやしなから本音を伝える。

「及ばずながら、力になろう。」

僅かなりとも罪悪感を打ち消せたのか嬉しそうな声を出す。

危険を呼び寄せる奏上、

皇国 の最弱軍への転属。

そつ、俺はこの面倒事を自ら背負い込んだ。

・
・
・

「——なれど敵騎兵の追撃を察知す。

前任大隊長これに対し、旺盛なる戦意をもって僅か百名の将兵を直率し遅滞戦闘に当たる。

小官、前大隊長の命を受け、残存部隊の指揮を代行し転進に成功す。独立搜索剣虎兵第十一大隊はこの時をもって北領における戦闘を終結せり。

この戦における大隊の戦死者は約八百名、これ、大隊の定員に届く数なり。」

僕が書いた事はここまでだ。

全く酷い文章だ。

事実を歪曲し、

誰も彼もが立派に軍務を果たした事にしてある。

いや、少なくとも兵に関する限りは真実であるが。

自国を焦土と化した事も伏せて美辞麗句で飾り立てている。

愛国心など欠片も持ち合わせていない僕がただ同情を引く為に。

最低の喜劇だ。

だがまだ閉幕は出来ない。

式部官が予定通りに儀式を進行させようと此方に体を向けた。

だがそれを無視して白紙の部分に目を向ける。

今、僕を止められるのは皇主だけだ

これから本番だ。

これを終わらせ、自分がどうなるのかは分らない。

しかし今の僕には続けるしか無かった。

・
・
・

同日 午前第十二刻 守原家 上屋敷 喫煙室

皇国 陸軍中佐 草浪道鉦

宮城より上屋敷へと共に戻った守原定康の機嫌は最悪だった。

あの場には居なかったが私が宮城で調べた限り手際の良い仕掛けだ。

これで、総反攻は潰された、と考えて良いだろう。

守原派の中でも不安視する者が居たのだ、どれ程無謀なのか、先を見通せば分かる物だ。

「何が北領の失陥は執政府と上級司令部の無能による、だ！！」
たかが百姓上がりの家の養子風情が！！」

守原を継ぐ筈の護州公子は

先程から生まれてから一度も戦塵に晒した事の無い秀麗な顔を怒りに歪めている。

扉が開き、守原英康が入って来た。

「何なのだ、あの男は。」

憤懣やる方無いといった様子で椅子に腰掛ける。

「新城——ですか？」

自分でも分かり切った事を聞く。

正直、私はこの二人に好んで仕えているのではない。

私は元々は五将家が主権を握る間際に守原へ臣従した弱小将家の主であり、

現当主である長康様に引き立てて頂いた。

私が忠義を感じるのは守原長康様が当主である守原家だ。
断じてこの二人の臣下では無い。

「他に誰がいるのだ。」

奴の巫山戯た奏上で守原家は侮辱された。

復仇の機会であった総反攻もこれではどうなるか分からん。」

更に言々と北領の権益を失った今、戦時に耐える経済力を失った。

守原も安東の様に経済危機を迎えるだろう。

まあ総反攻を起こしたらその前に家が物理的に崩壊した可能性が高いが。

「あの男には、色々ありますから。」

色々、か。

便利な言葉だ。

一つ一つ並べたてるにはあの男は面倒が多過ぎる。

過去は勿論、交友関係すらそうだ。

「そんな事は誰でも知っている。」

少し肩透かしをくらった様子で定康准将が話す。

新城直衛の（推定）年齢と同じ28歳だ。

つい二月前まで中尉だった男との差は――。

「奴は育預、つまりはただの衆民だ。

我々とは違う。」

「駒城は良馬の産地を抑えただけの百姓上がりだ。

フン、あの家では拾った汚い餓鬼でも有難がるのだろつ。」

侮蔑するように定康准将が吐き捨てる。

「その百姓の！

拾われた輩に！

我々は！守原は！

してやられたのだ！」

英康大將が机に拳を叩きつけた。

相当激昂している。

「大体、何故あの育預なのだ？

あの家の子飼いの輩があの大隊の指揮官だった筈だ。

それに伯父上を公然と侮辱する奏上をあの式部官が認める筈がない。

「

頭が冷えたのか、定康准将が冷静に疑問を挟む。

その事は調べがついている。

「それについてですが。」

「何だ、道証？」

英康大將が発言を促す。

「私が調べた所、あの軍状報告は後半に白紙がありました。

恐らく新城少佐は白紙を読んだのです。」

反射するように定康准将が命ずる。

「ならば奏書を手に入れる。

白紙を読み上げる等、認められるか！」

「それも不可能です。

実仁殿下、御自ら奏書を“後学の為に預かりたい。”と受け取られたそうです。」

「実仁殿下だと！

そうか！そういう事、か。」

英康大将が呻く。

「はい、駒城保胤中將は実仁殿下と幼年学校の同期です。

駒城家が殿下と協力関係にあるのでしよう。

それならば、新城少佐を使って総反攻を潰した後。

彼を殿下の下に逃す可能性があります。」

上手い手だ、流石の守原も近衛衆兵への影響力は弱い。

持つ必要が無かったからでもあるが。

「陸軍が危険ならば、近衛衆兵、か。

こそこそと衆民らしく弱兵の巢穴に隠れるか。」

定康准将が鼻で笑う。

「道鉦。

駒城の子飼いの大隊長はまだ帝国の手にあるのだな？」

何やら考え付いたようだ。

「はい、内地に戻るまでは後半月から一月程あるようです。」

それを聞いた守原定康は会心の笑みを浮かべ、こういった。

「ならば我々のする事は決まった。」

何を考えているのやら。

少なくともこの 皇国 の為にはなるまい……。

第十八・五話 奏上（後書き）

本当に申し訳ありません

少々遅れた上に主人公的な人の出番が無い話が一番長いとか・・・

本当に申し訳ありません。

次回で北領篇は終了する予定です。

読んでくれている方々に感謝を。

第十九話 季節は変わる

皇紀五百六十八年 四月二十一日 午後第四刻

皇国 水軍 熱水乙巡 < 畝浜 > 治療室

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

「一先ずは止血と備えの軟膏を塗っておきました。

万が一傷が膿む様でしたら内地の療院で診察を受けて下さい。」

水軍の兵医が深い声で処置の終了を告げる。

「有難う。

内地までは七日間だったな。」

額に裂傷、右肩に青アザ、軍服は汚物まみれ。

余り清潔とは言え無い俺を穏やかに見ながら兵医答える

「最短で、ですね。

熱水機関を併用しますので、それ程ズレは生じないはずですよ。

熱水機関を使っている間は海水風呂に入れますよ。

傷に渗みるかもしれませんが、一度試してみても如何でしょう?」

礼を言つて部屋を出る。

「痛い、な。俺は、それだけの事をしたのだったな。

よく忘れていられたものだ。」

独り言ちる。

無意識というのは救いであり、そして下劣だ。

あっさりと自分の命じた事を忘れてしまう。

自分の命の被害者に石を投げられるその時まで。

・
・
・

「敗残兵!」

「村焼き!」

「同胞殺し！」

「よくもわしらの村を！」

「そんなに我が身が惜しいか！」

「お前達の所為で病人のおかあが！」

「何も知らない俺達を！」

「てめえらだけの都合で！」

「軍隊なら何故私の娘を守ってくれなかった！」

「何故あの娘が死んで兵隊が生きている！」

・

・

・

「——本当に、痛い。」

村を焼いたのは誰か、それを知った村人達の怒りだ。

無抵抗な村人達を騙し焼き払った報いを俺は受けた。

兵達には迷惑をかけた。

彼らには責は無いのに。

割り切る、とあの時は言ったが矢張り駄目だ。

所詮、あれで衆民を助けることになる等、やはり兵を誤魔化すだけの詭弁だった。

俘虜生活の中で都合の悪い事をさっさと忘れようとしていた下衆な自分が確かにいた。

「大いなる武勲と名誉ある敵に。」

威風堂々とした騎士——バルクホルン大尉はそう見送ってくれた。

俺は武勲を上げただろう。

だが守るべき人々に石を投げられる様な真似をした者に名誉はあるのだろうか？

何を迷っている、戦死者の名簿に名を書き連ねるよりはマシだ。

そう思い直すが鬱屈は未だ腹の底に貯まっていた。

・

・

・
同日 午後第六刻 < 敵浜 > 上甲板

皇国 水軍 統帥部戦務課甲課員 笹嶋定信

今回の立役者である最新鋭の艦である< 敵浜 >。

それに便乗している事は、 皇国 水軍の軍人として（僅かに残る）
素直な一面を思い起こさせた。

そしてもう一つ思い出したいくない事を思い出させる男がいた。

「大丈夫ですか？」

大隊長殿、部屋に戻りますか？」

「・・・大丈夫だ。」

後で部屋に戻るから、先に戻って好きにしている。」

そんなやり取りを経て

ふらふらと人の寄らない辺りでぐったりとしている男へと向かう。

「船酔いかね？」

懐かしいな、私にも覚えがある。

あまり思い出したくないがね。」

話しかけるが

心なしか遠くを見る目をしながら敬礼を返すだけだった。

「・・・。。。」

中々の重症のようだ。

「ああ、気分が悪いのなら甲板にいた方が良い。

何しろ、船内は狭いからね。

空気が籠もる、兵室にぶちまけられた吐瀉物の臭いは中々キツいからね。

幸いこの船は新しいから良いが、古いとその臭いが染み付いて――。

・・・ああ、そうだ。

無理に我慢するよりそうやって吐いた方が良い。」

話を聞いていて限界が来たのか吐き始めた。

まあ水軍に入れば嫌でも通る光景だ。

今更どうとも思わない。

「・・・実に素晴らしいお話でしたよ、笹嶋中佐殿。」

顔は青いが話せる程度には回復した様だ。

「そうか、それはよかったよ、馬堂中佐。」

兎にも角にも、君と話がしたかったのね。」

減らず口には減らず口で返すのは私の悪癖だ。

「私に昇進を伝えるのは二度目ですか？」

これはまた、何とも奇妙な縁で。」

此方も、似たようなモノらしい。

「私は統帥部からのまあ、何だ、伝令の様なモノだ。」

「それは察しがつきますが、貴方が陸軍の人事を伝えるのも妙ですね。」

ゆつくりと首を傾げながら言う。

初対面が前線だったせいかもしれないが、改めて見ると年格好は実年齢よりも若く感じる。

「いや、水軍の話でもあるのさ。」

——ああ君、水を持ってきてくれ。」

近くを通りかかった兵に水を頼む。

「——すいません。中佐、どういう事ですか？」

「笹嶋、で良いよ。同じ水軍中佐でもある。」

もつとも、君は頭に名誉がつくが。ね。」

名誉階級はそう簡単に与える物では無い。

水軍が死地へと送り出した事への詫びだ。

「——失礼ですが、水軍は将家嫌いだと思っていました。」

意表を突いたのか驚きの表情を見せる。

「そうでもないさ、水軍は万民を平等に考える、少なくとも陸軍よりね。」

そして君は名誉階級に相応しい働きをした。」

将家の人間も水軍には居る。

主流から外れた家が多いのは事実だが。

「水・陸両方の中佐ですか、それは、珍しいですね。」

目尻を揉みながら考えている。

「現役 of 将校なら五人もいないだろうな。」

ああ君の部隊の首席幕僚、いや、大隊長代行か？

その、新城水軍名誉少佐も入れれば五人になるのかな。

——ほら、水だ。口を濯いだ方が良い。」

彼にも色々あったようだ。

その話もした方が良いだろう。

「——ありがとうございます。」

新城大尉、いえ、少佐ですか？

彼もそうなのですか。」

「ああ。元々大隊長に贈るつもりだったからね。」

それに、駒城からも色々と話があったからな。」

「駒城から話、ですか？」

馬堂中佐が怪訝そうに尋ねる。

「そうだ。君は知らないのか？」

例の奏上の前に大隊長としての正当性の保証の為に水軍からも君と

同等の扱いをしてくれと。」

実仁親王殿下まで口を挟んでいた。

何か大事になると思ったがまさかあの様な事になるとは思わなかつ

た。

「奏上？」

直衛が奏上したのですか？」

動揺が僅かに見える。

——下の名前、か。相当な古馴染だな。

「ああ、其処で北領鎮台の首脳に総反攻の首謀者、

守原家達を強烈に批判したらしい。」

駒州公達だけではなく、実仁親王殿下も関わっていらっしやる様だ。

「

「マズいな、其処まで派手にやったら——」

初対面時には絶望的な状況で飄然としていた男が額に手をやって嘆息している。

その妙に様になっている仕草は私に諧謔味を感じさせた。

「君も中々苦勞しているのだな。」

いや、こういつては何だが意外だよ。

路南では君の余裕に驚いたが。」

「苦勞知らずの小僧に見えましたか？」

皮肉を感じさせない口調だ。

単純にどう見えたかが気になるのか

それとも此方の偏見の度合いを探りたいのか

まあ両方が。

「どちらかと言えば何もかも見透す妖怪に見えたよ。」

実際、少なからず舌を巻く事が多々あった。

「随分な世辞ですね。」

そう答えを返した時には

先程までの狼狽を笑みで覆い隠している。

「こうして見ると君にも苦勞が多々あると分かるがね。」

「それはそうですよ。」

形は違えど苦勞は誰にでも多かれ少なかれ、あります。

まあ、私は自分が恵まれた産まれなのは否定しません。」

苦笑を浮かべながら、実感の籠もっている事を言う。

「そういうものか。」

いや、私も自分が苦勞したと思っている口でね。」

「統帥部戦務課の中佐と言うと軍主流の選良^{エリート}とはありませんか。」

——まさか、産まれた国が悪いとは言わないですね。」

今までとはまるで違う力のない笑みを浮かべて言う。

何やら思うところがあるようだ。

「まさか、違うさ。」

——不幸自慢の悪癖を許してもらえるかな？

私は、西領の産まれでね。

父は回船の船主兼船頭だったのだが、天領の経済発展に押されて無理をした拳句に事故死してしまつてね。

幼い頃の話だが荷主への賠償だけでも相当だったらしい。

恰幅の良かった母も僅か五年で木乃伊の様に細くなつて死んでしまつた。

私と兄を養う為に働きすぎたんだ。」

腹の底にある鬱屈そのままの暗い声が自分の口から出る。

「……御立派な御母堂だったのですね。」

軍帽を目深にかぶり表情は読めない。

「ああ、そうだね。

私は家族には恵まれた、それは確信を持つて言えるよ。

母が亡くなつた後、兄が私を養つてくれた。

回船の下働きを始めて稼ぎの大半を私の生活、取り分け教育に費やしてくれた。

勿論、生活は苦しかったよ。

兄の熱心さが認められて勤め先で一番若い、雇われ船頭になった夜に始めて

家の中で水晶瓶を見た位だ。

兄が危険な仕事を成功させて文字通りの一攫千金を成し遂げて始めてこの世の良い面を信じられた。

それまでは恨み辛みを帳面にぶつけていた様な物だったよ。

それまでは船乗りなぞ御免だと思つていたが、

水軍に入ったのもそれが切欠かもしれないな。

兄は喜んでくれたよ、父を尊敬しているからね。

私も矢張り親父の子なのだと、大層な喜びようだった。

西領有数の回船問屋を手に入れた時よりもね。」

細巻に火をつける。

「中佐。」

「笹嶋で良い。

同じ中佐じゃないか。」

「――笹嶋さん。」

私は――あなたの経験を理解出来るとは、言えません。」
声に苦味が混じっている。

彼が親しげにしていた駒城――主家の育預を思い出す。

そうか、彼の産まれば――

「成程ね。」

君は苦勞する友人の選び方をしている様だな。

いや、君が好んで背負い込んでいるのかな？」

自分で作つたような物だが、その重い空気を取り払おうと冗談めかして話題を変える。

「友人は選んでいますしそれなりに多いですよ。」

何故か厄介者も紛れ込みますが。」

――それも悪い事ばかりでは有りませんがね。

何やら達觀した様子である。

それにしても――

「――へエ。」

やはり戦場を離れるとこの男も様々な面が見える

「何ですか？」

私が顔を緩めたのを見て嫌そうに頬を攣らせた。

「君も存外、情に厚いのだな。」

苦澁の末とはあの作戦を指揮出来た人間が、とは口に出出来ない。

頼みとしたのは私なのだから。

「何ですか、存外つて。」

口を歪め、視線を私から外し、海原へと向ける。

「まあ、なんです。」

折角の縁は吟味して大事にしたい、と思っただけですよ。

特に水軍の方とは中々、縁がありませんので。」

其方も同じだろう　とでも言いたげな視線を超越す。

「確かに、縁は大切にしたいものだ。」

私も同意するよ。

それで君は何をするのだ？」

「却説、如何しましょうか。」

愉しそうに嗤う。

船酔いで青い顔に海に映えた光帯が複雑陰影を作る。

「そうは言いまして所詮は譜代の家臣です。

主家次第、ですね。

戻れば面白い立場なのは否定しませんがね。

それに——」

波で船が僅かに揺れる。

再び蒼白になった顔で言う

「今は動かない地面でゆつくりしたいです。

・・・本当に。」

ふらりと船縁に寄りかかり・・・

後は割愛させていただこう。

副官の様な事をしている少尉が迎えに来た時には

相応の見栄をどうにか取り繕っていた事は彼の名誉の為に言ってお

こう。

——さて、後で水を運ばせてあげるとしようか。

・
・
・

四月 二十四日 午後第八刻

畝浜 内土官用船室

独立搜索剣虎兵第十一大隊

西田少尉

「駄目だ・・・

甲板に行かせてくれ。」

寢床に伸びた馬堂大隊長が呻いている

「大隊長殿・・・

夜間は甲板に出るのは禁止だと水軍から言われているでしょう。」
そう言われて再びゆつくりと寢床に寝そべる。

「ただでさえ、船に弱いが、この船の熱水機関は、酷い揺れだ。
帆走に、切り、替わってくれて良かった。」

この人は、船が帆走に切り替えてからは、
甲板の隅で潮風を浴びながらぐったりしているか、
部屋でぐったりしているか、

の二通りの行動しかしていない。

即ち、一日中ぐったりしているのである。

「無闇矢鱈と甲板に出たがらないで下さいよ。」

「下手に籠もって船室で吐くよりはマシだ。」

早く地面に戻りたいよ。

何なら龍州で下ろしてくれても良かった位だ。

いつその事、衛浜から駒州に帰してくれないかな。」

憂鬱そうに溜息をつく。

船酔いだけでなく、北領での事を思い出すのも辛いのだろう。

この人ともその程度は察しがつく位、長く、濃い付き合いになった。

「大隊長殿は、内地に、いえ、故国に帰ったらどうなさるのですか
？」

「大隊の後始末だ。」

その後は、出来れば軍監本部に戻りたいが、
多分、駒州鎮台——いや、駒州軍だろうな。

後は若殿様、いや駒城閣下次第だ。」

予想以上に張りのある声が返ってきた。

答えの中身でこの人が将家である事を改めて実感する。

「ああ、安心しろ。」

これからは剣虎兵の需要は高まる。

それに折角の縁だ、お前の希望はちゃんと通らせるぞ。

何処が良い？

新城少佐は行く先がまだ決まっていないらしいが

お前は新城少佐の後輩だったな、彼の下に行くか？」

初めて聞く、優しい声だった。

「自分は――」

・
・
・

四月 二十六日 午後第八刻

駒城家下屋敷

馬堂家 当主 馬堂豊長

大殿がいらつしやる書斎への扉を若殿様が叩く。

「永末か？」

「いえ、父上。」

「失礼致します。大殿様。」

一礼して入る。

「おお、豊長も来たか。」

だらり、とした姿勢で本を読んでいたが私達をみて姿勢を戻した。その将家の長としてはだらしない姿に苦笑が浮かぶ。

「大殿。まだ駒州公であり大将なのですから、あまり遊ばないでください。」

往年の様に窘める。

「そう目くじらを立てるな。」

まあだからこそ憲兵だったお前を引き立てたのだが。

――保胤、お前も世話になっただろう。」

「ええ、確かにそうです。」

これからは、駒州から離れてもらいますが。」

「軍監本部か？貴様も出世したものだな？」

酔っ払った瀬川と取っ組み合いをして鼻を折ったお前が少将か。」
思い出したのか笑いを噛み殺している。

「篤胤様！」

そんな事をよく憶えておられるのやら。

「父上、本題に入って宜しいですか？」

呆れ顔で傍観していた若殿が軌道修正をする。

「直衛の奏上が決定打となり、夏季総反攻はほぼ完全に食い止められました。」

ですが、守原と宮野木の連携がより深まりつつあります。

宮野木と言っても元大将の方が動いている様です。」

「宮野木の老人も執念深いな。」

七十近いのに達者な事だ。

西原と安東はどうだ？」

「西州公自身は、特に思うところは無いようです。」

他家とは接触せずに西州鎮台の軍への再編の用意をしています。

安東は——いえ、寧ろ海良と言うべきでしょうか？」

海良——東州公の奥方の家か。

「フン、あの家は女が強いからな。」

まあ駒城も強いが政にまで口を出させるのはあの家位だ。」

女が当主を務めた事もある家だけあって駒城も女性を尊重するが安東の様に主導権まで握られる事はない。

「ええ、まあその海良の大佐が執政府や軍監本部へ熱心に通っているそうです。」

まあ何が利になるのかを調べているのでしよう。」

「あの家も変わらんな。」

目先の利に釣られて東州で家を潰しかけても改まらんか。」

東州は最後の内乱の戦場となった。

そして戦禍で荒廃した所を報奨として皇家は与えようとした。

復興に掛かる費用を考え、駒城・守原・西原は辞退したが、安東は飛びつき

家を傾かせかけた。

「この十年、あの家がもったのは奥方が計数に強い故ですから。奥向が強くなるのも無理はないでしょう。」

若殿も苦笑を浮かべる。

「先代が酷かったからな。奴がマシだったら話も違ったかもしれないが。」

用向きはそれだけではなからう?」

そう言つて私の方を見る

「ええ馬堂の世継ぎが帰ってきます。」

豊久がようやくと戻ってくる。

正直、死んだものだと思つていたから、私は少将となつた、皮肉なものだ。

「ああ、あの若者が、どれ数年ぶりに会つてみるか。」
懐かしそうに言う。

「私は彼の奏上の機会を奪つた形になつたことが少々気がかりです。駒城を割る切欠になりかねません。」

保胤様は僅かに眉をひそめる。

確かに武官としては最大の荣誉だが――。

「若殿、それは無いでしょう。」

手前味噌ですが、私の孫はそんな愚か者ではありません。」

「うむ、儂が会つた頃と変わつて無いのならば問題ないだろう。」

大殿様も同調してくれる。

「代わりと言つては何ですが、

実仁親王殿下に拝謁の機会を作ろうと思つています。」

「うむ、ならばそれに儂も出張としよう。」

面白そうに言う

「隠居するのも悪くは無いと思つていたが。

此処にも政治の季節が回つて来たか。」

・
・
・

四月二十八日 午前第八刻 弓瀬湾 皇都付近 < 畝浜 > 上甲板
独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

懐かしい——町並が見える。

懐かしい——匂いがする。

熱水機関の振動から避難を兼ねて見に来たが
自分が意識する以上の郷愁がこみあげてきた。
肩を叩かれる。

「さて、故国だ。」

笹嶋さんが朗らかな微笑を浮かべて立っていた。

「故国——ですね。」

あの姫様の勧誘を蹴った全てがこの国にある。

ぼんやりとあの時の事を反芻しながら船を降りる準備をさせに船室
へと降りた。

その数ヶ月ぶりの軽快な足取りは我ながら正直である。

・
・
・
同日 午前第九刻 皇都 水軍埠頭

独立搜索剣虎兵第十一大隊 大隊長 馬堂豊久

出迎えてくれたのは少し意外な面子だった。

「独立搜索剣虎兵第十一大隊！総員、大隊長殿以下四十三名に！
捧げ、銃！」

杉谷少尉の裂帛の号令に三百名近い兵が俺達に見事な礼を見せてく
れる。

俺達も答礼をし、帰還の式典へと向かう。

・
・
・

守原大將が何やら欠片も思っていない事を演説している。

小半刻程で話を済ませ、兵の処遇について軍監本部から来た退役間

際の老少将が

十分な路銀と一ヶ月の休暇を与えると告げ、解散となった。

「それでは、中佐殿、またお会いしましょう。」

西田も不敵な笑みを浮かべる。

「おいおい、俺の私兵になる分けじゃないぞ。」

さて、最低限の礼だ。

「それでは、西田正信少尉。

また会おう。」

「はい、馬堂豊久中佐殿。

それでは——さようなら。」

さて、後はあの少将閣下とのお仕事だ。

・
・
・

同日 午前第十刻 皇都 水軍埠頭

馬堂家 嫡男 馬堂豊久

ようやく軍務の話が終わる、式典とほぼ同じ長さってどういう事だ。

「豊久様、豊守様達がお待ちです。」

「お久しぶりです。豊久様」

見知った顔が二人、淡々とした声で挨拶してきた。

「久しいな、大辺、山崎。俺のいない間は、何かあったか？」

大辺は東州の内乱時に戦死した父の部下の息子である、

現在は三十で少佐であり、軍監本部の戦務課参謀として働いている

軍監本部と馬堂家のパイプ役をこなし、

そして俺に参謀のイロハを叩き込んだ人でもある。

「貴方の事で大わらわでした。

こうして無事に戻ってこられて何よりです。」

血色と表情の薄い顔は変わっていないが嬉しそうにしてくれている。

「家内では、奥方達は気丈な御方です。」

細い目をさらに細めて山崎が言う。

四十絡みで一見只の家令に見えるが家の警護を一任されている元は祖父の信頼の厚い憲兵下士官と言う強者だ。

よく見れば未だに分厚い胸板や腕が分かる。

「それでは、私は軍監本部に戻ります。明日には上屋敷でお会いしましょう。」

大辺は先程まで話していた少将の下へと歩いて行った。

会うのは半年振りだが相変わらずだ。

そして山崎が俺を促す。

「豊久様。あちらに豊長様と豊守様がお待ちになっています。」

「わかつているさ。その・・・何だ・・・アレだ。」

山崎が指し示す先には、うちの家族が待っている。

解散を命じたにも関わらず、

一向に来ようとしない俺に痺れを切らして、

大辺達をよこしたのだろう。

嬉しいが気まずい。

呼ばれた以上いい加減に行かなければいけないのだが。

「一緒に謝ってあげましょうか？」

意地悪く微笑みながら言いやがる。

俺は模型を壊した子供か。

軍帽を脱いで髪を整えて、港の隅にいる集団の方まで歩いていく。

うちの人間は随分と普通に來たらしく、祖父と父、そして護衛兼家令の山崎がいるのみだ。

今更だが将家らしい迎えではない。

「お久しぶりです御祖父様、父上、只今帰還致しました。」

「ああ、よく生きて帰った。」

祖父、馬堂豊長が笑顔を綻ばせ、何度も頷きながら答える。

普段は柔らかい笑顔を崩さない父でさえ、泣き笑いのような表情になっているのは、

それほどまで、俺の生存が危ぶまれていたからなのだろう。

最後に残る選択をしたことを少し申し訳なく思ってしまう。

「申し訳ありません、もう少し早く戻ってこられたのですが。」

「お前が後衛だと聞いたときは、死んだものと思っていたいからな。生きて返ってきてくれただけで満足だよ。」

父の言葉に、少しホツとする。

家族に要らぬ心労をかけてしまった。

「ありがとうございます。」

それだけの言葉しか交わしていないにも関わらず、互いにひねくれ者だからか、

素直な言葉を示すことに恥ずかしさがあり黙ってしまう。

傍から見たら、親子関係がうまくいっていない家族に見えるかもしれない

これはこれで上手くいっているのだが。

微妙な沈黙が漂う。

空気を読んだ山崎が祖父にそつと耳打ちをした。

「まあ、積もる話もあるし、とりあえずは上屋敷の方に帰ろう。」

「うむ、そうだな。豊久も久々の我が家だな。」

祖父が手招きをしながら近くにあった馬車へと乗り込んだため、父と俺がそれに続き扉が閉められる。

山崎が馭者台に座り、懐かしい振動と蹄が地面を叩く音がする。

家族で桜宴へ行った事を思い出した。

ああ、そうかももう季節はとっくに春か。

「苦労したな、豊久。」

久しぶりの内地はどうだ？」

祖父が労わってくれる

「——漸く、春だと思えました。」

ここに座って、初めてそう感じられました。」

第十九話 季節は変わる（後書き）

皆さんご無事でしょうか？

私は東京に住んでいます、幸い外出して直ぐだったので部屋の壁を本棚が穴をあけたのが一番大きな被害で済みました。

被災した方々の無事と亡くなった方々の御冥福をお祈りします。

幕間 とある勅任特務魔導官の一日

皇紀五百六十八年 四月二十六日 午前第五刻半

役宅内寢室 羽鳥守人

羽鳥守人はかつての軍隊時代に叩き込まれた習慣に忠実に目を覚ました。

彼は六年前まで 皇国 陸軍の将校であり、軍と戦場の理解者である事を示す

陸軍野戦銃兵章を授与されている猛者である。

尤も本人はともそうは見えない、特徴の無い顔に度の弱い眼鏡、文士か教師と言った方が似合う風貌である。

部屋も生活の場では無く、古本の保存庫として扱っているのかと思わせる状況だ。

当の本人は自分なりの秩序を乱さずに朝飯を済ませ、冷めかけの黒茶を呷り、

独り身の虚しさを感じながら厨房で皿を洗う。

そして買ったものの封も切っていない高級酒の水晶瓶の数を数え、溜息をつく。

—— 増えている。

酒はこの男の数少ない楽しみである。

「畜生め、一度物騒な世間になつたらこの様だ。

これでは当分、酒を飲めんな。

軍に呼び戻される事も想定しなければならんか。」

呻きながら連日の激務による疲労が抜け切らない目を擦り、眼鏡を掛けなおす。

羽鳥守人は現在、皇室魔導院で勅任二等特務魔導官の座についている。

その額には魔導士の証である銀盤は無い。

一般的に皇室魔導院の前身として語られているのは 皇国 の古都であり皇家の治める故府に置かれていた魔導師範学校とされている。これは諸将家が 皇国 の覇権を争っていた時代に衰退しつつあった皇家と

戦火の中で爆発的に増加した導術士の需要に対する養成が困難になった

五将家が内地及び西領の覇権を略確立し、東海列州をも平らげようとしていた時、

導術士達はその異端の能力、それに必然的に付随する情報通信を介した工作を疑われ

五将家に徹底的に駆り立てた。

主だった導術士の勢力が全て殲滅された。

後世では滅魔亡導と言われるこの虐殺は明らかに過剰反応であった。生き残りの導術士達は皇家の庇護を求め嘗ての学び舎であった故府へと逃げ込み、

皇家は伝統を尊重し、それを受け入れた。

そして、僅か三百名にまで減じた導術士の再興の為に

名目上はとして当時は既に信じられない占師としての導術利用を掲げ、

五将家の承認を受けることで皇室魔導院が創立された。

そして五将家の支配が確立され、導術が一般的な生活に浸透する事で滅魔亡導の再来の危険性が薄れ、導術士の数も往時と遜色が無くなる

魔導院は皇紀五三七年に養成機関として魔導師範学校を再建し、天領の導術通信の管理、導術利用の研究を任務とする事を皇主へと献策した。

天領は経済の自由化に伴い、富と情報が流れ込む場所へと変貌しつつあった。

その土地の導術通信を管理する事こそが皇室魔導院の実態を変化さ

せていった。

当時、五将家による支配への反発は未だに根強く、内乱の芽を摘む事を口実に国内外の導術通信を監視し始めた。

これは実際に有効である事から、五将家も認めざるを得なかった。

——それを認めたのは失策だったと先代護州公、守原時康は言った。魔導院が監視している通信の真偽の調査の為に導術士ではない諜報員を使い始めたのだ。

形式上、彼等も導術士とされ、勅任特務魔導官 と名付けられた。

その必要性に応じ、やがて導術士と特務魔導官の数は逆転し、皇室魔導院は 皇国 最大の諜報機関となった。

そして限定的とは言え、警察権を握った時、五将家は反対したが、万民輔弼宣旨書の発布を控え、既に執政府は彼らの手を離れ、役所を潰せる政治力は失っていた。

彼らは諜報機関の必要性は認めていたがそれを軍と同様に支配できない事はいたく気に入らなかった。

導術兵も魔導院の手勢が入る事を恐れ、遅々として進まない事は上層部の間では広く知られている。

閑話休題

・
・
・

同日午前第十三刻

皇室魔導院 特務局内国第三部

内国第三部は主に将家の監視を担当している。

その為この何処か教員室の様な並んだ机に座る者は少なく、大半は各地に散らばって居た。

だ現在は北領失陥を受け、各地の鎮台が軍への再編の準備を行い、五将家の要人は皇都で政争を激化させている為、人員もそれに従い皇都に集まっている。

更に言うと人員以上に仕事も増え、書類仕事も増えている。情報を扱う場とはそうした所なのである。

羽鳥もその法則に従って昨夜の搜索報告書類をようやく提出し、疲労に凝り固まった肩を回しながら部長室を出ようとすると、部長が声を投げ掛けた。

「ああ、今日行く、宮野木と安東の件の調査はどうだね？」

「準備は万端です。」

ただ皆、疲労が出てきています。

守原よりも動向を掴むのに労力がかかりましたから。

何しろ宮野木の老公は厄介ですからね。

この様な時は駒州公よりもやり辛いかもしれません。」

自身も疲労を自覚しているのか部長もうんざりしたように頷く。

「あの老人は根っからの反駒城だ。」

大体の行動は予想がつく。

具体的な確証を掴めれば良いが。」

部長は最近白髪が目立ち始めた頭を手で梳きながらぼやく。

「あの家は権謀で五将家に居るようなモノですからね。」

現在の背州公はやり過ぎですが。」

羽鳥も溜息をつく。

守原も宮野木も北領が落とされても未だ、政争に夢中だ。

この国の陸軍はまともな戦略をとれるのか不安になる。

内情の憂いを脳裏から追い出し、

自身の職場——少なくとも当面は——を出た。

午後第一刻 皇都内 割烹屋 星岡亭

皇都でも古参の料理屋に入り、少し外れた席に座る。

「よう、時間通りだな。」

羽鳥が親しげに声をかける。

「今は暇だからな。」

貴様は随分忙しいだろうが。」

一見、筋者の様にもみえる小柄だが、がっしりとした体軀の先客が答える。

「貴様が無事に帰って来たのだから時間を割くのもやぶさかではないさ。」

それにしても、貴様、休暇はとうに終わっているのに良いのか？」

「大隊長が怠けているからな。」

大隊長の代行で大隊の面倒を見ているだけだ。

だが、それももう終わりだ。

独立搜索剣虎兵第十一大隊はもう俺達の手を離れるだろうな。」

その男——新城直衛——が答える。

彼は現在、最も名が知れ渡っている部隊である独立搜索剣虎兵第十一大隊。

その大隊長代行である。

羽鳥は彼と軍の幼年学校の同期であり、同じ班員として（半強制的に）親交を深めた仲であり、

彼の数少ない友人だと言える。

「馬堂豊久大隊長殿、か。」

厄介な奴が英雄になったものだ。」

出てきた料理をつつきながらうんざりした様子を隠そうともしない。

彼自身も嘗て職務上、幾度も顔を合せた事がある。

尤も互いが良き関係を築いたとは言えず、

寧ろ互いに厄介者呼ばわりしていた。

「厄介なのは否定しないがな。」

俺は悪くは言わないよ。

奴には貸しも借りも数えるのが面倒な程あるしな、

何しろ餓鬼の時分からの付き合いだ。」

「しかし、貴様も奴の代行で派手に恨みを買ったな。

俺も彼方此方に火事の匂いをかき回る羽目になって

酒どころか本もおちおち読めん。」

恨みがましく言う。

「俺も目立たない様にしているつもりだったのだが、昔から他人に関わらぬ様にしていた、煩い奴は一人で間に合っているからな。」

——この三ヶ月で台無しだ。

ばやくきながら新城は茶をすする。

「今までだってお前は十二分に悪目立ちしていたろうが。

貴様が期待するよりも、馬鹿は少ないのさ。」

羽鳥はそれを鼻で笑う。

「何が言いたい。」

答える声は何処かわざとらしさを感じさせる。

「それがいかんのだ。」

羽鳥はそれをすかさず指摘する。

「貴様は人を試さずにはいられない悪癖を持っている。

そして貴様の基準にすぐわぬ奴は容赦無く排除する。

ああそうだ。貴様が弾きたい馬鹿は何も気がつかないで貴様を蔑視するだろうさ。

だがな、頭の良い馬鹿は違う。

貴様の演技に気付き、怒る。

だからな、貴様は毒にも薬にもならない輩には蔑まれ、

厄介事を押しつける輩から恨まれるのだ。

そして面倒ごとには愛される。」

羽鳥は相手を嘲弄するような内容を悪びれずに語る。

「そして俺の友人は人格者で大人物ばかりと言いたい訳だ。」

新城も皮肉気に口を歪める。

「貴様、自分を褒めてそんなに楽しいか？」

——楽しいね。

あっけらかんとした羽鳥の返答にその皮肉な微笑は苦笑へと変わる。

「何だ？その顔は、

俺は紛れもない人格者だぞ。

それこそ自分で自分を褒めたいくらいだ。」

そう言う羽鳥も今にも嗤い出しそうな表情をしている。

――褒めているじゃないか。

新城も苦笑を深める。

「ん、話が逸れたな。」

貴様が俺を呼び出した理由は何だ？」

羽鳥はそう言いながら真顔に戻る。

仕事に有益な話を聞き出せるかもしれない。

そう考えているのだ。

「俺がこれから如何するべきか、貴様の意見を聞きたくてな。」
戦場の英雄が嘆息する。

「その手の相談は何時も豊久が相手じゃないのか？」
諜報員はそれに対して気のない返事をする。

「駄目だ、あいつは確かにこの手の事が得意だが
馬堂が関われば其方を優先する。」

――本人がそう公言しているからな、間違いない。」
その事自体には何ら思う所はないようだ。

「ふん、その辺は奴も将家らしい。」

羽鳥も茶化す様に言う。

「――そうだな、まず一つ、

実仁親王殿下と駒城は完全な一枚板では無い、

お前はその間に立つのだ、何方も完全には信用しない事だ。
尤も、貴様の義兄上は別だが、な。

あの御仁、本物の善人だ。

普通ならとても政治には向かない程の善人だ。
それを補う才覚を持つのだから完璧に近いな。

もう一つは、守原が妙な動きをしている。

貴様だけでなく周りも注意する事だ。」

そう言った時には羽鳥の瞳には先程までの稚気は無く、
高い悟性を感じさせる光が閃いていた。

「守原の妙な動き？」

おい、それは何だ？」

羽鳥らしくない曖昧な言葉を新城が聞いたです。

「何が狙いか分からん。」

軍務局内で何やら工作している様だが、

龍州絡みだけではなさそうだ。」

龍州鎮台は軍への再編を急いでいる。

遅くとも秋には 帝国 軍が来寇するのは確実だ。

それを迎撃する司令部の参謀人事は五将家の政争の具の一つだ。

五将家は各家が子飼いの者を入れ、影響力を強めようと画策している。

「大して分かってないのか。」

新城は呆れた様な声を出す。

「その程度の話でなければ貴様に話せん。」

貴様の為に職を捨てる程の馬鹿では無いからな。」

羽鳥は当たり前だと言いつ返す。

そうして漸く運ばれてきた料理を二人は無言で食べた。

「さて、近衛、か。」

どうしたものか。」

新城は食事が終わると思い出した様に憂鬱な溜息をついた。

「近衛衆兵か。」

貴様も苦勞するな。」

羽鳥は面白そうにその様子を見る。

「俺はもう意見を言った。」

後は貴様次第だな。」

己に出来るのは此処までだ、と線を引いた。

そうした線を引く事は新城の価値観にも適っている。

「いじめられるのは趣味じゃない。」

何も知らずに駒にされるのも嫌いだ。」

少し考えながら口にした。

「そうだろうな。」

ならば逆の立場を取るか？」

答えを分かりきっているのか気の抜けた口調で尋ねる。

「それは俺の趣味には合わないし得手でもない。」

新城はそう言って茶碗の底に目を落とす。

「それにな、俺は邪魔な相手は完膚無きまでに叩き潰す。

俺はそうしてきたしそれが俺の好みだ。」

それを聞いた羽鳥は呵呵と笑いながら言った。

「ああそうだろうな。貴様は何時もそうだ。

だからこそお前は何かにも決定的な何かを持ち込む。

だから貴様ははた迷惑な輩なのだ。」

――世間が物騒になればこうして英雄になるのだろうか。

喉元でその言葉を押しとどめた。

――自分までこの男を英雄扱いする必要はあるまい。

今は友人として会っているのだから。

・
・
・

午後第八刻 宮野木家上屋敷周辺

二等特務魔導官は現場の指揮を任される事が多い。

羽鳥も不自然にならない様に部下を配置し、

自身も目立たぬ様に定期的に動きながら指示を出す。

「……宮野木、か。」

謀略を得意とし、駒城篤胤と渡り合い続けた老人を脳裏に浮かべ、
溜息をつく。

厄介な二人の老人は、表舞台へと謀略の網を伸ばすのだろう。

――厄介極まりない。

「アスローン・モルト、楽しみにしていたのだがな。」

――勅任特務魔導官の夜は長い、だが酒を嗜める夜は暫く無いだろ

— ۛ

第二十話 馬堂家の人々

皇紀五百六十八年 四月二十八日 午前第十二刻

馬堂家上屋敷前

馬堂家嫡男 馬堂豊久

「さて、我が屋敷に英雄の凱旋だ。」

祖父が屋敷に入り、明るい声を出す。

普段は厳格だが今日は嬉しそうにしている。

その後ろには家令頭の辺里が迎えに来てくれた。

「豊久様、お久しぶりでございます。」

さあ、皆様、外套を。」

相変わらず家令の鏡と言うほかが無い振る舞いだ。

祖父と同年代の筈だが白髪の他には年齢を感じさせるモノは無い

「ただいま、辺里。」

お前も健勝そうで何よりだ。」

先代からこの家に仕えているらしく

誠実さと熟練した慇懃な振る舞いは

周囲から厚い信頼を勝ち得ている。

尊敬するべき人間だ。

「豊久様、新城直衛様から明日の午前中に伺いたいと連絡が入っております。」

ああ、式典の間は話せなかったからな。

「分かった。宜しく伝えてくれ。」

そう言うとき頭を下げて使者の用意へと下がった。

「それでは我らが尊崇すべき辺里とも再会できたし

中に入るうか。

今日は豊久の生還と二人の昇進祝いだ。」

二人？

——祖父の階級章が目についた。

真新しい少将の階級章になっている。

「御祖父様、昇進なさったのですか。」

笹嶋中佐の言った通り、家名が上がったからか。

「お前が後衛戦闘を任じられた後に

駒城の方々が後押ししてくれた。

まあお前のお零れだ。」

僅かに苦笑を浮かべながら言う

話している間に喫煙室に到着した。

やはり我が家は寛げる。

「少将ですか。」

そうなると駒州軍参謀長殿ですか？」

少将といえば基本的には軍の参謀長、場合によっては首席参謀。

軍監本部ならば課長級の要職だ。

「いや、其方は益満殿が適任だろう。

儂は数年ぶりに軍鑑本部で兵站課を預かることになった。

名誉な事だ。」

祖父が満足そうに言う。

戦務課は保胤様の友人である窪岡少将だったな。

戦務課と兵站課を駒城が抑えるのか。

「ええ、それにお祖父様が軍監本部に居てくれるのならば

他家の専横も少しは抑えられるでしょう。」

それでも軍監本部総長はあの宮野木家の一門の志倉大将だ。

俺も陪臣の例に漏れず主家以外は信用しないがあの家は格別だ。

あそこの爺なら守原の方がまだ信用出来る。

ああ畜生、せめて大殿様が軍監本部を束ねてくれたらマシになるだ

ろくに。

「やれやれ、やはり私達の家の子ですね父上。」

帰ってきて早々に軍の事で話し合っている俺達を見て父が笑う。

「失礼。」

部屋に女性が二人、入って来た。

「御祖母様、母上、ただいま戻りました。

——遅くなって申し訳ありません。」

立ち上がって礼をする。

「武勲を上げ、そして生きて帰ってきた。

これ以上の事はありません。

良く帰ってきました。」

祖母である真佐子が相変わらず矍鑠とした姿勢で話す。

「貴方が無事だったのなら十分よ。

お帰りなさい、豊久。」

馬堂雪緒——俺の母だ。

優しい笑みを浮かべている。

「——ええ、無事です。」

御心配おかけしました。」

額の傷が治っていてよかった。

「さて、主家に倣って久々に皆で食事をするのでしょうか。」

父が心の底から楽しそうに言った。

・
・
・

同日 午後第一刻 馬堂家上屋敷 喫煙室

馬堂家嫡男 馬堂豊久

「で、北領はどうだった。」

食事を終えて、黒茶の豆を挽いた物（珈琲に似ている）で一服している。

祖父が急かす様に話かけてきた。

四半世紀ぶりの大規模な会戦に撤退戦だ。

——自分の孫がその際にした事も含めて話が聞きたいのだろうが。

「御祖父様は相変わらずせっかちですね。」

そんな風に焦るから鼻を折るのですよ。」

俺はまだ好いている人に話せる程に

心の整理は出来ていない。

「な、どこで聞いた!」

珍しく慌てた声を出す。

「駒城の大殿様から、随分前に聞きました。」

具体的には四年前である。

餓鬼の時分に育預である直衛と親しくしていた事が幸いして

特別に大殿様の書斎に入り浸らせて貰った事もあり、

大殿様に俺の世代では珍しく俺の顔を覚えて下さっている。

——父の事も含め他にも色々諸事情があるが。

「ぬう。」

こちらの返答に、祖父は困ったようにそっぽを向く。

自身も、先走ってしまったという認識を持っているようだ。

とはいえ、祖父からしてみればやむを得ないことなのかも知れない。

東州内乱時、大尉として出征した父はそこで所属していた大隊が半

壊し、

そこで本人も負傷した。

その後は大きな騒乱もなく十数年前に後見の様な事をしていた大辺

が兵理帷幕院に入り、

そして跡継ぎの俺が特志幼年学校に入ったのと同時に予備役大佐と

なった。

今は駒州公・篤胤様の政治面での腹心兼実業家の様な事をしている。

還暦を過ぎ、退役が近い祖父は、今回の事で俺が軍務から退く

ことを、

恐れていたのだろう。

ちなみに当の本人である父は無言で腹を擦っていた。

「まあまあ、御祖父様、大丈夫です。軍人を辞めたりはしませんよ。

——と、言いますか私をそこまで無責任だと思われるのも心外です。

」

祖父が気まずそうに視線をそらす。

上手く核心を突けたようだ。

「実際こちらもそうしてくれると助かるよ。

一応、曲りなりにも家は将家だ。

軍部内に馬堂家の人間が居なくては陪臣としての面子が立たない。

お前も結構な武勲を立てたからな。

お前の代わりに私が復役しても肩身が狭くてかなわないだろう。」

祖父とは対照的に、父は飄々と笑顔を浮かべており、

一見、こちらの意思表示を喜んでいるように見える。

もつともこの狸親父は、俺の知っている限り大抵こんな表情を浮かべている気がするが。

政治屋兼投資家となっている父には、卓越した洞察力がある。ひよつとしたら俺の意図にも気づいているのかもしれない。

投資か、そういえば――。

「ところで、例の件はどのようになりましたか？」

「うん？どの例の件だ？」

父が楽しげに記憶を探る。

「出資関連の話です。

蓬羽兵商に金を出していましたよね？」

確か面白い砲の開発が進んでいると手紙をくれた筈でしたが。」

その後、帝国軍が団体さんでいらつしゃったからそれっきりだ。

「ああ、確か銃兵でも携行出来る軽臼砲の改良案だったな。

ああ……まあ、二・三年前から取り掛かっていたらしくてね。

試射の際に砲身が破裂して死傷者を出して

それで開発が滞っていたようだ。」

砲は強力だ。

だがそれ故に扱いは丁寧に、慎重にしなければならない

幼年学校でも龍火学校でも砲の危険性は散々叩き込まれた、

そうでなければ砲兵なぞ務まらない。

「まあよくあること、では困りますが、

この時期に開発が滞る様では国がもちません。
実現すれば有用なのは確実でしょう。」

戦争は技術を発展させる、良くも悪くもそれは事実だ。

新兵器は歓迎だが信頼に足る物である事が前提だ

蓬羽で問題点を洗い出してから軍に持ち込んでもらいたい。

「今まではそれでよかったからね。」

匪賊や辺境の貴族が相手だったから勝つ事が当たり前だった。

新兵器も必要性は薄かったのだから。」

父も頷いてくれる。

「軍務局技術課は蓬羽にべったりですからどうとでもなりますね。

勿論、蓬羽が乗り気になってくれれば、の話ですが。」

蓬羽の女主人——田崎千豊がアスローン旅行に熱心になっていたら
困るが。

「其方は問題無いだろうね。」

あの女傑は今の所、 皇国 で夫の墓を守るつもりらしい。

一旦採用されたら後は父上が横車を押してくれるでしょう。」

「そうですね。」

御祖父様なら安心です。」

二人で信頼に満ちた笑みを浮かべる

「お前達は。」

祖父が何故か渋面を浮かべる。

さて、何故だろうか。

「ああ、そうだ。」

その蓬羽からお前に贈り物がある。

辺里！あれを持ってきてくれ。」

父が声を上げると辺里が素早く箱をもってきた。

「——失礼いたします、豊久様。」

その箱の中は——

「これは——」

「燧石式では無い新型短銃だ。」

全く豪勢な事だ、蓬羽からの贈り物だそうだ。」

父が愉快そうに教えてくれた。

「これは、お前が大尉に昇進した時に作らせたものとも違うな。」

祖父が唸る様に言う。

フリントロックリボルバー

あの燧石式輪胴短銃の事が、確かに全然違うだろう。

説明書きに目を通す。

玉薬を輪胴内の薬室に注ぎ、玉を込める形式は変わっていないがそれ以外は別物だ。

まず薬室の後部の仕切りの間に爆栓を取り付け、

それを叩槌で叩く事で爆破させ、発砲させる。

銃身には施条が施され、有効射程は約四十間、騎兵銃よりも長い。

叩槌を起こすと輪胴が回転するので射撃速度は小銃の比では無い。

六発までは、だが。

輪胴を回し、銃身の下でレバーの様な仕組みになっている槊杖で突き固め、

爆栓を後ろに取り付けるこれを六回繰り返すのだ、

更に可能ならば

乱戦中に再装填は困難だろう。

——弾薬は蓬羽から買っしかないようだ。

「実際に購入していたらあの時以上に金が飛んだでしょうね。

ほら、お前も説明書きより実物を先に見なさい。

随分と手の込んだ装飾まで施されている。」

父も興味深そうに眺める。

銃把には今回の戦で俺が受勲した陸軍野戦銃兵章と馬堂家の家紋が彫られている。

「おや、これは——豊久、その説明書きを見せてくれ。」

父が目についたのが爆栓を手に取り、俺が渡した説明書きに目を通す。

「何だ、お前、見覚えがあるのか？」

銃を手にとって観察していた祖父も目敏くそれに気がついた。

「はい、父上。」

手の上で爆栓を転がしながら解説を始めた。

「これ自体は四年前に試作の新型小銃の実包として試作されている物の部品の一つです。」

彼方は蠟紙や樹脂で弾丸、玉薬、そしてこの爆栓を一体化させ、叩槌で針を叩き、爆栓を爆破させて発射させる形式だそうです。

そして装填の簡易化によって射撃速度を高める革新的な小銃、と自慢していました。

新型の施条砲と共に今年中に軍に売り込む予定だそうです。」

ほう、それは良い知らせだ、が。

「肝心要の信頼性はどのようなのですか？」

四年前に作られていたのならはこの短銃にも組み込まれていても良いでしょう。」

それならば戦闘中でも再装填が可能なだけけれど。

「暴発事故こそないが、打針が脆くなってしまうらしくてな。」

八十発はもたせられる様になったから漸く売り込みの準備をしている。

実用化したのはつい先日なのだ、お前も贅沢を言っな。」

父が叱る様にそう言った。

「八十発、銃兵にもたせる弾数の上限を基準とするか、妥当な数だろう。」

祖父が相槌を打つ。

それを打ち尽くしたら後退せざるを得ない。

「もつとも、採用されてもすぐには普及できんだろうな。」

祖父が短銃から目を離しながら呟いた。

「何故ですか？」

「値段だ。施条銃が何故普及しないのかを忘れたか？」

臼砲の方はまだ安価だからまだ使える。

だがそれだけ複雑な構造ならば値段が高むのが必定だ。

戦場での有効性の実証が無いと、いやあっても無い袖は振れん。

後備役の動員だけでも予算が不足しているのが現状だ。」

祖父が疲れた様に座り込む。

父が補足する。

「まあ、試験運用の結果と戦局次第だろうな。

場合によつては皇債の発行も辞さないだろう。

そうならない事が一番だろうけれどね。」

何事も早急な切り替えは不可能だ。

だが、その有効性はほぼ確実だ。

今後の戦局次第だな。

——だからと言って俺に何ができるかというと困るが。

「所で私はどうなるのですか？」

何しろ配置すら決まっていない。

「ああ、それは、明後日のお愉しみだ。」

祖父が珍しく愉しげに言う

「何かあるのですか？」

「明後日、陸軍軍監本部に引継ぎの用意に行く。

若殿も軍監本部に用事があるそうだ。

お前にも同行してもらう。

昔の同僚達にも挨拶してこい。」

軍監本部か、久しぶりだ。

「そこで若殿様と話すのですか？」

若殿と会うのも年始の挨拶以来だ。

新城の事もあるし、何らかの形で会いたかったのだろう。

本来ならば、普通に呼びつけければ良いのだろうが——

俺も厄介な立場にあるという事か——。

「そういう事だ。

くれぐれも粗相をするなよ。」

祖父が生真面目な顔に戻った。

いつもの厳格な祖父だ。

時には幼年学校の教官よりも手厳しく叱られた。

頭では俺の為だと分かっているもやはり苦手だ。

「まあまあ父上。」

豊久だつてもう一流の将校なのですから。」

父が口を挟む。

素直な褒め言葉が面映い。

「そんな父上——。」

「何せ親王殿下とも書簡のやり取りを行った仲なのですから。なあ豊久。」

一転して人の悪い笑みを浮かべる。

「何だと——！実仁親王殿下とか！」

祖父が目を剥く。

「……粗相をした覚えはありませんよ。」

どこで聞いたのやら。

父も妙に耳が早い所は相変わらずだ。

「それより、ほら。」

私は一年ぶりの皇都なのですから

何か変わった事はありませんか？」

軍務から日常へと話題を移し、ゆっくりと時間を過ごした。

・
・
・

四月二十九日 午前第七刻

馬堂家屋敷内 豊久私室前

馬堂家 使用人 柚木 薫

将家の使用人の朝は早い。

何故なら軍人が大半の将家の人間は基本的に午前五刻には目を覚ますからだ。

使用人たる者、主達が目を覚ます前に食事を終え、一日の準備をせねばならない。

そして、馬堂家の使用人の朝は更に早い、そして忙しい。
他家の使用人経験者でも音を上げる者がいるほどだ。

何故なら家格と懷事情、そしてそれに伴う煩雑な諸事の量から考えれば

馬堂家の雇う使用人の数は少ないからだ。

尤もその馬堂家の使用人は（自分を含めて）質が高い。
読み書き計数、礼儀作法は当たり前。

更に厳しい身元の審査と辺里さんの面接を合格してようやく正式に雇ってもらえる。

馬堂家は軍の将官と往年の政治的魔術師、駒城篤胤の薫陶を受け
皇都中に情報網を巡らせている人間の家だ、人を選ぶのは当然だろう。

幸いなことに、私の親は皇室史学寮の博士であり、
教育に随分と力を入れてくれた人だったので、

能力・身元共に条件を満たすことが出来た。

その後、使用人としての様々な教育を受け、

かれこれ五年以上、私はこの屋敷で働いている。

辺里さんみたいにはいかなくとも

少しはこの屋敷にも慣れたつもりだが

毎朝『忙殺』の意味を体感しているとその自負も揺らいでしまう。

その忙しい朝の最中、

この家の嫡男である豊久様の部屋の前で新入りの子がキョロキョロ
している。

この屋敷からも三人程、軍に戻る用意で地元に戻っているので

春から新しく雇った二十歳前の青年だ。

まだこの屋敷で働き始め一月も経ていないので簡単な仕事をしながら
使用人の作法を覚えている途中なのだ。

「どうしたの？」

早く起こして差し上げなさい。」

「いえ、それが、その、」

部屋に入ろうとしたら豊守様が私を呼ぶ声がきこえたのです、でも先程、書斎にいらっしやいましたし……。」「不思議そうにしている。

私としてはあの魔窟しよさいに辺里さんと山崎さん以外が入った事が不思議だ。

「それ、豊久様の声色よ。

狸寝入りに声色、仮病、休みの日は起きたがらないの。

大殿様達の朝の組み手、あれを嫌がっているのよ。

幼年学校の訓練並みにキツいって言ってたわ。」「

山崎さん達警護班と豊長様が休日に行っている剣術と格闘の訓練だ。

私が前に覗いた時は噎せ返る様な汗と……。いや、思い出すまい。

豊守様は古傷がどうのこうのと逃げているが

いたって健康、かつ現役士官の豊久様は大抵連れ出されている。

「はあ、私は軍役経験が無いから想像できませんね。

それにしても声色ってあの寄席とかでやっているアレですか？」

胡乱な目で寝室の扉を見やる。

色々と聞いて想像していた偶像が砕けているのだろう。

「そう、仕事の関係で覚えたとかおっしゃっていたけれど。」「

軍人が何で声色なんか覚えるのか一介の使用人には理解できない。

「ま、いいわ。

貴女は山崎さんの所に餌を渡してきて頂戴な。

豊久様、あれで意外と偏屈者だし、私が代わりに行くから。」「

その言葉を聞いて新入君は顔を引きつらせて走っていった。

確かに龍州犬は怖いけど剣牙虎よりましじゃないかしら。

さて、と。

「豊久様、柚木です。

起きてください。」「

扉を叩く。

「……。」「

へんじがない、ただのためきねいりのようだ。

「大殿様も今日の訓練は休みだと仰せでした。ですから起きてくださいな。」

『後、三刻。』

「声を出せるならもう目が冴えていますよね。」

『いやいや、眠いとも。』

朝餉ができたなら目が覚めるさ。』

扉越しでも快眠して目が覚めたのがとても良く分かる快活な声だ。

「はいはい、入りますよ。」

『はい、どうぞ。』

意外とあっさりと部屋に入ることができた。

部屋に入ると豊久様は文机の引き出しを閉め、

立ち上がって私を出迎えてくれた。

やはりとうに目を覚ましていたらしい。

「豊久様、あまり新入りの子をからかわないで下さい。」

「久々に自宅で目覚めた朝から知らない顔を部屋に入れたくなかったのさ。」

ひらひらと手を振りながら言う。

「会話は良いのですか？」

「父の声色だからね。」

良く分らない基準、流石は駒州一変わり者の多い将家の跡取りだ。

「それにしても柚木ともひさしいな。」

半年、いや一年ぶりかな？

何というか、そう、瀟洒になった。」

にへら、と笑みを浮かべている。

「あら、口説いてくださるのですか？」

「それなら半日早いね。」

ま、誉め言葉だけとつといて。」

そう言つて肩を竦める。

駒城の若殿様が育預の女性を実質的正妻に迎えてから
使用人の中でも玉の輿を狙う人がたまにいる。

将家では珍しく儲けている馬堂家の未婚の嫡男
その手の女使用人がどう考えるを自覚した上で
私をからかっている、質の悪さは変わっていない。

この人なりの周囲の気を削ぐ防衛策なのだろう。

——婚約者がいるのだからさっさと身を固めれば済む話なのだが。

「左様ですか。ありがとうございます。」

朝食まで後小半刻程です。

それでは失礼します。」

適度に構わないのが一番だ。

「柚木は慣れていて詰まらないな。

まあいい、分かったよ。

下がってくれ。」

それにしては何処か嬉しそうだ。

そんな言葉を背に部屋を出る。

「あ。」

部屋の前にさっきの新入り君が立っていた。

「あの方が豊久様、ですか？」

また盗み聞きでもしていたのだろうか。

「もちろんそうよ。」

この屋敷に戻ってきたのは一年ぶりね。」

「はあ、瓦版に書かれていた記事とは随分違いますね。」

首をひねっている。

「軍服を着てない時は、人間そんなものよ。

それより何故あなた、扉の前にいたの？」

本当に盗み聞きだったら、山崎さんの所に連れていくべきかもしれない。

「あ！そうでした。」

豊守様から豊久様に昨日から手紙が沢山届いているから

後で——お越しいただきたい、と。」

私の後ろへと目を向けながら発した言葉に

「ああ、分かったよ。

ご苦労、さつきは悪かった。」

私の背後から返答が返ってきた。

「あたばあ!!」

飛び出そうになった心臓を抑えながら後ろをむくとそこには誰も居ない。

「柚木、辺里はもう知っているが、

育預殿が正午前にいらっしゃるから準備を宜しく。

——父上お早うございます。」

声の方へ向き直ると

面倒ごとを申し付け、食堂へ向かう我らの主人二人が居た。

ニタニタと此方を見る二人の姿はまさしく親子だ。

訂正しよう。

かれこれ五年以上、私はこの屋敷で働いているが未だに性根の捻くれた主人達には慣れていない。

そしてこれからも慣れる事は出来ないだろう。

第二十一話 旧友、二人

皇紀五百六十八年 四月二十九日 午前第九刻

馬堂家上屋敷 第三書齋 馬堂家嫡男 馬堂豊久

—— 釈然としない。

父から渡された手紙の束を見る。

何しろ確かに友人や疎かになっていた旧交もあるが

急に増えた親戚や身に覚えのない友人、

数える程しか会ったことがない、仰いでも尊くない恩師

—— 駒城派の切り崩しや縁故目当ての輩だ。

その為手紙の束は素晴らしく分厚い、

辛うじて縦と横が分かる程だ。

「お前が目を通すのが筋だろう？」

何、後で私と父上の目通しが必要な物を選び分けてくれれば十分だよ。
「

父がそうにこやかに微笑みながら押し付けていった。

いや、その箱だか束だか分からぬ物体を俺に見せないよう、書齋に

隠したまま

愛妻を連れてお外へと転進なさった。

お祖父は軍監本部につめているし御祖母様は益満の奥方の処だ。

いや、分かっている。

一応仮にも残念ながら目上の立場になる旧友と水入らずの歓談を。

と気を使ったのだろう。

そう思い直し、もう一度山を見る。

—— 釈然としない。

・
・
・

家族は皆出かけ、使用人達と自分しかこの屋敷には居ない。自分の書斎で目を通しているが、その静かさは人名を頭や時には名簿から捻り出すには良い環境だ。

せめて半分は己の人徳だと信じたところであるが。

「もうすぐ半分か。」

何か人徳派が劣勢だ、ここでも負け戦か。

一人で手紙を読み続けるのも辛い。

新城が来る前に終われば良いが。

「これは——富成中佐からか。」

龍火学校——砲兵の専科学校で世話になった教官だ。

駒州鎮台司令部付になったので向こうで会えると嬉しい、と書かれている。

階級が並んだか。

砲兵将校としての経験は富成中佐の方が倍以上ある

実力と経験だけならば大佐になっていてもおかしくない人だ。

叛徒の土地の弱小将家出身なので若い頃に苦労したらしい。

内乱が多かった 皇国 ではその手の問題は根深い。

伊藤大隊長殿もそうだが出世が家格に左右される風潮がある。

守原の公子は実戦に一度も出ず、後方勤務でも成果を上げていないが

二十八歳で既に准将——いや、少将閣下だ。

まあ此処まで露骨な人も珍しいが

似たような例は見回せば何処にでもある。

閑話休題

「此方は……益満昌紀大佐からか。」

駒城の家臣団筆頭の家だ。

駒城軍参謀長が内定している益満淳紀少将が家長であり

昌紀大佐はその息子だ。

現在は近衛禁土司令部に首席幕僚として勤務している。

将家とその領民達で編成された二個連隊と司令部から成る

総勢三千名の近衛唯一の騎兵部隊（計算が合わないのは近衛の見栄が原因だ。）

彼は其処で家柄に恥じぬ武勲を上げ、三十代半ばでその地位に就いた。

竹を割ったような性格に優秀な騎兵上がりの参謀と公私共に父に生き写しだと言われている。

「駒州兵理研究会の食事会^{ENKAJI}か。

まあ出ないわけにはいかないな。」

昌紀大佐は若手の陪臣を集めて兵理研究会を運営している。会の開催は年に数回程だが

駒州は勿論、軍監本部、皇州都護、龍州等の各鎮台に近衛禁士、そして水軍、と

彼方此方から人が集まり、面白い話が聞ける。

駒城の家臣団とは言え、駒州鎮台ばかりでなく彼方此方に散らばっているのだ。

各々の話を目当てに俺も含め、結構な人数が集まり

酒杯を片手に親睦を深めている、俺だけ下戸だけれど。

——もちろん、本来の目的自体も忘れてはいない筈だ。多分、きつと、おそらくだけれど。

残りの束へと手を伸ばした。

・
・
・

最後の一通に手を伸ばす。

「これは——堂賀准将からか。」

俺の軍監本部時代の上司だ。

現在は情報課防諜室の室長と順調に出世をしている。

親駒城派と言われているが

守原寄りの中立と言われている

元坊主の利賀元正執政とも親しく、

一歩間違えれば危険な絶妙な立ち位置を維持し

軍監本部の要職に居る怪物だ。

一見人当たりが良い初老の紳士だが

その実、大殿様より腹が黒……。

おや、誰か来たようだ。

「若様、育預殿がいらっしゃいました。」

柚木がノックをしながら、友人の来訪を告げた。

「分かった。喫煙室へ丁重にお通ししろ。」

何しろあれでも便宜上は我が主家の末弟である。

恩義がある元上司とは言え手紙は後にしよう。

未読の手紙を置き、客人の出迎えへと向かった。

——さて、何名のお越しかな？

・

・

・

同日 午前第十刻半

馬堂家上屋敷 喫煙室

駒城家御育預 新城直衛

——釈然としない。

馬堂家・家令頭の辺里の背中を眺めながらそう思った。

今回は生還祝いだ。

まあそれは素直に喜ばぬ程は俺も腐ってはいない。

だが、どうにも釈然としない。

何しろ俺が大隊長の様に扱われている節が彼方此方で見受けられる。

その切欠の一つが奴の書いた手紙だ。

あれが無ければあの奏上をするべきなのは奴だった。

——故に、釈然としない

勧められた長椅子に座りながら考える。

——奴がどこまで考えていたのか知る必要がある。
問題は奴がはぐらかしの達人である事だ。

——結局は奴次第か。

細巻入れを遊びながら考えていると扉を軽く叩き
豊久が部屋に入ってきた。

「お待たせしました、御育預殿。

昨日は御挨拶もせずに失礼致しました。」

そう言つて頭を下げる。

形式上は駒城の末子だが、

同年代の陪臣で俺を好意的に接し

それなりに扱つてくれているのはこの男だけだ。

「ああ、楽にしてくれ。」

コイツが俺に頭を下げられると落ち着かない。

「ありがとう、新城。

さあ、辺里！

我らが英雄とそのお零れに炭酸割のアスローン・モルトをくれ！」

豊久が声を上げると一寸もせずに

机の上に注文の品が現れた。

「素早いな。俺が頼む物までお見通しか？」

若い主が水晶椀を掲げながら尋ねると

「若と御育預様のお好みは憶えておりますので。」

老練な家令は微笑を浮かべ、答える。

「お見事、まさに馬堂家の至宝だね。」

惜しみなく賛辞を送る主に

「いえ。私には勿体ないお言葉です。」

その主人を産まれた時から見守つてきた目に笑みを浮かべて
穏やかに謙遜する。

「昼食も此方にお二人分お持ち致します。

ごゆっくりと。」

そして、慇懃に一礼をし、老家令は部屋を出た。

「じゃあ先ずは乾杯といくか。」

二人で杯を傾ける。

「炭酸割か、珍しいな。」

大陸では酒造の際の副産物として親しまれているがこの国では湧き水に含まれている物位しかない。

「厨房係が瓶詰めのを仕入れてくれているからな。彼の趣味は上々だ。」

酔いやすいのに随分と早い調子で飲んでいる。

「何だ？ 貴様、随分と機嫌が良いな。」

少し鬱んでいるかもしれないとおもっていたのだがいや、もしかしたら想像以上に重症かもしれない。

「まあな。」

昇進して、勲章も貰い、家格が上がった。

——そうしなくてはならないし、そうしなくてはやってられん。」

声を掠れさせながら俯く。

——成程な。

「石でも投げられたのか？」

ビクリ、と肩がはねた。

——初の経験、か。何とも羨ましい。

「ふん。覚悟はしていたさ。」

そう言いながら見せる顔は不敵な笑みが貼り付けている。

——俺とは違った形で此奴も戦場から戻っていない様だ。

「……貴様の書齋で話さないか？ 豊久。」

同日 午前第十一刻

馬堂家上屋敷 第三書齋 駒城家御育預 新城直衛

「相変わらずだな、お前の部屋は。」

見回すと独立搜索剣虎兵第十一大隊に赴任して以来の数ヶ月

完全に整理されていたのであろう豊久の部屋は、主が帰還して一日で哀れ元通りになっていた。

「ほら、柚木達の仕事を奪っちゃ悪いだろう。」

そう嘯いているがこいつが怠けたいだけだ。

書架、書類棚は綺麗に整頓されているが、

普段だらけている長椅子の周辺に乱雑さの最終防衛線を引き家令達への強固な抵抗を行っている。

文机には手紙の束が端に追いやられている。

丁度読み終わったのだろう、全て纏めて束ねてある。

「随分と手紙が来ているな。」

「ん？」

ああ、急に親戚や友人が増えてな。

場合によつては父上や御祖父様の所に

持ち込なければならぬ物まであつて大変だ。」

そう言いながら少々赤らんだ顔を文机に向ける。

「たかりか。」

俺にはその手の物は殆ど無い。

位階を持たない育預で敵ばかり多いからだろう。

「——他にも色々ある。」

これからの事を考えると面倒事は早いうちに対処しなくてはならない。」

曇らせた顔を逸らす。

「戦場からようやく離れても厄介事は先回りして——

いかん、酔っているな。」

どうも愚痴が多くなる。」

苦笑を浮かべ、言葉を切り椅子に座る。

「失礼します。」

若い少年の使用人が茶を持ってきた。

「あの、御昼食は此方にお持ちしますか？」

緊張した様子で主と客を見ている。

新しく入った使用人なのだろうか？

「いや、少ししたら喫煙室に戻らせてもらうよ。
そっちに運んでくれ。」

「はい、分かりました。」

部屋を出るまでの間、彼は俺達を興味深そうに観ていた。

「……随分と此方を見ていたな。」

あまりいい気持ちはしない。

「時の英雄が二人だから仕方無いさ。

あの年頃にとつて戦争と英雄は魅力的な冒険の場なのだろうから。

——些か好奇心が強すぎるみたいだが。

まあ悪く思わないでやってくれ。」

目尻を揉みながら主が取りなす。

「それで？」

態々こんな所に野郎を連れ込んで何のつもりだい？」

「何、貴様が居ないうちに随分と物騒になったからな。
色々と貴様からも話を聞きたくてな。」

「そんな事言われてもねえ。

ほれ、俺が居ない間って」

——俺、居ないしね。

などと巫山戯ている。

「笑わせるな、

毎度の如く、貴様が何か企んでいた事は分かる。」

その言葉に豊久は苦笑を浮かべ

「毎度の如くって何だよ、人聞きの悪い事を。

——今言った事は全て事実だ。」

そして、それは意地の悪い笑みへと変わった。

開念寺の意趣返しか。

「中途半端な事実は沢山だ。

俘虜生活で 帝国 を相手にしているのと一緒にするな。」
嘘を言わずに他人を誘導する技能は俺よりも高いだろう。

「そうは言われてもな。」

俺自身は北領に居たから父上に任せただけだよ。」

首をかしげ、遊び過ぎたと思ったのか決まり悪そうに頭を掻く。

「それは分かっている。」

俺が知りたいのは貴様には何が見えていたか、だ。」

「珍しい事を言うね。」

豊久が片眉を上げる。

「元防諜室員の私見は俺も興味があるからな。」

豊久は五年前に大尉に昇進してから二年間、

陰謀奸謀渦巻く軍監本部に勤務していた。

勢力争いの激戦区である情報課で、何をしていたのか

本人も口にしないが

大殿の住まう駒城家下屋敷に頻繁に通いつめていた事と

その後、田舎貴族の鎮庄に回された事から

勢力争いの抗争で失敗を犯し、追い出されたとも

他家から憎まれ、ほとぼりを冷ましていた、とも

噂されている。

真相を知っているのは情報課防諜室の面々と久しぶりに動いたらしい大殿だけだろう。

「こんな時にだけそんな事を持ち出すな。」

そう言いながら情報を扱う者の目で俺を観察している。

酔眼なぞとはかけ離れた視線を受け止める。

「——まあ、良い。」

その前に確かめたい事が一つある。

お前が近衛に配属されるのは確かなのか？」

どうやら話す気になったようだ。

「事実だ。」

「当然、衆兵か。」

お前は馬と将家に嫌われるからな。」

嫌な事を引き合いに出すな。」

「馬は余計だ。」

惘然として言い返す。

「悪い、悪い。」

しかし、お前が近衛か。」

ひらひらと手を振って抗議を受け流す。

「実仁親王の内意を受けて決まったそうだ。」

厄介者を好き好んで受け入れる事を考えれば裏があるのだろう。

「衆兵、あそこは確か。」

ふむ、実仁少将閣下の意向を考えれば十分有り得たな。

寧ろ此方の方が望ましいか？

だとしたら——ああそう言う事か。」

目をつぶり、目尻を揉みほぐしながら

ブツブツと独り言を口走している。

傍目からみれば春に湧く類のアレだ。

これは年中湧くから手に負えない。

「新城、お前も苦勞するな。」

だが今回は良い機会かもしれない。」

「義兄上にも同じ事を言われた。」

「ならば尚更さ。」

若殿様は政治家としては一流の御方だ。

お前の事を損得ぬきで考えてやれるのはあの御方だけだろう。

俺はもう——無理だからな。」

寂寥とした呟きには聞こえない振りをする。

「実仁親王殿下か。」

貴様は信用できると思うか？」

何もかもが政治に結びつけられる。

将家も皇家も相手を貶め権力を握る機会程度にしか思っていないの
だろう。

刹那、あの奏上に並んでいた守原達の顔を思い出し、
度し難い破壊衝動が腹の底を衝いた。

「駒城が求めている物は取り纏めの為の皇家の権威、実仁親王殿下は駒城の政治力と近衛の充足に必要な駒州軍との伝手上手く分担されている間は……」

おい、どうした？」

「——何でもない。」

それで貴様は如何に推測したのだ？」

「如何にも、もタコにも、もないよ。大外れさ。」

自分ではどう思っていても所詮は餓鬼だってことだ。」

不貞腐れた様に長椅子にそっくり返る。

貴様は子供か。

「拗ねるな、それはそれで面白そうだし話せよ。」

「——自分の失敗を好き好んで解説する趣味は俺には無いよ。」

「解説は貴様の趣味だろうが。」

「………やっぱり性根が腐りすぎて土と化してるよ、お前。」

毒づきながら立ち上がる姿は澁刺としている。

ガキの頃から説明好きなのは変わっていない。

「さて——」

豊久が説明を始める時は決まってそう言う。

「短く済ませろよ。」

「………」

俺の野次を黙殺して朗々と語り始めた。

「第一に、襟裏の意志統一は親王殿下が行うと思っていた。」

殿下は俺達——駒城に借りがあるからな。

大殿や若殿の意見に陛下が同意の感想をお示しになるだけでも

威力は十分ある。」

そう広くはない書斎を一周し、人差し指を伸ばす。

「第二に軍監本部内での総反攻に賛成する意見が予想以上に小さかった。」

中指を伸ばす。

「俺は参謀達がもう少し主家に盲目であると思っていた。」

窪岡少将達が取り纏めにかかる時にお前を使うと思っていた。

これが俺の読み違いだ。」

説明を終えると長椅子に体を沈めた。

「軍監本部か。」

何方にせよ嫌なところに送られるのだな。」

「おい、俺の古巣だぞ。」

苦笑を浮かべた元本部員が抗議する。

「だから嫌な所だと言っている。」

「——まあいい。」

実際、俺は五将家の政争に気を配る余裕は無かった。

お前が上手く 帝国 貴族を引っ捕えて来るかどうかの方が

切実な問題だったよ。

思い出すだけで胃が痛む。」

そう言いながら眉を顰める。

「それもそうだな。」

俺も苦笑が浮かぶ。

「実際、俺はまだ政治には関われないよ。」

当て推量して父上達に任せるのが精一杯だ。」

僅かに口惜しそうに呟く。

意外と出世欲があるのだな。

「御祖父様も昇進したが退役まであと数年だ。」

それが無ければ父上と同じ道を行きたかったが。」

「将家の嫡子の立場が許さない、か。」

貴様もさつさと子を作って幼年学校に入れば退役出来るだろ？

奇特にも許嫁だっているのだしさつさと身を固めたらどうだ。」

こいつでは無理だろうが。

馬堂家は二代続いて婚姻が早かったので周囲も急かしているが。

「勘弁してくれ。」

今朝も父上に同じ事を言われたんだ。」

当の本人は苦笑を浮かべて鰻の如く逃げ回っている。

「ほら、もういい時間だ。」

そう言いながら刻時計を懐から取り出した。

「これ以上辺里達を待たせるのも良くないな。」

家の料理人は凝り性だし冷めたら――」

早口で昼飯の事を語りながら俺に部屋を出るように促す。

――逃げたな。

笑いを噛み殺しながら日常の顔に戻った旧友の後に続いた。

・
・
・

喫煙室に戻り、昼食を平らげると部屋の主は

長椅子にゆったりと座り、声も緩ませる。

「お前、どうせ暇だろ？」

ゆっくりしていけ。」

どこまで作りなのかは分からないが、こいつは声の使い分けが巧みだ。

知らずの内にコイツに乘せられる事もある。

父譲りなのだろうか。

「確かに、暇なのは確かだな。」

今は百五十名程度しか残っていない大隊の管理だけだ。」

北領鎮台の残存部隊は龍州と護州を中心に各鎮台に割り振られている。

笹嶋中佐の手配で派遣された部隊も

原隊へ復帰しており生え抜きはその程度しか残っていない。

「補充は行われていないのか？」

「他の北領鎮台の部隊が優先されている。」

それに剣虎兵はまだ数が少ないからな。」

「そうなのか？」

専門性の強い砲兵みたいに転科が困難な訳ではないだろう。転科の訓練を受けていた者は結構いるのでは無かったか？」

色々と言いたい事はあるが――

兵科

この手の話はもめる物だ、

深く言及するのは別の機会にしよう。

「北領での戦果を受けて剣虎兵部隊の増強が進み需要が急造している。

駒州でも剣虎兵二個大隊を増強し、更にもう一つ鉄虎大隊の新編を予定しているそうだ。」

義兄上も剣虎兵の戦例研究を片手に僕に何度か実戦での経験を尋ねている。

「成程ね。」

そして近衛衆兵にも一個大隊かな。

殿下はお前に看板部隊を持たせて

衆兵の弱兵意識を払拭させたいのだろうからな。

相当力を入れる筈だ。」

豊久は面白そうに言う。

「新編の大隊か。」

面倒だが少なくとも大隊を貰えるのは悪くない。

「十中八九な。」

それに近衛衆兵に剣虎兵は居ないだろ？

陸軍からも古兵を引き抜く準備をしているだろう。

最悪、剣虎兵学校から教官を引き抜くかもしれないね。」

そう言つて顎を掻く。

「まさか、そこまでするか？」

「まあ流石に後備も居ない新兵科の養成所には

そうそう手を出さないだろうけどね。

――有り得ない話じゃないが、ね。

俺が言いたいのは殿下が威光を振るうだろうって事だ。

皇族が、お前の為に、な。」

一瞬、剣呑な光が目に見えた。

「ま、向こうが利用している間は殿下の庇護の下だ。」

当面は安心しておけ。」

打って変わり、そう言った時には

温和な笑みを浮かべている。

若番頭が店先で浮かべている様な人当たりの良い顔だ。

こうしていると陸軍野戦銃兵章まで授与された

——つまり将校が自ら鋭剣を振るう死地から生還した
軍人には見えない。

「あくまでも当面は、か。」

「駒城と皇家は永遠の主従ではあっても永遠の忠臣ではない。
それは利害の一致している間だけだ。」

豊久は細巻に火を着ける。

「——皇家は常に天秤の揺らぎを気にする。
生き延びる為にはそうするしかない。」

「駒城と馬堂も、か。」

細巻の煙が揺らぐ。

「……駒城あつての馬堂だ。」

大殿様も若殿様も良くしてくれているし、

御二方とも駒州公に相応しい御方だと認識している。

俺だって自分が切り捨てられない限り、

恩を仇で返すつもりはないさ。」

内容に反し、その声には何の感情も窺えない。

「——義兄上には良くも悪くもそれは出来ない。」

善人故の欠点だ。

苦悩して苦悩してそれでも切り捨てられず、心中しかねない。

だからこそ、俺が——。

「どうかな？」

内では政争、外からはあの姫様が着々と内地侵攻の準備中

まさしく亡国の危機だ。

何があってもおかしくない。

この世には不思議ではないものなど何もなし、さ。」

豊久は頬を歪ませる。

「何があつても、か。」

皇国　の刻時計は踏み壊された、と評する人もいたな。」
俺も溜息を漏らす。

既得権益の奪還と意地の為に無謀な総反攻を求める愚か者達
俺はこの亡びかけの国に愛国心など持っていない。

この目の前の男はどうなのだろう。

「俺は単に一巡しただけだと思う。」

財貨の不均衡が戦乱を招いただけだ。

不平貴族の反乱や匪賊とも

そうした意味では変わらない。

規模がまた拡大しただけさ。」

富が膨らめば欲も膨らむ。

そして富が離れたら権力を振るい、

掻き集めようとする。

守原達を見れば良く分かる。

成程、世に無意味な戦は無くならない。

それをこの男はどう語るのか、少し興味が湧いた。

「金の恨み、か。」

貿易赤字による正貨の流出が

帝国　出兵の切欠だったか？」

俺の意図を理解したのか

豊久も仰々しい身振りで補足をする

「そしてそれによる反乱の爆発的な増加だな。

馬鹿馬鹿しい。

貴族にべつたりの大商人が

穀物売り惜しみの原因だ。

ふん、自分達で反乱を煽った様な物だ。

無能だ、無能。」

帝国　そのものを嘲笑っている。

「そして蛮族鎮定、か。」

御大層な名目だ。

「おまけに 皇国 経済の強みは流通だ。占領しても 帝国 と比較したら

大量の回船と熱水機関の技術程度しか旨みはない。

熱水機関を積極利用すると

帝国 本土の能率が悪い農奴階級の鉱工業が潰れる。

そして回船問屋が発達したのは導術のお陰だ。

滅魔亡導なぞもう昔話でしか無い 皇国 経済を

反導術の教義を奉じ、

交易相手を蛮族と呼び、

情報伝達手段すら知らない輩が活用出来るか？

帝国 の問題は、農奴制なんて非効率な制度だ。

勝ったところで肝心の問題は何も解決されない。」

皇国 は亡国の淵に追い込まれた。

それをこの男は無意味だと嘲笑している。

「 皇国 とて早々に虎城山地を盾にすれば長期戦に持ち込める。

元々東方辺境領は戦続きで財政は本土頼りだ。

帝国 は確実に財政が逼迫するよ。

更に西方諸侯領も南冥、アスローン両国を相手の紛争が慢性的に続いている。

其方にも金を出さなくては諸侯内で反乱だ。

帝国 は勝っても負けても命数は長くない。

その経済・政治の構造を変えない限り、

必ず破綻して内乱になる。

国が割れるのは時間の問題だ。」

話の内容に反し、不機嫌な唸り声を上げる。

そう、問題は

「それまでこの国が持てば良いがな。

帝国 も意地があるだろう。」

『その時』まで 皇国 が国の体裁を守っていられるか、ということだ。

「そうだろうね。」

あちらさん、常勝故に矜持も高い。

ユーリア姫殿下に似たような事を

言ってみたら追い出された。」

先程と打って変わり

けらけらと笑っている。

余程爽快な思い出なのだろうか。

一見頭の螺子が外れた様にすら見える。

俺としてはまだ緩みかけの状態だと信じたい、が

「……あ？」

おい、待て。

「言ったのか？」

東方辺境領姫に？」

俺の発言が聞き返される事は良くあるが

嫌味抜きで俺がするのは初めてだ。

「 帝国 軍の幕営に來いとか言われたからな。

戦争している間に国を沈めかねない無能の所に行くか、と。」

「よく首が繋がったまま帰って來られたな。

不敬罪に問われても不思議じゃないぞ。」

確かに 大協約 で守られてはいるが

だからと言って帝族を挑発するような真似を好き好んでするのは

余程の馬鹿か狂人位だ。

「そこまで馬鹿じゃないさ。」

「政治力の欠如を批判したから余計に、か。」

「そうだね。」

一見二人きりだったけど

当然ながら護衛の武官が隠れていたんだろうから――」

「帝族の意地もあり、か。」

初の外征なら尚更に。

貴様、本当に軍監本部向きだな。

陰謀、肝謀、無謀の三つ揃いだ。」

「失礼な、深謀遠慮の智将と呼べ。」

間髪無くこの切返しを真顔で言うか——相変わらずだな。

「——フッ」

俺が口を歪めると

「ククッ——」

我が旧友も笑い声を漏らす。

二人で笑いあう。

良くも悪くも一番付き合いが古い友人は飄然としていた。

・
・
・

同日 午後第二刻 馬堂家上屋敷 玄関

馬堂家嫡男 馬堂豊久

——さて、少しは釈然としたのかな。

帰還の途に着く新城を観察する。

「それではまた今度。」

機嫌良く見える。

少なくとも問題無いか。

「ああ、態々来てくれて有難う。」

御陰で俺も色々^{色々}と知りたいことを知ることが出来たし

何よりも気分転換になった。

こうした時は人の痛みを理解できる友人は有り難い。

「義兄上も直ぐに会うが宜しく、と。」

「ああ、若殿様にも宜しく言っておいてくれ。

——ああ、そうだ。」

いかな。忘れていた。

「これを。」

俺の輪胴短銃を渡す。

「貴様のお古か。」

そう言いながらも

俺が渡した物を持つ手はとても丁寧だ。

「酷いな。確かに五年物だけど特注品だ、
そこの短銃の倍以上はするぞ。」

それに手入れは怠っていないから新品同様だ。

——使い方は分かっているな？」

「皇都に戻って早々に貴様の試射につき合されたからな。」

減らず口を叩きながらも
渡した意味を理解しているのだろう、
僅かに手が震えている。

——この男、存外に小心なのだ。

「ならば良い。」

それは貸しているだけだからな。
必ず返せよ。」

「努力する。」

そう言いながらやけに恭しく短銃をしまう。
新城らしい分かりづらい皮肉だ。

「——それでは。」

御育預殿、御気をつけてお帰りくださいませ。」

新城に慇懃に貴人への礼をする。

勿論こいつが嫌がるのは百も承知だ。

「有難う。」

無愛想に言い捨て、家の馬車に乗っていった。
念の為に二名程、護衛をつけている。

今日は大丈夫だろう。

「行ったか。」

——山崎、見つけたか？」

屋敷の警備を取り纏めている山崎が近寄ってきた。

新城が来てから周囲を探らせていた。

「はい、十五名程、屋敷の周辺に張り付いております。」

さすが元憲兵、良い仕事をしてくれる。

「そんなに、大層な事だ。」

そいつらの所属は分かるか？」

「いえ、ですが魔導院では無いと思います。」

連中でしたらもつと上手くやる筈です。」

ならば将家の手の者か、

さてさて、守原か、安東か、西原か、

——それとも、宮野木、か。

あの狒々爺が相手だとしたら面倒極まりない。

思い出すだけでうんざりする。

「何人が育預殿について行ったか？」

「いえ、未だ全員がこの屋敷の周りにおります。」

育預殿にも、殿達にも付いていなかった様です。

豊久様のみが狙いかと。」

口調は慇懃だがその振る舞いは軍人その物に戻っている。

「万一忍び込む様なら俺と御祖父様で話を聞く。」

外で大人しくしているのならば手出しはするなよ。

深追いも禁物だ。」

こんな事で死者を出したくない。

「互いに、ですね。」

安心して下さい、上手くやりますよ。」

「ああ、任せた。」

家の警備班は祖父の子飼いだけあり有能だ。

下手を打つ事は無いだろう。

壁の耳は少ないに越したことは無いが持ち主を刺激するのも危険だ。

——さて、俺も家の掃除を始めた方が良いかな。

耳の持ち主が騒がない程度に加減を間違えない様、ね。

第二十一話 旧友、二人（後書き）

気づいたら一ヶ月……だと……？
本当に申し訳ありません。

第二十二話 祖父と孫と防諜と

皇紀五百六十八年 四月二十九日 午後第五刻半

馬堂家上屋敷 馬堂家当主代行 馬堂豊守

「つまりは向こう次第だよ、豊久。」

渡された駒州からの導術報告書から目を離し、

我が息子に目をやった。

主家の家風に影響されたのか、

あるいは太平の始まりとほぼ同時に産まれた子だからか、

私は将家らしくなくこの息子と濃い関係を築いている。

いや、その実幼い頃に不自然な聡さを見せたからかもしれない、
思わず笑みに苦いものが混じりそうになった、

——そう考えると私の行動原理は極めて将家的だ。

結局は家の為なのだから。

「ですが馬堂家が嘗められるのは不味いでしょう。」

「それだけじゃないだろう？」

「分かりますか？」

豊久の表情が作りのない苦笑に変わった

「分かるさ、不肖の息子の事位はね。」

この子も暫く見ないうちに随分と作りが巧みになったが
まだまだ私には透けて見える。

「敵いませんね。」

「それで？」

促すと決まり悪そうに頭を掻きながら

「子供染みているのは自覚していますが、

土足で私の屋敷に踏み込まれたのが非常に不愉快です。」

ふむ、確かにこの子の気持ちも分かる。

「まあ警告程度なら良いだろう。」

血を流すつもりは無いだろう。」

だが豊久は微笑を浮かべ首を横に振る。

「御祖父様次第です。」

ま、この手の事には慣れた二人で対応させていただきます。」

やれやれ、あの少年の相手は

元敏腕憲兵に防諜参謀か、可哀想に。

「——外の輩は山崎に任せているのだね。

私も探りを入れてみよう。

父上も間も無く帰ってくるから早めに済ませなさい。

明日からはお前も忙しくなるだろう。」

何人が友人に当たってみるとしよう。

場合によっては適度に話しやすくさせてもらおう。

「はい、父上。」

私もいじめさせてもらいますよ。」

愉しそくに嗤った。

全く、この子は誰に似たのだから——。

・
・
・

同日 午後第六刻

馬堂家上屋敷

馬堂家当主 馬堂豊長

「それは向こう次第になりますね。」

大辺が呟いた。

「まあそうだろうな。」

問題は龍州鎮台の兵站である。

最低でも七月までには直ぐに軍へと改組出来る様にしなければなら
ない。

「東州鎮台も拡充の用意をせねばなるまい。」

集成軍で対応するとなれば、皇域に集結している駒城・護州と並び主力となるだろう。」

東州は龍州の南に隣接する島だ。

徴用船を使えば十日も掛からずに主力を派遣出来る。

防衛の要となるだろう。

「問題は近衛、だな。」

頭数だけで考えるなら総軍（とは言っても一万に届くか届かないかである。）

を動かすのも必要だ。

「ですが、育預殿の事も考えると。」

豊守子飼いの参謀、大辺が抗議の声を上げる。

「実仁親王殿下もそこまで愚かではあるまい。」

駒城の育預殿を万全を期さずに前線に送ると思わん。

——少なくともそう願おう。」

嘆息する、どの地位にあらうとそれは決して樂園の箱庭にはならない。

辺里がせめてもの憩いの場へ扉を開けると

「御祖父様、大辺。」

我が孫が駆け寄ってきた。

「ん、豊久、今帰った。」

「お邪魔します。」

「やぁ大辺。」

悪いが御祖父様を借りるよ。」

そう言つてまだ軍服も脱いでいない儂を隅へ引つ張った。

「何だ？」

また小遣いせびりか？」

「何年前の話ですか！」

そうではなくて、——御祖父様。

久々に憲兵になりませんか？」

そして——にやりと笑った。

・
・
・

同日 午後第六刻

馬堂家上屋敷 第一書齋

馬堂家 新人使用人 石光元一

馬堂家当主の書齋に当主と監視対象が籠っている。

しかも戦務課の参謀まで引き連れてだ。

——きな臭い、深追いは禁物だと言われたが——

さてどうしようと考えていたら

何時の間にか現れた家令頭の辺里さんに黒茶を持っていくよう言い渡された。

——この人がどこから現れるのかは未だに分らない。

「失礼します。」

あの、黒茶を——」

「待っていた、入れ。」

豊長が返事をした。

「やあ、勅任特務魔導官。」

新人三等官かな？

こんな仕事を押し付けられるなんて可哀想に。」

馬堂豊長から渡された書類を眺めながら馬堂豊久が言った。

「！？」

やつぱりバレた！

「やってくれたね、ホント。」

蹄原の両親は書類上だけの義理の関係。

その上、教育を受けた私塾も偽装。

駒州で調べれば直ぐに分かった。

だが、役所関連の偽装は手が込んでいるね。

魔導院らしいやり口だ。」

やけに朗らかな口調が恐ろしい。

「まさかね、こんなに早く釣れるとは思わなかったよ。」

あのさ、ウチの警護班、庭と門を彷徨いているだけだとも思ってたのかい？」

唇をさらに釣り上げた。

「戦が無いからそれだけで安泰になる程、将家は生き易くは無いだ。」

取り分け、馬堂はそうした家だ。」

重々しく家長の豊長が告げた。

「さて、石光クン、だっけ？」

異議があるのなら言ってごらんよ。」

嗜虐的な笑みを浮かべて反論を促すが。

「・・・・・・」

口が乾き、舌が回らない。

心臓が早鐘の様に鳴る。

理が無いと書いて無理である。

「魔導院も儂の事を忘れたのか

やれやれ、年は取りたくない。」

逞しい体躯の老人が後退した白っぽい灰色の髪をかき回す。

——元憲兵にして駒州公の右腕——馬堂豊長。

「そう思うなら早朝訓練を控えたら如何ですか？

安心しますよ、主に私が。」

変わらぬ笑みを浮かべ、黒茶を啜る青年、

——軍監本部の怪人、堂賀准将の薫陶厚き

防諜室出身の英雄——馬堂豊久。

「僕は、その、」

やっこの思いで舌を回す。

「ああ、別に構わないよ。」

我が敬愛する上司の手紙も返してくれたしね。」

そう言いながら馬堂豊久は堂賀准将からの手紙をひらひらと振る。

「今の所は、だ。

あまり嗅ぎ回られると困る。

儂は軍監本部の情報を握っておるし

豊守の書斎は、金銭に関わるからな。」

僕の様子で確信を得たのだろう、

かつての鬼憲兵が僕を睨みつける。

視線がそのまま圧力になって僕に襲いかかり。

扉が――再び開いた。

「御二人とも、宜しいですか？」

軍監本部戦務参謀、大辺少佐が入室した。

「構わん。」

「何だい？」

豊長様の視線が逸れた隙に無意識に止めていた息をする。

あのままでは窒息していたかもしれない、と本気で思った。

「――。」

大辺少佐が二人に耳打ちしている。

豊久は何度か彼と小声で会話を続けた後、

此方に向き直り

「取り敢えず、さ。

これの写し、渡しれられないか。

持っているだろ？」

そう、にこやかに告げる。

「いえ、あの。」

「ほら、渡してくれないか？」

首を振った。

未だ写しきっていない、だがこれだけでも――。

「もう一度言わせるの？」

――渡せと言っているのだよ、私は。」

「ッ――。」

その声を聞いた瞬間、身の毛がよだった。

実戦経験者——殺人を行つた人間。

それを強制的に理解させる

冷やかで人を殺した声だった。

「こ、此処に。」

「はい、確かに」

——ん？途中じゃないか。」

一転して朗らかな態度に戻った。

「じ、時間が。」

「はいはい、成程ね。」

にこにこ微笑みながら燐棒を擦り、

あつという間に僕の初仕事は煤へと成り果ててしまった。

「よし、それでは御祖父様。

後はお任せします。」

「承った。」

ああ、そうか。

「さて、それでは君の知っている事を話してもらおうか。」

今日、死ぬのか、僕。

同日 午後第六刻

馬堂家上屋敷 第一書齋

大辺秀高

「結局、どれだけ素直になるか、次第だよ。

はかせる証拠集めは任せるよ。」

そう、言いつけられた彼の私室の調査報告を済ませ、

豊久様の隣に座った。

「参ったな、俺も虐め過ぎたかな。」

そう囁きながら笑いを噛み殺している。

「大殿と二人がかりですからね。」

同じ様に小声で返事をしながらその大殿を観る。

「俺は兎も角、御爺様は本物だからな。」

この人も大概だが

大殿は私達が産まれる前からこうした場の第一線に居たのだ。
正しく——本物だ。

「しかし、妙ですね。」

私は魔導院の事は詳しく無いですが

大殿と豊久様の事を考えればあんな子供を送ってくる程
軽率だとは思えません。」

「俺もそう思うよ。」

御祖父様には言うに及ばず。

俺も魔導院の将家担当の第三部に顔を覚えられている筈だ。」

大殿は魔導院が諜報機関に転換した時期に憲兵を指揮し、
軍への浸透を防ごうとしたが導術通信を握られ、必然的に敗北した。

「—— たった二年で随分と顔売ったんですね。」

この人は一体、何をしていたのやら。

「まあ色々とあつてね。」

—— それにしても、彼方さん、何を考えているのだ？」

黒茶に口をつけながら思考を巡らせる。

三寸ばかりの間、大殿達の声だけが部屋に響いた。

「彼も我々が知りたい事は何も話していませんね、

あの様子では真実、知らされてないのでしょうか？」

怯えている様に見え、嘘をついている様にも見えないが、
上の意向等も語っていない。

「さあね。」

それを知るには色々と骨を折るしかなさそうだが、
今は其処までする必要はあるまいよ。」

考えながら目を揉んでいる。

「最悪、何時でも切り捨てられる。」

あるいはそれすらも観察対象なのかもしれませんね。」

「俺達が独断で血を流す訳にもいかないからか、

忌々しいが主家の事を考えるとな。

彼方にとって、駒城が手綱になっている。」

目を向けると件の青年は容赦無い追及を受け
もう可哀相な位にぐったりとしている。

そう呟き、黙考するかのように俯き、

「そうになると、本番は“ばれた”と向こうに知らせてからだ。

あんな雑魚は虐めて楽しむ位しか用はないな。」

そして頭を上げ、愉しそうに嗤った。

どこまで本気なのか分らない、

触らぬ神に何とやら、止めるのは大殿に任せよう。

「——お、もう終わりが。」

当主が鳴らした呼び鈴の音に気づき、

目を向けると、少年は体を抱え、膝をついていた。

震えているのが分かる。

——心が折れたのだろうか。

「お前達が口を挟まんから止め時を間違えた、
やりすぎた。」

少し眉を顰めている。

警護班が二人がかりで彼を連れていくのを気遣わしげに見ている。

「生きているなら問題無いですよ。」

寧ろ、私が続けてもよかったかもしれませぬね。」

同情の色が全くない冷笑を浮かべている。

本気で怒っている様だ、初めて見たかもしれない。

「豊久、怒るな。」

大殿が窘める。

「怒ってなど——いませんよ。」

僅かに鼻白んだ様子で豊久様が答えた。

「豊久様、御自分の立場を考えてください。」

私も出来る限り感情を排した声で制止する。

「いや、大辺。俺は——」

「慎んで下さい。」

「・・・・・・はい。」

生意気な新品少尉の様に返事をした。

「それで、どう掃除するのですか？」

真顔に戻り大殿に尋ねた。

「我々の監視の下におかせてもらう。

男手はどのみち必要だ。

下手に入れ替えたら

また面倒な輩が入り込むかもしれんしな。」

大殿はそう言つて嘆息する。

念を入れて警戒していても入り込まれたのだ、無理もない。

「屋敷の監視下としますと

彼の処遇は豊守様に一任するのですか？」

「そうだ。

あれなら間違いはあるまい。

辺里に山崎も補佐するからな。」

私の質問にかかるく頷いた大殿はそのまま豊久様へ目を向けた。

「幾ら何でも口は出しませんよ、父上達に任せます。」

両掌を上げ疲れた様に答えた。

「そつした方が良いだろうな。

お前には軍務に専念してもらいたいが——」

視線の先の初孫は珍しく否、と首を横に振った。

「育預殿だけ苦労するわけにもいかないでしょう。

——それでも誠実な友人でありたいと思つているのですよ。

どんな形であれ、彼もそうしてくれている限りは。」

第二十二話 祖父と孫と防諜と（後書き）

概ね隔週更新になると思います。

第二十三話 陸軍軍監本部

皇紀五百六十八年 四月三十日 午前第九刻半

陸軍軍監本部前

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

——さて、まさかこんな事になって此処に来るなんてな。

いやはやこの世に不思議な事など何もないと云うが。

複雑な感情を胸中に抱きながら、眼前の練石造りの巨大な建物を眺めた。

皇国 陸軍最高司令部 陸軍軍監本部である。

「お前でも感傷に浸る事があるのだな。」

御祖父様が興味深げに俺を見る。

自分でもどんな表情をしているのか解らないが矢張りそう見えるのか。

「私にとっては、転機の場所ですから——」

此処に配属されなかったら辺境巡りもせず、

北領紛争に参加する事も無かっただろう。

——止める、馬鹿。たればの妄想なぞしている暇は無い。

頭を振るい、意識を戻す。

「若殿はどこにいらっしゃるのですか？」

「兵站課だ。」

各地の鎮台は通達が下れば直ぐに軍に改組出来る様に準備しているからな。」

どうにも、俺が時期外れに暇なのが申し訳なく感じた。

「分かりました。」

そうなると帰りは矢張り私一人ですか。

御祖父様もそのまま残りですね？」

駒州・護州両鎮台は皇都周辺に集結し始めている。

対 帝国 への本格的な準備に取り掛かるのだろつ。

「当然だ。」

馬車は残しておく、お前も好きにしろ。」

ならば帰り際に防諜室に寄っていくか、
仕事の話は積もる前に、つて言うしな。

俺も少しは家の為に働くとしよう。

同日 午前第十刻

陸軍軍鑑本部 兵站課 課長室

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

「閣下。入ります。」

兵站課長室に入るのは初めてだ。

兵站課自体には二・三度出入りしているが――。

肝心の課長は俺と共に入った途端に部下達に捕まってしまった。

殺気立った目つきで駆け寄ってきた参謀達の姿はある種の懐かしい
光景だった。

あまり見たくないけれど。

「お久しぶりです、閣下。」

軍礼装の保胤様に敬礼する。

年は俺の二十歳近く上だがそうは見えない。

その代わりに貴人の清廉な高貴さが溢れています。

浄化されそうだ。……浄化？

「お疲れ様です。馬堂中佐。」

敬礼を交わし、若殿が声を発した。

「座ってくれ。」

祖父の姿がないので現状二人きりである。

「北領では苦労したそうだな。直衛から聞いた。」

「はい、気がついたら大隊長殿、でした。」

ええ目的は予想以上に果たせましたが。」

実験部隊での新戦術・新戦科の有効性を見る為に北領まで赴任を希望したのだ。

まあ、他にも多少、事情はあったが。

「本当に良くやってくれた。」

「はい、閣下。」

部隊に恵まりました。

特に御育預殿には助けていただきました。」

そう言うと言を細めて頷いた。

「そうか、直衛も珍しく素直に褒めていたよ。」

あいつもあだからな、君が居て助かった。」

「——はい、閣下。」

奴と同部隊に居たのは単純な幸運ではない。

剣虎兵部隊が発足し、新城が剣虎兵学校でまたぞろ何かやらかして
辺境送りが決まっていた第十一大隊に送られた。

それを知った 皇国 辺境巡りツアー終了間近の俺が
新兵科と諸兵科連合の研究を兼ねて

一年程、幕僚として赴任するつもりだったのだ。

そして漸く皇都が駒州で腰を落ち着けられる身分になる筈だったのだ。

「ああそうだった、君は確か——

——いや、言うべきでは無いな。」

年季明けの事を思い出したのか

若殿様は僅かに顔を顰めた、真実、優しい御方だ。

「閣下。」

育預殿を近衛に転属させるそうですね。」

話題を変えよう、誰も得しない話題だ。

「ああ——君も知っている通り、駒州の中でも色々口を出す輩が多い。
い。

それならば、と実仁殿下が自由にやらせたいと言っていた。

君等は実仁殿下と懇意になった様だな。」

一瞬口箆ったがすぐに温和な口調に戻った。

駒州の後備に送ると思っていたので少々意外であったが親王殿下から言い出したのか。

義兄としては思う所がある、と見てよいだろう。

——実仁親王を信用しきれていないのか？

「殿下とは利害が一致しただけです。」

お互い泥沼に嵌りかけていたので。」

御祖父様が来るまでこの話題を続けるか？

「殿下は衆民を救出し、後衛戦闘の危険をこれ以上、侵さず皇族として期待された以上の武勲をお上げになりました。」

私は代価に大きな助力を得られました。

残念ながら一度も拝謁の栄に浴していませんが。」

保胤様は穏和な苦笑を浮かべた。

「過日頂いたお言葉では君の事を案じておられた。」

今度拝謁の機会を作ってあげよう。」

「光栄です、閣下。」

衆民英雄

尤もあの方にとっては新城近衛少佐のついでだろう。

どうせ、糞生意気な将家の小僧程度にしか思っていないだろう。

俺は近衛への伝手を十分に持っている。

益満大佐に連絡すれば禁士隊の実情は十分把握出来るし

衆兵は新城が大隊の編成の際に当てにならない衆兵を教導出来る様に陸軍から古兵を引き抜くだろう。

その際に俺が将校を推薦すれば政治的行動を感知出来る。

幕僚に防諜室の息がかかった者、

そして、砲兵に俺が辺境巡りの際に面倒をみた士官から気の利いた奴を見繕い

大隊に入ればある程度は探れる筈だ。

近衛衆兵で問題になるのは（或いは出来るのは）新城だけだ。問題は親王としての実仁親王殿下だ。

——駒城との結びつき、可能な限り把握しておきたい。

「それと、君の今後の事だが。」

おつといかん、本題に入るのか。

「はい、閣下。」

再び姿勢を正す。

「遅くなつて申し訳ありません、閣下。」

——お前には連隊を預ける。独立連隊だ。」

祖父が書類を抱えながら入室した。

部下達の用事が一段落したらしい。

「連隊ですか？」

私は中佐ですよ、閣下。」

祖父と孫ではなく、今は少将と中佐だ。

——そう、中佐だ。

皇国 陸軍では、大隊なら兎も角、連隊は有り得ない。

そして基本的に幕僚や後方勤務の経験を積む事が多い印象がある。

俺もそうなると思った、願望込みで。

保胤様が補足する。

「無論、臨時配置だ。」

君が冬まで大過無く過ごせば大佐になる。」

へえ、それはまた、随分と——

「単隊での戦闘を想定し諸兵科連合で編制する。

カンブレルベ
戦闘団と言つ奴だ。

正式名称は独立混成第十四聯隊だ。」

御祖父様が連隊について説明する。

混成連隊——諸兵科連合の独立連隊。

そうなると前線配置が前提か。

最早決定事項ならば文句は脳内だけで済ませるが

代わりに我儘を言わせてもらおうか。

「諸兵科連合では補給や統率が煩雑になります。

大隊規模なら兎も角、連隊では維持、運営が難しいのでは？」

諸兵科連合は単純に便利だとは言えない。

戦闘能力は飛躍的に高まるが指揮は複雑だし何より管理運営が面倒なのだ。

砲兵の補給には手間がかかるし騎兵も馬の管理に手間がかかる。更に専門外の兵科に的確な教育を行い

それを活かす指示を出すには幕僚達の助けが必要になる。

北領でも新城が居なければ剣牙虎の扱いに手間取っただろう。

「故に諸兵科連合部隊を率いた経験のあるお前を充てるのだ。

既存部隊である独立銃兵第三六五大隊と馬堂家から鋭兵一個大隊を出す。

これで第一・第二大隊だ。」

御祖父様が抱えていた書類から数枚を手に取りながら説明をする。

金のかかる鋭兵大隊か、本当に我が家は金満将家だな。

これに騎兵と砲兵を加えて主力部隊かな？

駒州の騎兵ならば供駒さんからめばしい部下を教えてもらうか？

「そして編成中の鉄虎大隊、この三個大隊を基幹に部隊を集成する予定だ。

だが、定数すらも決まっていない。

良い機会だからな、お前を呼んだのだ。」

——定数すらも決まっていない？

——連隊に鉄虎大隊？

「閣下、剣虎兵は独立部隊として編成するではありませんか？」

今まで編制された剣虎兵部隊は全て独立大隊だ。

威力偵察に迂回・奇襲と単独行動が多い為である。

そして剣牙虎に慣れた馬は少ない事もあり、剣虎兵は一般部隊にとつて厄介者なのだ。

剣虎兵を使うのなら輜重部隊の駄馬が剣牙虎に怯える等といった苦情も処理せねばならない。

剣虎兵が主体の第十一大隊でもそうだったのだから

俺に与えられる聯隊では他の兵科が増える分問題が増えるだろう。

——使い方さえ誤らなければ強力ではあるのだ、それは疑問の余地

は無い。

だが馬と相性の悪い剣虎兵は使い勝手が悪すぎる、独立大隊が一番なのだ。

「導術を利用した連携の実験だ。

君が一番理解していると思うが、剣虎兵の損耗率が高い。

勿論、それ以上に戦果も高いのだが、

何しろ二年前に漸く部隊が編成されたばかりの新兵科だ。

現在の運用法だけでは消耗に育成が追いつかなくなるかもしれない。何しろ後備部隊も存在しないからな。

故に他の部隊と緊密な連携を行い

それによって損害をどの程度減らせるかの実験の意味もある。

だから独立部隊だ。」

第十一大隊は伊藤少佐が最期に指揮を執った夜襲で七割近くが戦死した、それが根拠なのだろう。

確かに剣虎兵は多勢相手だと兵が散ってしまう、銃兵達が統制を取り戻したら支援が集中出来ない以上、剣牙虎も巨大な的になってしまう。

だからこそ、燐燭弾が上がった後にあれ程の被害を受けたのだ。

何しろ隊列を組まずに戦闘するので集結し後退させるまでの時間が掛かりすぎる。

——使いどころが難しい、専門の幕僚が欲しいな。

剣虎兵学校教官経験者を引っ張った方が良いかな？

訓練幕僚も兵科別に付けると効率が上がる。

ついでに砲兵幕僚もつけるか。

此方は富成中佐に口を利いてもらおう。

どうせ実験部隊だ、これくらい良いだろう。

そして、肝心要、連携の肝となる導術だ。

部隊がばらけやすい剣虎兵の生命線と言っても過言ではない。

「閣下、導術部隊の規模は如何程になりますか？」

「基幹となる部隊には既に配属されているのを含めれば百三十名前

後だ。」

——異様に充実している。

導衛兵の動員が進んでいるのだろうか？

皇室魔導院とも関係改善したのか？

——後で調べた方が良いな。

後、必要なのは砲兵と支援部隊だ。

連隊である以上、定数を四千未満に収めなければならないが——。

何時でも戦力不足になるのが戦場である。

旅団すれすれにしたって良いだろう。

「連隊が編成されるのは何時ぐらいになりますか？」

祖父が答える。

「基幹部隊はすぐにも集められる。

新編部隊は、一ヶ月以内に——

君が軍務に復帰したら直ぐに連隊全隊の面倒を見られる様にする。」

保胤様が面白そうに言う。

「やけに早いですね。」

とは言っても部隊の新設に関わったこと等ないけれど。

やりすぎではないだろうか。

下手にやっかみを買う位ならば、帝国の侵攻に間に合わずとも良いのだが。

俺が変に考え込んでいることに気づいたのか、

保胤様が説明をする。

「別に君が考えているほど、難しい事情じゃない。

各鎮台は戦時体制——軍への改編を行っている最中だからな。

ある程度は融通を利かせられる。

それに、君にもある程度自由にやらせてあげないと信賞必罰が問われる。

家の末弟も相当好き勝手に動くつもりらしいからな。」

そう言って苦笑する。

信賞必罰が問われる、か。

本当にそれだけだろうか――。

いや、あまり勘繰るのも失礼だろう。

「お前は余計な詮索をする前に頭数だけでも決める。

何の為に休暇中に呼び出したと思っている。」

あまりの質問攻めに祖父が嗜める。

定数か。

現在決定しているのは銃兵二個大隊と鉄虎兵大隊の三個大隊

鉄虎は単独行動が多くなるから千近くと計算して――二千三百名と試算しよう。

輜重を考えると余り空気が無いな。

――騎兵は無理だ。

剣牙虎に慣らしても馬は万全な状態にはならない。

相手の騎兵を脅かす為に吼える時に此方まで馬が動揺する。

落馬する者すら出る可能性すらある。

駒城の騎兵は精兵だ、かなり惜しいが他で使う方が効率が良いだろう。

――偵察役は剣虎兵に任せるか、足が遅くなるが導術兵を随伴させればどうにかなる。

後は砲だ。

最近、周囲に忘れられている気がするが俺の本職である。

最低でも騎兵砲と平射砲を中隊で欲しい。

第一・第二大隊にも臼砲・騎兵砲を各一個小隊分配置させよう。

合計二十門、門数だけならば砲兵大隊だ。

無念だが擲射砲は無理だ。

足が遅くなるし断種を増やすと輜重部隊に負担がかかる。

――必要な時は他部隊へ支援を求めれば良いだろう。

だが非常に残念だ、あれはいいものだ。

導術で弾着観測が可能になった以上、

施条砲が実用化されるまでは皇国陸軍の主役となるだろう。

――予算と導術兵が足りるのなら、だが。

その導術兵と野戦築城が出来る工兵中隊。

この二部隊は使いどころが肝心だ。

苗川で確信した、防御陣地は導術と相性が良い。

場所を選べばこの連隊でも向こうの旅団を数日程度は食い止められるだろう。

導術も疲れきらない様に注意しなくてはならない。

そして一番苦勞するであろう輜重大隊。

手持ちの帳面で試算する。

「閣下、頭数は三千を超えます。

宜しいでしょうか？」

「構わない、流石に4千を超えたら困ったがね。

ならば定員は——三千九百名で良いかな？」

興味深そうにざっと計算した俺の帳面に目を通して言う。
本当にぎりぎりである。

本部が少々手薄になっているが、まあ何とかなるだろう。

普段は工兵を護衛にすれば問題無い筈だ。

「これでは殆ど旅団ですな。」

祖父があまり調子に乗るな、と軽く睨む。

「前線や後衛戦闘に送られる可能性が高いですからね。
限界まで注文をつけさせて貰いますよ。」

幾ら御祖父様でも譲れない事だ。

俺が見返すと祖父は頷き、書類に筆を加えはじめた。

「——似ているな。」

それを見ていた若殿様がそう呟き、微笑した。

「閣下？」

「ああ、君が直衛に似ていると思ってね。」

「——朱に交われれば何とやら、と言いますからね。」

野戦指揮官として真似るべき所は真似ているつもりだ。

真似るべきで無い所や真似られない所も多々——いや、寧ろ殆どが
そうだが。

「あ、それと御祖父様が軍監本部に居るのならば大辺を此方に回して下さい。」

兵理帷幕院に入る前に中隊を率いてから一度も戦場に出て居ないでしょう？

私の連隊で使わせて下さい。」

「首席幕僚に配属させるのか？

良いだろう、手配しよう、本人にはお前から話せ。」

祖父は若殿様が頷くのを見て帳面に書き込んだ

「剣虎兵幕僚に剣虎兵学校の教官経験者をお願いします。

砲兵幕僚は富成中佐に推薦をお願いしたいのですが宜しいでしょうか？

第十一大隊から一個小隊を鉄虎大隊の中に搜索剣虎兵中隊を再編させる基幹人員に――。」

小半刻程の間、俺は帳面片手に注文を連発した。

ふと隣を見ると祖父の眉間のヒビが恐ろしい事態になっていた。

以後、俺がその方向への視覚を封鎖したのは言うまでもない。

若殿は苦笑しつつも俺の要望の大半を受け入れてくれた。

既存の大隊と馬堂家が出している兵を中心に

匪賊の討伐などで実戦を経験した兵が半数を占め

幕僚陣も充実している。

士官の数も二百名程度となるだろう。

近衛禁土程では無いが、士官の割合は高い。

常時の指揮能力は導術を活用すれば飛躍的に高まる。

訓練の優先順位を厳格にすれば三ヶ月――いや、二ヶ月だ。

それで、駒州軍の名に恥じぬ部隊になるだろう。

同日 午前第十一刻

陸軍軍監本部 戦務課付近

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

「——と思うがどうか？」

「取り敢えず、前線送りの道連れにされた恨み言を申して宜しいでしょうか？」

大辺が溜息をついた。

確か七年前に中隊を率いて以来、一度も戦場に出ていないのだ、この男。

「連隊本部の人事は一任されていたからね、信頼出来る者を幕僚にしたいのさ。」

俺に参謀教育を施したのは少佐だ。

その能力は知っているよ、首席幕僚殿。」

「また皇都で要らぬ心配をするよりはましですかね。」

少なくとも貴方が何をするかを見張ることが出来る。」

そう言つて溜息をついた。

少し耳が痛い。

「北領では必要だった。」

あの戦よりはマシであつてほしいな。

いや、そうしなければならぬな、少なくとも俺の連隊にとっては。」

そう、俺が責任を持つて死地へと連れていく連隊だ。

「——そうですね。」

それではまた、連隊長殿。」

感情の薄い顔に僅かな驚きと喜びの色をよぎらせ、今の職場へと戻つていった。

——まだ連隊長じゃないぞ、首席幕僚よ。

同日 午前第十一刻三尺

陸軍軍監本部 情報課防諜室 室長執務室

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

懐かしいな、この部屋に入るのも四年ぶりか。

「お久しぶりです、堂賀閣下。」

「久しいな、馬堂中佐。」

俺の敬礼に答礼するのは俺の嘗ての上司である堂賀室長だ。

久しぶりに会った上司は髪は灰色こそ白の度合が強くなっていたが猛禽類の如く鋭い目に射抜くような光を閃かせ、

どこか愉しげに唇を歪めている姿は変わっていなかった。

「それで？あれで早くも釣れたそうだな。」

「はい、閣下。」

当然ながら耳が早いな。

この人が書いた書面には呼び出しの他はいつでもよい事を大仰に書いていただけであった。

それであつさりと魔導院の輩を釣り出すのだから恐ろしい。

「連中が何を考えているかは流石に分からん。」

馬堂家は執政府にも強く食い込んでいる。

貴官のお父上の方が探りやすかるう。」

書類の束を取り纏めながら続ける。

「それに貴官は勅任二等特務魔導官とも顔見知りだろう？」

羽鳥、か。

新城の友人だと知った時はおどろいたな。

だが

「二度と見たく無い類の人間ですがね。」

奴に関しては不愉快な記憶しかない、

互いの職務を考慮すれば当然といえば当然だが。

「だが、その様な事ばかり言っていられないだろう？」

なあ中佐。」

などと面白そうにおっしゃる。

「分かっております、閣下。」

だが、あの頃の事を考えると、友好的に接する事は出来ても信頼関係を築けるとは思えない。

「ですが閣下の麾下の者だけでも——」

陸軍には陸軍の情報機関がある。

——特務偵喋憲兵隊。

情報課の管轄下であり、防諜室が実質的に支配しているのだが——
「無理だ。」

宮野木に安東、そして守原、将家の手勢が入り込みすぎている。
だからこそ、貴官が知りたい事も耳に入るのだがね。
その代わり私の動きも耳に入る。」

将家の勢力争いの御陰で身動きがとれないのは変わらずだ。
それに規模も皇室魔導院どころか水軍の外郭団体である内外情勢調査会にも負けている。

導術に至っては魔導院から教官を借り受けている始末だ。

「それにな、貴官だけではないのだ、駒城の者は。」

——駒城にすら知られたく無いから私の所に来たのだろうか？」

俺なぞよりも長く深く陰謀の世界で生き抜いた男の猛禽の如き視線に射抜かれた。

「.....」

やはり、俺なんぞとは役者が違う。

「貴様も大胆だな、鞍替えを考えているのか？」

視線を緩め、唇を再び楽しげに歪める。

「勿論そうならない為でもあります。」

ですが、万が一、駒城が潰れそうなら、

或いは馬堂家を切り捨てようとするなら——」

「現状では？」

「私は駒城を主家と仰ぐのは恵まれた事だと考えていますよ。」

少なくとも主家は国を守ろうとしています。

今の駒城には忠義を感じています。

何方も家がある限りは忠義を尽くします。」

馬堂は簡単に切り捨てられない程度には

駒州内に深く食い込んでいるが——。

いや、それでも状況次第では危険だ。

馬堂家に不必要な類の力を持つてしまっている

大殿は必要であると判断すれば出る杭を杭ごと切除してしまう。そうで無くては駒城が独立独歩の方針を執りながらこれ程の権勢を維持する事は出来ない。

今必要なのは切札を作る土台だ。

それも土に埋もれて見つからない土台である必要がる。

「――大掛かりな行動は出来ないが協力しよう。

私の子飼いの者ならば信用できるからな。

その代わり、貴様の家が持つ伝手も使わせてもらっぞ。」

顎を掻きながら思案している。

この人も最終的に何方に肩入れするかを見極めたいのだ。

そして、将来を考える（皇国の執るべき方針を含め）としたら駒城寄りと考えるべきだろう。

「新城直衛と実仁親王殿下、ですね？

蓬羽を含めた衆民の有力者にも何名か。」

これ以上は父上にも相談しなければならぬ。

俺が前線、祖父が後方の責任者である以上

この手の事には父上が動く事になる。

「上出来だ。」

ますます機嫌が良くなっている。

「愉しみですか？」

「ああ、何とも愉しみだ。

後は貴様が私の下に戻ってくれば言う事無しだったが。」

愉悦の笑みを浮かべている。

「私も当分は部隊の面倒を見ることになりそうです。」

「連隊長だったな？」

ふふふ、来年には閣下にもなるか？」

「またまたご冗談を。

お聞きして宜しいでしょうか？」

閣下、で思い出した。

「何だ？」

今まで見たことが無いほど上機嫌である。

正直、逆に恐い。

「個人副官をつけていらつしやらないのですか？」

ちよつとした好奇心だ。

俺が個人的に知っている将官は誰もつけていないが、

将官には両性具有者である個人副官の配属を希望する権利がある。

彼（女）達は法的には亜人として扱われている。

護衛として鋭剣の達人であり、副官としての能力も高く、

そして忠実であり、コトに及んでも人間を妊娠しない（相続の面倒が起きない）、

と色々な意味で都合が良いらしい。

結構な数の将官が彼（女）達の配属を希望している。

ちなみに御祖父様は夜にするより朝に孫を張り倒す方が好きらしい。態々訓練所まで屋敷に造つてまで続けるのだから恐ろしい。

「——家のが、な。」

先程の上機嫌から一転して僅かながら恐怖の表情が張り付いている。

「ああ、分かりました。」

一般的に、個人副官は周囲からは情人扱いされる。

例外とされる者もそう勘ぐられる。

それからは如何に軍監本部の要人と言えど逃げられない様だ。

そしてそれは家庭のいざこざを引き起こす。

——それにしても恐妻家だったのか、この人。

ある意味、この情報は本日一番大きな成果かもしれないな。

笑いを噛み殺しながら、そう思った。

第二十三話 陸軍軍監本部（後書き）

連隊の名称と編成を考えるのに時間を食いました。
水軍に諜報組織があるのを知らなかったり
不勉強極まりないです、はい。

第二十四話 陪臣達の宴

皇紀五百六十八年 四月三十一日 午後第四刻

皇都 大馬場町 桜契社本部

駒城家陪臣 皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

「本部に来るのは久しぶりだな。」

此処は陸軍将校の親睦団体である桜契社の本部である。
共済組合と云えば分かり易いだろうか？

皇国 陸軍将校に任官した者はすべてが加盟する事になっており、
予備役に編入されてからも会員の権利は一生保有し続ける。
運営費は現役将校の俸給から一定額を差し引く事によって捻出されている。

主な活動内容は将校たちの会食や宿泊といった保養の面倒から
個人的な軍事研究の支援、

そして戦死した将校達の遺族への援助金を出す事である。

施設自体は会員の紹介があれば他の者でも利用可能であり、
外部の人が退役将校の同僚に連れられて、なんて光景も偶に見られる。

そして、会員である限りは衆民であろうと将家であろうと
平等な権利を有するというのが運営理念であり、

この理念には誰もが従っている。

今日、此処へやって来たのは益満大佐主催の駒州兵理研究会の会食
の為である。

駒州鎮台も皇都周辺に集結している。

懐かしい顔に会えるかもしれない。

「相変わらず、豪華だな。」

本部の内装は皇国陸軍が経験した戦いにちなんだ装飾や絵画で統一
されている。

駒城篤胤大将——大殿様や他の五将家当主達の率いる軍勢が東州から凱旋する場面の絵も掲げられている。

「——何時か此処に第十一大隊が加わるかもしれない、かな？」

——そうなたら結構、嬉しいな。

尤も奴は鼻で笑うのだろうか。

仏頂面で含羞と自己嫌悪を覆い隠し、鼻で笑う姿はまるで見てきたように想像できる。

——こんな物が兵の健気に報いるか、とでも言うのだろうか。

衆民将校が増え、俺の様な将家の将校は減っている。

そうである以上、それもまた一種の鎮魂になるだろう。

此処に描かれている将家の将達も俺達の矜持の証から歴史の遺物となるのだろう。

——ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、なんてね。

時代は変わる、だな。

天領は活気に溢れ、港には回船がひっきりなしに出入りし辺境は開発されていた。

そう、間違いなく 皇国 は発展していた。

『馬堂豊久』で無かった遠く朧な過去に憧れていた

『旧き良き時代』に酷似していた。

帝国 が逆恨みで馬鹿な戦争を始めるまでは、だが。

勿論、ただ幸せな人間ばかりでは無いが、

それでも何時かは、と希望を持っている者が多かった。

軍も厳密な規則を守る将家出身者は減りつつある。

——時代は変わり、将家は消える、将家の将家たる故最後の拠り所を失う。

衆民の時代が来る、衆民の政府となり、衆民の軍となり、

皇国 は皇家を敬う衆民達の国になる。

そして家名では無く、財貨で地位が決まり万民平等を囁く国になるのだろう。

——それが良いことなのかは分らない。

それはそうしたモノなのだ、と考えるしかないのだろう。

——そして、何時か——

「何をしている？豊坊」

「！！あまり驚かさないで下さい。」

「なんだ、貴様。久しぶりの挨拶がそれか、豊坊。」

そう言いながら豪快に笑う声には聞き覚えがあった。

「——お久しぶりです、益満大佐殿。

御健勝そうで何よりです。」

そんな十余年も前の呼び方は止めてほしいのだが。

「ふん、馬堂中佐、か。

気がついたら閣下とお呼びしなくてはならなそうですな。」
かつての弟分に剽けて見せる。

「ははは、軍監本部に顔見せに行った時も言われましたよ。

まあその分、色々と酷い目に遭いそうですかね。」

「だが、冬まで生きていれば大佐だろう？

父から聞いたが、若殿も貴様の事を買っている様だな。」

ははは、どれだけ好き勝手やらせてもらったのやら。

後が恐いな、主に同僚の目とか

「こんな戦況では大佐の階級章をぶら下げる前に

『閣下』に成りかねないのが恐ろしいのですが。

ま、帷幕院に行き損ねましたし、

家格を鑑みて、この戦の間は大佐でしょうね。」

と、言うよりも俺がそうポンポン出世する程、

上の席が空く様な戦況にならないで欲しい。

人材は育つのに時間がかかるのだ。

兵部省にとって涙すべき四十寸なぞ御免だ。

「確かに、貴様が経験不足なのは否めないが

まあ働き次第だろうよ。」

そう言い、顎を掻く。

「俺も遠からず、総軍司令部に転属だ。

その前に馬鹿な騒ぎを片付けなくてはならないが。」
うんざりした様に頭を振る。

「馬鹿な騒ぎ、ですか？」

「まあ色々、な。」

栗原閣下も無能では無いのだが、五将家の横車には弱くてな。
だから今日は貴様を肴に馬鹿騒ぎして憂さ晴らした。」

そしてまた、呵呵と笑った。

「さあ！」

主賓の癖に皆を待たせるな！

さっさと行くぞ！」

まるで引き摺る様な強引さで俺を大会堂の奥へと引率する。

——これだから騎兵は。

第十一大隊が北領に着いたばかりの時も

伊藤大隊長に引きずられた事を思い出し、嘆息した。

——戦場でこそ俺達^{ほうへい}は騎兵を叩くが日常では騎兵に砲の如く引きずられるのが定めの様だ。

・
・
・

同日 午後第五刻

桜契社本部 大会堂

駒城家陪臣 馬堂家嫡男 馬堂豊久

大会堂は喧騒に包まれていた。

十数卓の円卓を占領している駒州産の分家・陪臣格の少壮有為の将校達が集まっているからだ。

兵理研究会にこれ程の人数が集まるのは始めてでは無いだろうか？
陪臣格の筆頭でこの会の主催者である益満昌紀大佐が音頭をとる。

「それでは、我ら駒城家家臣団が俊英、馬堂豊久の生還を祝って！」

「乾杯！！」

皆が好き好きに飲み物を注いだ杯を呷る。
俺は頭を抱える。

俊英ってなんだ、俊英、ってさ。

「ははは、それなりの事をしたのだから、もつと誇りなよ、豊久。」

「うう、お久しぶりです、俊兼さん。」

北領では御無事かどうか、心配しました。」

隣に座っていた駒城家重臣の佐脇家の嫡男に挨拶する。

家の位階は同じだが、年齢はこの人が三つ上で

階級は俺が二つ上だ。

こうした事は色々と面倒だが軍内じゃないし敬語でいいだろう。

「いや、俺はそれこそ、凍死か溺死か、などと考えられた贅沢者だったよ。」

——佐脇俊兼大尉、派遣された集成兵団に居た銃兵第九旅団で中隊長をしていた筈だ。

「君こそ、あの育預に——。」

あ、不味い。

「・・・・・・・・。」

こんな時は黙って微笑に困惑の色を浮かべて見せましょう。

日本でも 皇国 でも通じる便利な肉体言語で御座い。

特に具体的な事を言わずに済むのが実に素晴らしい逸品である。

帝国 やアスローンでは通じないから困る。

「ああ、すまないな。」

決まり悪そうに佐脇も微笑した。

（俺は吞まないが）酒の席で他人の悪口なんて無粋ですよ、ってね。
「いえいえ。」

まあ、若いから仕様がなない所もあるしなあ、俺、年下だけど。

「おい！馬堂水軍中佐殿！此方に来い！」

割れた声が大会堂に響いた。

「おっと。頭に名誉をつけ忘れている奴がいますね。」

少し注意してこなくては。」

「ははは、また船に乘せられない様にな。」

そう言つて杯越しに手を振つて見送つた。

水軍の人達が集まつている円卓だ。

尤も今は結構な人数が混ざり合つているが。

「おい、それより貴様、＜畝浜＞に乗つたそうだな。

あの熱水機関、どうみた？

俺は最初から熱水機関は輸送船から試すべきだと言つていたのだ。

そうすればあんな無益な溺死者も——。」

「フウ……」

溜息をついて相伴相手を観る。

あまり話した事が無いが、確か水軍の久原少佐だ。

酒が入っているらしく、

日と潮に焼かれている事を差し引いても顔が赤い。

そして、俺に延々と愚痴だか持論の展開だか良く分らん話をしていく。

東海洋艦隊の人だったかな？

権門意識も薄いし悪い人じゃないと聞いているが——。

「済まないね。」

この人は転進作業の時に船上から何人も溺れ死ぬのを見ているんだ。

「

同期らしい男が俺の隣で囁いた。

「そんなに酷かつたのですか？」

「少なくとも、数千人は亡くなつたらしい。

海が荒れていた上に真冬だったからな、運荷艇がひっくり返つたらまず助からない。

——君も苗川を利用したのだ、分かるだろう？

笹嶋中佐がと救命艇で運ぶ要請を出したそうだ。

詳細でははっきり書いていなかったが、他の艦では没つた艦長も居ただろうよ。」

暗い顔をして頭を振った。

——そこまでする程、酷かったのか。

「まあ、何だ。」

君も一応は、水軍中佐なのだ。

これからはより一層宜しく頼むよ。」

にやりと——笑った。

「あの——失礼ですが——。」

「ああ、これは失敬。」

名乗っていなかったな。

——駒杉和正、水軍中佐だ、都護陸兵団の長をやっている。

今後ともヨロシク。」

そう言つて円卓に残つていた洋餅^{パン}を丸齧りした。

「ははは、私は前線行きですから。」

当分は顔を忘れないでいただだけで十分ですよ。

馬堂豊久、本業は 皇国 陸軍砲兵中佐です。

よろしくお願い致します。」

そう言つて久原少佐の方を見ると同じ水軍組二人を捕獲していた。

やっぱり絡み酒かよ。

「それは御愁傷様。」

——彼は俺が相手しておくよ。

君と話たがつている連中も多かるう。」

行つてきな、と俺へ軽く手を振った。

「それでは御二人とも、またいずれ。」

会釈をし、僅かに喧騒から外れた年長組の円卓へと向かった。

益満大佐に鍬井大佐、供駒中佐、そして珍しい事に富成教官までい

た。

駒州軍の参謀組かな？益満大佐は近衛総軍だが。

この席に座っている人は皆、階級が上か先任で年上だ。

「お久しぶりです、皆様。」

「おや、貴官の愛弟子じゃないか、富成。」

供駒中佐が俺が近寄るのを見て隣の同僚へ話しかける。

「愛弟子？」

手間は掛かったが愛なんぞかけた覚えは無いな。」

一間五尺の小柄な体で長身の騎兵将校である供駒中佐と並んで座っている

我が教官のお言葉である。

「ははは、確かに、随分と辛口の考課表をいただきましたが。」

思い出しただけで笑みが引き攣る、割と情け容赦の無い教官だった。龍火学校——砲兵専科学校での話だ、懐かしい。

「手を抜くのは良いが、お前はそれが下手過ぎる。」

下士官に任せる方が良いのに何でも自分でやろうとしていたからな。

「

あゝそう言えばそうだったな。

あの頃は若かったよね、ホント。

「だが、北領では崩れかけた大隊を上手く取り纏めていたじゃないか。」

中尉時代とは随分変わっただろう。」

鍬井大佐が助け舟を出してくれた。

「どうでしょうかね。」

まあ、大尉の時に彼方此方で小火を消して回っていましたからね。如何に自分が頼りない存在かを知る経験は積みましたよ。」

今までは辺境貴族の反乱鎮圧が（演習以外の）砲兵の出番だった。

小隊・中隊を引っこ抜いて部隊を混成したり

大規模な反乱の場合には独立大隊を旅団・連隊にくつつけたりする事が多く

匪賊討伐と違ってちよつとした戦争ではあった。

まあ、金のかかる砲を態々出すのだから当たり前と云えば当たり前だが。

だが、それも天狼の様な大会戦などとは程遠く敗退して決死の遅滞戦闘なぞ有り得ない話だ。

「経験を活用出来るのならば、それで十分マトモだ。」

益満大佐がぼそり、と呟いた。

「中には教本通りの工夫の欠片も無い行動しか執れない理屈倒れの馬鹿も居る。

そうした奴に限って幕僚に頼る事をしない。

間違った場面でもその論理に従う。

失敗したら自分ではなく教本の責だとしても言うのか！」

唸る、結構な鬱憤が溜まっている様だ。

「何処にでも居ますよ、その手の人間は。

私の世代では責められないし、そのままであって欲しかったですけど。」

若菜——は論外としても実際、実戦経験が無い将校はその手の問題を抱えた奴が多い。

この二十五年間、まともな戦争が無かったからだ。

「確かに、机上でしか戦えない者も多かったのだ、机上の空論に陥る者を責められない。

だからこそ、大佐殿の言うとおり、学べぬ者は責められるべきなのだ。」

兵の命と国の興廃を背負うのだから。」

富成教官が俺を窘める。

「それは分かっていますよ。

戦争が始まった以上は学び、戦う必要がある事も。」

溜息をつく。

「ですが、対策は極論すれば訓練の激化と前線送りだけですからね。金も人材も大量消耗します、まさに戦争ですな。」

かつて細やかながら学んだ事を思い出す

——戦争などするものではない。

大量の消費と技術開発が見込めるとしても、血を流して得た物に国は、大衆は固執する。

以前の己の国を鑑みれば分かる。

——だが、国が自由を謳歌するには軍事力が必要なのも確かだ。二度目の大戦の理由を考えれば分かりやすい。血を流し、勝ち得た権益の危機。

自給自足の生存圏を持った国とそれ以外の国の対立、混乱し、迷走し、そして大戦へと至り、人間は遂に人間を滅ぼす力を入れた。

「——楽園は永遠に存在しないからこそ楽園、か。」
「どうした？」

鍬井大佐が俺の呟きに反応した。

「いえ、どんな事にも終わりはある、と思っただけです。今までの平和にも、この無益な戦にも。」

「どんな結末であれ——か。」

富成教官は悲しげにこの閑達な喧騒を見た。

「負ける、と決まってはいないさ。」

供駒中佐が励ます。

「数だけが問題では無い。」

やりようはあるさ、俺達は若殿と共に 皇国 の為にあるのみだ。

俺達は 皇国 陸軍なのだから。」

鍬井大佐が明快極まりない結論を出す。

「俺は近衛だがね。」

陛下の宸襟を安んずる為にも、な。」

益満大佐もそう言っただけで笑った。

「——まあ、やれるだけやりましょう。」

悪戦は変わらないでしょうが。」

——此処に居る人達は旅団を率い、司令官を補佐する事は出来てもけして軍を率いる事は出来ない。戦場で万を超えた命を預かるのは五将家だ。有能であれ、無能であれ選択の余地は無い。

——そうした世界なのだ、此処は。口にした黒茶はやけに渋かった。

——今回ばかりは酒にすれば良かったな——

第二十五話 銃後の女性達

皇紀五百六十八年 五月一日 午前第十刻

馬堂家上屋敷 第三書齋（豊久私室）

馬堂家嫡男 馬堂豊久

俺は大層困っていた。

——類は友を呼ぶ、或いは朱に交われば赤くなる。

卵が先か鶏が先かの違いはあれども要するに周囲の人間と自分が似ている

そうした結果が多々あるからこそ存在するのである。

けだし、俚諺は真理と言う通りにそうした状況が発生しやすい事が世の常であるということが事実である事は確かだろう。

ここで俺の周囲を見渡すと、ある恐ろしい事実が浮かび上がる。

—— まともな女性関係を築いている人間が妙に少なく恐妻家が淡泊な独身主義者ばかりである。

先の俚諺の通り俺も女性遍歴はほぼ白紙であり
基本的には面倒な主家の末弟様の面倒をみるか

読本の蒐集や酒を飲みかわせない分、陪臣間の横の繋がりの強化を
休日の日課として

浮いた話なぞ無かった。

つまり哀しいかな、悪い兄貴分に教えられた店通い以外では

俺が知る女性の扱い方は為政者としての無能さを指摘する程度しか
無いのだ。

—— まあ、自業自得ではあるのだが。

故に——俺は大層困っていた。

「本当に——哀しいです。」

原因はこの女性である。

柔和でどこか幼い顔つきとそれに反した人を見透かす様な深い井戸

の様な静かな光を湛えた眼。

——俺がこの世で苦手な人間上位十名に入る女性——弓月茜である。

「私は——貴方の許嫁のつもりでしたが」

寂しげな表情を浮かべて静かに詰問される。

「いえ、その——」

だらだらと脂汗が頬を流れる。

ある種、ユーリア殿下より怖い。

何しろこの件に関しては俺が全面的に悪い。

つまり丸腰なのだ、主に理論武装的な意味で。

「御家が大変な事は私でも分かります。

ですがあまりにも——」

理路整然と続く説教と恨み言と労りを複雑に混ぜ込んだ言葉。悪意を欠片も見せないその言葉がづらい。

「……頭を下げるべきだろうか？」

——必然の長期戦を予期すればそれは愚策かもしれないが。

いや、戦略的優位は彼女の手にある。

主導権を握られてしまった以上やむを得まいよ。

「……俺がまともに連絡しないのが悪いのだが
苦手なんだよなこの女。」

「——本当に申し訳ありません。」

素直に頭を下げる。

俺が婚約をずるずると長引かせているのにこの女は嫌な顔一つしないで待っている。

俺の我儘に付き合わせている様なものなのだから頭が上がらない。

「いえ、私も感情的になりすぎました。」

嘘だ、と叫びたいがそれを言った後の事を考えると怖い。

それに心配させてしまったのは本当なのだ。

「申し訳ありません、心配させてしまいましたね。」

濃い黒茶の苦味が滲みる。

「俘虜でも、御無事だったと聞いた時には——」

二度とあんな思いはしたくないです。」

「申し訳ありませんが、どうやらまた前線送りになりそうです。軍監本部に戻るかと思いましたが。」

防諜室も別の意味で危険だけれど、平時でも事故死する事があるかな。

「父も気にしていました。」

残念ながら弓月は軍に口出し出来ませんが。」

弓月家——故州の名家であり、

皇家に侍従を多数出し、当主が現侍従長を務めている名家、右堂家の遠縁にも当たらしい。

彼女の父は内務省の勅任参事官——省内第三位の序列を務めており、輔弼令の直後から目敏く衆民官僚を保護し、中堅官僚達を取り纏め派閥を造り上げている。

頭を五将家に抑えられている事で権勢の拡大は限界と見られている

——と父が言っていた。

ましてや軍や兵部省に入り込む余地は無いのだろう。

「だからこそその婚約、そういう事ですからね。」

そうした家と金満将家、きな臭さを嗅ぎとれ無いほど俺は純粹では無い。

だからと言って反対しているわけでもこの女性が嫌いなわけでもないのだが……

どうも俺は其方で考えてしまう。

「あら、拗ねないで下さいな。」

「拗ねていませんよ。」

嘆息する、割り切れない幻想を持つのも問題だ。

折角の良縁なのに要らぬ裏を勝手に嗅ぎとっているのだから馬鹿げた話だ。

何処かの御行じゃないが

知って知らぬ振りが上等、一時の浮世の夢と承知で惚れる、それが粹よ。

それが一番なのだが、酒も色も酔うのが怖い無粋で不調法な馬鹿なのだ。

他人の裏を探って要らぬ逡巡をしているだけである。
どうしようもない俺の持病だ。

若い内に悪い男と付き合い過ぎたのだ、主に父親とか大殿様とか傍聴室長とか。

新城にすら呆れられているのだから俺も大概の阿呆だ。

「損得有りでも私は構いませんけれど。」

——意外と純ですよな。」

くすり、と笑われた。

彼女はそうしたものだ和理解しているのだろうか——。

「……前にも誰かに言われた気がします。」

「あら、きつと美人でしたのでしょね。」

薄く、微笑を浮かべている。

一流の占師は指一本立てるだけ、などと小話にあるように曖昧なものに人は自分で意味をつける。

俺の場合は——人間、後ろめたいと枯尾花も幽霊に見えるものである。

同日 午前第十一刻

馬堂家上屋敷 第三書斎（豊久私室）

弓月家次女 弓月茜

私は——少々困っていた。

溜息を喉元でこらし、目の前で決まり悪そうにしている許嫁——馬堂豊久を観る。

損得勘定の婚約と理解している分、乗り気にはなっていないようだ。
だからと言って嫌なわけでもなく

——中途半端なままずると五年近く続いている

この三、四年の間、彼が彼方此方、西領から北領まで飛び回ってい

たせいでもあるのだが。

「——美人、ですか。」

色々と問題がある方でしたけれど——そうなりますね。出来れば二度と直接会いたくは無いです。」

僅かに引きつった苦笑を浮かべている。

「北領で？」

「そんなところですよ。」

嫌な事ばかりでしたよ、全く。」

愚痴っぽい言い方である。

この男は今、『英雄』^{ひと}、と言われている。

新城直衛、あの男が衆民の間では持ち上げられているからか守原を筆頭に他の将家から新城直衛を非難し、彼の扱いが不当だと言いつ立てる人間が増えている

新城直衛を嫌う駒城の家臣団の中でも同調している人間が居る。

肝心の本人は周囲へ不満を漏らしていない、今の在り方に納得しているのだろう。

達観しているのか、度量があるのか、——矢面に立ちたくないのかだが——どの様な扱いだろうと、この男が北領^{ひと}で戦い抜いた一人であるのは確かだ。

「ご苦労様でした。」

嘘偽りのない気持ちでそう言う

何やらもごもご云ってそっぽを向かれた。

結局、根っこは捻くれた子供とそっくり、そう思うと少し口元がほころんだ。

何というか——恋愛感情は持ちがたいのに親愛の情を持たせる人だ。顔立ちは悪くはない、体格も軍人としては過不足ない（細身ではない）のに

何故か男性を意識させない人だ、——軍服を着ていない時は。

「ははは、確かに苦労のしすぎで途中から

苦労の意味すら分からなくなりそうになりましたよ。」

苦笑いをしながら無意識なのだろうが左腕をさすっている。

「——怪我をなさったのですね？」

——戦争。何人死んだ、と言言葉よりも、こんな身振りの方が実感してしまう。

「・・・・・・」

一瞬で動揺の色が消えた。

「——ただのかすり傷ですよ。」

余裕を感じさせる微笑を浮かべている。

男の見栄、いえ、それとも将校の演技かしら？

「あまり——無理をしないで下さい。」

「——そうしなければ、帰って来られなかった、そう思うようにしています。」

自嘲する様に言う。

「・・・・・・」

知らずに——口を挟む様な事はしたくない。

「まあ、帰って来られただけ、私は幸運ですよ。

心配してくれる人も存外多いですし。

後、親戚も増えましたからね。」

皮肉を飛ばしながら笑っている。

「はあ・・・・・・」

空元氣も元氣の内——こんな言動は困りものですけど、ね。

同日 午後第二刻

駒城家下屋敷

駒州家育預 新城家当主 新城直衛

——参ったな、遅れてしまう。

僕は——少し困っていた。

近衛への辞令が出る前に、と友人達が都合をつけ、集まってくれる。

僕も出かけようとしたら——義姉に見つかってしまった。

「また、馬堂様と、ですか？」

義姉さんが僅かに不機嫌そうに僕を睨む。

軍人という人種を嫌っているからか。

——いや、豊久の事を嫌っているのは任官する前からだ。

「いいえ違います義姉上。」

羽鳥達に同期の皆で集まろう、と言われまして。」

安堵、慕情、そして焼けつく様な激情に酔う。

「聴いてるの？」

義姉上が僕を優しく叱る様に睨む。

常の様に、どこか陶然としたまま相槌を打つ。

「度が過ぎないように御気を付けてなさい、直ちゃん。」

貴方は昔から——」

ああきつと義姉さんは母親代わり位にしか思っていないのか、いや当然だ、だからこそ、義兄上と共に。

ああやはり屋敷から出て別の所に住まえば良かった。

いや、もし、そこを義姉さんに訪ねてこられたら——

破滅的な妄想を脳裏で弄ぶ。

はは

ははは

それもいいな。

楽になれるじゃないか、

納得して地獄に行くことが出来る。

そうだ、そうだと俺は義姉さんさえ——

「——あら、少し話すぎたわね、直ちゃんも楽しんでいらっしい。」

「……はい、義姉上。」

余りに刹那的な思考をかき消しながら頷いて屋敷を出る。

僕はけして振り向かない、今の今まで考えていた事への羞恥を隠し

きれなくなつてしましいそうだからだ。

同日 同刻

駒城家下屋敷

駒城家若殿愛妾 駒城蓮乃

あの子は——いつも振り向かない。

義弟の背を見送りながら思う。

そう、いつもの通りに振舞っている。

あの恐ろしい戦から帰っても——何も変わっていない。

——あの子は何者に成り果てたのだろう。

あの何もかも焼かれた東州では狭霧の影を魔王の様に恐れ、
木の葉のざわめきに驚いて泣き叫んでいたと言うのに。

大殿様も、若殿様も二度となおちゃんに会えぬかもしれないと言われた

そんな戦場であの恐い男と何もかもを焼き尽くして殺してまわって

——
いいえ、いいえ、違う、あの子は何も変わっていない。

そう、あの暴力的なまでの行動力と時には卑劣な行動をとるほど臆病さ。

——そう、それにあの頃から変わっていないのかもしれないのは私も同じ

若様と結ばれているのにあの子に強く呪わしく、縛られているのだから——

第二十五話 銃後の女性達（後書き）

義姉さん！！ 義姉さん！！ 魔王が今、僕をつかんで連れてゆく！！

・・・・・・ 分かりづらいネタですね、はい。

幼児と魔王で思い出したゲーテの魔王ネタですがまた微妙な仕上がりで丸々カットしました。

それでも微妙なのは仕様です。

約一ヶ月ぶりの大遅刻で申し訳ありません。

大震災の影響で始業が遅れて節電の為に休講穴埋めの為なのか試験前にレポート祭りです。

何とかしのぎ切れても試験のターン・・・

せめて二週間後にはもう一話書きたいところです。

第二十六話 卓を囲む者達

皇紀五百六十八年 五月一日 午後第四刻

皇国 陸軍特志幼年学校卒業生 新城直衛

僅かに頬がゆるむのを自覚しながら店に入る。

中々どうして無調法な羽鳥が知っていたとは意外に思うような、何処か上品な料亭風な店だ。

ちよつとした色気のある仲居にインパネスを渡し、

案内された先の小部屋に入ると見知った面々が卓を囲んでいた。

——参ったな、俺が最後か。

すると皆が立ち上がり、羽鳥が久しぶりに聞く張りのある声を出した。

「新城少佐殿の武功と無事の生還をお祝いする、敬礼!!」

見事に均整のとれた敬礼が俺に向けられた。

今は後備役になっているが皆が二十過ぎまで将校として戦い、そして血を見ている。

「少佐殿、着席の御許しを。」

今では皇室史学寮で研究員をしている古賀が真面目くさった演技を続ける。

「座ってくれ、いい加減にしろ。」

どうもこうした事には慣れない、むず痒さを覚えながら皆を促す。

「樋高、始めちまおう。」

暫く見ないうちにますます福福しい見かけになった榎氏政が隣に座った樋高を促す。

——榎氏政、大手の造酒屋である大周屋の若旦那だ。

軍隊時代はそつなく仕事をこなしているのに

その外見から兵に自発的に面倒をみさせるといふ奇特な将校だった。

「そうだな、皆が揃ったことだ、始めるか。」

樋高もそう言つて仲居に頷く。

先程の仲居だ、改めて見ると典雅な顔立ちがこの男に似ている。

「何だ、ご家族なのか？」

「従姉妹だよ。」

「そして許嫁だろう？」

この店の一人娘でお前が若旦那、肝心な処を抜かすなよ。」

古賀が茶々を入れる。

「まあ、そうだ。」

若旦那として一辺に作つて持つてこさせる事にした、異論は無いな？」

少し顔を赤らめながら剽げる姿には

曾ての上官にすら噛みつく狂犬少尉の面影はない。

すぐに旨そうな料理が並び、酒の入った水晶椀が皆に配られる。

「おい、新城。貴様がやれ。」

古賀がせつつく。

「そうだな——ならば 帝国 騎士が言っていた言葉だが」

僅かな含羞を飲み込み、音頭をとる。

「大いなる武功と名誉ある敵に。」

「「「大いなる武功と名誉ある敵に！」「」」」

・
・
・
皆が幾度か杯を呷り、皿が積まれた頃、古賀が思い出した様に尋ねた。

「そう言えば、貴様が面倒をみていた大隊長は、何といったか、」

「何代目の大隊長だ。」

伊藤大隊長達が行った夜襲作戦は剣虎兵の貴重な戦例として研究されている。

大佐へと特進し、遺族達も丁重に扱われている。

その後、指揮権を引き継ぎ二代目の大隊長豊久の行動は今でも議論の対象になっている。

衆民出身者からは非難する者も多い、将家だからこそと言つべきなのだろうか。

分かり易い構図になっている。

「貴様の前の――、ああそうだ、馬堂中佐だったかな。」

「馬堂豊守の息子だな。」

槇はやはりと言つべきか、父の名から先に記憶から引つ張り出してきた。

「ああ、あの金を彼方此方に出している人か。」

樋高が得心して頷く。

「駒城の老公の裏方役だな。」

厭なところまで息子も生き写しだ。」

羽鳥が不愉快そうに呟いた。

「何だ？知つた顔か？」

古賀が聞きつけたのか身を乗り出した。

「奴が軍監本部の防諜室で下っ端だった時に、

何度か会つた、ある意味此奴より性質が悪いな。」

俺の方を横目で見ながらの木で鼻を括つたような返事に槇が声を上げた。

「軍監本部だと？」

そんな選良エリートが何故貴様と一緒に部隊に放り込まれたんだ？」

「おい、貴様どういう意味だ。」

思わず苦笑が浮かぶ。

まあ確かにあいつも選良の範疇に入っていたのだろうか。

「それで？」

その将家の元選良将校は実戦でつかえたのか？」

「まあ兎に角、豊久は情報幕僚として十分に有能だったよ。」

――大隊長としては北領で持ちこたえた事で分かるだろう。」

馬堂中佐が苗川で行つた導術の活用によって防御陣地に脚光を浴び

せる事になった。

先に挙げた伊藤少佐の夜襲と併せ、第十一大隊は実験部隊としての役割を完全に果たしたと言えるだろう。

何百という兵の健気と屍を北領晒した引き換えに、だが。

「豊久？」

ああ、駒城の陪臣だったな、貴様の旧知でもおかしくないか。」
槇が首を傾げる。

「ん、何時だったか言っていた餓鬼の時から付き合いの奴か？」
古賀が随分前の話を持ち出した。

「ああそう考えると納得出来るな
貴様と古い付き合いだ、何もない筈がないな。」

「『成程な。』」

羽鳥の茶々に一同が納得したように頷いた。

「おいおい。」

何とも手酷い友人達だ。

いや待て、俺の友人を選ぶ基準には必然的に最初に寄ってきた……
あらゆる意味で空恐ろしい結論を記憶の隅に封印する。

「それにしても防諜室？」

俺は名前くらいしか聞いたことがないな。」

そういいながら古賀が俺を見る。

「俺も知らん、羽鳥に聞け。」

愚痴は零しても何をしていたのかは殆ど話さなかった。

「おい、俺にやらせるのか。」

羽鳥が苦笑しながらもそれに応えて

「簡単に言えば軍へ潜り込もうとする連中をひっそらえているのさ。
傘下にそつした組織がある。」

簡潔な説明をする。

「だがそつした仕事は貴様の処が導術を一手に握って
将家から離れたと聞いたが。」

一人だけ下戸である樋高が水を呷りながら口を挟んだ。

「ああ、規模はそれ程大きくはない。

寧ろ水軍の傘下にある内外情勢調査会の方が規模は大きいな。

だが、何度か 帝国 諜報総局の連中を摘発した事や家の魔導院の潜入員を放り出した事がある。」

樋高や古賀が意外そうな顔つきをしている。

事実、軍監本部と言えば参謀達が将家間の勢力争いに没頭している、そんな印象が先行している。

「内部抗争も確かにあるし、それに対応が遅れる事もあったがな
取り纏めている奴が厄介極まりない野郎で——」

酔いがまわったのか既に愚痴になっっている。

この無駄に流暢な語り口は愚痴ならではだろう。

「だがなあ。

帝国 の侵攻を予測できなかったのだろう？

幾ら御大層な組織があつて頭数が揃つていても働かなくては意味が無いだろうが。」

じろり、と羽鳥の方を見ながら古賀が唸った。

「情報は水軍も魔導院も掴んでいた。

握り潰したのは陸軍と大手の回船・両替商の意を受けた執政府だよ。
俺の聞いた話が正しければだが。」

顔を赤らめた羽鳥が噛み付く。

「おい待て、それは。」

槇が身を乗り出す。

「だから、聞いた話だ、ただの噂だよ。」

羽鳥が軽く手を振って宥める。

「……昨年末から両替商達が 帝国 から引き上げを始め
ていたのは確かだ。

根はある噂だな、何かしら嗅ぎつけていたのは確かだ。」

槇も身を戻し、呟く。

「金の恨みを受ける側は逆に良い思いをしている。
可能性に過ぎない情報では腰も重くなるか。」

今も昔も人は変わらないものだな。」

古賀が唸る。

「あくまでも噂が正しければの話だがな。

二十五年もまともな戦が無かったのだ。

やむを得ないところもある。」

羽鳥が顎を掻きながら言葉を継ぐ。

「陸軍も一応、兵団を年初に派遣していたな。

軍に改組しなかった事は、

帝国 を刺激する事を恐れていたのだろうが、

最初から向こうがその気だった以上、無意味だったな。

貴様が回り回ってまた面倒を背負う羽目になった。」

俺を見ながら鼻で笑う。

「前も言ったが、やはり貴様は面倒に好かれる質なのだな。」

「俺は嫌いだよ、本当に。」

何時だって面倒事から寄ってくる。」

寄られる様な態度なのだとされているのも事実であるが。

「そうか？」

普段の所作を見ているとそうは思えん。

むしろ好んでいるようにだって見えるぞ？」

槇が笑いながら混ぜ返す。

「そうだな、俺もそう思っていた。

貴様は人を選ぶが面倒事も選んでいるのだとな。」

古賀まで真面目な表情を貼り付けて頷き、樋高までもが笑い出した。

——明け方まで飲み続けて義姉さんに叱られたのは別の話である。

・
・
・

皇紀五百六十八年 五月十日 午後第四刻

兵部省陸軍局前 堂賀家私有馬車

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

笑みを浮かべているかつての上司に目を向ける。

「閣下、何の御用で私を？」

こちらら休暇中だが新設連隊が彼方此方から部隊を引っこ抜いている事もあり。

鎮台司令部や引き抜き先の部隊への挨拶回りを念入りにしているのだ。

ここ数日は基本的に屋敷に寝に戻るだけとなっている程度には働いているのだ。

そんなさなかに我が上司が

『都合よければ来い。悪くても来い。当然ながら軍装で来ること。』
などと使者を寄越してまで呼びつけるのだから強引な御仁である。
まったく、どこのコカイン中毒者だ。

「用があるのは俺ではない。」

彼——の家主だろうな、恐らく。」

そう言いながら堂賀室長は面白そうに視線で先に行くように促す。

「失礼。」

そして俺が馬車に乗り込むと先客が声をかけてきた。

「馬堂中佐、待っていたぞ。」

目つきの鋭い中年の男が座っていた。

「あ、おに——荻名教官殿。お久しぶりです。」

「おい、貴様今何を言いかけた。」

幼年学校時代の鬼教官がじつとりとした目で睨む。

「気のせいですよ、荻名中佐殿。」

荻名中佐——五将家の一角である西原家の陪臣格の家主である。

十年前に数年ほど幼年学校の（鬼）教官を務めた後は順調に出世を続け、

現在は軍監本部作戦課内戦況情報班長を勤める程の才覚を示し、
西原の陪臣格の中でも切れ者で通っている。

「まったく、貴様は、相変わらずというべきか——」

荻名中佐が溜息をつく。

「それで如何して堂賀閣下を介してまで私を？」

階級が並んでもとても同格とは思えないな、教官の方が先任だし当たり前なのだが。

「ああ、貴様に似て陰険で腹黒い上官を通してまで貴様を呼びつけたのには理由がある。」

准将閣下の壁に耳を擦りつける連中を追い払う手腕は確かだからな。

「

そう言いながら席を詰める。

「それ程の話を持っていると。」

「若殿が堂賀准将に会うついでに貴様に会いたいと言っている。」

無意識に息を飲む。

「——成程、西原大佐殿が。」

確かにそれは大層興味深いお話ですね。」

十年前、体調を崩していた父、西原信英公の代わりに

当時二十八才の中佐が大殿様と安東の先代の二人と組み

宮野木和麿大将に退役の二文字を付け加えた。

辣腕の謀略家である西原信置大佐。

軍務には熱心ではないが異様に耳が早く、防諜室とも関わりがある。

「問題は、西州御家の話なのか、若頭領個人の話なのかですね。」

「さてな、一介の陪臣には分からね。」

そういつて意地悪く笑う。

もうやだ、この教官。

「だが、貴様も分かっているだろうが、その二つはほぼ同義だ。

大殿様は大抵の事は若殿にお任せになっていらっしやるからな。」

「ほぼ同義と同義は全く違うのですが……」

「聞く相手が間違っているということだ。」

まあ、前の時の様に俺に付いていくとも思っておけ。」

馬車に乗り込みながら苦笑を浮かべた持ち主が会話に割り込んできた。

「ああ、また龍州に出向ですしね。

今度は聯隊のおまけですが。」

厭な事まで似ているな。

「ん？貴様も龍州行きか。」

荻名教官が反応した。

「そうなるでしょうね。

まだ正式には決まっていますが、どうも連隊を任せていただける様で。」

「名目上は臨時配置でその後に大佐殿、か？

貴様も苦勞に見合った、とは言えないか。

若殿に目をつけられたのだからな。」

にたにたと愛弟子（？）の苦境に笑っている。

——却説、あの悪党中年は一体何を企んでいる？

西原は総反攻が潰された後は日和見に徹している。

守原は宮野木と結び反駒城勢力を結成、安東を取り込みつつある。

それに対して駒城は北領で武勲を自家の陪臣と育預が立てた事

皇家の有力者である実仁親王殿下と協力して奏上の場で大芝居をう

ったという公然の秘密

そして守原が北領を失った今、五将家の中では随一の経済力を武器に

衆民・叛徒出身の将校や水軍、近衛と協調関係を結ぶことで発言力

の拡大を狙っている。

とまあ、皇国 は今日も元気に魑魅魍魎が跳梁跋扈しているのであるが

その中でも西原家から見ると取り分け厄介な魑魅魍魎爺が跳ね回っている。

「背州公——宮野木和暦は相変わらずの様子らしいですね。」

俺の独り言風の問いかけに堂賀室長が微笑して頷いた。

「駒城も西原も目の敵だ、安東も先代が長生きしなくて良かった、
と思っっているかもしれんな。」

退役大将閣下は自分を表舞台から追いやった大殿と信置大佐を憎悪

している。

彼等が勝利し、守原と共に実権を握った後に西原家を歓迎するとは思えない。

「守原閣下も宮野木の御老公の方が好みらしくてな。

都合の良い時には我らの主家も盟友扱いしていたただけるのだがね。」
荻名教官の惚けた言葉に堂賀室長が声を殺さずに笑い出した。

「己の故郷に住まう親しき隣人に敵わないのは仕方無いでしょう。」

——我ながら適当な減らず口である。

実際のところ、守原英康も西原に利益を配分するよりは
元々自家の領土であった背州を本拠地に行っている宮野木が強まる方が
ましだと考えているのだろう。

もちろん宮野木も守原も互いを信頼などしているはずもない。

それでも守原は宮野木の方が西原よりも御しやすいと考える筈だ。

何しろ背州鎮台の内にも守原陪臣が在任している、何方が主導権を
握れるのかは明らかだろう。

「辺境の強者より近くの弱者、か。

帝国 の事をわすれているのかね、守原英康大将閣下は。」

荻名教官も鼻を鳴らしている。

——西原家の実力は宮野木よりも高い。

古くから西領の実権を握っているだけあり、

駒城 守原＞西原＞他の二家

と、五将家間に出来た実力の序列はこの太平の二十五年間にほぼ確
立している。

これは広大な東州の復興の為に家産が破綻しかけていた安東を除けば
概ね己の領土に抱える鎮台の規模に比例している。

駒城が倒れたら守原家が二家を 帝国 軍の矢面に送り出すだろう。

「あまりに素早く逃げ——転進なさりましたからね。

帝国 兵は碌に見ていないから気がついていないかもしれません
な。」

——何処でこの戦争を手打ちにするつもりなのだろうか？

考えていてもどうしようもない。

——今は可能な限り駒城が主導権を握り、

万が一敗北しても馬堂家が有力でいられる様に庇護者が必要だ。

「兎に角、今日は閣下の後ろで黙っていますよ」

西原にとって対抗手段として駒城の存在が強力過ぎない程度に存在している事が

彼らにとって都合が良い。

だが何方にも表立って肩入れする様な事はしない。

今現在駒城と友好関係であり、駒城からある程度距離をとる、或いはとる必要がある存在。

そして軍中枢の有力者、か。

——だから堂賀室長か、協力関係にある馬堂家も上手く運べば——。

「それでも構わんがね。

分かっていると思うがあの奏上の件もあるからな——」

室長が言う事も残念ながらとても良く分かる。

奏上は武官にとっては最大の栄誉だ、俺だって裏側を考えなかったら一度は夢見る。

それが大隊長代行の直衛がやらかした事で駒城内でも喧喧囂囂の騒ぎになった。

彼処に俺が立っていたらどうなったか、考えただけでもぞつとする。

今の所は新城が悪目立ちしているからまだマシだが……

反新城派の神輿に乗せられる事になったら家の破滅だ。

「だが今回はそれで良い、

肝心な話は貴様の父君でなければならぬからな。

さてと、そろそろだな。」

堂賀室長が到着間近であることを告げる。

——今回は聞き、見て、言わざる、と行きますか。

・
・
・

同日 午後第五刻 皇都内 星湾茶寮内
皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

もはや笑うしかなかった。

——なんの冗談だ、この卓に座っている面子は。
通された部屋に居る先客は三名だった。

「お久しぶりですな、閣下。

君もだな中佐。」

相変わらず茫洋とした掴み所のない顔つきの西原信置大佐が座っている。
これは当たり前だが。

「ほう、彼があゝの馬堂の世継ぎか。」

何故か、 皇国 執政利賀元正が居る。

何でこの生臭坊主がここにいる？

そして最後の一人はよりにもよって……………

「……………」

じとり、と荻名教官を横目で見るが

「——」

俺は知らんとでも言いたそうに首をブルンブルンと振った。

「おや、御二人も来ていましたか。」

堂賀室長がにこやかに歓談しながら座る。

本当に大物である。

「執政殿は公式には此処には居ない事になっている。」

場違いな程若々しい声が響いた。

「こうして会うのは初めてだな、馬堂中佐。

海良朱未、陸軍大佐だ。」

三十前の青年将校が手を挙げる。

海良朱未——安東当主の義弟殿だ、安東家建て直しの功労者である

安東夫人の弟であり

兵部省でも優秀な軍官僚だと評価されている、らしい。

「初めまして、海良大佐殿、馬堂豊久陸軍中佐です。」

笑みが引きつらない様に注意しながら簡単な挨拶をする。

——本当に黙って座っていた方が良いな。出来れば三猿でいたい気分だ。

脂汗が滲むのを自覚しながら席に着いた。

第二十六話 卓を囲む者達（後書き）

一週間の大遅刻です、本当に申し訳ありません。

何度か書き直しましたが描写が殆ど無い御仁だと

どうも違和感が拭えない上に拙文も直らないままです。

・
・
・

某所の威風堂々とした元帥閣下や腹黒宰相代理みたいに魅力的に書けたらどんなに嬉しいか……

私の筆力が足りないだけなのですが。

第二十七話 わりと忙しい使用人達の日

皇紀五百六十八年 五月十三日 馬堂家上屋敷内道場棟
午前六刻半

馬堂家 嫡男 馬堂豊久

「——フウ」

後方に間合いをとり、息をつく。

戦況を分析する——までもない。

誰が見ても圧倒的に押されている。

不味いな、このままだと十中八九負ける。それならばいつその事——
無駄についた度胸に物を言わせ一気に接近すると

轟！！

烈風の如く杖が空気を切り裂きながら襲いかかる。

身を屈め、それを避けながら相手の足に擬剣を叩きつける、が。

「！？」

巧みな足裁きで半身に回り込み——

「甘い！！」

背中を叩かれ。

「そらっ！」

足を薙かれ、視界の一面に床が広がり——

「ほれっ！」

「うぎゃー！！」

一発もらって完全に藺草の臭いを強制的に嗅ぐ羽目になった。
背中に杖を押し付けられているのが良く分かる。

「そこまで！勝負あり！」

豊長様の勝利です。」

賞賛と驚きのどよめきが響く。

俺を心配する声は全くない……………泣いてないヨ。

・
・
・
同日 午前八刻 馬堂家上屋敷内 道場棟
馬堂家 警護班 班長 山崎寅助

「はあ………」

結局、俺は御祖父様の噛ませ犬じゃないか。」

訓練が終わった後のお決まりの愚痴を聞く。

警護班を交えた訓練の中で行われた馬堂家の現役軍人二人の一騎打ち
ちは

大いに場を沸かせたが、若さよりも絶え間ない研鑽を積んでいる老練さが勝利を勝ち取り

当主権限でその研鑽を強引に積まされる事になった。

「そもそも剣で杖を相手にしろって時点で不利過ぎるよ。」

相手が御祖父様である時点で剣の勝負で勝率三割なのになさ。」

豊久様が背中をさすりながらぶつぶつと文句を言っている。

私は下士官時代から大殿に仕えている為、あの方の気骨は分かっている。

「白兵をやったと聞いて大殿なりの祖父心なのでしょう。」

大殿は剣術・体術に加え、憲兵の捕縛術の一環として、杖術を修めている。

そして後方勤務である現在でも数日に一度は警護班を交えて実戦さながらの訓練を行い、

年齢を感じさせない体力と達人と呼んで差支えのない腕前を維持している。

豊久様は強制的に指導を受けていたがそれでも弱い訳ではない。

元々短銃を好んで使うが、鋭剣の腕も悪くはない。

——比較対象が強すぎるだけだ。

「ああ、それは分かるけれどさ……実際、負傷したのは事実だ。」

こうなるのも何となく分かっていたよ。

良い訓練にはなったし、体を動かすと気も鬱がないし」

苦笑を浮かべながら本棟に戻る路を並んで歩く。

「——流石に年を食っただけはあるよ、本当に。」

欠伸を噛み殺しながら呟く姿はどことなく疲労してみえた。

・
・
・

同日 午前第十一刻

馬堂家上屋敷 離れ倉庫

馬堂家使用人 石光元一

僕は溜息をついた。

——何故こうなったのだろう。

皇国 最大の諜報機関である皇室魔導院に所属しているである。

——元々、不破にある魔導院の施設で育てられ、試験を受け、三等魔導官となった、

筈なのにこうして駒成家陪臣の家で倉庫の整理をやらされている。

——上の方で何やら取り決めがあつたらしく定時報告の際に現状維持方針を伝えられたからだ。

現状維持ってアンタ、雇い主にもろつとバレた職場に潜入員を入れても誰も喜びませんかな。

——失礼、取り乱しました。

少なくとも男手としては使用人仲間には喜ばれている。

御陰で若くして肩と腰が天折しそうだ、療院に行くとしたら経費で落とせないだろうか。

パッキパキの肩を回しながらまた溜息が出る。

「石光クン、大殿様がお呼びだよ。」

柚木さんが柵の整理をしている途中の僕を呼び付ける。

「僕を？」

「若殿様が蓬羽に行くらしいから色々と運ばされるんじゃない？
それが専門でしょ？」

柚木さんは僕の顔を見てけらけらと明るく笑う。

「冗談よ、でも助かっているのは事実だけれどね。」

笑いながら後はやっておくから、と背中を押された。

——これはこれで悪くないな、自然と頬が緩んだ。

同日 午前第十一刻半 馬堂家上屋敷

馬堂家使用人 柚木薫

「はあ………」

部屋を出ていった石光青年の背を見送り、息を吐いた。

「何もかも物騒になっていく。」

ホント、この屋敷まで嫌な空気になったものねえ。」

私にだって分かる程、屋敷の主達は張り詰めている。

豊久様が二日前の夜中に帰ってきてから大殿様と若殿様と一緒に書斎に籠もり、辺里さん以外の何者も近寄らせずに殆ど丸一日出て来なかった。

年長者二人はそれぞれ休んでいない休日を気にせず仕事に戻り。

休暇中である豊久様は六刻で十七杯の黒茶を消費する荒技を披露しながら丸一日、沈思黙考を続けていた——と云えば聞こえが良いのだが、必要ない書付を燃やして灰を出すし、

（細巻を控えている所為なのか）黒茶を十七杯も飲み

使用人^{わたし}をほぼ丸一日部屋に出入りさせていた、意外と手間がかかる人である。

「柚木、いる？」

ふらり、と何時の間にか見慣れた顔が現れていた。

噂をすれば何とやら、と云うのでしょうか？

「豊久様、何でしょうか？」

「いや、若気顔^{にやけがお}の少年を見かけてさ。」

少し様子を見に来たのさ。」

玩具を見つけた猫の様に目を輝かせている。

——そんな暇があったら貴方はまずさつさと身を固めろと言いたい。

「それだけですか？」

「……いや、それだけではいけれど。」

その間と視線を逸らしている姿では説得力なんかありません。

「……それで、豊久様は、今日はお出かけなさいますか？」

最近は彼方此方へ出かけていた事を踏まえて確認する。

「いやいや、俺は留守番だからね。」

ま、そうそう来客なんて来ないだろうし、ゆつくりさせて貰うよ。

辺里が捕まらないから一応、柚木に確認しにきたけれど。」

頭の中で予定表を広げるとデカデカと赤字で大仕事やっかいごとが記されている。

「予定では午後にお客様がいらっしゃいます。」

「ん？誰が？」

「弓月の殿様がいらっしゃるそうです。」

「何だと？ 何時の間にそんな話が？」

くしゃりと少し伸びた髪を掻き回している。

「若殿様がお帰りの際に御一緒する予定と仰せでした。」

私の言葉を聞いてくらし、と足下をふらつかせた。

「ま、た、父上か。」

こめかみを抑えながら呻いている。

毎度毎度、遊ばれていますねえ。

「——何人来る？」

「弓月様お一人と拝聴しております。」

それを聞くと一瞬、残念そうな表情を浮かべる。

——やだ、面白い。

「ああ、そう。——何だい、その目は。」

じとりと半眼で睨んでくるが

「何がですか？」

か弱わたしい使用人のささやかな反撃に

——何でもないよ。

惘然とした返答を残し、部屋を出て行った。

・
・
・

同日 午後第三刻 馬堂家上屋敷 第三書齋
馬堂家使用人 柚木薫

——訪れた書齋には唸り声が響いていた。

「御休みになられていますね。」

「ついでにうなされていますねえ。」

辺里さんの手伝いとして訪れた書齋の主は帳面と鉄筆、そして足を乗せた文机と

椅子に体を預けて——うなされていた。

「あの、大丈夫なのでしょうか？」

顔面が蒼白で、額に脂汗を浮かべている。

「初陣の後を思い出します。」

あの時も、うなされていました。」

優しげ汗を拭う姿はまるでこの青年の祖父であるかの様。

彼が産まれた時から見守っているのだ、当然なのかもしれない。

「っ！誰——辺里か、」

体を跳ね上げて目を開いた。

「——あまり驚かさないでくれよ。」

ぼそり、と呟きながら何時の間にか片手に握っていた鉄筆を机に投げ戻している。

「申し訳ありません。」

うなされたおいででしたので、差し出がましい事をしました。」

当の辺里さんは顔色一つ変えずに足置きにされていた卓上の体裁を整えている。

「いいよ、有難う辺里、おまけのついでに柚木も。」

こんなトコ御祖父様に見られたら酷い目にあうしね。」

そう言った時には常の愛想のよい顔つきに戻っていた。

おまけのついでって何ですか、コノヤロ。

「それよりも、豊久様。」

若殿様がもう間も無くお帰りになる御時間で御座います。」

辺里さんは僅かに微笑みながら必要なことだけ伝える。

「父上が、それじゃあ、弓月殿も？」

「はい。御一緒だそうです。」

「——まあ、俺も相談したい事があるし、調度良いか。」

そう言いながら肩をこきゅこきゅと回しながら立ち上がった。

「柚木。」

「はい、黒茶はもうすぐできますよ。」

「ん。ありがとう。」

実に本日十八杯目である。

この人の腹はどうなっているのだろうか？

・
・
・

同日 午後第八刻 馬堂家上屋敷庭園

馬堂家警護班長 山崎寅助

弓月の馬車に護衛を二名程つけ、本日の特殊業務は終了した。

本日の私の仕事は犬を入れ替えて何時もの報告へ出向くだけだ。

「若殿様。」

軽く書斎と庭を繋ぐ窓の下を叩く。

「残念、俺だ。」

顔を出したのは豊久様だった。

「父上は御祖父様とちよいと話の詰めに行ったよ。」

ま、俺が代わりでも問題ないだろ？」

逆光であっても不敵な笑みを浮かべているのがわかる。

「はい、それでは御報告を——」

・
・
・

「——以上です。」

「警保局からの方々は、まあ当然だな。

勅任参事官は警保局長とほぼ同格だ、護衛もつくだろうさ。」

「ええ、家名だけのお飾りでもありません、実際に実力者です。」

「ああ、目敏い御方だよ、父上によく似ている。

娘の方まで察しが良いからなあ。」

疲れた様な溜息をつく。

「——まあそれは兎も角、俺もそろそろ軍務に復帰する時期だ。分かつていると思うが、皇都は加速度的に物騒さを増していくからな。

皆を頼むよ、山崎。」

真摯な視線を感じる。

——そんな不安そうにしくなくても私にとっては当たり前の事だ。

これでも下士官時代に大殿について以来の二十余年、幸運な人生を送らせてもらっている恩義がある。

「お任せ下さい。」

私の言葉に何かを感じたのか、一瞬口籠った後の返答は少々そっけないものの心情を知るには十分すぎるものだった。

「ああ、その、何だ、——ありがとう。」

窓を閉め、背を向けても耳朶を真っ赤にしているのが良く分かる、声の響きだけでなく、彼の背後にいる若殿様が嬉しそうに、面白そうに笑っている姿が見えたからでもある。

「それでは私はこれで失礼します。」

人を食った笑みに変わった若殿が硬直している息子に声をかける場面を背に巻き込まれない内に転進する。

・

今日は一段と光帯が美しい、気分の問題なのか気候の問題なのかは判断がつかないが

私はそう感じた。

「おや？山崎、こんな所で珍しいですね。」

聞きなれた声が背後から響く。

「ああ、辺里さん。」

確かに珍しいかもしれないな。」

十五年に及ぶ付き合いの上司が厨房口に立っていた。

「酒を久しぶりに飲みたくてね。」

まあ度を超すつもりはないさ、文字通り一杯だけだ。

光帯を肴に、つてな。」

そんな風雅を気取るなんて珍しい、と辺里が軽く笑っていると。

「あれ？」

こんな処で御二人とも何をしているんですか？」

柚木と石光が連れ立って・・・

いや柚木が石光を引き連れてやって来た。

「なに、晩酌の素晴らしさについて語っていたのさ。」

私の言葉を聞くやいなや、

「御一緒しましょうか？」

目を輝かせて食らいついてきた。

私が自分の子供と同じ年頃の娘に気圧されている様を老家令頭と少年使用人が面白そうに眺めている。

「分かった、分かった、ならば折角だ。」

四人で呑もう。但し、一杯だけだぞ。

皆、明日に酔いを残させるわけにはいかんからな。」

不満そうに口を尖らせる柚木に、それを慰める石光。

そしてそれを横目で見て笑っている辺里が珍しくからかうような声でこっそりと私に囁く。

「いいのですか？」

柄にもなく風流を気取るつもりなのでは？」

「柄じゃないからやめだ。」

まあ、それに、——こういうのも悪くはないだろう？

あわただしい使用人達の一日の閉めに相応しい。」

第二十七話 わりと忙しい使用人達の日（後書き）

また一ヶ月か

本当に申し訳ありません！

同時進行で書いていたので次回は明日投稿します。
平均すれば隔週をぎりぎりオーバー・・・アレ？

第二十八話 兵部省で交わす言葉は

皇紀五百六十八年 五月十五日 午前第十刻

兵部省陸軍局 人務部 皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

俺はまた、困っていた。

次の配属先が内定した以上第十一大隊に残る部下達の面倒を見なければならぬ。

これでも軍監本部で揉まれた口だ、同年代の陪臣将校達よりは伝手を持っていくつもりだったのだが――

「この申請では一個大隊を新編するのとまるで変わらないな。剣虎兵も未だ数が少ないから都合をつけるのが難しい。」

俺の要求が無茶だったのか人務部次長の草浪中佐が手厳しく撥ねつける。

守原傘下の陪臣格で一番の俊英だと評されている男であるがさて、英康御大将閣下はそれに見合う待遇をしているのかねえ。

是非とも探りを入りたいものだが、この様子じゃあ警戒されているか？

「各鎮台で既存の部隊の増強が進められている。」

第十一大隊は、今は兵部省直轄の中途半端な状態であるから優先順位も低くなる。

今から申請を出しても早くても夏までにどうにかなるかならないかどうか。

口調だけでも友好関係を築くつもりがゼロなのが良く分かる。

人材不足が著しい兵科である事は理解しているし、俺が少々、無茶を言っている事は自覚している。

だが、こんな軍法会議の様に詰問される謂われはない。

捨て駒同然の後衛戦闘を命じたのはあの守原英康だ、ならば多少は便宜を図っても良いだろうに。

まあ、これで龍州辺りで起こるだろう死闘に駆り出されないのならば少しはマシかね？

「……はい。」

だが、個人的な感傷ではあるが、あれだけ苦勞させるだけさせてさつさと捨てて連隊に移るのは氣に入らない。

将家として優遇されている以上、部下たちへ負うべき義務が俺にもあるだろう。

「気持ちには解らないでもないが

後任の大隊長に任せた方が良さだろう。」

後任、ね。俺の事もあるから既に決まっていそうなものだが。

「——はい、ですが肝心の後任は決まっておりますか？」

北領鎮台の残存部隊らは書類上、兵部省直轄となっているが——守原英康が主導しているので正式に発表されるまで殆ど何も分らないのだ。

「——候補は上がっているのだがね、未だ決まっていない。

何しろ北領で名を馳せた部隊だからな、慎重に吟味せねばならない。

「

一拍おいて、俺に鋭い眼を向ける。

「そして、当然ながらその立役者である君も随分と注目されている。

——この様に、な。」

懷から取り出した書状を俺に押しつける。

これの送り主の名は——守原定康、か。

「これは……。」

このタイミングで、こう来るのか、畜生、意外とやり手だな。

——だが、こんな事で防諜室出身者の顔を崩せると思うなよ？

魂の顎が外れかけても口元は歪めたまま、北領で度胸だけは無駄に吐いたからね。

「——成程、次長殿がおっしゃるように、私も分不相応に注目されているようで。」

さて、とついでにカマをかけてみるか？

「護州公子閣下が私に興味を抱くとは――

ならば、護州公閣下は、昨今の情勢を如何お思いでしょうか？」

持病持ちで実権を弟である英康に奪われた当主――守原長康 護州公爵。

弟である英康大将の直情的で苛烈な性格とは対照的に

五将家当主には不適當な程に情に厚く、温和な性格と政治に関わらない事から

人々が皇家を敬う様に彼を慕う人間は少なくはない。

実権を握っていないからこそその人望なのかもしれないがだからと言って、けして無視してはいけない存在だろう。

「長康様は――殿は、ずっと臥せておいでだ。」

守原大将閣下が御家を率いる事になるだろう。」

僅かな逡巡の後の慎重且つそっけない言葉の後は可能な部分の取捨選択の相談に戻り

やがて次長との対面は終了した。

部屋を出て、次に総務課へと向いながら考えを纏める。

草浪中佐――質問には答えていないが面白い事を漏らしてくれたな。推し量るべきは、護州派閥の内がどれ程の人物が英康個人に忠勤なのか、かな？

そうなると気になるのは――守原定康、か。

懷にいった書状を撫でる。

今まで彼に注目する事はなかったが・・・これは如何に解釈すべきなのだろうか？

・
・
・

同日 午後第一刻

兵部省 陸軍局 総務部

皇国 陸軍少佐 大辺秀高

「——困ったものだよ、結局、大隊の補充はろくにされていなかった。まだ。」

後任の大隊長には苦勞をかける事になりそうだ。」

予定よりも一週間早く軍務に復歸した馬堂中佐が愚痴をこぼしている。

それでも、その表情が全く困っているように見えないのは父の教育故なのだろうか。

「立つ鳥跡を濁さず、といきたかったけれどな。」

件の聯隊に着任する前に共に北領で散々な運命を共有した部下達をマシな状況へ、と考えていたらしいがそれも上手く運ばなかった様だ。

「中佐殿の後任の人事が気になりますね。」

士官達の補充もされていない、と言つのならば尚更に。」

「それで戦力化が遅れるのならば本末転倒だ。」

手元に置いてても切れない手札など意味がない。」

私の言葉に鼻を鳴らして返事をし、話題を転じた。

「ああ、そうだ。」

龍州軍の陣容はどうだ？」

「後方支援部隊の拡充と参謀の内定は滞りなく進んでいます。」

参謀陣は例によって玉虫色ですが、まあ最前線で好き勝手は出来ないでしょう。

それに集成軍の派遣も視野に入れて司令部の増強が行われています。可能ならば後備部隊も動員したいのですけれど予算の問題があります——」

溜息をつく、組織が協力的でも予算の問題はついてまわる。

「御祖父様——兵站課長閣下も苦勞なさっている、と。」

例の聯隊、幕僚も伝手の御蔭で目処がついたし

俺の配属辞令も間も無くだ、——間に合うかな？」

「間に合わせるしかないでしょう。」

その為の部隊と言つても過言では無いでしょうからね。」

大型の独立聯隊であり、連隊長はこの英雄となっている駒城の陪臣だ。

新設と云う不安点があるが一個旅団に匹敵する戦力になりうると言ってしまうても過言ではない、余程の遅れがない限りは確実に龍州への派遣軍に組み込まれるだろう。

「・・・・・・まあ、生きている英雄の存在意義なんざ他人を持ち上げて面倒をおつかぶせる為だからな。」

肩を竦めながら発する言葉は飄然とした表情とは真逆に辛辣だ
「相変わらず言ってくれるな。」

貴様が休暇を切り上げる程、軍務に熱心だとは知らなかったぞ。
部長室から出てきた窪岡課長が馬堂中佐に声をかける。

「窪岡閣下。」

私達二人も型通りの敬礼を交わす。

同日同刻 兵部省陸軍局 総務課

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

窪岡少将、前人務部長であり、現在は戦務課の長を勤めている若殿様の御友人だ。

——だが、それだけで少将が勤めるポストの中でも重職を歴任出来るわけがない。

謀略活動こそ滅多に行わないが損得勘定の鋭さと視野の広さで優秀さを知らしめている。

「大隊の生き残り達の面倒をみようと思ひましてね。」

中々思い通りにいきませんが、多少はマシにしますよ。」

剣虎兵学校助教となる曹長を初めに下士官を量産させ。

西田と増強用に有望な下士官を数名引き抜く予定だし、

新城も予想が当たれば猪口曹長を始めに可能な限りの人数を引き抜くだろう。

奴は近衛に過剰な期待を寄せるような人間じゃないからね。

あまり人は残らないだろう。

正直な話、後任の大隊長は苦勞する事になると思う。

だが、元々人材が足りない為、剣虎兵の独特に過ぎる戦いを実戦を通じて知り抜いた人材は貴重だ。

彼らはあの激戦を生き残ったのだ、後方で後進を育成させるには最適の人材である。

弱兵軍隊に送られる新城が喉から手が出る程求めるのも分かるし

剣虎兵学校も打診したら大喜びするの当然だ。

後任を守原に決められる部隊に放り出す位ならば

長期消耗戦を見込んで後方で教育に回す方がマシだ。

「何をやるのかは大体わかる。」

まあ、間違いではない上に名分も立つ。」

窪岡少将が顎をさすりながら頷く。

「おれたち軍監本部よりも兵部省の管轄だが、

実際、剣虎兵を前線で使ったら頭数が足りなくなる可能性が高い。

人手が足りないからな、導術よりは幾らかマシだが。」

疲れた様かというと実際疲れているのだろう重い溜息をつく。

「後は貴様が例の大型連隊にも連れ込むのか？」

「はい、閣下。独立大隊でなくなつた以上、再編は行います。

その際に空いた枠へ詰め込む予定です。

剣牙虎の扱いに熟達しているべき下士官と将校は必要ですからね。

兵の育成に関わりますから。」

兵の教練は配属された隊で（基本的には連隊単位を最大として）行われる。

銃兵はまだマシな方だが

例えば砲兵では熟達した下士官と将校の指導の下でも

実戦投入するには早くても一年は時間をかけなくてはならない。

剣虎兵も、伏撃の際には剣牙虎を黙らせ。

時には砲に怯えている剣牙虎を駆り立てるには剣牙虎の扱いに熟達していなければならない。

その為、剣牙虎の主となる事が多い下士官、将校は専門的な教育を受ける必要がある。

「士官一人と下士官を何名かを連れて行くつもりです。」

俘虜生活を共にしましたが、幸いあまり恨まれなかったのだ。

「貴様も苦勞したものだな。」

戻つて来る事が出来ただけ幸運なのだろうが。」

窪岡課長の苦笑いを浮かべ

「臨時配置と言う事で、あくまで内定ですが。そう承っています。」

駒城保胤中将の御指名だ、確定同然だろうな。

「そして遅くとも年明けには大佐になる。」

その後はまだ分らないがな。

父を追い越す日も遠くないだろうさ。」

父上は三十六の時に大佐で退役だったな。

まあ戦時中だと十六年間、少佐を務めていた人が五年で中佐から元

帥閣下になる事もあるからな。

比べるのも可笑しな話だ。

「俺の処から大辺を引き抜くのだ、これからも苦勞してもらつ。」

貴様も表舞台に引き摺り出される時だ。」

表舞台、か。誰がお膳立てする舞台なのやら。

「育預殿が奏上なんてする御時世ですからね。」

例の奏上も——まあ言えない事も言いたくない事も言ってくれまして。

まあ、彼らしいと言うべきやり方ですよ。」

戦務課長が頷きながら話題を変える。

「育預——新城少佐が近衛に送られるのは聞いているな？」

「親王殿下——衆兵隊司令長官閣下の内意をうけていると聞いています。」

「そうだ。で、あるからこそ貴様も微妙な立場にある。」

貴様の周囲が物騒になる事も理解しておけ。

望まぬ神輿に担がれる事も十二分に有り得る。」

「はい閣下。気を付けます。」

だからこそ、駒城閣下の恩顧に報いる為に微力を尽くします。」
そうだ、今の俺はこれで良い、後は皇都に残る当主達に任せるとしよう。

人間、何もかも自分でやろうとすると大失敗を起こすものだ。

——それを忘れてはいけない。

・
・
・

同日 午後第二刻 兵部省 陸軍局 人務部

人務部次長 草浪道鉦中佐

——公用と言えど、丸一日も部長が居ないと少し困るな。

部長の決済が必要な書類の束を机の隅に乗せる。

この半日で馬堂中佐を筆頭に何名もの士官達に持ち込まれ結構な厚さになった。

大半が前線に投入する予定の部隊だ、私も龍州鎮台で戦務参謀を任じられる事になっている為、

共に前線に立つことになる。

その為、彼らが提出した申請書には目を通す際、自然と職分以上の熱がこもる。

——さて、馬堂中佐は中々豊守殿に似た人物の様だ。

父に似て目端が利く人物なのは間違いないだろう。

だが、問題は彼自身よりもその家族——父と祖父を含めた三人だ。

そして現状、防諜室長と親密な関係を築いており、彼の助力もあつてか、動きが掴み辛くなっている。

それでも断片的な情報から推測するに、

どうやら彼らは駒城に忠誠を誓いつつも独自に手札を掻き集めている様だ。

——まあ、陪臣が全て無邪気に主家を信望する筈もない、

だがそうそう裏切る事もするまい、彼等が行動を起こすにしても事態が動いてからだ。

今日、訪れる二人の将校、彼らが本命だ。

——新城直衛、北領では、次席指揮官として

崩壊寸前だった大隊で指揮官としての経験が乏しい馬堂中佐を補佐し内地に戻った後は個人的にも親交が深い彼を差し置いてあの奏上で大芝居をうった。

あの戦の前にも幾度か問題を起こした事や横紙破りを行っていることは知っている。

度胸があるのかそれともそれ以上なのか、或いは只の戦争屋か——見極めるべきだろう。

そしてもう一人は——

扉を叩く音で現実に引き戻された。

「失礼いたします、次長。新城少佐殿が出頭いたしました。」

部長の個人副官が告げた言葉に背筋を緊張させる。

「御苦労、すぐに通すように。」

・

・

・

同日 午後第二刻半 兵部省 陸軍局内

皇国 近衛少佐 新城直衛

僕は困っていた。

人務部次長である草浪中佐から近衛衆兵隊司令部への配属辞令を受け取り、

窪岡少将に挨拶をしておけ、と義兄に言われていた事を思い出したのだが——

何しろ、今まで軍監本部の高級参謀とは縁なぞなかった。

さて、何処にいるのやら、

誰かに尋ねる事が出来れば良いのだが。

周りを見渡すと将校が二人連れ立って僕の横を通り過ぎた。

「少し宜しいでしょうか？」

振り向いた二人の顔は僕が古くから知っている顔だった。

旧友と言って差し支えが無いだろう馬堂豊久と

僕が抹殺すべきと決意している人間の一人である佐脇俊兼だ。

「何ですか？」

はは、新城少佐、健勝そうで何よりだ。」

豊久は一瞬、しまった、と言いたげに口を引きつらせたが

すぐにそれを笑みで覆い隠しながら敬礼し、

「これはお懐かしい、少佐殿。」

佐脇俊兼は屈辱の色を隠さずに敬礼した。

同日 午後二刻七尺 兵部省 陸軍居 二階廊下

皇国 陸軍中佐 馬堂豊久

俺は、困っていた。

目の前の二人、駒城家育預である新城直衛と駒城の重臣の家系である佐脇俊兼だ。

俊兼さんはやや融通が利かないが人当たりは悪くない、

将校としても兵と共に苦勞する事を厭わない真面目な将校だ。

——こう言ってはなんだが人としての評判は新城よりも遥かに良い。

俺も先の駒州兵理研究会の様に駒城での行事で顔を見かければ歓談する事もある。

他意なく友人と言える仲だろう。

問題は例によって新城だ。駒州で初等教育を受けていた時に

まあ何というか典型的な異分子への極めて子供らしい対応をとった、
そつだ。

要するに虐め、である。

人間が道徳的になるには自らを学ぶ事よりも相手を批判するのが一番であり、

皇帝が国を治める楽な方法はより良い政策を考える事ではなく小国を侵略し、略奪を行い、奴隷を自国に持ち込む事である。

謂れのない敵にとつてはたまつたものでは無いがそれは忌々しい事に何処でも世の常だ。

「こつち」は「あつち」わたしたちと違う、

事の大小はあれどもそれが暴力の源泉だ。

それは幼い陪臣達にも例外なく適用された。

——その後、何があつたのかは知らない、

だが、俺が二人と知り合つた頃には直衛は周囲から一種の禁忌タブーの様な扱いを受けていた。

俺が、まあ何というか若気の至りで大殿の書斎に入り込む手段として声をかけるまでは

直衛は、隅で誰とも口を利かずに本を読んでいるだけの少年だった。そして、その所為か育預殿との縁は腐つても切れないのだ。

同日同刻 兵部省 陸軍部庁舎

皇国 近衛少佐 新城直衛

「御昇進おめでとう御座います、少佐殿。」

忌々しさを隠さずに佐脇大尉が言つた。

「ありがとう、大尉。」

「しかし、幸運でしたな、優秀な大隊長が俘虜となつたお陰で貴方が少佐とは。」

悪意を隠さぬ口調で言う。

ふん、馬鹿らしい。

人殺しの才能を妬むのか、この愚か者は。

馬鹿の後ろで豊久が苦笑している。

「全くだ。」

僕も驚いているよ、大尉。

まあ君はもう中佐にでも成つていると思つていた。」

「・・・」

怒りを込めて僕を睨む。

「おいおい二人ともキツいなあ。

そこまでにしなよ。」

辟易した様に豊久が呟く。

それに気がつかなかったのか佐脇が明確な怒りを発した。

「自分は他人の武功で昇進する様な「あのさあ、黙れ、と言っているのだよ、私は。」

冷たく、低い声が佐脇の言葉を遮った。

「！！」

佐脇は言葉を遮った男へ顔を向けた。

「おや、聞こえなかったのかい？——佐脇大尉。」

その声は飄然と微笑を浮かべている 皇国 陸軍中佐の物だった。

「・・・ 申し訳ありません、中佐殿。」

未だに驚きが覚めないのかどこか呆然とした様子で謝罪した。

「君もだ、少佐。

陸軍だろうと近衛だろうと

将校が立ち話をする上に口論するなんて言語道断だ。」

「はい、中佐殿。

申し訳ありません。」

その様子を佐脇が嘲笑する様な目で見ていたのは無視する。

「そうそう、偶には素直にする事も大事だよ。

——ああ大尉、君もそろそろ行った方が良かるう。

時間をとらせて悪かった、また近い内に会うだろう。

その時を楽しみにしている。」

「はい、中佐殿。

失礼致します。」

佐脇は豊久にだけ敬礼し、立ち去った。

随分と露骨な事だ。

「それで？」

誰か尋ね人かな？」

出口へとゆつくり向かいながら俺に話し掛けた。

「はい、中佐殿。」

窪岡首席参謀閣下に挨拶を、と。」

「ああ、窪岡課長閣下か。」

退庁時刻の前には課に戻ると言っていたから――

時間を考えれば出口で会える筈だ。

多分、閣下もお前を待っている筈だよ。

何しろ、ある意味ではお前の世話を若殿以上にしているからな。」

「？」

彼の言葉の意味を図りかねていると

軽く笑って正解を告げた。

「前の人務部長だよ。」

今は栄転なさっているけどな。」

「成程。」

それは確かにお世話になっていますね。」

俺も苦笑いするしかなかった。

「ああ、お前を北領に送り込んだ張本人さ、と。」

出迎え御苦労さま、少佐。」

彼が答礼をする先には

「はい、中佐殿。」

――新城少佐、窪岡閣下があちらの馬車でお待ちです。」

軍人としては少々細身であり、血色と感情の薄い顔には見覚えがあった。

確か馬堂家の子飼だ。

確か、戦務課の参謀だった筈だ、窪岡少将の出迎えか。

「それでは、近いうちに会おう、新城近衛少佐。」

ふ、と邪気のない笑みを浮かべ。

「――大辺、相談したい事がある、少し良いかな？」

「はい、中佐殿。」

二人は連れ立って馬堂家私用の馬車の中へと消えていった。

第二十九話 備えあれど憂いあり

皇紀五百六十八年 五月 十五日 午後第三刻

軍監本部公用馬車内 皇国 近衛少佐 新城直衛

対面に座っている人物へ目を向ける。

ほっそりとした顔に似合わない無骨な顎髭を生やしている高級軍官僚、

——軍監本部戦務課課長・窪岡淳和少将だ。

「貴様の義兄殿から話は聞いているな？」

「はい、閣下には必ず御挨拶をしておけ、と。」

「ああ、挨拶は大切だよ。」

窪岡少将が薄く笑いながら頷く。

「ええ、餓鬼の時分から義兄にそれだけは口うるさく教えられました。」

感謝しております。」

あまりにも義兄らしい行動に目の前の将官が声を上げて笑う。

「——そうだな、義兄殿はそう云う人間だ。」

だからこそ、此処まで苦心して筋道を立てたのだからな。

——貴様は既に近衛少佐になっているな？」

「はい、閣下。衆兵隊司令部附です。」

「そうになっている。」

だが、すぐに新編の大隊が与えられる筈だ。

衆兵隊司令長官である実仁殿下は旅団を任せても良いとお考えだったのだが、

流石にそれは周囲の反感を買いすぎる。」

「有難うございます。」

矢張り、奴の予想通りか。

まあ、確かに旅団長は准将が補職される事が常識だ。

新任の少佐を其処に任じるのは無茶に過ぎるだろう。

それに、豊久が聯隊を指揮する事が決まっている以上

僕が（実際は三千名程度の聯隊規模とは言え）旅団を持っていると彼方此方で要らぬ騒ぎがまたぞろ騒ぎだすに違いない。

「そうだよ、恩に着ろ。」

特に、義兄殿とこの俺に、あれこれと大変だった。

人務部長としての初仕事と仕事納は貴様に拘ったのだからな。」

——豊久の言葉を思い出し、何となく面白みを覚えた。

——世話になった、か。

確かに、そうかもしれないな。

辺境巡りをしていた奴が年に何度か妬み節を言うくらいには楽な時期ではあった。

「貴様もそれなりの働きをしたからな。」

これからは並みの将家以上の待遇になるだろうさ。

ほんの数年で旅団が手に入る位にな。」

「はい、閣下。」

それまで国が保てばいいけれど。

「ああ、そう言えば貴様、参謀教育は受けているのか？」

「いいえ、閣下。」

軍の中で受けた教育は幼年学校で受けた銃兵としての基礎教育だけだ。

後は強いて云えば剣虎兵学校で戦史の教官の真似事をした程度だ。

「そうか、まあ貴様の様な男は実戦の指揮だけで十分だ。」

兎に角、保胤にしる俺にしる——それに殿下も貴様の實力に見合った地位に就く事を望んでいる。

理由については言うまでもないな？」

まあ、その理由は三者三様だろう。

——それに何より。

「僕は受けた恩義は忘れません。とりわけ、義兄から受けたものは絶対に。」

また、その逆も然り、であるが。

「それだけか？」

僕の言葉を聞き、睨むような目でこちらを探る

「僕にとつてはそれで十分以上です。」

「成程、保胤が聞いたのなら、喜ぶだろうな。」

鼻で笑いながら頷いた。

「御内聞にお願いします。」

何しろ義兄は、なんと云いますか、御存知の通りの御方ですから。」

それを聞いた窪岡少将は笑いを噛み殺しながら

「人物眼はあるようだな」

そう言った。

「育ちが育ちです、閣下。」

人間と云うものに興味を持たざるを得ません。」

それと他人に好かれるかどうかはまた違うが。

——何かと義兄達に気をかけられたりもしたが、どうにもならない事もある。

「率直でもある。」

「正直と評されたらどうしようかと思いました。」

僕の答えに声を上げて笑いながら

「そうだな、貴様があの馬堂の若造と長い付き合いだと知らなかったらそう言ったかもしれんな。」

と答えられ、今度は僕の方が苦笑を漏らす事になった。

奴は余程の事か、冗談くらいにしか嘘をつかないが、正直と評するには程遠い。

本人が聞くと不貞腐れるだろうが、奴は父の影響が良くも悪くも強いのだ。

「ああ、それは確かに。」

ですが、それなら我慢強いとも評していただきたいですね。」

これを聞いた少将は呵呵と笑いだした。

「貴様の義兄殿も貴様の事はちゃんと見ている様だな！

保胤から聞いていた通りだ！」

そう言つて再び笑い声をあげ、

「——貴様、人務部で草浪中佐に会つたか？」

その響きが消えない内に冷静な声で僕に尋ねた。

「はい、閣下。」

「貴様はどう見た。」

——貴様は、か。

「守原の陪臣では一番のやり手だと聞いていました。

確かに世評に違わない人物だと。」

「ほう、それで？」

窪岡少将は面白そうに僕を見ている。

この手の事で奴と比べられるのはあまりいい気がしない。

奴が頭に叩き込まれた人名簿の分厚さはあの家の家風を考えれば分かる。

「——切れる男です、出来れば好意を勝ち得たいです。」

「そうか。」

顎に手をやり、考えを巡らせている。

軍官僚として高い評価を得た頭脳がどの様な思考を紡いでいるのだろうか。

——ふと人務部で見かけた両性具有者を思い出した、彼女らは完全な美貌に加え、

優れた論理思考能力を持つていられると言われている。

——まあ、自分には縁のない類の人々だ、少なくとも当面は。

馬車の中の静謐は外の喧騒に破られた。

馬の嘶き、人の怒号、そして——血の臭い。

後ろを見ると建て直している倉庫の前で馬車が材木の下敷きにされている。

邏卒達が集まつた野次馬達を追い払いながら療医達の到着を待つている。

——豊久や草浪中佐の警告が頭をよぎつた。

「閣下、宜しいでしょうか。」

偶然ではないだろう、ならば事の結末を見届けている奴が居るはずだ。

「よろしい、気をつけろよ。」

何かあつたら保胤に顔向けができません。」

「大丈夫でしょう、それに何かあつても僕にも用意はありますので。」

奴が我儘を言つて作らせた輪胴短銃を見せた。

「成程な、だが油断はするなよ。」

窪岡少将の言葉を背に地に足をつけた。

——さて、何処にいるものやら。

・
・
・

同日 午後第三刻半 馬堂家私用馬車内

馬堂家嫡男 馬堂豊久

事故から三寸もせずに馬車の対面に飛び乗つて来た客人に目を向ける。

一見すると精々が兵役を終えたばかりの商店員くらいにしか見えな

い。
だが隙のない身のこなしと着物の左胸が細長く膨らんでいる事が
彼が暴力に慣れている事を分かせている。

「見事な手腕だ、さすが堂賀閣下の信を受けるだけのことはある。」

あの事故の犯人は俺が室長に頼み込んで新城につけさせていた
堂賀室長の配下である特務偵察憲兵隊の一人だ。

荒事になる前処置を施すのも彼らの職務の一環である。

「いえ、元からあの手の連中が出入りしている政国屋は警戒対象に
入っていました。」

室長閣下も不穏な動きがあつたら止めよ、と。

人殺しを稼業にして三代の連中です、騒ぎも後を引かないでしょう。
——そうではなくては彼処までやりません。」

成程、予想的中だな。

「後始末は此方で行う、後は任せてくれ。」

あの問屋には家も噛んでいる、三十金くらい渡せば事故で済ませるだろう。

それでも皇都視警院が勘繰る様ならば弓月の伝手を使わなければな。弓月伯が一声上げれば警保局から圧力をかける事も出来る。

また無言の圧力がかかるのだが。

「——御協力感謝いたします、中佐殿。」

そう言つて軽く頭を下げる、名前は教えられていないが、本当によく働いてくれた。

「ああ、室長に無理を聞いてくれた礼をよろしく言つてくれ。」

——失礼致します、中佐殿。

そう言い残し、路地に名も知らない男は飛び降りた。

「………」

「何だ？大辺。」

隣に座つていた大辺がじつとりとした視線で俺を見ている。

「手馴れていますね。」

「防諜室は人手不足だったからな。」

まともになつたのは堂賀准将——当時は大佐だったな、あの御仁が就任してからさ。

俺が在籍していた頃は再建の途中だったのからな。

それまでは防諜じゃなくて互いの脅迫の手段を探す方に熱心だった。

「

ようやく内輪もめを押さえ込み、職務を行える様になつた頃だ。

そして、当時、辣腕を振るつていた堂賀大佐は

室長の座に就き、閣下と呼ばれる様になった。

太平の世に准将の手腕が合わさつたからこそ出来た事だろう。

——さてさて、閑話休題、と。

「ああ、一応もう一度あの辺を回ってくれ、捨て剣虎兵がうつついていたら拾うから。」

御者に声をかけるよこで大辺が——相変わらずですね、と溜息をはいたのは無視する。

同日 午後第三刻半過ぎ 皇都西本条通り
駒城家 育預 新城直衛

視線をさまよわせ、考える。

——豊久は普段はアレでも謀り事には敏感だ。

俺に警告するのだから奴自身も何かしら備えていてもおかしくない。例えば、軍監本部へ義兄に会う為に出頭していた時に古巣に立ち寄り協力を取り付ける等。

尤も確証はない。

どうも気が高ぶり、不必要に行動的になっている、暴力の匂いに反応しているのだ。

——浅ましい、千早の方が理性的かもしれないな。

自嘲の笑みが浮かべると視界の端に馬車が映った。

「どうやら向こうから迎えが来たようだな。」

鉄路馬車も混み出す時間だし調度良い、とどうでもよい事を考えていると

扉が開き、先程別れた面が手招きした。

「おお、引きがいいな、感謝しろ、そして敬え。」

「まことに申しわけないが貴様を敬うには過去の行状を知りすぎているな、

貴様に酒を教えたのを誰だと思っている。」

乗り込みながらお決まりの下らない言葉の応酬をする。

「それで？」

今度は俺を釣りの餌にして何を釣った？」

「何だ、人聞きの悪い、心配して来てやったのに。」

なあ、大辺。」

「はい、中佐殿。」

軍人式の言い方で白々しい答えが返ってきた。

この男も何とも忠誠心の厚い部下を持ったものだ。

肩をすくめ、

「貴様も厄介事に好かれるな、結構な腕っこきを引っ張り出した奴が居たらしい。」

——依頼元は調査待ちだ。」

と言った。

大方見当はついていないが、確証がないのだろう。

「腕っこき、か。」

俺もそれなりに他人に認められたわけだな。

あまりいい気はしないが。」

そんな方面でしか評価されていない様な気がする。

「窪岡少将と二人あわせて殺すつもりだったのかもしれないな。」

彼は駒城派の将官だ、よほどの騒ぎになる。

それに乗じてお前と窪岡少将の血で総反攻復活などと馬鹿げた夢を

みたのか？

だとしたら、お前が奏上の時に余程恨みを買ったのが切欠だろう。

奏上も終わったのに感情だけで態々金を積んでまで、将官の馬車を

追って殺しに掛かったのだからな。

——本気で夏季総反攻を強行するのならば、奏上の前にお前を奉書

ごと焼くだろうさ。」

此奴なら本当にやりかねない。

「貴方も大概ですよ。」

全く変なところばかり豊守様に似て——」

隣の秀才参謀が頭を抱える。

「じやなきやこの高貴な育預様とこんな長い付き合いが出来るわけないさ。」

ひらひらと手を振りながら気の抜けた返事をする。

「さて、と書類仕事が終わったと思ったが
駆け込みで残業だ。

ちよいと俺は降りるから宜しく。

大辺、父に言伝を頼むぞ。」

何時の間にか先程窪岡少将と別れた道の先に来ていた。

「新城、二度目があるかもしれないからな、気をつけるよ。

俺に出来るのは所詮、対症療法だけだ、何も解決していないからな。

」

——そう言つて姿を雑踏の中に溶け込ませていった。

・
・
・

同日 午後第五刻 馬堂家上屋敷

馬堂家当主代理 馬堂豊守

息子から視線を外し、脳裏で図面を引く。

「・・・守原は一枚板ではないようですが、当面、表面化する事は
まずないでしょうね。

守原定康は駒城の切り崩しに取り掛かる様です。

——意外と言うべきか、突くべきところは見えているようですね。
自分達が誰に何を押しつけたのかを忘れたみたいですが。」

うんざりしたようにひらひらと書状を振っている。

「本当にいい面の皮をしている。

敵を押しつけた相手に此方に来いとは。」

当事者としては憤懣やる方無いだろうな。

水軍の責任者であつた中佐と殿下が居なければどうなっていたのや
ら。

「それで、豊久、お前はどうしたい？」

「乗るのは論外としか言いようがありませんね。

かと言つて露骨に事を構えるのも悪手でしょう。

不本意ですが、守原に恨まれるのは嫌です。

前線でもまた連中の後始末を押し付けられるのは御免ですよ。」

「ああ、嫌だ。またあの屑が前線にしゃしゃり出て来たらどうしよう。」

（当たり前だが）凄まじく恨んでいるな。

「豊久、恨むのはよいが、それで判断を曇らせてはいけないよ。教えた筈だ、怒りは要らぬ力が入る。」

「——功を焦るな、要らぬ力は込めるな、居丈高に構えるな。覚えていますよ、とても役に立ちました。」

私が教えた言葉の使い方を諳んじ、照れた様に微笑を浮かべる。

「女性には使えないようだがね。女性の泣かせ方が最悪だ。

茜嬢もお前を存外に好いているだろうに」

まだまだ、若い。私がこうして少しからかえば——

「いや、そのようなアレは、その、困ります。」

あつという間に乱れる。

将家の嫡流としては二十も半ばを過ぎてこれでは困るのだが。

私も父も既に子を持っていた年なのに。

「——孫の顔が見たかったな。」

「——何を言ってるんですか、四十半ばで孫は早いですよ。」

息子がじつとりとした目で抗議する。

「身を固めていない佐官と言うのも問題じゃないか？」

少佐になったら身を固めるのが通例である。

「それは、あー平時の話でして。その偶々中佐になっただけである自分としては

前向きに検討する要素ではありますが元々否、と言うには根拠が皆無に等しいわけでして

だからと言ってただちに話を進めるのはやぶさかですし、善処の方向へと向かいつつある事を自分は確信しております。」

無駄に長く無駄に丁重な無駄な長広舌をありがとう。

「つまり婚姻するには裏事情が鼻につくと。

それはそれ、これはこれ、だろくに、お前だって弓月殿の伝手を利用したじゃないか。」

故州伯爵も激化する政争の事もあり、駒城との結びつきを求めている。

「……まあ、娘を嫁にやる父親の心はそれに反しているようだが、複雑な父心である。」

「……」

そつぽを向いて細巻をふかしている。

——やれやれ、若い内から裏事情を教えすぎたかな。

「話を戻すが、取り敢えずは西原を介した適度な便宜でよかつ。元々、本命は西原であつて守原の伝手は必要ない。」

駒城を敵にするつもりもない。」

頼る先を考えるのならば、西原はまだマシだが、守原は論外だ。

「そうですね。」

本当ならば二重間謀スパイなんて綱渡りは御免ですが。」

「大殿にこの事は伝えたほうが良いだろうな。」

まったく何かあると皆が私を疑う、酷い話だ。」

「……そんな家風がこの十年で創られましたからね。」

それだけ平時に迎合できていた、と云う事でしたが。」

そう言つてまた二人で苦笑を交える。

「——直衛の事もあります、気をつけて下さい。」

これから戦場に赴く奴が云う言葉ではないぞ、馬鹿息子め。」

「あまり心配するな。」

当主が後方を抑え、お前が前線に赴くのだ。

私も相応に働けだけさ。

それに、山崎にあれだけ熱心に言ってくれたからな。」

また不貞腐れて細巻で煙幕をはりだした子供を見て声を出さずに笑つた。

——政争で勝利を得る前に 帝国 軍が皇都に殺到する可能性を脳

裏から追い出しながら

第二十九話 備えあれど憂いあり（後書き）

戦争が近いのでプロットを調節していたら

佐脇さん家の俊兼君が素晴らしき死亡エンド（十傑集的な意味で）か
彼岸エンド（魍魎の筐的な意味で）かの二択になりました。

・・・・・どうしてこうなった。

第三十話 千客万来・桜契社（上）

皇紀五百六十八年 五月十六日 午後第三刻 小半刻前

桜契社大会堂 皇国 水軍中佐 笹嶋定信

陸軍士官の擁するこの会館に足を運ぶのは初めてだ。

「……………これは、なんとまあ。」

駒城保胤中将と新城近衛少佐、俘虜交換式でも帰還式典でも見たことがないほど畏まっている馬堂中佐——そして駒城篤胤大將が円卓についていた。

敬礼を交わすと駒城の老公が深みのある声で

「直衛、お前の友人に紹介される栄誉を与えて貰いたいのだが」

「はい、殿様。此方は笹嶋水軍中佐です。」

「笹嶋中佐？」

目を見開き、笑みを浮かべる。

「成程、お前達が北領で共に戦った人物か？」

笹嶋君、噂は伺っておりますぞ。

儂の末弟と家臣が世話になったようすな。

お礼を申し上げたい。」

白々しいがこれも儀礼の一種だ。

新城が駒城の末弟として紹介するのでもなければ大將と中佐が馬堂中佐（家臣）の友人と主家の当主として話す事になってしまう。

「それでは、儂の長男を紹介させて貰いたい。」

「はっ、光栄であります。」

保胤中将もこうして紹介される事で貴人として扱われる。

挨拶を交わし、

「それと君も知っているだろうが、馬堂家の嫡流である馬堂豊久だ。」

「お久しぶりです、笹嶋中佐。」

控えていた中佐とも礼を交わし、勧められた馬堂中佐と新城少佐の間の席につく。

私が座つても席がまだ三席空いているが誰かが来るのだろうか？

「随分と居心地が悪そうだね。」

隣に座った青年中佐に囁くと

「陪臣にとつて、主家はある意味では皇族以上に分かり易い畏怖の対象なのですよ。」

軍務内や完全に私的な場なら上官か友人で通りますが

この場では育預殿も主家に連なる末弟殿でして。

ここでは皆様が目上でして、畏まるのみです。」

そう言つて苦笑する。

「育預といえども末弟か。」

随分と私が知っている将家と違うな。」

「まあ、今は五将家の雄と言えど元をたどれば駒城は豪農から身を立てた家ですからね。」

そう言つた家風なのですよ——ちなみに、私の家はそこの馬丁上がります。」

そう言つて少し笑う。

「まあ、主家がそう言っているのですから、

然るべき人望があれば万事がその通りに扱われてもおかしくないのですがね。」

本人の対人関係構築能力に問題がありましたね。

よほど酔狂な連中しか寄つてこないのですよ。」

実際、もう少し上官達と上手くやっていれば

北領に赴任する前に大尉か少佐になつていてもおかしくありません。」

わざとらしく私にヒソヒソと囁く。

「聞こえているぞ、酔狂者の筆頭格め。」

口元を歪めた駒城家の末弟が軽く笑いながら口を挟んだ。

「酷いですね、御育預殿。」

私はこれでも陪臣格の間では良識派で通っているのですよ？」

「恐妻派見習いの間違いだろ？」

相変わらず婚約者から逃げ回っているそうだが？」

哀れ、良識派は苦笑を浮かべて沈黙してしまった。

「笹嶋君、君の噂は直衛から聞かされていた。

今の配置は統帥部参謀だったね？」

水軍は陸軍よりも信賞必罰についてきちんとしている。」

保胤中將がそれを笑って眺め、言った

「第十一大隊が築いた軍功のお零れと言ったところです。

まあ、自分は貰えるものは貰っておけ、と云う性分ですので有難く頂戴いたしました。

ええ、それに有望な人脈も得られる事は統帥部参謀としても有り難い事でして。」

少々露悪的な口調で言うと

「成程な、直衛達が気にいるだけの事はある。」

篤胤公が愉しげに言った。

どうやら駒州公からみたら私も酔狂者らしい。

「それにしても、新城少佐が近衛に配属されたのは驚きました。

殿下は衆兵隊の改革に熱心だったそうですが、これもその一環でしょうか。」

私の言葉に隣に座っている馬堂中佐が僅かに身じろぎした。

大店の若番頭が客に向けている様な顔つきは変わらないが、

保胤中將に向けている目つきだけが鋭くなっている。

中將もそれを微笑で受け止め、

「ええ、実仁親王殿下が強い御希望なさってね。

北領でいよいよ必要だとお考えになったのだろう。

君も確か——」

「ええ、最後まで北美名津にいらっしやいましたので幾度か拝謁の栄を。」

私に軽く頷き。

「直衛、馬堂中佐。」

「はい。」

「はっ。」

——誰だ、お前ら。

そんな阿呆な事を考えるほどらしくない返事を二人がした。

駒州の若頭領の声望はけして過大ではないようだ。

保胤中将は刻時計に目をやり、

「暫くしたら実仁親王殿下がおいでになる」

それは豪勢な事だ。

「お忍びで近衛少将としてお見えになる。」

将校としての礼のみで十分だと仰っていた。

殿下は新しく幕営に加わった将校と親しく言葉を交わす事をお望みだ。」

「それは光栄な事です。」

言葉に反してなんの感慨もこもっていない声だ。

「ああ、それと——」

ちらり、と自身の陪臣に視線を送り。

「それと戦地で文を交わした将校にも、だ。」

「——う。」

私に伝書竜をやらせた男はだらり、と額に汗を浮かべ。

その様子を、笑みを浮かべた駒州公が眺めている。

——何をやったんだか。

「笹嶋君もよろしく願いたいのだが。」

「はい。」

会話の合間に給仕達が弱めの米酒と軽いつまみを円卓に並べる。
これで実仁親王殿下が到着するまで間をもたせるのだろう

・
・
・

小半刻もすると場もほぐれてきた。

尤もそれを分かりやすく示したのは新城少佐だった。

細巻を楽しみながらつまみと杯を口に運んでいる。

一方の馬堂中佐は最初に杯を交わした後は二杯目を半分まで空けてからは頭をふらふらさせている。

気がついた新城少佐が苦笑を浮かべてつまみと水を追加で持つてこさせている。

駒城親子と私は杯を傾けながら世間話をしている。

「――是非とも笹嶋君には御家族ともども我が屋敷の庭宴においていただきたいですな。」

「ええ、喜んで伺います。」

先程の言葉の通り、駒城との縁を築く事は決して損ではない。

ましてや守原が他の将家の囲い込みを始め、その戦略方針に納得出来ない以上は尚更だ。

ああそうだともう一つ

「ああ新城少佐、君の猫をその時に子供達にもみせてやってくれな
いかな？」

私の話を聞いてからは随分とお気に入りだね。」

「ええ、分かりました。」

千早も幼子の扱いには慣れていきますし、問題無いでしょう。

千早にも磨きをかけておきましょう。」

新城少佐が嬉しそうに言った

「――幼子？」

千早が内地で婿でも見つけたのかい？」

舟を漕いでいた馬堂中佐が眠たげな半眼を向け、尋ねる。

「幾ら何でも3ヶ月でそれは早すぎだ。」

「ならば人間の子供か？」

だとしたら随分と豪胆だな。

間違つて幼年学校にでも入ったら早死にするぞ。」

水をすすりながら茫洋とした口調で問題発言をする――が
「なに、初姫様にそれはなかるう。」

ああ、成程それな・・・ら・・・？

「ブツ」

それをあつさり上回る問題発言が飛び出した。

「ゲホッ——」

おい、待て、それって——」

噓せこみながら馬堂中佐が話し出した。

「——失礼、御育預殿の監督の下なら問題無いでしょうが。」

驚きのあまり酔いが醒めたのだろうか、口調が戻っている。

「姫様が随分と気に入って下さったようだな。」

口元をほころばせて軽く手を振る。

「直衛がついているのなら間違いは起きない、千早ならば尚更だ。

君も昔から分かっているだろう、中佐？」

微苦笑を浮かべた保胤中將が口を挟む。

「——はい、申し訳ありません、出過ぎた真似を致しました。」

陪臣の顔で謝罪する馬堂中佐に、

いいよ、と軽く手を振る姿は衆民が漠然と抱いている将家の理想を
絵にしている様だった。

・
・
・

小半刻程、雑談を交わし空気がほぐれると保胤中將が顔を引き締め、
私に本題を訊ねた。

「——それで笹嶋君、統帥部戦務参謀として聞きたいのだが
水軍は現況をどう見ている？」

さて、ただの会食の筈はない、これからが本番か。

「内地侵攻の阻止は不可能です。

如何せん現有の戦力では数が足りません。

統帥部と皇海艦隊司令部ではそう結論しております。」

東海洋艦隊司令部の浅木司令長官達は総反攻推進派だった、今では
流石に大人しくなっているが——

「まとまりそうかね？」

駒州公が茫洋とした表情のまま私に尋ねる。

「努力は払われています。」

楽観は難しい、統帥部の中になつて守原派は居るのだ。

「まさかとは思いますが、艦隊決戦なんて考えているのですか？」

馬堂水軍名誉中佐が面白そうに口を挟んだ。

「計画自体は持ち上がっている、見てみるか？」

「結構です、それで華々しい戦果を上げても次に続かないでしょうしね。」

肩をすくめ、首を振る。

——素人考えですが
と断りをいれ

「四十隻で 帝国 辺境艦隊の相手は厳しいでしょう。」

上手く撃退出来たとしても、消耗した後に再度揚陸を試みられたら
後方攪乱すら不十分になる可能性が高いでしょう。」

「私ならば当面は見せ札に徹しますね、水軍は我々《砲兵》以上に
金を食いますからね。」

相手を引きずりだけでも十分に敵の懷に穴を空ける事が出来ま
す。」

さすが馬堂家の嫡流と言うべきか、金勘定に目を着けるか。

「私も同意見だ。」

四十隻の集中投入を防ぐ為には最低でも三倍——百二十隻は必要に
なる。」

「一度に百二十隻も、ですか？」

確か——辺境軍が所有する艦隊の総数とほぼ同数ですね。

それを複数の補給線・港湾の防衛に充てる事を強要する、と

総計はどの程度になりますか？」

そう私に訊ねる馬堂中佐の顔つきは参謀のものだった。

「現状では最低でも二百四十隻以上、内地侵攻の際には六百隻の大
台に乗る。」

まあ、理論上の話であって向こうがそれだけ用意するには一年近くかかるだろう。」

興味深げに私の話を聞いている保胤中将に視線を向ける。

「――それまでは此方も通商破壊と艦隊の拡充に全力を注ぐしかないですな。」

当面は陸の方に苦勞してもらわなければなりません。」

「その後は何としても生き残る、帝国の国庫が底を覗くまでは、それしか勝ちの目はない、か。」

水軍の戦争指導も此方と同じようだ。」

「陸軍も同様ですか。」

「努力が払われていると云う点も、だがね。」

「帝国も大国としての悩みを抱えています。」

凱帝国にアスローン、帝国は西にも火種を抱えているのも事実です。

あちらも騒がしくなれば多少は楽になるのですが。」

馬堂中佐が額を掻きながら言う。

「在外公館も動いているがそれを当てにする分けにもいかない。」

御国もこれから更に傷つくだろうな。」

保胤中将が悲しげに頷く。

「国力がちがいきすぎるのです、義兄上。」

義弟が慰める。

「お前の予想は如何なものだ？」

駒州公が自身の末子に目を向ける。

「義兄上の仰る通りです。」

碌でもない事になる事だけは確信しています。

正面きつての大会戦は論外です、長期消耗戦に持ち込むしかありません。」

彼も躊躇なく断定する。

「昨今の戦では戦費の増大に拍車がかかっています。短期決戦が行えない以上はよほど上手くやらないと

帝国 軍に手を引かせる事に成功しても大量の財政赤字が残ります。

そして、 帝国 も 皇国 に負けたとは思わないでしょうから賠償や領土割譲で損失を埋める事も期待出来ないでしょう。戦後の事を考えると恐ろしいくらいです。

——まあ、尤もこうした事に関しては義兄上の方がよく御存知でしょう。」

「嫌な話を持ち出す。

私も子供の内に駒城の内情を見せすぎたな。」

そう言いながら保胤中將が軽く頷いて賛同の意を示し、

「事実、弾薬の消費量は恐ろしく跳ね上がりましたね。

第十一大隊が苗川で戦闘した際には白兵ぬきでしたから尚更でしょうが。

予想よりも消耗が早かったので、冷や冷やしました。」

そう言つて馬堂中佐は目を伏せた。

「君の祖父——豊長少將が専門なのだが弾薬消費量についての報告が上がってきた。

金穀の総額は未だ終わっていないようだが。」

「どうでした？」

陸兵隊の事も考えれば決して無関係ではない。

「天狼——は二刻程度で大崩れしたからあまり参考にならないが、その後の遅滞戦闘などの統計によるとおおよそ三刻で銃兵は三百発以上、砲兵は一門につき約二四〇発と出ている。」

「いいですね、計測出来る幕僚が居て。」

しみじみとある意味泣ける事を呟く人は無視する。

「今後、正面からの大会戦——それに類するものが発生した場合、砲には一門あたり千発、銃兵には一人あたり八百発を用意せねばならない。

更には兵站の増強も必要だ。弾薬の増産備蓄に工廠の増設、——更には後備の動員。

戦費の工面に苦勞するだろうな。」

苦い顔で 皇国 最高と評された軍政家がこれからの苦勞を語る。

「水軍はいかがですか？」

馬堂中佐に促され、私も話す。

「我々は北領で戦闘を行わなかったがそれでも消費弾薬の増加傾向が著しいのは確かだ。」

だが問題はそれだけではない。」

「艦の新造かね？」

熱水機関を積んだ船が活躍したと聞いたが。」

駒州公が興味深そうに聞いた。

「ええ、これからは艦艇の熱水機関化、それに伴う黒石の買い付けに保管。」

兵站の面倒は陸軍に負けませんな。

それに今の所、艦艇用熱水機関だけでも既存の巡洋艦に匹敵する値段でして、

予算の問題もまた然り、です。」

乾いた笑いが出てくる。

外からの刺激は今、この国の心臓部も揺るがしている。

「それにしても、あれだな。」

それを理解しているであろう保胤中將が心配そうな顔つきで自身の義弟に話しかけた。

「お前も戦争だけではなく戦後まで憂うか。」

醒めた口調で義弟が答える。

「自分のような立場の軍人は関わるべきではない、とも心得てはいませんが。」

自分の関わらない事にこそ、考えてしまうものです。

その手の事で一席ぶつ奴も居ますから。」

そう言つて軽く笑う。

馬堂中佐が憮然として反論しようとする給仕が新たな客の到着を告げた。

第三十話 千客万来・桜契社（上）（後書き）

間に合った、のですが上下にわけさせて頂きます。
PCが不調でして修理に出すことにしました。
よって次回も（また）遅れる可能性があります。
まことに申し訳ありません。

第三十一話 千客万来・桜契社（下）

皇紀五百六十八年 五月十六日 午後第三刻半

皇国 水軍中佐 笹嶋定信

新たに現れたのは三人の少将だった。

敬礼を交わしながら陸の将官達を観察する。

一人は予告通り、実仁親王殿下だ。

私も最後まで北領の地で協力しあつた事は記憶に新しい。

もう一人は窪岡少将、軍監本部戦務課長の要職についている。

保胤中将の同期らしく、私的にも親しい関係を築いているようだ。

最後の一人は謹厳な空気と軍服で逞しい体軀を包んだ六十絡みの老人であつた。

——馬堂豊長、馬堂家の当主だ。

「さあ、楽しんでくれ。」

この場の最上級者は駒城の爺だ。」

そう言いながら乾杯の用意をしている皇族少将を近衛少佐が無感情な眼で観察している。

窪岡少将は新城少佐とぼそぼそと何やら会話を交わし、祖父と話している馬堂中佐に視線を向けた。

「御祖父様、来るのならば私に言ってくれても良かったでしょうに。」

「

「窪岡殿に捕まってから知つたのだ、仕方あるまい。」

御育預殿は兎も角、儂まで拝謁させていただけるとはな。」

「——まあ、確かに随分と豪勢な顔触れですね、駒城の大殿様に軍司令官の若殿様、

それに軍監本部の首席参謀閣下が御二人に近衛衆兵隊司令殿下

——まあ、なんと云いますか、給仕の胃にも私の胃にも優しくない状況ですね。」

心無しか引きつった笑みを浮かべた孫に

「そう思うのならば今日くらいは大人しくしている。」

どこか疲れた表情で注意するが

「謹んで了解致します、私^{わたくし}、万事控え目が信条です。」

暖簾に腕押し柳に風と受け流される、普段の關係性を垣間見た気がした。

・
・
・

同日 午後第四刻半 桜契社大会堂

皇国 陸軍中佐馬堂豊久

——皇族、遠い昔に実権を失い、名目上の君主として政治的道具として立ち回り、

古びた権威の齎す有難味と万民輔弼宣旨に対する恩義によって衆民が払う敬意によって

皇国 に君臨している一族だ。

——あくまで名目上は近衛を皇家の軍として保有している——筈だった。

だが戦時と云う言葉は時には何もかもを変えてしまう言葉である。

だからこそ実仁親王殿下は直衛を再建の契機として近衛に引き入れ、大殿達が軍費削減の為に与えた儀仗^{お飾り}の弱兵達を本物の軍に変えようとしているのだろう。

まあ、それはいい。

この 皇国 が圧倒的に戦力不足なのは確かだ、頼りになる部隊が幾らあっても困るものではない。

だが、それはあくまで基本的に皇主陛下の認可の下に 皇国 陸軍の指揮下にある部隊として、だ。

皇家の——とりわけ実仁親王の私兵になつては困る。

臣下の筆頭として駒城が戦を仕切るのが理想的な展開であつて

皇家は今までと変わらず、あくまで 皇国 として君臨なさっている。いいのだ。

実権など持つべきでない、彼らが権威を纏えている所以は実権を持たないからこそなのだから。

——酔い覚ましの水を啜りながらとりとめのない事を考えていると磊落さを感じさせる笑い声が耳に入りこんできた。

実仁少将閣下は引き抜いた近衛少佐をお気に召したようだ。

新城の部隊に監視役を入れておくべきだな。

——勿論、奴の眼鏡に適う度胸と能力が必要だ。

司令直々の許可が降りたらアイツ、将校相手でも容赦なく首を切るだろうし。

なによりそれが原因で戦死したら俺のなけなしの良心が痛む。

——新城少佐。

貴様と共に勇戦した大隊長殿を紹介してくれ。」

おっと、今度は此方か。

「はい、閣下。

此方は馬堂豊久砲兵中佐です。」

軽く頷き、俺に視線を向ける。

「こうして直接会うのは初めてだな、中佐。

北領で最後まで戦い抜いた武勲は聞いている。」

「はい、閣下。

ですが全ては北領で閣下に受けた御恩と

大隊総員の奮戦があつてこそです。」

その勇士達の死体を野晒しにして衆民たちとともに捨て去った奴がぬけぬけと言う。

まあ、将校、それも勝ちを逃した将校なんてそんなモンか。

「駒州の者らしい物言いだな。」

そう、少将閣下は薄く笑みを浮かべて言った

まあ、主家が下屋敷の堀をとっぱらうような家風だからね。

「随分と爺も貴様を気に入っていたようだったが、

保胤に新城少佐、それに貴様、駒城は三代先までは安泰だな。
爺が羨ましくなる」

そう言つて曾ての侍従武官であつた大殿様と言葉を交わし始めた。

——三代先、か。

皇国　が残れば、だな、それは言わない約束だけれどさ。

「馬堂君。」

おつと今度は笹嶋さん　か。

「何でしょうか？」

「浦辺大尉が君と室長殿に宜しく、と。」

うん？

浦辺・・・浦辺・・・

畝浜の乗組員ではないよな？

腹黒室長の名前を出した以上、考えられるとしたら内外情勢調査会
か？

それとも情報課の御仁か？

——まあいいや、それは室長の仕事だ。

結局、俺は外部協力者に過ぎないのだからな。

「ええ、閣下にも。宜しく伝えておきます。

しかし何故、中佐殿が？」

「統帥部の上がどうにも私を陸への窓口にしたいようだね。」

だから耳が利く陸の将校への伝手が欲しい、と。

「分かりました。

閣下に伝えておきますが、御返答は閣下の意思次第です。

——まああちらにとつても良いお話でしょう。」

水軍内の守原派のある程度制する事も出来るかもしれない。

「また謀か、中佐？」

窪岡少将が此方を面白そうに見て言った。

「謀から身を守る術です、閣下。

言うなれば防諜です、防諜。」

窪岡少将に反論する。

「謀略だか肝計だかしらんが。
あまり少佐を巻き込むなよ？」

何しろ、駒州が若頭領殿と近衛少将閣下のお気に入りだからな。」
戦務首席参謀閣下はしれつと俺の反論を無視しくさった。

「そうだ、許さんぞ。」

親王殿下まで楽しそうにノツてきた、おっかねえ。

「やれ、御無体な。」

自分は清く正しく 皇国 軍人として

忠勤を尽くしていますのに。」

一介の陪臣中佐としては

軽く両掌を見せて降参するしかなかった。

同日 午後第四刻半 桜契社大会堂

皇国 近衛少佐 新城直衛

- - あの馬鹿の減らず口は矢張り死んでも治らないだろうな。

苦笑を噛み殺して柳に風、と涼しい顔をして水を飲んでいる不逞の輩から視線を外すと

衆兵隊司令が此方を見て言った。

「新城少佐には俺の下で大隊を率いてもらう。」

「剣虎兵ですか？」

多少は気になって調べていたが豊久が言った通り、
剣虎兵部隊はやはり存在していなかった。

「ああ、そうだ。」

事務処理上は——何と言ったか、強襲専門の——

「鉄虎兵ですか？」

「それだ。鉄虎兵大隊として新編する。

装備・人員は可能な限り充当する。

定数を千五百名以下である限りは好きに要求して宜しい。」

「それでは聯隊規模になってしまいますが。」

第十一大隊は九百名弱だ。

独立大隊と言えども異例にすぎる。

「近衛と陸軍は違う。」

少し言葉をきり、実仁少将は口元を歪ませた。

「まあ取り敢えず駒城の面々に感謝しておけ、それと陸軍兵站の責任者にもな。」

大殿は鼻で笑う様な素振りで応じ義兄は鷹揚に頷く。

まあ、その程度のものか、とも思った。

だが少々疲労の色を見せている軍監本部の総務も職務内である兵站課長を見ると

後方は後方で苦労があるのだとも思った。

だが好きにやらせてもらうが。

「部隊番号は五〇。番代を割り振る、何が良い？」

「空いている一番最初の番号で構いません。」

「ならば貴様の部隊は近衛衆兵鉄虎第五。一大隊だ。

勿論、衆兵隊司令部直轄となる。

いいか、近衛においては俺以外の上官は居ない。」

近衛衆兵鉄虎第五。一大隊、か。

悪くない、寧ろ良い。

確かに新編と言つのは少々面倒だが、好きに造れる事が出来ると言う事だ。

近衛衆兵である事を考慮に入れるのならば決して悪い条件では無い。

下士官・士官を古兵で固めればどうにでもなる。

何より大隊はそれも剣虎兵大隊はとても愉しい任務だ。

自然と笑みが浮かんだ。

給仕が運ぶ料理を見ながら考える。

——皇族、実仁親王としての政治的な意味、これから守原共がどう動くか。

五。一大隊、か。

ああ、そうだ。けして悪くない。

・
・
・
同日 午後第五刻半 桜契社 大会堂
皇国 水軍中佐 笹嶋定信

会食も酣を過ぎた頃、乾いた声が耳朵をうった。

「まさに我が世の春だな、少佐。」

守原英康と守原定康が立っていた。

真つ先に旗艦に逃げ込んだ男達だ。

彼らの半歩後ろに見覚えのない男が立っている。

兎にも角にも皆が（先任大将である駒州公以外は）不本意ながら敬礼をしなければならない。

「——草浪中佐も御同行と来たか。

懐刀まで持ち込むとは、厄介事でしょうか？」

「で、あろうな。」

お隣の馬堂さん達がぼそぼそと話している内容から残りの一人も彼等の御同類と分かる。

「御健勝そうで何よりです、閣下。」

保胤中將が穏和な微笑を浮かべ挨拶をする。

「なんのなんの、駒城中將。

駒州が御大将と若殿に親王殿下

更には首席参謀殿達に北領の勇士達までも

お見かけしたとあらば御挨拶せねばなりますまい。」

鷹揚な振る舞いを見せながら守原大将が言葉を続ける。

「中將は、確かうちの甥とは。」

「ええ、何度か。」

一見和やかに話が進んでいる、このまま終われば良いのだが、そうは行かないだろう。

「実仁少將、今日はまた。」

「新しく幕営に加わる将校と言葉を交わしたくてな、守原大将。」
これにも鷹揚に頷き、駒州公とも愛想を交わし、僅かに頬を歪めながら

「駒城大将、其方の陪臣の佐脇家、その世継に大隊を与えたいのですが。」

と言った。

「佐脇？俊兼ですか？」

「ええ、優秀な将校だと聞きましたな。」

不可侵の楽土たる御国の危機には出来る者には相応のものを与えるべきかと。」

アンタの横に一度も戦塵を浴びていない少将をおいてよく言つ。

「丁度、空きがありましたな、

再編中の独立搜索剣虎兵第十一大隊を任せる事にしました。

北領でみせた勇戦振りに劣らぬ戦果を上げてくれると信じている。」
皆がかつての大隊長に視線を向けた。

「ええ、かの大隊が曾ての如き精強さを取り戻してくださるでしょう。」

彼は度胸も知性もあります、部下を見捨てて逃げ出す様な真似をしないでしょう。

彼ならば自分はおるか伊藤大佐殿にもけして劣らないでしょう。」

無感情な声で——無感情に笑った。

「閣下の御慧眼には感嘆の極み、です。」

その顔と声には空虚さしか感じさせず、守原大将ですら当惑を隠せなかった。

「守原大将、中佐もこう言っているのだ。

どうかな？一緒に一献。」

面白そうに事の成り行きを見ていた駒州公が口を開き、

虚をつかれた守原英康は慌てて

先程の鷹揚さからかけ離れた様子でもごもこと謝絶し、大会堂から出て行った。

最後まで草浪中佐とやは我関せず、と露骨なまでに振舞っていた。

・
・
・

同日 午後第六刻 南一条筋

馬堂家嫡男 馬堂豊久

「――」

隣を新城が黙々と歩いている。

明らかに機嫌が悪いし、その原因も分かりきっている。

我が敬愛する駒州公閣下が御育預殿を俺に押し付けてお帰りなされたのだ。

――軍務の話なら明日にするだろ、常識的に考えて。

溜息をつくと新城が此方をじろりと睨んだ。

「――俺は佐脇さんじゃないよ。」

「分っている。」

「お前と彼の関係を知っていたわけじゃない。」

奴の狙いは新城を庇った事で産まれた駒州の内にある不和を煽る事だ。

だからこそ守原定康は俺を誘ったのだろう。

「それに、佐脇さんだって結構な将校だ。

自分の部下を無碍に扱う人じゃないさ。

向こうの意図は兎も角、大隊にとつては悪い人事じゃないだろう?」

「・・・・・・」

へんじがない、ただのすねたがきのようだ。

やれやれ・・・・。

「――近衛に兵たちを移す準備はもう済ませてある。

――まあ、俺も西田とあと何人か下士官が貰うし

剣虎兵学校に下士官を送る事も決まっているが

残りは好きにしろ、五十人は残っている。」

「ああ——ありがとう。」

新城が——ありがとう？

「おいおい、俺に礼を言うなんて重症だな。」
戯けて両手を上げると

「おい、俺をなんだと思っている。」

と失笑が返ってきた。

「冗談だよ、冗談。」

と俺も笑いながら未だ春寒の残る道を屋敷へと歩いていった。

第三十一話 千客万来・桜契社（下）（後書き）

年齢の問題で駒城の爺様を先任にしました。

まあ七巻辺りで守原英康が中將になっているし、お見逃し下さいませ。

ところで守原英康って銀英伝のロボスにそっくりですよね。
意識しているのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772p/>

或る皇国将校の回想録

2011年11月15日18時13分発行